

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	佐山 豪太
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 253 号
学位授与の日付	2018 年 7 月 25 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法の検討 —コーパスが提示する頻度データの言語学的な分析に基づいて—

Name	Sayama, Gota
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 253
Date	July 25, 2018
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	Considering an effective Russian vocabulary learning method employing derivational affixes – Based on linguistic analysis of frequency data from corpora –

[博士論文] 2018 年 3 月

派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法の検討
ーコーパスが提示する頻度データの言語学的な分析に基づいてー

東京外国語大学 大学院総合国際学研究科

博士後期課程 言語文化専攻

佐山豪太

派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法の検討 ーコーパスが提示する頻度データの言語学的な分析に基づいてー

佐山 豪太

目次

1 章. はじめに.....	1
1.1. 本稿の背景（ロシア語教育における語彙学習の難しさ）.....	1
1.2. 本稿の目的（ロシア語に特化した効率的な語彙学習法の検討）.....	4
1.2.1. 研究設問 a: 派生接辞学習による語彙力増加の数量的確認（5 章）.....	6
1.2.2. 研究設問 b: 学習価値の高い派生接辞の選定（6 章）.....	8
1.2.3. 研究設問 c: 学習価値の高い意味の選定 – 動詞接頭辞 <i>npo-/pro-</i> を例に –（7 章）.....	9
1.2.4. 研究設問 d: イメージ・スキーマと放射状カテゴリーの記述整備 – 動詞接頭辞 <i>npo-/pro-</i> を例に –（7 章）.....	10
1.3. 本稿の構成.....	12
1.4. 表記.....	12
2 章. 語数の計量の単位.....	14
2.1. 語の単位.....	16
2.1.1. トークン.....	17
2.1.2. タイプ.....	18
2.1.3. レマ.....	19
2.1.4. ワードファミリー.....	21
2.2. トークン, タイプ, レマ単位によるテキストの分析例.....	23
2.2.1. トークンによる分析.....	25
2.2.2. タイプによる分析.....	26
2.2.3. レマによる分析.....	30
2.3. 語の単位と言語研究.....	32
2.3.1. トークンと言語研究.....	33
2.3.2. タイプと言語研究.....	33

2.3.2.1. タイプを用いた研究事例.....	33
2.3.2.2. タイプの問題点.....	40
2.3.3. レマと言語研究.....	41
2.3.3.1. レマを用いた研究事例.....	41
2.3.3.2. レマの問題点.....	42
2.3.4. ワードファミリーと言語研究.....	44
2.3.4.1. ワードファミリーを用いた研究事例.....	44
2.3.4.2. ワードファミリーの問題点.....	48
2.4. 総括.....	48
3 章. 外国語教育とロシア語コーパス.....	50
3.1. 外国語教育におけるコーパスの利用.....	51
3.1.1. 辞書とコーパス.....	52
3.1.2. 学習用語彙リストとコーパス.....	53
3.2. コーパスの構築.....	57
3.2.1. データの収集法.....	58
3.2.1.1. 均衡コーパス型データ収集法.....	58
3.2.1.2. モニターコーパス型データ収集法.....	59
3.2.2. テキストサンプリング.....	60
3.2.3. コーパス規模.....	63
3.3. ロシア語コーパスと頻度辞書.....	63
3.3.1. Штейнфельд (1963).....	64
3.3.2. Засорина (ред.) (1977).....	66
3.3.3. Лёнгрен (1993).....	68
3.3.4. Brown (1996).....	70
3.3.5. Ляшевская, Шаров (2009).....	72
3.3.6. Sharoff et al. (2013).....	79
3.3.7. Sketch Engine と ruTenTen11.....	81
3.4. 総括.....	85
4 章. コーパス規模が高頻度語の選定に与える影響	
– 100 万語コーパスと高頻度語の関係を例に –	89
4.1. 本章の分析の意義：コーパス規模と高頻度語の関係.....	92

4.2. 自作 100 万語コーパスの概要	94
4.2.1. 自作 100 万語コーパスにおけるテキストのサンプリング比率	95
4.2.2. 自作 100 万語コーパスにおけるテキストの収集法	97
4.2.3. 自作 100 万語コーパスにおける総語数の数え方	98
4.2.4. 自作 100 万語コーパスにおけるテキストカバー率	99
4.3. RNC-M と自作 100 万語コーパスにおける高頻度語の重複数	101
4.3.1. 重複数の分析手法	101
4.3.2. 重複数の分析と考察	103
4.4. 総括	107
4.4.1. 高頻度語の選定における 100 万語コーパスの有用性	107
4.4.2. 本稿 5 章～7 章で用いるコーパスの選定	108
 5 章. 派生接辞学習による語彙力増加の数量的確認	110
5.1. ロシア語の語彙によるテキストカバー率	111
5.2. 概念・語彙素の形成における英露の分析的・統合的な度合い	114
5.2.1. 英露における体の表現方法	116
5.2.2. 英露における受動態の表現方法	119
5.2.3. 英語の句動詞/動詞句とロシア語の接頭辞付き派生動詞の対応	121
5.2.4. 5.2. のまとめ	125
5.3. 分析：派生接辞学習による語彙力の増加	127
5.3.1. 頻度データのワードファミリー化	128
5.3.2. テキストカバー率の考察	131
5.4. 総括	133
 6 章. 学習価値の高い派生接辞の選定	135
6.1. 教材の問題点と本章の意義	137
6.2. 学習価値の高い派生接辞	140
6.2.1. 先行研究 (Bauer, Nation 1993) の概要	140
6.2.2. 分析：生起頻度と実質的生産性の計測	143
6.2.2.1. 接頭辞の分析と結果	145
6.2.2.2. 接尾辞の分析と結果	152
6.2.2.3. 後接辞，接周辞，連接辞の分析と結果	156
6.3. 分析結果の考察	158

6.3.1. 分析結果の考察：接頭辞.....	158
6.3.2. 分析結果の考察：接尾辞.....	165
6.3.3. 分析結果の考察：後接辞，接周辞，連接辞.....	174
6.3.3.1. 後接辞	174
6.3.3.2. 接周辞	176
6.3.3.3. 連接辞	176
6.4. 派生接辞を用いた語彙学習の課題.....	177
6.4.1. 語形成的意味	177
6.4.2. その他の課題	181
6.5. 総括.....	182
 7 章. 学習価値の高い意味の選定 – 動詞接頭辞 <i>npo-/pro-</i> を例に –	185
7.1. 動詞接頭辞 <i>npo-/pro-</i> の意味分類と分類手法	187
7.1.1. 動詞接頭辞 <i>npo-/pro-</i> の意味分類.....	187
7.1.2. 動詞接頭辞 <i>npo-/pro-</i> の意味群の分類手法	190
7.1.2.1. 解釈構造と意味的・統語的特徴	192
7.1.2.2. イメージ・スキーマ	195
7.2. <i>npo-/pro-</i> の各意味の詳細.....	199
7.2.1. THROUGH「何かを通過・貫通する動作」	200
7.2.2. [Cluster 1]「対象や目的の脇を通り過ぎる動作」	202
7.2.3. [Cluster 2]「通過に伴って何かが伸びる動作」	206
7.2.4. [Cluster 3]「徹底的な動作」	215
7.3. 分析：意味毎の生起頻度の計測.....	222
7.3.1. 分析手順	222
7.3.2. 分析結果と考察.....	224
7.4. 多義的な動詞接頭辞の意味学習に向けた放射状カテゴリーの記述整備.....	228
7.4.1. 放射状カテゴリーと先行研究の概要	229
7.4.2. 動詞接頭辞 <i>npo-/pro-</i> の放射状カテゴリー	233
7.5. 総括.....	241
 8 章. 結び.....	244
8.1. 本稿の総括	244
8.2. 今後の課題	248

参考文献一覧.....	250
付録 C_1 における <i>npo-/pro-</i> の各意味の分類例	261

1 章. はじめに

1.1. 本稿の背景（ロシア語教育における語彙学習の難しさ）

かつて言語学者 Henry Sweet は、「外国語の学習に内在する真の難しさとは、その語彙を習得しなければならないことにある」(Sweet 1900: 66)と述べた。確かに語彙の学習は、初級はもちろん中級以上の学習者にも付いてまわる問題であり、どこまでやればよいのかを明確に規定しづらい分野である。というのも、限られた数の規則から成る文法とは異なり、語彙は膨大な数で構成されているためである (Carter, McCarthy 1988: 4; Laufer, Nation 2012: 163)。

当然、ロシア語の語彙学習に議論を限定しても、同様のことが当てはまる。ロシア語の教員である Nicholas J. Brown は、「構造を有し、1年間で十分に習得し得るロシア語の文法とは異なり、この言語の語彙は膨大で、かつ、一定の形を持たない」(Brown 1996: 1)ため、語彙力を伸ばすにはかなりの時間が必要であると述べている。例えば、東郷他(編) (1988)の露和辞典には見出し語換算で約 26 万語（重要語 7,500 語）が収録されている。設定された目標によって数は異なるが、ロシア語学習者は、そのうちどれほどの語彙を知っている必要があるのか。また、どのようなストラテジーを用いてロシア語の語彙を学ぶべきなのか。このような具体的な議論をするには、まず語彙学習に対する認識やそれを取り巻く環境を把握しなければならない。

言うまでもなく言語の運用には文法の知識だけではなく語彙力が求められる。語彙は「リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの骨格を成し、それゆえ、我々の生活のほぼすべての側面において不可欠な要素である」(Webb, Nation 2017: 5)。他にも、Grabe, Stoller (2002: 76)が述べているように、「豊富な語彙力は、リーディングだけでなく、第2外国語のすべての技能、知的学習能力、そして関連する背景知識にとって極めて重要である」。当然、多くの研究者が第2言語を習得する上で語彙学習は重要であるとみなしている (cf. Candlin 1988; Laufer 1997; Zimmerman 1997; 太田垣 1999; Nation 2001; Folse 2004; バトラー後藤 2011; Webb, Nation 2017)。Candlin (1988: 7)が述べているように、「語彙学習は言語教育の根幹を成すものであり、シラバスの作成、学習者の熟達度評価、学習教材の選択における重要な要素である」。そして、豊富な語彙力は数多くの例文を理解することに繋がり、結果として形態論や統語論といった文法の理解も促進する。

また、日本におけるロシア語教育という枠組みを越えた、世界的な語彙学習の流れからもその重要性は確認できる：現在、ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages, 以下 CEFR¹) の根幹を成す行動中心主義に基づいた教授法が世界中で趨勢を極め

¹ CEFR とは外国語学習者の習熟度、習得段階を示す際に用いられるガイドラインで、現在、外国語教育

ており、今後日本でも浸透していく可能性が指摘されている (玉木 2009: 232). 実際に、日本人英語学習者向けに作成された CEFR-J という枠組みも存在する². 他にも、CEFR の考え方を基礎として作成された日本語教育の枠組み (独立行政法人国際交流基金(編) 2017)や、多言語教育への CEFR の適用を目的とした取り組み (和田他 2004; 真嶋 2007)も見受けられる³. ロシアでは CEFR への対策の一環として、ロシア連邦教育科学省の認定により外国語としてのロシア語検定 (露: Тест по русскому языку как иностранному / 英: Test of Russian as a Foreign Language, 以下 TORFL) が制定された (中澤 2012: 155). 以下に、CEFR と TORFL のレベルの対応を挙げる.

表 1. CEFR と TORFL におけるレベルの対応 (Андрюшина (ред.) 2014: 4)

言語運用のレベル					
レベル 1	レベル 2	レベル 3	レベル 4	レベル 5	レベル 6
ロシア連邦のシステム (TORFL)					
入門レベル	基礎レベル	第 1 レベル	第 2 レベル	第 3 レベル	第 4 レベル
欧州式のシステム (CEFR)					
A1	A2	B1	B2	C1	C2

この検定試験はレベル毎に語彙リストを作成しており⁴, これらは現在、国内外を問わず教材に導入する語彙の選定基準や文法事項の参照元として用いられている (e.g. Варламов и др. 2005; Жукова 2005; Бондарь, Лутин 2006; Беляева, Луцкая 2008; 沼野他 2012; Богомолов 2012; Головки 2015). また、大阪大学では、TORFL はすでにカリキュラムに正規導入されている (林田 2016)⁵.

のカリキュラムデザイン、教材作成などの基準として欧州内外で広く用いられている. CEFR は A1 から C2 までの 6 つのレベルから成り、ロシア語を含めた多くの言語には、CEFR を参考に作られた検定試験が存在する. CEFR の詳細は Council of Europe (2001), または以下の URL を参照されたい:

http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/cadre1_en.asp

² CEFR-J とは、日本の英語教育における利用を目的に構築された、CEFR に基づく新しい英語能力の到達度指標である (参考 URL: <http://www.cefr-j.org/cefrj.html>). 投野(編) (2013)はそのガイドブックである.

³ これにくわえて、個別の大学、もしくは個別の言語に対して CEFR を適用した事例も存在するが、その解説は拝田 (2012)が詳しい.

⁴ TORFL が設定する各レベルの導入語数は以下の通りである:

- | | | |
|------------------------|-------------------------|------------------------|
| a. 入門レベル – 約 780 語 | b. 基礎レベル – 約 1,300 語 | c. 第 1 レベル – 約 2,300 語 |
| d. 第 2 レベル – 約 5,000 語 | e. 第 3 レベル – 約 11,000 語 | |

なお、第 4 レベルは教養のあるネイティブスピーカーレベルの言語運用能力を想定しているため、特定の導入語数は設定されていない.

⁵ 大阪大学外国語学部ロシア語専攻では、前身である大阪外国語大学時代の 2000 年度より、TORFL に基づいたロシア語の総合試験が実施されている. 詳細は林田 (2016: 145-148)を参照されたい.

このように、英語以外の言語教育においても CEFR は普及している。

一方で、語彙学習や語彙指導を取り巻く環境には問題が多い：歴史的な観点から振り返ると、外国語教育において語彙学習は軽視されてきた (Meara 1980)。近年主流であったコミュニカティブ・アプローチではコミュニケーションの意味に焦点が当たっており、語彙はそれほど重要な位置を占めてはおらず (Folse 2004: 24), Laufer, Nation (2012: 163)によると、短時間の活動を除けば、語彙指導はその大部分が無視されており、カリキュラムデザインにおいて文法、トピック、タスクよりも序列は後ろである。CEFR の理論的背景にある行動中心主義に立脚して教育プログラムを組む場合、多岐にわたる課題を克服するために多種多様な語彙を受容的に理解するだけでなく、発表的に用いる能力が求められる。だが、教育機関で「語彙指導は体系的に行われることがなく、学習者の個人的努力にゆだねられることが多い」(太田垣 1999: 48)。また、語彙が外国語学習において無視されてきた時代 (cf. Meara 1980)と比べれば、語彙学習への注目度は高まってきているという指摘もあるが (Bogaards, Laufer (eds.) 2004: VII)⁶、それでも、他分野と比べると依然として関心は低いと言えよう。

この語彙学習への関心の低さ（もしくは語彙学習の研究成果が現場に応用されていない状況）は英語に限った傾向ではない。例えば、山下 (2006: 42)によると、日本語教育においても語彙学習が独立して意図的、体系的に進められることはまれである。ロシア語教育の環境も例外ではなく、語彙学習が教室で行われることはまれである。

これにはロシア語特有の問題が関係している：まず、日本では、多くの場合、ロシア語の授業数が少ないという環境的な問題が存在する (cf. 金子 2016; 黒岩 2016; Подалко 2016; Хаясида 2016)。また、英語とは異なり、ロシア語には大半の学習者が大学入学時から学習を始めるという問題もある⁷。ロシア語教育において「語彙は文法に対して下に位置する」(Хмелевская и др. 1991: 9)と考えられているようであるが、これは、語形変化が豊富なロシア語の学習は形態論がかなりの比重を占めており、学習の初期段階では形態論上の課題が多いためであろう (cf. 堤 2001: 34-35)。第 2 外国語としてロシア語を教える場合、授業の期間は限られており、慣れないキリル文字、名詞の格変化、動詞の活用という項目はより大きな課題となる (Хаясида 2016: 27)。通常、限られた授業時間内に語彙を取り上げる余裕はなく、多くの場合、語彙学習は教室外で行われる。

⁶ Nation (2011)も同様に、近年、語彙学習への関心が高まってきていると指摘している：Nation (2011)によると、過去 120 年の間になされた語彙学習研究の 30%がここ 12 年に集中しており、当分野の研究状況は激変している。

⁷ 高等学校におけるロシア語の開設に関しては林田 (2014)が全国規模の実態調査を行なった。それによると、北海道で 11 校、関東で 6 校、東北・中部で 7 校がロシア語の授業を開講している。このように、現状、高等教育機関においてロシア語が普及しているとは言えない。また、開講しているほとんどの高等学校が第 2 外国語（選択必修 / 自由科目）としてロシア語を教えており、十分な学習時間は確保されていない。

重要語彙であってもその用例に十分に触れる機会は非常に少ない。この状況は、程度の大小はあれど専門課程のロシア語教育においても見受けられる。

時間的な制約以外の問題もある。先行研究が多い英語の語彙学習法の成果は外国語教育全体へ寄与しているが、形態的・統語的に英語と大きく異なるロシア語にそれをそのまま応用することは難しいと思われる。例えば、英語の高頻度⁸2,000語はテキストの80%をカバーするため、学習者がまず覚えるべき汎用性の高い語彙群とされるが (cf. Nation 2001), この考えをそのままロシア語の語彙学習に適応することはできない。5章を通して詳細に述べるが、新しい概念・語彙素の形成に際してロシア語は統合的な度合いが強く、接頭辞や接尾辞などの付加による派生に依存する (例えば、英語の句動詞は、ロシア語では派生語で実現される場合が非常に多い: *go in* 「入る」, *go through* 「通過する」は、ロシア語では *ходить/hodit'*⁹ 「進む」に接頭辞 *в-/в-*¹⁰ が付いた *входить/vhodit'* で表現される。このような対応例は頻繁に見受けられ、ロシア語には極めて多くの派生語が存在していると思われる (後述の 1.2.1. で説明する))。結果、英語の 2,000 語とロシア語の 2,000 語の知識が許容する言語活動には差があると推測される。言語によって覚えるべき基本語彙の数は異なっていて然るべきであるが、この点は見落とされがちであり、英語以外の諸言語の導入語彙数は横一列で議論されてしまう場合がままある¹¹。ロシア語にはロシア語特有の言語的特徴があるため、それを考慮した、もしくは活かした語彙学習ストラテジーが検討されなければならない。つまり、ロシア語の語彙学習にはロシア語に特化した何らかの手法が反映されていなければならないのである。

上記で言及した問題を総括すると、まず、ロシア語教育は時間的な制約が厳しい。そして、これまでにロシア語に特化した語彙学習法が検討されてこなかった。したがって、現状求められるのは、ロシア語の言語的特徴を考慮した、効率的な語彙学習法の検討・確立である。

1.2. 本稿の目的 (ロシア語に特化した効率的な語彙学習法の検討)

本稿は、ロシア語の語形成における形態的手法の豊富さに着目し、効率的な語彙力増加の一手段として派生接辞を用いた学習法を言語学的な観点から検討・提案する。

⁸ 高頻度語とは、あるテキスト内において頻繁に生起する語を指す。高頻度語と語彙学習の関係は深い：高頻度語を含む基本語は、「外国語または第2言語としての英語使用か、話し言葉または書き言葉の英語使用か、一般的または専門的な目的での英語使用かに関係なく、すべての学習者に不可欠である」(Nation, Hwang 1995: 36)。

⁹ キリル文字の翻字法については、1.4. で言及する。

¹⁰ 本稿における派生接辞の表記方法は、主に Ефремова (1996) の記述に従う。

¹¹ 現在、多言語教育推進研究会が高等学校における複数外国語の必修化に向けて、英語以外の外国語の学習指導要領 (JALP 多言語教育推進研究会 2016) を提言している。その中で、各言語の導入語彙数はフランス語、中国語、ドイツ語、ロシア語に共通して 1,000 語程度と定められている。

では、ロシア語教授法の枠組みにおいて語形成はどのような位置を占めてきたのであろうか。語形成の分野は言語学的な分析から得られた成果が多く、接頭辞や接尾辞といった派生接辞の記述は整備されている (e.g. АН СССР 1960, 1980; Земская 1973, 2007; Ефремова 1996; Улуханов 1996; Янко-Триницкая 2001). また、言語学的な分析の副産物として、ロシア語教育における接頭辞学習の必要性に言及した研究もある (e.g. Янда 2012; Janda et al. 2013; Кузнецова, Янда 2013)¹².

ただ、語形成の知識を活かした語彙学習の有用性を客観的に、言語学的に示した研究は、著者の知るところではまだ存在しない。Плотникова (2011: 4)は「学術的・学術教授法的な文献において、外国語としてのロシア語学習を目的とした語形成の記述はかなり小さな位置を占める」と述べている。日本の教材においても同様に、語形成への言及はほとんど見られない。

そこで、本稿では、ロシア語の語彙力増加に派生接辞の学習が実際に有効であることを示す「客観的なデータ」の獲得を目指す。さらに、主に応用言語学的な観点から、ロシア語の派生接辞の記述を整備し、教材に語形成の記述を盛り込む根拠を提示する。これを踏まえた上で設定した本稿の具体的な研究設問は、以下の通りである。

(1) 本稿の研究設問

- a. 派生接辞学習による語彙力増加の数量的確認
- b. 学習価値の高い派生接辞の選定
- c. 学習価値の高い意味の選定 – 動詞接頭辞 *нпо-/pro-*を例に –
- d. イメージ・スキーマと放射状カテゴリーの記述整備 – 動詞接頭辞 *нпо-/pro-*を例に –

ここでは a.~d.の概要に触れる：これら 4 つの研究設問は互いに関係しており、本稿は a., b., c., d. といった流れで、積み上げ式に効率的なロシア語の語彙学習法を検討する。まず、Russian National Corpus (以下、RNC) の頻度データを用いて¹³、派生接辞の学習がロシア語の語彙力増加に実際に有効であることを言語学的に・数量的に確認する (1.2.1.)。次に、学習価値の高い派生接辞を生起頻度と実質的生産性¹⁴の観点から選定する (1.2.2.)。そして、動詞接頭辞 *нпо-/pro-*を分析対象

¹² Janda et al. (2013)の研究は 7.4.で言及する。

¹³ 現在、「コーパスの分析技術は、特定領域の専門家に属するものとは考えない傾向が強まり、言語学全体を通して重要な研究資源となっている」(McEnergy, Hardie 2012: XIV)。例えば、コーパス言語学は機能主義に属する分野と親和性が高い (cf. Deignan 2005; 中本, 李(編) 2011; McEnergy, Hardie 2012)。現在、コーパス言語学はすでにそれ単体としてだけでなく言語学全体に資源を提供する分野として大きな役割を果たしている。

また、Paul Nation などの研究が示すように (e.g. Nation 2001, 2004)、語彙学習の分野でもコーパスから得られる頻度データが研究資料として用いられており、コーパス言語学は応用言語学も適応の射程に納めている (外国語教育とコーパスの関係は 3.1.にて詳細に扱う)。

¹⁴ 実質的生産性とは「当該の派生接辞が含まれる派生語の個数」を意味する (新たな派生語を形成する潜

として、自作の 100 万語コーパス内において意味毎の生起頻度を確認し、学習上覚えるべき、学習優先度の高い意味の選定を行う (1.2.3.)。同時に、多義的な接頭辞の意味学習を念頭において、*npo-/pro-*が持つイメージ・スキーマと放射状カテゴリーの記述を整備する (1.2.4.)。

以下で、研究設問の順に沿ってどのように本稿が論を進めていくのかを概観する。

1.2.1. 研究設問 a: 派生接辞学習による語彙力増加の数量的確認 (5 章)

ロシア語は語形成における形態的手法が豊かであり、新しい概念・語彙素の形成は主に接頭辞や接尾辞といった派生接辞の付加によって行われる。したがって、ロシア語における派生語の含有量は多いと推定される。そこで、5 章では、派生接辞の知識がどれだけ語彙力増加に寄与するのかを言語学的に、数量的に確認する。その際、主に英語の語彙学習研究を参考にして、テキストカバー率 (text coverage)¹⁵という指標を分析に導入する。

ロシア語は特定語数によるテキストカバー率が英語と比べて大幅に低い。以下で、RNC の Main Corpus (以下、RNC-M)¹⁶、英語の British National Corpus (以下、BNC)、そして Brown Corpus において、高頻度語がどれだけのテキストカバー率を実現するのかを確認する¹⁷。

在的な生産性ではない)。詳細は 6 章で述べる。

¹⁵ テキストカバー率とは、テキスト内の既知語の割合を示す指標で、1,000 語、2,000 語といった特定の語数がどれだけテキストに含まれているのかを表す。例えば、この指標は、テキストに含まれる 95～98%の語彙がカバーできていれば(既知語であれば)、内容の理解を伴ったリーディングが可能となる、特定の 5,000 語を知っていればテキストの内容を理解できる、といった可読性 (readability) や閾値説 (threshold level hypothesis) の研究に用いられる (e.g. Laufer 1989, 1992, 1997; Hirsh, Nation 1992; Carver 1994; Hu, Nation 2000; 小森他 2004)。

他にも、テキストカバー率は語彙リストの有効性や汎用性を示すために、そこに含まれる特定語数の語彙がテキストをどれだけカバーするのか、といった指標としても用いられる (e.g. Sutarsyah et al. 1994; Coxhead 2000; Nation 2001; Cobb, Horst 2004; Nation 2004; Browne 2013, 2014)。テキストカバー率は 5.1. で詳細に扱う。

¹⁶ RNC-M の総語数は約 9,200 万語である。このコーパスは主に書き言葉のテキストで構成されており、話し言葉のテキストは全体の 1%に満たない。本稿では、RNC-M を書き言葉コーパスとして扱う (詳細は、3.3.5.参照)。

¹⁷ 本稿では、パーセンテージの数値は小数点第一位、または第二位まで表示する (小数点第一位までの数値しか得られないデータが 1 つでもあれば、それに合わせて他のデータも小数点第一位までしか記載しない)。

表 2. ロシア語・英語コーパスにおける特定語数によるテキストカバー率（語の単位：レマ¹⁸）

語数 (高頻度語の数)	ロシア語	英語	
	RNC-M ¹⁹	BNC ²⁰	Brown Corpus ²¹
1,000 語	60.9%	70.8%	72.0%
2,000 語	69.4%	77.5%	79.7%
3,000 語	74.1%	80.9%	84.0%
4,000 語	77.2%	83.0%	86.7%
5,000 語	79.5%	84.3%	88.6%

RNC-M の高頻度 1,000 語と 2,000 語は、コーパスを構成するテキストのそれぞれ 60.9%、69.4% をカバーする。この結果を単純化して捉えると、仮に学習者が高頻度 1,000 語をすべて知っていた場合、テキストの 60.9%の語彙は既知語となる。可読性の研究に従えば、このテキストカバー率が示す語彙力では、理解の伴ったリーディングなどの言語活動は難しい（5.1.参照）。一方で、英語の高頻度 2,000 語はテキストの約 80%をカバーする。

つまり、RNC-M の高頻度 2,000 語は、8～10%近く英語のそれよりもカバー率が低いのである。英語の 2,000 語とカバー率で並ぶのに、ロシア語は 2 倍以上の 約 4,000～5,000 語を要する。単純化して考えた場合、この数値の差は、テキストの内容を理解するのにロシア語学習者はより多くの語を覚えなければならない、ということを意味する。

佐山 (2013, 2014)は、これまでの研究を通して、カバー率の差は英露が異なるやり方で概念・語彙素を表現するために生じているという考えに至った。程度の問題ではあるが、ロシア語と比べると、英語は概念・語彙素の数を増やす手段として語連続という分析的な手法を生産的に用いる傾向にある。つまり、英語は既存の語の組み合わせで概念・語彙素を表し得る。一方、ロシア語はこれらの数を増やす手段として派生という統合的な手法を用いる。概念・語彙素を表す際にその都度派生語を形成していくのである。例えば、英語の完了体²²、受動態、句動詞/動詞句はロシア語では派生語として表現されることが非常に多い。ロシア語が派生語を形成しているのに対し、英語は語を形成するのではなく、語の連続で多くの概念・語彙素を表している。結果、ロシ

¹⁸ レマ (lemma) とは、語幹と品詞を同じくする各種の表記形を包含する基準形を指す (Francis, Kučera 1982: 3-4; 石川 2008: 78)。つまり、レマは語形（屈折形）を集約した単位である。例えば、レマ単位で語を捉える場合、*walk* のレマは、*walk, walked, walking, walks* から構成される (Baker et al. 2006: 104)。なお、レマは後述の議論に深く関係するため 2.1.3.にて詳細に言及する。

¹⁹ RNC-M のテキストカバー率は Ляшевская, Шаров (2009: 1063-1064)の記述に基づく。

²⁰ BNC のテキストカバー率は、Adam Kilgarriff が公開している頻度リストを元に著者が計算した (URL: <https://www.kilgarriff.co.uk/>)。

²¹ Brown Corpus のテキストカバー率は、Nation (2001: 15)がまとめたデータを引用した。

²² ロシア語学では伝統的にアスペクト (aspect) に対して「体」という用語を用いるが、本稿もそれに倣う。

ア語内の派生語の数は多くなる。英露のこの違いが特定語数によるカバー率の差に繋がったのである。

上述の考察から、ロシア語の語彙力増加の一つの手段として派生接辞の学習が挙げられるが、次に、その効果を数量的に確認するための分析を行う。具体的には、英語の先行研究 (Bauer, Nation 1993; Coxhead 2000; Nation 2001, 2004; Webb, Nation 2017)などを参考に、RNC-M と RNC の Spoken Corpus (以下、RNC-S) のレマ単位による頻度データを、本源形 (исходное слово) とその派生語群を 1 つにまとめる word family (以下、WF) ²³ という単位で数え直す。

(2) WF の例 (動詞 *развить/razvit'* 「発達させる」を例に)

*развить, развил (-ла, -ло, -ли), разовью (-ёшь, -ёт, -ём, -ёте, -ют), развив, развей, развейте... /
развиться, 「発達する」, развивать 「発達させる」, развитие 「発達」, развитой 「発達した」,
высокоразвитый 「高度に発展した」, переразвить 「発達させすぎる」,
переразвиться 「発達しすぎる」 + それぞれの語形 (屈折形) ... → «развить» の WF²⁴*

上述の例には、本源形である *развить/razvit'* とその派生語群が挙げられているが、これらは WF 単位で語を捉えると 1 語として扱われる。本稿では、本源形とその派生語の集約作業 (WF 化) を、RNC-M と RNC-S において実際に高頻度に生起している語を対象として実施する。

仮に WF 単位で語を捉え、特定語数によるテキストカバー率が大幅に上昇した場合、その結果は派生接辞の学習が効率的に語彙力を上げることを数量的に示している。この分析手法は、派生接辞の知識がどの程度カバー率 (既知語率) を上げ得るかを示しているからである。分析の結果を述べると、WF 単位で語を捉えることによりテキストカバー率は大幅に上昇した。したがって、理論的ではあるが、派生接辞の知識は語彙力増加に効果的であることが確認された。

1.2.2. 研究設問 b.: 学習価値の高い派生接辞の選定 (6 章)

本稿の内容は、言語学と教育学の両方に関係した基礎研究に属するが、前者の成果を後者へ応用するには、両方の領域で求められる条件を満たしていなければならない。言い換えると、5 章の分析から、派生接辞学習は言語学的に語彙力増加に寄与するという結果は得られた。だが、このデータを教育現場で応用するには、さらなる分析と考察が求められる：ロシア語の派生接辞の

²³ WF については 2.1.4. で詳細に言及する。なお、本源形は語形成の頂点 (вершина) に位置する語を指すが (cf. Тихонов 1985), 英語の WF における見出し語 (headword) に相当する (cf. Webb, Nation 2017: 7). 本稿では本源形という用語を使う。

²⁴ *развить/razvit'* の WF の例は Тихонов (1985) の語形成辞典を参照した。

数は極めて多い。Ефремова (1996)の語形成要素辞典には約 1,900 もの接辞が挙げられている。効率性を求める場合、これらすべてが学習上同じ価値を有しているとは言えない。時間的な制約が厳しい状況を考慮すると、実際の言語活動の中で頻繁に会う派生接辞は覚える価値が高く、まれにしか出会わない派生接辞は無視してもよい、または後の学習項目にしても良いと考えられる。

そこで、6 章では、数ある派生接辞の中で具体的にどれが高頻度に用いられており、かつ、実質的生産性が高いのかを確認する。そして、その結果に基づいて語彙力増加に役立つ派生接辞を選定する。この分析結果の数値が高い派生接辞は、実際に学習者が出会う機会が多いため、語彙力増加の目的で覚える価値は高い。

具体的な分析手法に関しては、Bauer, Nation (1993)などの先行研究を参考に、コーパスの高頻度域に含まれる派生語からすべての派生接辞を抽出し、それぞれの生起頻度と実質的生産性を計測する。その数値に基づいて学習価値が高い、学習の優先順位が高い派生接辞を選定する。分析の結果を述べると、派生接辞は生起頻度と実質的生産性が高いもの、中程度のもの、低いものに分けられ、連続体を成して存在していることが確認された。

1.2.3. 研究設問 c.: 学習価値の高い意味の選定 – 動詞接頭辞 *npo-/pro-*を例に – (7 章)

6 章の分析から、特定の派生接辞、特に動詞接頭辞の生起頻度と実質的生産性の値が高いことがわかった。したがって、これらを優先的に学ぶことにより効率的に語彙力を伸ばすことができる。ただし、語彙学習の時間が確保しづらい環境を考慮した場合、高頻度で、かつ、実質的生産性の高い派生接辞を選定してリスト化しただけでは不十分である：ロシア語の派生接辞、特に接頭辞は多義的であるが、現状、日本の教材では移動動詞 (verbs of motion) の学習項目として接頭辞の空間的な意味が導入されるだけにとどまる。当然、実際の言語使用においては、それ以外の意味でも接頭辞は使われているため、この提示の仕方では不十分である。したがって、語彙学習の検討に際しては、学習価値の高い派生接辞を選定するだけでなく、さらに、学習価値の高い意味まで絞り込むことが望まれる。

つまり、教育という文脈においては辞書のように接頭辞の意味を列挙するのではなく、学習に特化した意味の記述整備が求められる。7 章では、6 章の分析において生起頻度と実質的生産性が高く、これまであまり研究されてこなかった動詞接頭辞 *npo-/pro-*を分析対象として、自作の 100 万語コーパスにおいてそれぞれの意味毎の生起頻度を計測する。この分析により数値の高かった意味は、言語活動に際して学習者が出会う機会が多いため、優先的に覚えるべきものであると言える。分析の結果を述べると、*npo-/pro-*の意味群には、頻繁に使われているものとそうでないものがあり、学習に際して各意味の重要度は異なるということがわかった。

1.2.4. 研究設問 d.: イメージ・スキーマと放射状カテゴリーの記述整備

– 動詞接頭辞 *npo-/pro-* を例に – (7 章)

5 章～7 章の分析から得られたリストや記述の整備は、語彙力増加を目的とした派生接辞学習を検討する上での根拠として機能する。7 章の後半では、これまでの分析・考察によって得られた結果を踏まえて、動詞接頭辞 *npo-/pro-* のイメージ・スキーマ (image schema) と放射状カテゴリー (radial category) を検討する。

接頭辞の意味はどのように導入すれば学習者の負担が減り、効率的な学習が促進されるのだろうか。本稿では、多義的な接頭辞の意味学習を促進する方略としてイメージ・スキーマの利用を検討するために、まずその記述の整備を行う：イメージ・スキーマは身体的・空間的経験において繰り返し生じるパターンを抽出したものである (Johnson 1987)。このイメージ・スキーマは意味拡張の動機付けとして機能する場合がある。例えば、Johnson (1987) は英語の不変化詞 *out* に関して、以下のようなイメージ・スキーマを挙げている²⁵。

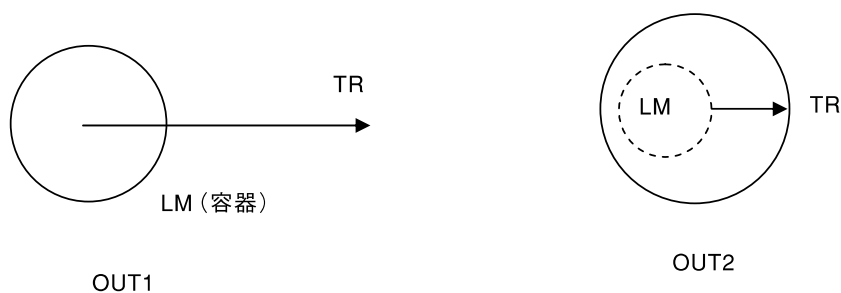


図 1. 不変化詞 *out* のイメージ・スキーマ

(谷口 2011: 66)²⁶

(3) OUT1 と OUT2 の用法に対応する例²⁷

a. OUT1: Get *out* of the car.

「車から出なさい。」

b. OUT2: Roll *out* the red carpet.

「赤いカーペットを広げなさい。」

(谷口 2011: 66)

²⁵ 図 1 は Johnson (1987: 32-33) を谷口 (2011: 66) がわかりやすく改変したものである。

²⁶ 例文の引用情報は以下のように記載する：

- 研究書や論文などからの引用：書誌情報と必要であればページ数を記す。
- web からの引用：Timberlake (2011) に倣って“on the web”と記す。
- コーパスからの引用：インターネット経由で RNC や BNC のサイトから例文を引用する場合は「(コーパス名) より引用」と記し、アクセス日の情報を付す。
- 電子版の文学作品からの引用：出典のサイトを註で示した上で、「(題名) より引用」と記す。
- 自作の例文：母語話者に間違いがないかの確認を取った上で引用し、「自作の例文」と記す。

²⁷ 日本語訳は著者が追加した。

OUT1 は、LM（容器）の中側から外側へ TR が移動しているという *out* の基本的な用法であるのに対し²⁸、OUT2 は TR の元の状態を LM とみなしており、そこから外側へ広がる移動を表しているが、これは OUT1 からイメージ・スキーマを変形することで生じたものである（谷口 2011: 65）。

イメージ・スキーマの外国語教育への導入に関して、谷口（2011: 66）は、「特に空間的意味を根源として多様な拡張を示す前置詞や不変化詞の意味を明確に提示することができ、学習者にとっておおいに理解の助けとなることが期待される」と述べている。同様のことがロシア語の動詞接頭辞にも当てはまるであろう。

イメージ・スキーマは動詞接頭辞の意味理解を促進すると思われるが、これだけでは意味群を列挙して提示することには変わりはない。そのため、接頭辞の各意味を覚えやすくするために放射状カテゴリというモデルを検討・作成する。図 1 の OUT2 は、OUT1 からイメージ・スキーマの変形を経て生じており、両者の間には関係性が感じられる。このように、言語単位の各意味は互いに繋がって存在していると認知言語学では考える：Lakoff (1987) はプロトタイプ理論（7.4.1. 参照）を用いて多義語の分析を行っているが、その意味群は互いに関係し合っているとし、その結果として放射状のカテゴリを成して存在しているとした。これを放射状カテゴリという。多義語に含まれる各意味は、互いがネットワークのように繋がっており、メタファー、メトニミー、イメージ・スキーマの変形などによって拡張していく。この意味の派生関係を示すのに援用されるのが、放射状カテゴリという認知言語学のモデルである。

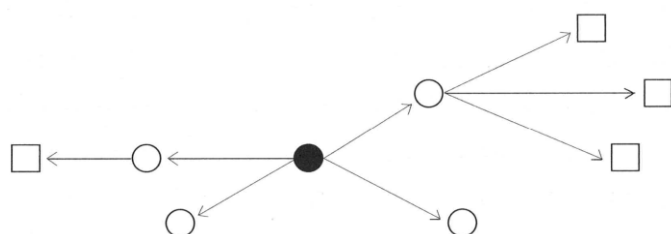


図 2. 放射状カテゴリのイメージ図

（辻（編）2013: 340）

プロトタイプ的な成員（黒丸）は放射状カテゴリ内で中心に存在し、そこからメタファー、メトニミー、そしてイメージ・スキーマの変形などにより 2 次的な成員（白い丸）が生じる。そして、その周囲に 3 次的な成員（白い四角）が位置づけられている。

本稿では *npo-/pro-* を例として、プロトタイプの意味からどのようにして周辺的な意味が拡張しているのかを認知言語学の観点から検討し、放射状カテゴリを作成する。この認知的なモデルは、理論的ではあるが、多義の理解を促進すると推測される。7 章ではその記述を整備し、今後の実証研究の土台を築く。

²⁸ Langacker (1987) に従い、イメージ・スキーマ内で移動する物体に対して Trajector (TR), 移動の起点となる物体に対して Landmark (LM) という用語を用いる。詳細は 7.1.2.2. で言及する。

1.3. 本稿の構成

2 章から 4 章までは後述の議論に必要な用語，概念，背景知識，先行研究などを紹介・導入する。そして，5 章から 1.2.1.～1.2.4.で触れた研究設問の分析，考察，議論を行う。

まず 2 章にて，トークン，タイプ，レマ，WF といった 4 つの「語」の単位について説明する。この知識は，コーパスの総語数や特定の語数によるテキストカバー率といった指標を理解するために不可欠であり，また，どれだけの語彙を学習者に提示すべきかといった応用言語学的な研究の理解にも必要である。続く 3 章ではロシア語のコーパスとそれに基づいた頻度辞書について触れる。本稿は全体を通して語の生起頻度を分析対象とし，その結果を根拠として効率的な語彙学習法を検討する。そのため，どのロシア語コーパスを頻度の分析に用いるかが極めて重要な前提問題となる。そこで，4 章では，前章での考察を踏まえて 1.2.1.～1.2.4.で掲げた研究設問の分析にどのコーパスが最適かを，主にコーパス規模の観点から分析・考察する。そして，5 章から 1.2.で言及した本稿の研究設問の分析，考察，議論に移る：RNC-M と RNC-S が提示する頻度データを用いて，派生接辞の学習が語彙力の増加に役立つということを言語学的に，数量的に確認し（5 章），さらにどの派生接辞の生起頻度が高く，かつ，実質的生産性が高いのかを調査する（6 章）。次に，動詞接頭辞 *npo-/pro-* を分析対象として学習価値の高い意味の選定を行う。同時に，多義的な接頭辞の意味学習を検討する際に必要となる記述を整備するために，*npo-/pro-* を対象としてイメージ・スキーマと放射状カテゴリーを作成する（7 章）。最後の 8 章にて，本稿の分析から得られた研究成果を総括し，今後の課題に言及する。

1.4. 表記

本稿ではロシア語の例文を提示する際，1 段目にキリル文字，2 段目に ISO 式翻字(transcription)，3 段目にグロス，そして 4 段目に日本語訳を提示する。ISO 翻字の方式は以下の表の通りである。

表 3. 本稿における翻字一覧

キリル文字	а	б	в	г	д	е	ё	ж	з	и	й	к	л	м	н	о	п
ISO 式翻字	a	b	v	g	d	e	ë	ž	z	i	j	k	l	m	n	o	p
キリル文字	р	с	т	у	ф	х	ц	ч	ш	щ	ъ	ы	ь	э	ю	я	
ISO 式翻字	r	s	t	u	f	h	c	č	š	ŝ	"	y	'	è	û	â	

本稿におけるグロスの略字は Leipzig Glossing Rules²⁹に準拠しているが、必要に応じて変更を加えている。略号の一覧は以下の通りである。

表 4. グロス一覧

1	first person	NAME	name
3	third person	NE	neuter
ACC	accusative	NOM	nominative
ADJ	adjective	NUM	numeral
ADV	adverb	PART	particle
CONJN	conjunction	PASS	passive
DAT	dative	PFV	perfective
DTV	determinate verb	PL	plural
GEN	genitive	PRED	predicate
IDTV	indeterminate verb	PRN	pronoun
IMP	imperative	PRP	preposition
INF	infinitive	PRS	present
INS	instrumental	PST	past
IPFV	imperfective	PTCP	participle
LOC	locative	SF	short form
M	masculine	SG	singular
N	noun	V	verb

なお、本稿では、議論に必要な部分にはグロスを付さないこととする。

²⁹ Leipzig Glossing Rules の詳細は以下のサイトを参照されたい：
<https://www.eva.mpg.de/lingua/resources/glossing-rules.php>

2 章. 語数の計量の単位

2 章では、後述の議論のために、語数を計量する際に用いられる単位を 4 つ導入する。本稿の 5 章では、ある一定量の高頻度語や基本語がテキストの何パーセントをカバーするのか、といった分析・考察を行う。その際、「語」の単位をあらかじめ規定しておかなければ議論が成立しない。

現在、多言語教育推進研究会³⁰が日本の高等学校における複数外国語の必修化に向けて、ロシア語を含む英語以外の外国語の学習指導要領を提言している。その中で語彙指導の方針も検討されているが、ロシア語の導入語数は 1,000 語程度とされている (JALP 多言語教育推進研究会 2016: 48)。また、ロシア語と同様に、フランス語、中国語、ドイツ語の導入語数も 1,000 語程度と定められている。一方、英語の導入語彙数は、例えば、平成 21 年度の学習指導要領によると、中学校で 1,200 語、高等学校で 1,800 語と決められており、中高合わせると 3,000 語程度となる (文部科学省 2009: 5)。

上述の導入語数の「語」とはどのような単位を想定しているのでしょうか。例えば *play, plays, playing, played* をそれぞれ別物として 4 語と数えているのだろうか。仮にこの数え方をロシア語に当てはめると、複雑な形態論を持つロシア語は語形（屈折形）が多いため、多言語教育推進研究会が提案する導入語彙数で表せる内容は非常に少ない。中学校学習指導要領 (文部科学省 2008: 40) は、英語の「語数については、綴りが同じ語は、品詞にかかわらず 1 語と数え、動詞の語尾変化や、形容詞や副詞の比較変化などのうち規則的に変化するものは原則として 1 語とみなすことができる」と、語の定義について補足している。この一文だけでは不明瞭な部分もあるが、例えば、動詞 *play, plays, playing, played* などの語形は、まとめて 1 語と捉えても良いと推測される³¹。語数の計量に際してこの単位を採用すれば、ロシア語の語形は一気に集約され、導入できる語数は大幅に増える。一方で、高等学校学習指導要領 (文部科学省 2009: 38) は、「語の数については、活用形を全体として 1 語と数えたり、派生語をまとめて 1 語と数えたりすることもできる」としており、「語」の単位をより広く捉えてもかまわないという旨の記載がある。例えば、*player* 「選手」、*replay* 「リプレイする」は明らかにその内部に *play* を含んでおり、前者と後者はこの語から派生しているが、上記の基準の元では、これらはまとめて 1 語と捉えても良いようである。ロシア語は語形成における形態的手法が豊富であり、基本語の中にも派生語は数多く存在するため、1

³⁰ 参考 URL: http://jalp.jp/wp/?page_id=1069

³¹ 「綴りが同じ語は、品詞にかかわらず 1 語と数え」の部分が説明不足であろう (cf. 高野 2010: 23)。綴りが同じ語とは、同形異義語 (例: 名詞 *bear* 「熊」と動詞 *bear* 「耐える」) を意味するのか、品詞転換による派生語と派生元の語 (例: 名詞 *conduct* 「行動」と動詞 *conduct* 「行動する」) を意味するのか、がわかりづらい (英語にはある語が複数の品詞に属している場合あり、これは品詞転換 (conversion) という現象による)。

語の単位に派生語まで含めると、さらに導入できる語数は増えることになる。このように、カリキュラム、教材、語彙リストなどで採用している「語」の単位が異なると、それに伴って語彙の導入量の多寡も異なるのである。

導入語数の議論を成立させる前提として、語数の計量における「語」の単位を明確にしておかなければ、分析から得られる結果に大きな違いが生じてしまう (望月他 2003: 3)。そのため、研究で用いる語の単位はあらかじめ規定しておく必要がある (Bauer, Nation 1993: 265)。実際、コーパス言語学に属する研究の多くは「語」の生起頻度を数えるという記述統計的な分析を行っている。テキストに含まれる「語」の頻度を数えるには、それに先立って「語」を計量する単位を決定しなければならない (例えば、人の身長を測る際、センチかフィートのどちらを用いるかによって得られる結果が異なる (石川 2008: 74))。

では、「語」はどのように定義されるのであろうか。Harley (2006)は以下の4つの案を示し、どれも不十分な記述であると述べている。

(4) 「語」の定義の案 (Harley 2006: 1-4)

- a. 定義 1: 連続して、スペースなしで書かれる文字列
- b. 定義 2: 休止なしで、一続きに発音される音の連続
- c. 定義 3: 両側に休止を伴って、それ自体で発音され得る音の連続
- d. 定義 4: 言語において考え (物事、性質、関係など) を表現するために使われ、それ自体が意味をもつ発話の最小単位を構成する声音の連続、もしくは、そのような一つの音 (Oxford English Dictionary より引用)

まず a. は書き言葉にのみ焦点を当てている。「言語は記述される前から語を有している」 (Harley 2006: 2) ことから、a. の定義は間違いである³²。b. に関しては、話す際に「ふつう語と語の間に休止はまったくない」 (Harley 2006: 2) という点を考慮していない。c. は、*How are you?* が休止を伴って発音されないことから不十分な定義であると言える (Harley 2006: 2)。d. はしっかりとした語の定義に一番近いと思われる (Harley 2006: 3)。ただ、この定義は1語を超えた単位である句動詞を考慮していないため (高野 2010: 23)、改良が必要であろう。結局のところ、語の認定に関して、研究者間に統一した見解は存在しないのである (cf. Gardner 2007)。

このように、「語彙研究において答えるのが最も難しい問題の一つが、『語とは何か?』」 (Nation, Meara 2002: 35) という問いなのである。「語を厳密に定義しようとする」と最終的には収拾がつかない

³² 他にも、a. の定義には、日本語のように分かち書きをしない言語を考慮していないという問題もある。

くなくなってしまう」(高野 2010: 10). そのため、自らの研究目的に合わせて、どのような語の単位が考えられるのか、といった議論や考察をする方が賢明である (cf. 高野 2010: 10). 1 章で言及したように、本稿ではテキストカバー率の上昇度に基づいて派生接辞学習の効果を確認する。そのため、まず分析に際しての「語」の単位を規定して、それに基づいてテキストを計量すると明言しなければならない。

そこで、2 章では Nation (2001), 望月他 (2003), 石川 (2008, 2012), Webb, Nation (2017)などを参考にして、主に応用言語学・英語語彙論の観点から「語」の単位について言及する：まず 2.1.にて英露の例を示しながらトークン (2.1.1.), タイプ (2.1.2.), レマ (2.1.3.), WF (2.1.4.) といった 4 つの語の単位を概観する。そして、2.2.ではこれらの単位を用いて実際のテキスト分析を行い、「語」の単位によって結果として得られる数値に大きな差が生じることを確認する。その際、ロシア語で書かれた文学作品と、その英語版をトークン、タイプ、レマ単位で比較することで、英露の言語的特徴を浮かび上がらせる（この分析は、ロシア語は派生接辞を用いて統合的に概念・語彙素の数を増やすという 5.2.の考察に繋がる）。続く 2.3.では、これらの単位がどのような言語研究に適用可能かを考察し、さらに、語彙学習という領域でどのように用いられているのかに言及する。最後に、2.4.にて「語」の単位について総括する。

2.1. 語の単位

英語やロシア語で書かれたテキストを数量的に分析する際、まず基本的な「語」の単位はスペースで区切られた文字連鎖として捉えられる³³。例えば、英語の *this book* は、*this* と *book* の間にスペースが挿入されているので、2 語で構成されていることが直感的に理解できる。ロシア語も同様に分ち書きをする言語である (*эта книга*/*èta kniga*「この本」は、*эта*/*èta*「この」と *книга*/*kniga*「本」の 2 語で構成されている)。その上で、応用言語学、もしくは語彙論の観点から、いわゆる語形（屈折形）や派生語をどう扱うかによって「語」の単位はさらに細分化される。

主だった語の単位として、次の 4 つが挙げられる (cf. Nation 2001: 7-8; 望月他 2003: 3-13; 石川 2008: 74-83, 2012: 140-144; Webb, Nation 2017: 7, 14).

³³ 日本語は分ち書きをする慣習がないため、語の単位の設定は英語やロシア語よりも複雑である。日本語の語の単位認定に関しては長単位と短単位といった解釈が可能であるとされ、現代日本語書き言葉均衡コーパスではその両方が採用されている
(参考 URL: http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/morphology.html).

(5) 「語」の単位の種類

- a. トークン (英: token / 露: токен)
- b. タイプ (英: type / 露: словоформа)
- c. レマ (英: lemma / 露: лемма)
- d. ワードファミリー (英: word family / 露: словообразовательное гнездо)

これら4つの単位は、コーパスサイズ(総語数)の計量、文学作品や新聞に含まれる語数の計測、特定語彙によるテキストカバー率の分析、学習用語彙リストの作成などにおいて活用され、研究の目的によって使い分けられている。以下で、a.~d.の単位について個別に言及する。

2.1.1. トークン

トークン³⁴は記述統計の最も基本的な単位であろう。トークンは、テキスト内に生起するすべての語形(word form)を単純に数え上げていき、同じ語形が2回以上現れている場合でも、つまり、たとえ重複していたとしても、その都度数え上げる単位を指す(Nation 2001: 7)。

(6) It is not easy to say it correctly³⁵.

[1] [2] [3] [4] [5] [6] [7] [8]

「それを正しく述べることは簡単ではない。」

(Nation 2001: 7)

(6)の文中には語頭が大文字か小文字かの違いはあるものの、下線部のit(Itとit)が2回生起している。だが、トークンという単位の元では、ある語がたとえ重複していても毎回数え上げるのが決まりである。したがって、この文を構成する語を単純に一つひとつ数え上げる。すると、トークン単位の元では、(6)の文は8語で構成されているという結果が得られる。

次に、トークンによる英露の分析例を挙げる(なお、下記例文(7)のaとbは、タイプ、レマ、WF単位による分析にも用いる)。

(7) a. Learn more about the teachers teaching teachers to teach.

[1] [2] [3] [4] [5] [6] [7] [8] [9]

「先生に教え方を教える先生についてもっと学べ」

(on the web)

³⁴ トークンは他に「述べ語数」とも呼ばれる。

³⁵ 例文の下に付されている[]で囲まれた数字は、語を数える際の順番を表す。なお、これ以降の例文に付与された数字も同じ内容を意味する。

b.	Что	ж,	думаю,	делать.	<u>Думал</u> ,	<u>думал</u>	и	придумал.
	Čto	ž,	dumaû,	delat'.	Dumal,	dumal	i	pridumal.
	what	at_all	think-1.SG.PRS.	do-INF.	think-SG.PST.	think-SG.PST.	and	think_of-SG.PST.
	[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]	[8]

「(私は) いったいどうしたらよいのかを考える. 考えて, 考えて, そして思い至った。」

(現行 RNC-M³⁶より引用: アクセス日 2017/12/14)

a.には同一語形の語(下線部の *teachers*)が含まれている. だが, トークン単位では重複している語もその都度数え上げていくのが規則であるため, a.の語数は9語という結果になる. b.の文中には *думал/dumal*「考えた」(下線部の *Думал* と *думал*) が2回現れている. だが, 重複していても毎回数える必要があるため, b.のトークン数は8語となる.

なお, トークン数とは「テキストに現れる語の累計数であり, コーパス総語数もこれによる」(石川 2008: 76). つまり, トークンとはコーパス規模に言及する際に用いられる単位である. 他にも, 「『1頁, もしくは1行にどれくらいの語が含まれているのか?』, 『この本はどれくらいの長さか?』 <...>といった質問に答えようとするのであれば, 計量に使われる単位はトークンである」(Nation 2001: 7).

2.1.2. タイプ

タイプ³⁷という単位の元では, たとえ同じ語形が2回以上生じて, それらを繰り返して数えることはしない. つまり, タイプとは「重複を除いた語種の数である」(石川 2008: 76). あるテキスト内で重複して生起している語形は1語として扱うのである. そのため, テキスト内に含まれるタイプ数は必然的にトークン数よりも少なくなる. (6)をタイプ単位で数えると以下のような結果が得られる.

(6)	<u>It</u>	is	not	easy	to	say	<u>it</u>	correctly.
	[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]	

(引用情報と日本語訳は(6)と同じ)

(6)の文には *it* (下線部の *It* と *it*) が2回現れている. タイプという単位でテキストを数える際,

³⁶ 1章にて, RNC-Mは9,200万語の書き言葉コーパスであると述べた. だが, これはRNC-Mの頻度辞書(Ляшевская, Шаров 2009)が作成された2009年時のデータを指す. その後, RNC-Mは規模を拡大し続け, 現在(2018年1月6日)の総語数は約2億8,300万語である. 本稿では, 現在のRNC-Mを「現行RNC-M」と呼称し, 9,200万語の「RNC-M」と区別する. なお, 現行RNC-Mはweb経由で検索可能であるが, その頻度辞書は編まれていない.

³⁷ タイプは「異なり語数」とも呼ばれる.

重複した語形をその都度カウントしない。したがって、タイプ換算で(6')は7語となる。

次に、英露の(7)をタイプ単位で数えてみると、以下のような結果が得られる。

(7') a.	Learn	more	about	the	<u>teachers</u>	teaching	<u>teachers</u>	to	teach.
	[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]		[7]	[8]
b.	Что	ж,	думаю,	делать.	<u>Думал</u> ,	<u>думал</u>	и	придумал.	
	Čto	ž,	dumaû,	delat'.	Dumal,	dumal	i	pridumal.	
	what	at_all	think-1.SG.PRS.	do-INF.	think-SG.PST.	think-SG.PST.	and	think_of-SG.PST.	
	[1]	[2]	[3]	[4]	[5]		[6]	[7]	

(a.と b.の引用情報と日本語訳は(7)と同じ)

a.では同じ語形（下線部の *teachers*）が2回生起している。タイプという単位でテキストを数えるのであれば、繰り返し文中に現れる語形はあくまで1語として処理される。したがって、a.のタイプ数は8語となる。一方、ロシア語のb.においても、*думал/dumal*（下線部の *Думал* と *думал*）という同一の語形が2回生起している。タイプでb.を数える場合、2つの *думал/dumal* を1語として扱う。その結果、b.のタイプ数は7語へと減少する。

2.1.3. レマ

レマとは語幹と品詞を同じくする各種の表記形を包含する基準形を指す (cf. Francis, Kučera 1982: 3-4; 石川 2008: 78; Browne 2013: 15)。つまり、ある語の各語形を集約した単位がレマである。例えば、動詞 *study*, *studies*, *studied*, *studying* は、レマ単位では **STUDY** に集約される（図3が示すように、通常の表記形と区別するためにレマという概念は大文字で表記される（石川 2008: 78））。

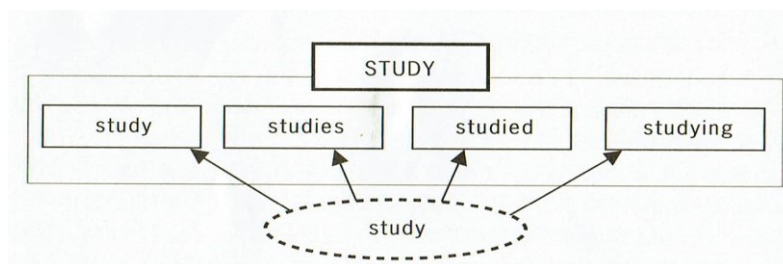


図3. レマのイメージ (石川 2008: 78)

レマは語彙素 (lexeme) と呼ばれることもある (Stubbs 2001: 25)³⁸。両者は概念的に異なっているものの、語を数えるという点においては同様の性質を有している。語彙素（図の破線部）は各

³⁸ 例えば、Browne (2013, 2014)はレマに相当する概念に対して *lexeme* という用語をあてがっている。

次に英露でレマの例を確認する。以下で、「発達させる，開発する」を意味する動詞 *develop* と *развить/razvit'*を通してレマの特性を概観する。

- 次に、(7)をレマ単位で数えると、以下の結果が得られる。

- a.に関して、まず2回生起している *teachers* (下線部) は1つの語として考える(レマ: TEACHER「教師」). また、点線部の動詞 *teaching* と *teach* を1語として数える(レマ: TEACH「教える」). したがって、レマ単位では、a.は7語で構成されている. b.のロシア語の例でも同様に、各語形を1語に集約していく. すると、下線部の *думаю/dumaï*, *Думал/Dumal*, *думал/dumal* が1語に集約される(レマ ДУМАТЬ/DUMAT'「考える」). 結果、レマ単位では、b.の文は6語で構成されている.

20

2.1.4. ワードファミリー

前節のレマは、一言で表すと各語形を1つにまとめた単位であった。WF⁴⁰は、元は Palmer (1931) による語彙の有益な提示法に端を発した概念で (cf. 望月他 2003: 11), 「見出し語 (例: ‘assume’), その語形 (‘assumes’, ‘assumed’, ‘assuming’), そしてその派生語 (‘unassuming’, ‘unassumingly’) で構成される」(Webb, Nation 2017: 7). すなわち, WF はある語の各語形とその派生語を一まとまりとして捉えた, より広く語を集約する単位である (石川 2012: 141).

動詞 *develop* と *развить/razvit'* を対象に, 英露の WF の例を挙げる.

(9) WF の例

- a. *develop* / *developable* 「開発可能な」, *undevelopable* 「開発不可能な」, *developer* 「開発者」, *undeveloped* 「未発達の」, *development* 「発達」, *developmental* 「発達上の」, *developmentally* 「発展的に」, *semideveloped* 「開発半ばの」, *redevelop* 「再開発する」 ...
+ それぞれの語形... → «*develop*» の WF⁴¹
- b. *развить* / *развиться* 「発達する」, *развивать* 「発達させる」, *развитие* 「発達」, *развитой* 「発展した」, *высокоразвитый* 「高度に発展した」, *переразвить* 「発達させすぎる」, *переразвиться* 「発達しすぎる」
+ それぞれの語形... → «*развить*» の WF

a. では動詞である本源形⁴² *develop* とその派生語群が1つにまとめられている。例えば, *develop* に接頭辞の付いた *redevelop* 「再開発する」や, 他の品詞に属する *developer* 「開発者」, *developmentally* 「発展的に」も1つの単位に集約されている。なお, WF にはレマの概念も含まれるので, *develop* とその派生語群の各語形も同一の WF のメンバーとして捉えられる。b. も同様に, 本源形 *развить/razvit'*, そして *развитие/razvitie* 「発達」, *развитой/razvitoj* 「発展した」などの派生語 (+ 語形) が1つの単位にまとめられている。WF とは, ロシア語学でいう *словообразовательное гнездо* 「同一語根を有した語群」の単位に等しいと考えて差し支えない⁴³。

WF 単位で前出の(7)を数えると, 以下の結果が得られる。

⁴⁰ WF は「単語家族」と和訳される場合もある (cf. 石川 2008, 2012).

⁴¹ *develop* の WF の例は, Bauer, Nation (1993: 254) から引用した。

⁴² 1 章で言及したが, WF に含まれる語群の頂点に位置する語を本稿では本源形と呼ぶ。

⁴³ Тихонов (1985) と Козлова (2014) の語形成辞典は, 本源形とその派生語の集合体を *словообразовательное гнездо* と呼称している。また, Евсеева и др. (2007: 234-235) は, *словообразовательное гнездо* はレマよりも広い1語の概念であり, 同一語根の語群をまとめたものであると述べている。これは WF に相当する。

(7''') a. Learn more about the teachers teaching teachers to teach.
 [1] [2] [3] [4] [5] [6]

b. Что ж, думаю, делать. Думал, думал и придумал.
 Čto ž, dumaû, delat'. Dumal, dumal i pridumal.
 what at_all think-1.SG.PRS. do-INF. think-SG.PST. think-SG.PST. and think_of-SG.PST.
 [1] [2] [3] [4] [5]

(a.と b.の引用情報と日本語訳は(7)と同じ)

a.の例では、下線部の *teachers*, *teaching*, *teachers*, *teach* は語根を同じくする語群であり、WF 単位では 1 語として扱われる (*teacher* は、*teach* に接尾辞 *-er* が付いた派生語である)。したがって、WF 換算では、a.の文は 6 語から成る。b.のロシア語の文に関しては、まず各語形を 1 つにまとめる。すると、*думаю/dumaû*, *Думал/Dumal*, *думал/dumal* がレマ ДУМАТЬ/DUMAT' に集約される。次に派生語をまとめると、*придумал/pridumal* は派生元の語である *думать/dumat'* にまとめられる。*придумал/pridumal* は、動詞 *думать/dumat'* に接頭辞 *при-/pri-* が付加された派生動詞 *придумать/pridumat'* 「思いつく」の単数・過去形である。総括すると、WF 単位の元では下線部の *думаю/dumaû*, *Думал/Dumal*, *думал/dumal*, *придумал/pridumal* は 1 語として扱われる。

なお、通常、意味的にのみ繋がりのある語群を語形成の分野内で論じることがはしないが、WF という概念もそれを考慮しない。すなわち、WF という概念は、以下のような形態的な派生関係にない語群を扱わない。

(10) 意味的に繋がりのある語

a. 1) лес	–	2) дерево	b. 1) книга	–	2) страница	c. 1) армия	–	2) солдат
les		derevo	kniga	–	stranica	armiâ	–	soldat
forest		tree	book		page	army		soldier
「森」		「木」	「本」		「ページ」	「軍隊」		「兵士」

(Янко-Триницкая 2001: 223)

a.の 1) *лес/les* 「森」と 2) *дерево/derevo* 「木」は前者が上位概念で、後者が下位概念である。両者は形態的な派生関係にはない。同様のことが b.と c.にも当てはまる。これらはメンタルレキシコン (cf. 門田(編) 2003) の中でおそらく紐づいて存在していると推測されるが、WF はあくまで形態的な派生に基づいた概念であるため、(10)で見られるような意味的繋がりを考慮しない。

2.2. トークン, タイプ, レマ単位によるテキストの分析例

ここでは、語の単位によってテキストの分析結果がどの程度異なるのかを確認する。具体的には、トークン, タイプ, レマ単位で実際にロシア語のテキスト（文学作品）に含まれる語を数える⁴⁴。また、比較対象として、これらの文学作品の英語版に対しても同様の分析を行い、各単位の計量を通して英露の言語的特徴を観察する。

テキストの分析には Sketch Engine⁴⁵を用いる：Sketch Engine は web 経由で使用でき、自らのコーパス作成や検索, レマ化, 語彙リストの作成, コンコーダンス, シソーラス検索, 共起語の調査などといった、語の分析に必要な様々な機能を提供してくれる (cf. Kilgarrieff et al. 2004; Tiberius, Kilgarrieff 2009; Kilgarrieff et al. 2014)。現在では英語だけでなく、ロシア語, ウクライナ語, チェコ語, ポーランド語, ブルガリア語といったスラヴ語で書かれたテキストの分析も可能であり、かつ, web 上にはこれらの言語の巨大コーパスが検索可能な状態で公開されている。その中でも, TenTen シリーズ⁴⁶のコーパスは規模の点で特筆に価する(英語の enTenTen13 は総語数が約 197 億, ロシア語の ruTenTen11 は総語数が約 145 億にも昇る)。Sketch Engine は有料サイトであるが, 現在ロシア語の語彙分析に使える最も高性能なツールであろう⁴⁷。

⁴⁴ 現状, WF 単位でロシア語のテキストを分析するソフトウェアは存在しない。そのため, WF 単位でのテキストの分析は古典的な手作業に頼るしかない。なお, 5 章の分析では一定数の語に対象を絞る, レマ単位の頻度データを WF 単位で数え直すが, これは手作業で行った。

⁴⁵ Sketch Engine の URL は以下の通りである：<https://www.sketchengine.co.uk/>

⁴⁶ TenTen とは 10 の 10 乗を意味し, このプロジェクトでは 100 億語程度のコーパスを自動作成することを目指していた (石川 2012: 18)。現在では, TenTen シリーズのコーパスは 30 以上の言語に用意されている。詳細は以下の URL を参照されたい：<https://www.sketchengine.co.uk/documentation/tenten-corpora/>

⁴⁷ Sketch Engine 以外で, ロシア語の語彙分析に使えるツールとして AntConc (Anthony 2005)が挙げられる。AntConc とは, Laurence Anthony が開発したフリーのコンコーダンス・ソフトウェアである。web 経由で容易に入手でき, テキスト内の語のレマ化, 語の生起頻度, 語と語の共起関係の計測などの機能が備わっている (cf. 水野, 阿出川 2006)。AntConc では, トークン, タイプ, そしてレマ単位での分析が可能である。ただ, レマ化に際してロシア語は以下のようなファイルを自作しなければならない。

a. 名詞「金」の例：деньги → денег, деньгам, деньгами, деньгах

b. 形容詞「ロシアの」の例：российский → российского, российскому, российским, российском, российская, российской, российскую, российской, российское, российские, российских, российскими

c. 動詞「する」の例：сделать → сделал, сделала, сделало, сделали, сделаю, сделаешь, сделает, сделаем, сделаете, сделают, сделай, сделайте, сделав, сделавши, сделанный, сделанного, сделанному, сделанным, сделанном, сделанная, сделанной, сделанную, сделанное, сделанные, сделанных, сделанными, сделан, сделана, сделано, сделаны, сделавший, сделавшего, сделавшему, сделавшим, сделавшем, сделавшая, сделавшей, сделавшую, сделавшее, сделавшие, сделавших, сделавшими

「→」という記号は, 右側にある語を左側の語にまとめることを意味する (石川 2008: 79)。例えば, (деньгу/den'gi を含めた) денег/deneg, деньгам/den'gam, деньгами/den'gami, деньгах/den'gah といった各語形は「→」の左にある деньгу/den'gi にまとめられる (つまり, レマ化が行われる)。

このようなファイルを作成しなければならないため, 分析対象の語数が多い場合には AntConc は不向きである。ただ, 少数の特定の語彙を分析対象とする場合, AntConc は十分ロシア語の研究に耐え得る。

分析対象のテキストとして、以下のロシア文学作品とその英訳を選んだ。

(11) 分析対象のテキスト⁴⁸

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| a. 『犬を連れた奥さん』 ⁴⁹ | b. 『スペードの女王』 ⁵⁰ |
| c. 『はつ恋』 ⁵¹ | d. 『アンナ・カレニナ』 ⁵² |

Sketch Engine を用いて、上述の文学作品のテキストをトークン、タイプ、レマといった単位で計量すると、以下のような結果が出力される。

表 5. (11)のテキストの計量結果⁵³

作品			トークン	タイプ	レマ
a.	『犬を連れた奥さん』	ロシア語版 Дама с собачкой	5,111 語	2,052 語	1,451 語
		英語版 The Lady With the Dog	6,647 語	1,486 語	1,271 語
b.	『スペードの女王』	ロシア語版 Пиковая дама	6,854 語	2,900 語	2,035 語
		英語版 The Queen of Spades	9,806 語	2,053 語	1,713 語
c.	『はつ恋』	ロシア語版 Первая любовь	18,777 語	5,879 語	3,807 語
		英語版 First love	24,514 語	3,563 語	2,869 語
d.	『アンナ・カレニナ』	ロシア語版 Анна Каренина	269,743 語	33,554 語	15,079 語
		英語版 Anna Karenina	351,785 語	13,442 語	9,820 語

また、石川 (2012: 98-99)が指摘しているように、AntConc は「直感的に使用できること、ユーザーとの意見交換により頻繁に改良が行われていること、仕様の透明性が高いこと、ユーザーが検索条件をカスタマイズしやすいこと、処理が高速なこと」といった利点を有している。

なお、AntConc や Sketch Engine 以外にも、同様の分析機能を備えたソフトウェアは存在する (例えば、WordSmith Tools, TextSTAT など)。投野 (2015a: 183)は、このようなソフトウェアを網羅的に紹介している。

⁴⁸ これらのロシア語の電子テキストは Lib.Ru (URL: <http://lib.ru/>) から、英語版の電子テキストは Project Gutenberg (URL: <https://www.gutenberg.org/>) から入手した。なお、テキストの分析にあたって、本文と関係のない書誌情報は削除してある。

⁴⁹ 1899 年、アントン・パーヴロヴィチ・チェーホフ (Антон Павлович Чехов) 作。

⁵⁰ 1834 年、アレクサンドル・セルゲーヴィチ・プーシキン (Александр Сергеевич Пушкин) 作。

⁵¹ 1860 年、イワン・セルゲーエヴィチ・ツルゲーネフ (Иван Сергеевич Тургенев) 作。

⁵² 1877 年、レフ・ニコラーエヴィチ・トルストイ (Лев Николаевич Толстой) 作。

⁵³ 表内の数値にはピリオドやカンマなどの記号は含まれていない。また、これらの数値は、大文字と小文字の区別なく算出されたものである。

a.～d.の分析を通して、語の単位に何を採用するかによって、結果として得られる数値に大きな差が生じていることが確認できる。a.の『犬を連れた奥さん』を例にとれば、ロシア語で書かれたオリジナルのテキストはトークン換算では 5,111 語から成るが、語の単位をタイプにして数え直すと、2,052 語にまで縮まる。さらに、語形を集約したレマ単位の元ではその語数は 1,451 となる。続く b., c., d.においてもトークン、タイプ、そしてレマへ単位が変わるにつれて語数が減っていく。同様に、英語版にも同様の現象が観察される。以下で、それぞれの単位毎に得られた結果の考察を行う。

2.2.1. トークンによる分析

トークン単位の元では、すべての作品に共通して英語版のテキストはロシア語のそれよりも語数が多い。両言語の文法体系には違いが存在するため、同じ作品のテキストを同じ単位で数えても、分析結果の語数には差が生じて当然である。ここではトークン数に差を生み出す原因を考察する。

英露間でトークン数に最も影響を及ぼす文法事項は、冠詞の有無であろう。実際、*the, a, an* がテキストのトークン数に与える影響は大きい。

(12) ロシア語と英語の対応例（冠詞の観点から）

- a. Говорили, что на набережной появилось новое лицо: дама с собачкой.
 Govorili, čto na naberežnoj poâviloc' novoe lico: dama s sobačkoj.
 say-PL.PST that on sea_front appear-SG.PST new face lady with small_dog
- b. It was said that a new person had appeared on the sea-front: a lady with a little dog.

「新しい顔が海岸通りに現われたと噂されていた：犬を連れた奥さんである。」

(『犬を連れた奥さん』より引用)

上記の文は『犬を連れた奥さん』の冒頭部であるが、冠詞を文法カテゴリーとして持たない a. のロシア語は、b. の英語よりもトークン数が少ない (b. では冠詞が 4 回出現している)。一文をとっても、冠詞の有無によってこれだけの差が計測されるのであれば、1 つの作品を通して英露の間に大きな差が生まれるのは当然である。

以下に、冠詞をストップワード（検索や頻度の計算から除外される語）として、トークン単位で同作品を計測した結果を挙げる。

表 6. 冠詞の有無別トークン数（総語数）

		『犬を連れて 奥さん』	『スペードの女王』	『はつ恋』	『アンナ・ カレーニナ』
トークン数	冠詞あり	6,647 語	9,806 語	24,514 語	351,785 語
	冠詞なし	6,134 語	8,865 語	22,816 語	327,280 語

全体を通して、冠詞を除外したトークン数は、冠詞ありのトークン数よりも 7～10%ほど少ないことがわかる。

ただ、冠詞を差し引いても英露の差は依然として埋まらない。これには、英語は概念・語彙素を単一の形ではなく、複数の語を用いた分析的な形で表す傾向の強い言語であることが影響していると考え（逆に、ロシア語は統合的な度合いの強い言語である）。以下に、その例を挙げる。

(13) a. <...> Левин вышел из кабинета.

Levin vyšel iz kabineta.

Levin-NAME. go_out-PST. from study_room

b. <...> Levin went out of the room, <...>

「レービンは書斎から出た。」

（『アンナ・カレーニナ』より引用）

a.において「出る」を意味する動詞は、*идти/йти*「進む」に接頭辞 *вы-*（英語の不変変化詞 *out* に相当）が付加されてできた *выйти/выйти* (> *вышел/вышел*)によって表されている。一方、b.の英語では、それが動詞 *go* と不変詞 *out* の組み合わせといった分析的な形で表現されている。テキストの総語数は、分析的な形が多い方が嵩む。この言語的特徴が、英語で書かれたテキストのトークン数を多くしている一因であると推測される（これは、本稿の研究設問に関係しており、5 章で詳細に扱う）。

2.2.2. タイプによる分析

タイプを語の単位に採用した場合、英露の間で特徴的な違いが見受けられる。前節で見たように、トークン換算では、ロシア語版のテキストは英語版のそれよりも語数が下回っている。だが、タイプ換算という条件下では、ロシア語の方が語数の点で上回るという逆転現象が起きている。

表 7. 文学作品における英露別タイプ数

『犬を連れた奥さん』	『スピードの女王』	『はつ恋』	『アンナ・カレーニナ』
露語 2,052 語	露語 2,900 語	露語 5,879 語	露語 33,554 語
英語 1,486 語	英語 2,053 語	英語 3,563 語	英語 13,442 語

英語と比べて、ロシア語は形態論的に複雑な言語である。Sharoff et al. (2013: 3)によると、自身の Internet Corpus (3.3.6.参照) の高頻度 5,000 語を対象にして、1 語が平均してどれだけコーパス内で語形を有しているのかを調べた結果、その数値は 8.35 語であった。この現象は Type/Token Ratio (TTR)⁵⁴からも確認できる(ロシア語: (11) a. 40.1%, b. 42.3%, c. 31.3%, d. 12.4% / 英語: a. 22.3%, b. 20.9%, c. 14.5%, d. 3.8%)。

以下で英露の屈折のパラダイムを比較する⁵⁵。

表 8. 英露における名詞「夫」の屈折の比較

英語: husband	
単数形	husband
複数形	husbands
所有格	単数: husband's 複数: husbands'
ロシア語: муж ⁵⁶	
単数形 (+格)	муж, мужа, мужу, (мужа), мужем, муже
複数形 (+格)	мужья, мужей, мужьям, (мужей), мужьями, мужьях

馬場 (1998: 31)によると、「現代英語の名詞は、かつてあった文法的性の区別をすべて失い、主格・対格、属格・与格という格変化のうち属格のみが's の形で残り、複数形はいくつかの母音変化によるもの <...> を除いて、-s / -es をつけるだけですむようになった」。一方、基本的にロシア語の名詞は男性、女性、中性のいずれかに属し、それぞれ変化のパターンが異なるが、数(単数/

⁵⁴ TTR とは、トークン数とタイプ数の量的な関係を示すために語彙研究の分野で用いられる(石川 2008: 76)。TTR はタイプ数をトークン数で割った百分率であるが、テキストの中にどれだけ異なる語が含まれているかを表しており、テキストの語彙多様性を確認する際に用いられる(石川 2008: 76)。

ただし、ここでは異なる言語を比べており、分析結果はロシア語が英語よりも多様に、豊かに語彙を用いているということを意味してはいない(後述するが、この差はロシア語の複雑な屈折のパラダイムに起因する)。

⁵⁵ ここで用いる英語の屈折は、Bauer, Nation (1993: 258)に倣って、複数形、3 人称単数現在、過去形、過去分詞形、-ing 形、比較級、最上級、所有格とする。

⁵⁶ муж/muž の格変化は Зализняк (1977)の記述による。

複数)と格(主格/生格/与格/対格/造格/前置格)によって形を変える(したがって、12通りの語形があり得る)。ただ、すべての格が形態的に異なっているというわけではない。例えば、男性名詞 *муж/муž* のパラダイムに関して言うと、単数生格と単数対格 (*мужа/muža*)、そして、複数生格と複数対格 (*мужей/mužej*) で語形が重なる(このように、複数の格にわたって同じ語形が存在する場合は、片方を()で括る)。

ただ、表8は、ロシア語の潜在的な語形の多さを示しているに過ぎない。そこで、『犬を連れて奥さん』の中で実際に確認してみると、*husband* は単数形 *husband* と所有格 *husband's* の2つの語形で現れていた。一方、ロシア語の *муж/муž* は文中で単数主格 *муж/муž*、単数生格・対格 *мужа/muža*、単数与格 *мужу/mužu* といった語形で生起しており、英語よりもタイプ数が多い。

次に、形容詞の屈折のパラダイムを英露で比較する。

表9. 英露における形容詞「長い」の屈折の比較

英語 long	
原形	long
比較級	longer
最上級	longest
ロシア語 длинный ⁵⁷	
単数形	(男性) длинный, длинного, длинному, (длинный/длинного), длинным, длинном (女性) длинная, длинной, (длинной), длинную, (длинной)-длинною, (длинной) (中性) длинное, длинного, длинному, (длинное), длинным, длинном
複数形	длинные, длинных, длинным, (длинные/длинных), длинными, (длинных)
短語尾	длинн, длинна, длинно, длинны
比較級	длиннее
最上級 ⁵⁸	(男性) длиннейший, длиннейшего, длиннейшему, (длиннейший/длиннейшего), длиннейшим, длиннейшем (女性) длиннейшая, длиннейшей, (длиннейшей), длиннейшую, (длиннейшей)-длиннейшего, (длиннейшей) (中性) длиннейшее, длиннейшего, длиннейшему, (длиннейшее), длиннейшим, длиннейшем (複数) длиннейшие, длиннейших, длиннейшим, (длиннейшие/длиннейших), длиннейшими, (длиннейших)

馬場 (1998: 31)が言うように、「古英語の形容詞は、名詞と文法的性・数・格の呼応を見せていたが、現在は比較変化を除き屈折がいっさいなくなった」。ロシア語の形容詞は性、数、そして格

⁵⁷ *длинный/dlinnyj* の変化は Зализняк (1977)で確認した。

⁵⁸ Зализняк (1977)は最上級の形を変化の一覧には加えていない。ここでの最上級の形は、形容詞に派生接尾辞 *-ейший/-ejšij* を付加することで実現されているからである(つまり、これは屈折ではなく派生である)。ただ、*-ейший/-ejšij* は非常に生産性・規則性が高く、また、英語との比較のために、ここではこの接尾辞による最上級の形を表に記載している。

によって形が変化するため、表 9 が示すように、そのパラダイムは名詞よりも複雑である。また、形容詞には短語尾形⁵⁹や、接尾辞-ейший/-ejšij を付加して形成される最上級の形もあるため、語形の数はさらに多くなる。実際、英語版の『犬を連れた奥さん』では、表の「長い」は *long* という語形でしか生起していない。一方、その露訳である *длинный/dlinnyj* は、3 つの語形（男性単数主格: *длинный/dlinnyj*, 女性単数前置格: *длинной/dlinnoj*, 複数主格: *длинные/dlinnye*）で現れている。なお、名詞と同様に、すべての語形が異なっているわけではなく、複数の格で重複する場合もある⁶⁰。

最後に動詞の屈折のパラダイムを英露で確認する。

表 10. 英露における動詞「愛する」の屈折の比較

英語 love	
原形（命令形）	love
3 人称単数現在	loves
過去形	loved
過去分詞形	loved
-ing 形	loving
ロシア語 любить ⁶¹	
原形（不定形）	любить
現在形	люблю, любишь, любит, любим, любите, любят
過去形	любил, любила, любило, любили
能動形動詞 現在	(男性) любящий, любящего, любящему, (любящий/любящего) любящим, любящем (女性) любящая, любящей, (любящей), любящую, (любящей), (любящей) (中性) любящее, любящего, любящему, (любящее), любящим, любящем (複数) любящие, любящих, любящим, (любящие/любящих), любящими, (любящих)
能動形動詞 過去	(男性) любивший, любившего, любившему, (любивший/любившего), любившим, любившем (女性) любившая, любившей, (любившей), любившую, (любившей), (любившей) (中性) любившее, любившего, любившему, (любившее), любившим, любившем (複数) любившие, любивших, любившим, (любившие/любивших), любившими, (любивших)

⁵⁹ 短語尾形（short form）は通常の形（長語尾形）と意味的に若干異なり、主に、一時的な（一定の）特徴を示す。例えば、以下の例文において *здоровый/zdorovyj* 「丈夫な」は短語尾形で用いられており、「現在」の状態を表している（АН СССР 1980: 557）。なお、この形容詞が長語尾で用いられれば、「（もともと）健康だ」くらいの意味を表す。

Мальчик здоров. （長語尾は *здоровый/zdorovyj*）
 Mal'čik zdorov.
 boy healthy-ADJ.M.SF.
 「少年は（いま現在）健康だ。」

⁶⁰ 形態が複数の格で重複していても区別ができないというわけではない。例えば、形容詞 *золотой/zolotoj* 「金色の」は、男性単数主格と女性単数与格の時に両者の語形が重なるが、どちらの格なのかは文脈によって決めることができる（Зализняк, Шмелёв 2000: 11）。

⁶¹ *любить/lubit'* の活用は Зализняк (1977) の記述による。

受動 形動詞	現在	(男性) любимый, любимого, любимому, (любимый/любимого), любимым, любимом (女性) любимая, любимой, (любимой), любимую, (любимой), (любимой) (中性) любимое, любимого, любимому, (любимое), любимым, любимом (複数) любимые, любимых, любимым, (любимые/любимых), любимыми, (любимых)
	過去	(男性) любленный, любленного, любленному, (любленный/любленного), любленным, любленном (女性) любленная, любленной, (любленной), любленную, (любленной), (любленной) (中性) любленное, любленного, любленному, (любленное), любленным, любленном (複数) любленные, любленных, любленным, (любленные/любленных), любленными, (любленных)
	短語尾	любим, любима, любимо, любимы
不完了体副動詞	любя	
命令形	люби, любите	

英語の動詞の屈折には「(三人称単数)現在形, 過去形, 過去分詞, -ing 形といった種類がある」(大石 1988: 22). 一方, ロシア語は「豊かな屈折形態論のおかげで, 動詞はテンス, ムード, 人称, 性, 態, 数, そして分詞の格と形態の長短によって様々に区別される膨大な語形を持つ. 完了体動詞は最大で 68, 不完了体動詞は最大で 121 の語形を有する」(Janda, Lyashevskaya 2011: 207).

『犬を連れた奥さん』内で *love* は, *love* (原形) と *loved* (過去形, 過去分詞) の 2 つの語形で現れている. 一方, ロシア語の *любить/lubit'* は, *любил/lubil* (男性単数過去), *любили/lubili* (複数過去), *люблю/lublû* (1 人称単数現在), *любим/lubit* (3 人称単数現在) の 4 つの語形で生起している.

ここまでの考察から, 潜在的なレベルにおいてだけでなく, 実際のテキストにおいてもロシア語は英語より多くの語形を含んでいることがわかる. したがって, 表 7 におけるロシア語のタイプ数の多さは, 名詞, 形容詞, 動詞の屈折パラダイムの複雑さに起因すると言える.

2.2.3. レマによる分析

レマは, 各語形を 1 つに集約するというその性質から, テキストの語数を大幅に圧縮する. タイプ単位でテキストを計量した時と同様に, レマ単位でもロシア語は英語よりも語数が多い.

表 11. 文学作品における英露別レマ数

『犬を連れた奥さん』		『スペードの女王』		『はつ恋』		『アンナ・カレーニナ』	
露語	英語	露語	英語	露語	英語	露語	英語
1,451 語	> 1,271 語	2,035 語	> 1,713 語	3,807 語	> 2,869 語	15,079 語	> 9,820 語

テキスト規模が大きくなるにつれて, 両言語における語数の差も広がる. 例えば, a. の短編小説『犬を連れた奥さん』のトークン数は, ロシア語が 5,111 語で, 英語が 6,647 語であるが, レマ数

はそれぞれ 1,451 語と 1,271 語である。長編小説『アンナ・カレニナ』はロシア語のトークン数が 269,743 語、英語のトークン数が 351,785 語に昇るが、レマ数はそれぞれ 15,079 語と 9,820 語である。

この差は、2.2.1.でも言及したが、英露における概念・語彙素の表現方法の違いに起因すると思われる（概念・語彙素の形成に際して、英語は既存の語の連続で、つまり、分析的な形を用いる傾向にある。一方、ロシア語は同様のことを派生という統合的な形で表現する）。例えば、英語において語連続で表し得る 1) 完了体、2) 受動態、3) 句動詞/動詞句は、ロシア語では接辞が付加された派生語として現れることが多い。

表 12. 概念・語彙素の増え方のイメージ: 英露の「読む」を例に（下線部は派生接辞）

概念・語彙素の例	英語	ロシア語
読む	read	читать
1) 読んでしまう	have read	<u>проч</u> итать
2) 読まれる	be read	чит <u>а</u> ться
3) 読み返す / たくさん読む	read over / read a number of	<u>пер</u> ечитать / <u>на</u> читать
概念・語彙素の表し方	語連続（分析的な形）	派生（統合的な形）

1)に関して言うと、英語は迂言的に完了体・不完了体の概念を表す (cf. Comrie 1976)。一方、ロシア語は体系だった体のカテゴリーを有しており、それは「完了体-不完了体の形態的対立によって実現される。動詞はすべてそのいずれか一方に属し、同じ（近い）語彙をもつ完了体動詞と不完了体動詞はペアをなす」(中澤 2010: 249)。例えば、1)の「してしまう」という完了の概念は、英語では *have* + 動詞の過去分詞という分析的な形で、ロシア語では接頭辞の付加による統合的な形で実現され得る（例：「読んでしまう」は、英語では *have*+動詞の過去分詞形（分析的な形）で表されるが、ロシア語ではそれが *читать*「読む」に接頭辞 *про-*/*pro-*の付いた完了体動詞 *прочитать*/*pročitat'*（統合的な形）となって現れる）。

英語の受動態は、「ドイツ語やフランス語などと同様に、動詞の活用変化という統合的な形ではなく、*be* 動詞+動詞の過去分詞(+*by* 名詞句)という分析的な形で表現される」(二枝 2009: 106)。一方、ロシア語には受動態の表現方法がいくつかあるが、不完了体のそれは、基本的に後接辞 *-ся/-sâ*⁶²を付加した再帰動詞によって表される (cf. АН СССР 1980: 615-616)⁶³。つまり、「読まれる」という受動の概念は、英語では *be* 動詞+過去分詞形 (*be read* / 分析的な形) で、ロシア語では

⁶² *-ся/-sâ* を含む *постфикс* の訳は、木二会会員共訳 (1998: 81)に倣って「後接辞」とした。

⁶³ 他にも、語順や不定人称文によっても受動の意味は表現される (Harrison, Mullen 1967: 37-38; АН СССР 1980: 617)。また、完了体動詞の受動態は、受動形動詞過去短語尾によって表される。

читать/čitat'に後接辞-ся/-sâ が付加された派生語 читаться/čitat'sâ (統合的な形) で表されている。

3)の句動詞/動詞句の「読み返す」と「たくさん読む」は、英語ではそれぞれ *read* と不変化詞 *over* による句動詞, *read* と *a number of* による動詞句で表され得る。一方、ロシア語では、それが читать/čitat' に接頭辞 пере-/pere- と на-/na- が付加されてできた перечитать/perečitat' と начитать/načitat' で表現され得る。ここでは、「読む → 読み返す / たくさん読む」という新しい概念・語彙素の形成が英語では分析的な形で、ロシア語では統合的な形で実現されている。

ここまでの考察からわかるように、概念・語彙素の形成に伴ってロシア語はその都度派生語の数が増えていく。したがって、潜在的な語彙数 (レマ数) がロシア語は英語よりも多いと考えられる (5章で詳細に扱う)。

なお、2.2.1.~2.2.3.の分析にはロシア語から英語に訳された文学作品を用いた。参考までに、逆に英語からロシア語に訳されたテキストにおいても同じ分析を行った。その結果、同様の傾向が確認された (トークン数では英語が勝り、タイプとレマ数ではロシア語が勝る)⁶⁴。

2.3. 語の単位と言語研究

ここまでに見てきたトークン、タイプ、レマ、WF は、研究の目的を吟味して使い分けなければならない。2.2.を通して考察したように、どの単位で語を捉えるかで、得られる結果は大きく異なるからである。特に、英語とロシア語のように、語形成における形態論の比重が異なる言語を比較する際には、どの単位を前提として議論を進めるかを考慮しておくべきである。

例えば、語彙の導入数を検討する際には、どの単位を採用するのが極めて重要な事項となる：前出の中学校・高等学校学習指導要領 (文部科学省 2008, 2009) では、英語の導入語数はそれぞれ 1,200 語、1,800 語と定められているが、実際の導入量はどの単位を指しているかで大きく上下する。多言語教育推進研究会が提案する高等学校における英語以外の外国語の学習指導要領では、ロシア語の導入語数は 1,000 語程度とされている (JALP 多言語教育推進研究会 2016: 48)。この数は、フランス語、中国語、ドイツ語と横並びで同じに設定されているが、派生接辞の付加によって概念・語彙素を増やす傾向の強いロシア語を対象とした場合に妥当と言えるのであろうか。これは、ロシア語の言語的特徴を把握した上での決定なのであろうか。

⁶⁴ アーサー・コナン・ドイルの『四つの署名』(1890) を対象として、トークン、タイプ、レマ換算でテキストに含まれる語数の計測を行った。なお、ロシア語と英語のテキストは、それぞれ Lib.Ru, Project Gutenberg から入手した。結果は以下の通りである。

作品		トークン	タイプ	レマ
『四つの署名』	ロシア語版 Знак четырёх	34,226 語	9,743 語	5,763 語
	英語版 The Sign of the Four	43,184 語	5,552 語	4,428 語

漠然とある単位が他の単位よりも優れていると判断することに意味はないが、ここでは、主にロシア語を対象として、どのような場面で各単位の長所が際立つのかを考察する。

2.3.1. トークンと言語研究

テキスト分析の一步目となる単位は、スペースで挟まれた文字連鎖を1語と捉えるトークンである。Лёнгрен (1993: 28)が述べているように、より充実した後続の発展的な分析は、この単位から始まる言える。

トークンはテキストに現れる語の累計数であり、コーパス言語学において総語数はトークンによって数えられた値である (石川 2008: 76)。例えば、RNC-M は総語数 9,200 万語であるが (Ляшевская, Шаров 2009: VI), これはトークン換算でコーパス内のテキストを数えている。なお、この総語数は句読点などを抜かして数えたものであり、それを語として数えた場合は約1億1,500万語に上昇する (通常、ピリオドやコンマは語として扱わない)。他にも、「1頁もしくは1行にはどれくらいの語が含まれているのか」、「この本の長さはどれくらいか」、「人は1分間に平均してどれくらいの語を話すのか」といったことを知りたい場合はトークン換算でテキストを数える (Nation 2001: 7)。

トークンでテキストの語数を計量する際の問題点として、*I'm* や *we'll* といった単位を1語として扱うか、2語として扱うかといったことが挙げられる (Naiton, Meara 2002: 35)。また、話し言葉における *um* 「えーと」や *er* 「えー」を語として捉えるのかも決めておかなければならない (Naiton, Meara 2002: 35)。

2.3.2. タイプと言語研究

2.3.2.1. タイプを用いた研究事例

タイプは、ある語の特定の語形での生起頻度を調べる際に用いることができる。2.2.2.で言及したように、ロシア語は1つの語が数多くの語形を有している。そのため、ある語が特定の語形で高頻度に生起するという情報は、それをどの語形で導入するのかを決める根拠となり、教材の例文を作成する際などに役立つであろう。

また、辞書の見出し語を決定する際にもタイプは活用される：辞書における語形の扱いには統一性が欠けている (cf. 望月他 2003: 5-8)。例えば、動詞 CONFUSE 「混乱させる」のレマに含まれる *confusing* 「混乱させるような、わかりにくい」という語形は、辞書によっては形容詞として見出し語を得ている場合がある (Stubbs 2001: 25)。この傾向はロシア語に関しても当てはまる。次の表が示すように、ある特定の語形が元と異なる統語機能を獲得している場合、その語形はそ

のまま見出し語として記載されており、多くの辞書でこの方針が見てとれる。

表 13. 辞書における見出し語の比較（表内の斜体は屈折接辞）⁶⁵

項目		Ожегов, Шведова (1997)	Ляшевская, Шаров (2009)	Wheeler et al. (eds.) (2007)	東郷他(編) (1988)	Тихонов (1985) ⁶⁶
1.	a. включать 「含める」 b. включая 「を含めて」	○	○	○	○	○
2.	a. казаться 「のように見える」 b. кажется 「らしい」	△	○	△	△	×
3.	a. мочь 「できる」 b. может 「かもしれない」	○	○	△	△	×
4.	a. утро 「朝」 b. утром 「朝に」	○	×	○	○	○
5.	a. вечер 「夕方」 b. вечером 「夕方に」	○	×	○	○	○

表からわかるように、辞書によっては特定の語形が1つの見出し語として記載されている。

形態論は伝統的に屈折と派生に分けられるが、一般に屈折は語彙素の形態を提示し、派生は新しい語彙素を形成すると考えられる (Bauer 1988). つまり、「屈折とは文中の他の語との関係を表すために、ある語形において起こる変化を指し、<...> 派生は、既存の語（語根）から新しい語が形成される方法の多用なプロセスを扱う部門である」(Lyons 1968: 195). この点において、レマ化されずに個別に見出し語化された語形は、元の語とは異なる統語機能を獲得しており、異なる語彙素に属しているように映る。例えば、*включать/vklûčat'* 「含む」に副動詞の屈折接辞 *-я/-â* が付いた表 13 の 1. *включая/vklûčââ* という語形には、前置詞に現れる言語的特徴が観察される。

- (14) <...> в Академию поступило лишь пятеро парней, включая него.
v Akademiû postupilo liš' pâtero parnej vklûčââ nego.
into academy enter-PST. only five boy including him-PRN.ACC.

⁶⁵ 表内の記号が意味する内容は以下の通りである：

a. ○：見出し語として記載 b. △：見出し語の下位項目として記載 c. ×：記載なし

⁶⁶ 語形成辞典によっては、いわゆる屈折接辞を派生接辞と捉えている場合がある。例えば、表内の 4. と 5. の *-ом/-от* は、男性・中性名詞の単数造格の屈折接辞であるが、Тихонов (1985) はこれを派生接辞として捉えているようである。表では、もし語形成辞典において当該の語が派生語として記載されている場合は○、ない場合は×と記す。

「アカデミーに入学したのは、彼（主人公）を含めて5人の青年であった。」

(on the web)

ロシア語の代名詞 *он/он* 「彼」, *она/она* 「彼女」, *оно/оно* 「それ」, *они/они* 「彼ら」は前置詞の目的語となった場合、斜格形の語頭に *н-/н-* が付く (АН СССР 1980: 536). (14)の例文では *включая/vključaâ* の目的語 *его/ego* が *него/nego* となって現れている (下線部). このように語頭に *н-/н-* が付いた例が観察されるため, *включая/vključaâ* は *включать/vključat'* の副動詞というよりも, すでに前置詞的な性質を獲得していると思われる (cf. 匹田 2007)⁶⁷. また, 通常, 副動詞の主語は, 主節の主語と一致するが, *включая/vključaâ* の場合はそれが一致していない点からも, その前置詞的な性質が窺える. なお, *включая/vključaâ* は, 表 13 のすべての辞書で前置詞として扱われている.

表 13 の 2. *кажется/kažetsâ* と 3. *может/možet* は *казаться/kazat'sâ* と *мочь/moč'* の 3 人称単数現在の語形であるが, 元の動詞と意味的にだけでなく, 統語的にも異なっている.

- (15) a. Он кажется ребёнком b. Кажется, он не придёт.
 On kažetsâ reběнком Kažetsâ, on ne pridët.
 he seem-3.SG.PRS. child-INS. apparently he not come-PFV.PRS.
 「彼は子供のように見える。」 「どうやら彼は来ないらしい。」

(東郷他(編) 1988)

- (16) a. Он может сделать это.
 On možet sdelat' èto.
 he can-3.SG.PRS. do-INF. it-ACC.
 「彼はそれをする事ができる」

(on the web)

- b. Может, он просто любит историю.
 Možet, on prosto lûbit istoriû
 perhaps he just love-SG.PRS. history-ACC.
 「もしかしたら, 彼は単に歴史が好きなのかもしれない」

(現行 RNC-M より引用 : アクセス日 2017/08/08)

(15)と(16)の a.において下線部の *кажется/kažetsâ* と *может/možet* は 3 人称単数現在の形で, それ

⁶⁷ 匹田 (2007)は, 「前置詞らしい前置詞」と「そうでない前置詞」の連続体を記述する際, 例えば, 以下の3つの判断基準が考えられるとしている: 1)アクセントの変化, 2) *н-/н-* の前綴り, c. 相互代名詞 *друг друга* を目的語とする時の前置詞の位置. *включая/vključaâ* に関して当てはまるのは, 本節で言及した 2) である. また, 3)は web 上で用例が確認されるが, その数は極めて少ない.

ぞれ「のように見える」, 「できる」を意味する. 一方, b.において, 下線部の *кажется/kažetsâ* と *может/možet* は「らしい」, 「かもしれない」といった意味で用いられており, また, 目的語を伴っておらず, 統語的にも a.とは異なっている. RNC-M の頻度辞書 (Ляшевская, Шаров 2009) では, b.の *кажется/kažetsâ* と *может/možet* には副詞として別個の見出し語が与えられている. これらは, 英語でいう *probably* 「おそらく〜」や *hopefully* 「願わくは〜」といった文副詞 (sentence adverb) のように捉えられているのであろう.

表 13 の 4. *утром/utrom* 「朝に」と 5. *вечером/večerom* 「夕方に」は, それぞれ名詞 *утро/utro* 「朝」と *вечер/večer* 「夕方」に単数造格の屈折接辞-ом/-om が付いた形である. これは, 造格がもつ「〜を利用して, 用いて」といった道具・手段の意味と関係していると推測されるが, 通時的な意味変化を経て, 現代ロシア語では「朝を利用して→ 朝に」, 「夜を利用して → 夜に」といった副詞としての用法が定着したのであろう (cf. 井上 2015). ただ, Пешковский (1956: 143)は, 副詞として固定化した格は本来的な格とはアクセントと意味の 2 点で異なるとしているが⁶⁸, 4.の *утром/utrom* と 5.の *вечером/večerom* にはアクセントの移動という現象は起きていない. さらに, 以下の例文のように, 定語の存在によって *утром/utrom* や *вечером/večerom* が名詞の造格形なのか, 名詞から派生した副詞なのか判断が難しい場合も存在する.

- (17) a. Ранним утром я отправился гулять.
 Rannim utrom â otpravilsâ gulât'.
 early-ADJ.INS. I leave-PST. walk-INF.
 「朝早くに私は散歩に出かけた.」 (Пешковский 1956: 145)
- b. Рано утром я выхожу за газетой.
 Rano utrom â vyhožu za gazetoj.
 early-ADV. I go_out-PRS. for newspaper
 「朝早くに, 私は新聞を取りに外へ出ます.」
 (現行 RNC-M より引用: アクセス日 2017/9/23)

通常, 形容詞は副詞を修飾しない. だが, (17)の a.では形容詞 *ранний/rannij* 「早い」が定語とし

⁶⁸ 例えば, 副詞 *бегом/begóm* 「走って」は, *бег/beg* 「走ること」の単数造格 *бегом/bégom* とは意味とアクセントの点で異なっていると思われる.

Он	прошёл	ещё	раз,	теперь	уже	быстро,	почти	<u>бегом</u> .
On	prošël	ešë	raz,	teper'	uže	bystro,	počti	begom.
he	pass-PST.	one_more_time.		now	already	quickly	almost	

「彼はもう一度通り過ぎていった. 今度は素早く, ほとんど走っていた.」

(現行 RNC-M より引用: アクセス日 2013/9/24)

て *утром/utrom* を修飾している。一方, b.では副詞 *рано/rano* 「早く」が, 副詞 *утром/utrom* を修飾している。いずれにしても, このような特定の語形は異なる統語機能を獲得していると考えられる。これは, 辞書や学習用語彙リストにおいて特定語形を別個に記載する十分な理由となるであろう。

また, 特定の語形の生起頻度が高い場合, この情報は教育上別の見出し語を設定した方が良いとする根拠となろう: 例えば, Sketch Engine を用いて, 自作の 100 万語コーパス 1 号 (4 章参照) を調査すると, *утро/utro* と *вечер/večer* の各語形の中で, 単数造格形が突出して高頻度に生起していた。また, それらのほぼすべての例が造格を要求する前置詞や動詞の支配ではなく, 単体で副詞的に用いられている。

表 14. 自作 100 万語コーパス 1 号における *утро* と *вечер* の生起頻度

	全体の生起頻度	単数造格形の生起頻度	副詞的に生起している例
<i>утро</i>	235	97	95
<i>вечер</i>	223	90	89

特定の語形がこれだけ高頻度に副詞的に用いられていれば, 応用言語学的には別の見出し語として記載しても良いであろう。

さらに, 特定の語形の生起頻度が他よりも突出して高い場合, それは学習者にまず提示すべき語形として考えることができよう。例えば, Evi Šteinfeldt は, *случай/slučaj* 「場合」は前置格 *случае/slučae* の形で, *удовольствие/udovol'stvie* 「満足」は造格 *удовольствием/udovol'stvie* の形で生起する頻度が多いことを示し, 「名詞の様々な格の形態を比較することで, ロシア語教育においてどのような順番でこれらの形態を提示すべきか, という情報が得られる」(Šteinfeldt 1973: 34)⁶⁹と述べている。現行 RNC-M で調査をしても同様の結果が得られる⁷⁰。これは, 前者が前置詞 *в* 「中で」を伴って *в случае/в slučae* 「の場合には」, 後者が前置詞 *с* を伴って *с удовольствием/s udovol'stvie* 「喜んで」というコロケーションで高頻度に生起するためであろう。

- (18) a. A что муж дарит вам в случае победы?
A čto muž darit vam v slučae pobedy.
now what husband-NOM. present-PRS. you-DAT. in case-SG.LOC. victory-GEN.

⁶⁹ Šteinfeldt (1973)のコーパス (3.3.1.参照) において, *случай/slučaj* は前置格が, *удовольствие/udovol'stvie* は造格が全体の約半分の生起頻度を占める (ただし, 単数と複数の区別の記載はない)。

⁷⁰ 現行 RNC-M において *случай/slučaj* 全体の生起頻度は 196,301 である。そのうち, 単数前置格の生起頻度は 96,561 であり, これは全体の 49%にあたる。*удовольствие/udovol'stvie* も同様に, 全体の生起頻度 (36,089) に対して, その 39% (13,937) が単数造格形で生起している (アクセス日 2017/9/23)。

「それでは、勝利した場合、夫はあなたに何をプレゼントしますか？」

b. Я с удовольствием пойду к вам на репетицию.

Â s udovol'stvîem pojdu k vam na repeticîu.

I with pleasure-SG.INS. go-PRS. towards you to practice

「私は喜んであなたのところに練習へ行きます。」

(現行 RNC-M より引用：アクセス日 2017/07/31)

自作の 100 万語コーパス 1 号を対象として、Sketch Engine にて *случай/случай* と共起する語を確認すると、前置詞 *с/v* との共起関係が非常に強いことがわかる (共起頻度 502, LogDice スコア⁷¹ 9.29). *удовольствие/udovol'stvie* も同様に、前置詞 *с/s* との共起関係は強い (共起頻度 32, LogDice スコア 7.02). このように、高頻度語に関して、特定の語形で頻繁に生起するという情報が網羅的に整備されていれば、それは教材作成の際に大いに役立つであろう⁷².

他にも、格と生起頻度の関係を扱った言語学的な研究でもタイプはおおいに役立つ：ロシア語の名詞は、性 (男性・女性・中性)、数 (単数・複数)、格 (主格・生格・与格・対格・造格・前置格) によって形が異なり得る。下の表は、名詞の複数形が格によってどのように形を変えるかを示している。

表 15. 名詞複数形の格変化 (語末の文字別)

語末 の文字	男性名詞			中性名詞		女性名詞		
	子音	-ий	-ь	-о	-е	-а	-я	-ь
主	студенты	герои	писатели	места	моря	газеты	недели	жизни
生	студентов	героев	писателей	мест	морей	газет	недель	жизней
与	студентам	героям	писателям	местам	морям	газетам	неделям	жизням
対	студентов	героев	писателей	места	моря	газеты	недели	жизни
造	студентами	героями	писателями	местами	морями	газетами	неделями	жизнями
前	студентах	героях	писателях	местах	морях	газетах	неделях	жизнях

複数与格、複数造格、複数前置格は、男性・女性・中性に共通して語尾が *-am/-am*, *-amu/-ami*, *-ax/-ah* (硬変化), *-jam/-âtm*, *-jami/-âmi*, *-jah/-âh* (軟変化) である。複数におけるこれら 3 つの格は、現代ロ

⁷¹ LogDice スコアとは、語と語の結びつきの強度を示すダイス係数を対数化した指標である。コロケーションの抽出を目的とした研究などにおいて用いられる。

⁷² 望月他 (2003: 5) は、*flabbergast* 「びっくり仰天させる」に関して辞書によっては *flabbergasted* だけを見出し語にしていることに触れ、それはこの語形が最も頻繁に用いられるというコーパスの情報を利用したのだろう、と述べている。

なお、*блестеть/blestet'* 「輝く」の能動形動詞現在の形 *блестящий/blestâsij* 「輝かしい」が多くの辞書で元の動詞とは別個に記載されているのも、頻度の高さや用法の違い (「より～」を意味する *более/boleee* が付く、など) を考慮しているものと考えられる。

シア語では一部の例外を除いて異形態をもたない⁷³。一方で、複数生格は *-os/-ov*, *-es/-ev*, *-eü/-ej*, ゼロ語尾, *-b/-'* など豊かな屈折語尾の形を有している。

千野 (1972) は先行研究を挙げながら、この現象には格の生起頻度が関係していると述べている。格が多く異形態を保持するには、その語形の使用頻度が高くないとてはならない。古代ロシア語の段階では複数与格、複数造格、複数前置格にはそれぞれ異なる語尾が存在していたが (cf. 木村 1985), これらは格としての生起頻度が低いため、現代ロシア語では異形態が消滅して 1 つに集約していった (通時的に保持することができなかった) と推測される。逆に、異形態の多い複数生格は使用頻度が高いことも予測される。

現在、コンピューターの技術革新によって、千野 (1972) の頃よりも大規模な言語資料を用いた調査が可能となった。そこで、本節では約 145 億語から成る ruTenTen11 (詳細は 3.3.7 参照) と 100 万語の自作コーパス 1 号～5 号 (詳細は 4 章参照) において格毎の生起頻度を調査し、それぞれの全体に対する割合を測った。結果は以下の通りである。

表 16. 格毎の生起頻度の割合 (Sketch Engine の分析による / 小数点第 3 位以下は四捨五入)

		ruTenTen11	1 号	2 号	3 号	4 号	5 号
単数	主格	21.45%	22.58%	23.16%	23.59%	22.84%	23.54%
	生格	25.01%	23.38%	22.10%	22.65%	22.17%	22.17%
	与格	3.23%	3.68%	3.76%	3.67%	3.67%	3.75%
	対格	11.06%	12.61%	13.17%	13.00%	13.18%	13.23%
	造格	5.18%	5.92%	6.07%	6.01%	6.06%	6.23%
	前置格	7.95%	8.04%	7.93%	7.98%	7.95%	7.82%
複数	主格	6.09%	5.52%	5.69%	5.52%	5.81%	5.66%
	生格	11.62%	9.58%	9.29%	9.04%	9.32%	8.93%
	与格	1.37%	1.26%	1.36%	1.27%	1.29%	1.30%
	対格	3.44%	3.54%	3.71%	3.58%	3.75%	3.61%
	造格	1.79%	1.98%	2.02%	1.91%	2.06%	1.99%
	前置格	1.81%	1.90%	1.75%	1.77%	1.90%	1.78%

上記表のデータを順位別に並べ替えると、次のようになる。

⁷³ 複数造格には, *люди/lúdi* 「人間」, *дети/deti* 「子供」が *людьми/lúd'mi*, *детьми/det'mi* になるといった例外が存在する (匹田 2016: 86)。また, *дочь/doč'* 「娘」の複数造格が *дочерьми/dočer'mi* と *дочерями/dočerâmi* になるように, 2 つの語形が併存しているものもある (匹田 2016: 86)。

表 17. 格毎の生起頻度の割合（順位順）

ruTenTen11	1 号	2 号	3 号	4 号	5 号
単数生格	単数生格	単数主格	単数主格	単数主格	単数主格
単数主格	単数主格	単数生格	単数生格	単数生格	単数生格
複数生格	単数対格	単数対格	単数対格	単数対格	単数対格
単数対格	複数生格	複数生格	複数生格	複数生格	複数生格
単数前置格	単数前置格	単数前置格	単数前置格	単数前置格	単数前置格
複数主格	単数造格	単数造格	単数造格	単数造格	単数造格
単数造格	複数主格	複数主格	複数主格	複数主格	複数主格
複数対格	単数与格	単数与格	単数与格	複数対格	単数与格
単数与格	複数対格	複数対格	複数対格	単数与格	複数対格
複数前置格	複数造格	複数造格	複数造格	複数造格	複数造格
複数造格	複数前置格	複数前置格	複数前置格	複数前置格	複数前置格
複数与格	複数与格	複数与格	複数与格	複数与格	複数与格

これら 2 つの表から、すべてのコーパスを通して、格の中で複数与格、複数造格、複数前置格の生起頻度が最も低いことがわかる。これだけ生起頻度が低ければ、歴史的に男性・女性・中性に共通した形に集約していったという仮説に一定の妥当性はいえ出せるであろう。一方、複数生格は全体的に生起頻度が高く、異形態を保持するのに有利な条件にある。

ただ、これは現代ロシア語の状態を分析しているのであって、通時的な観点からこれらの格がどのような変遷を辿ってきたのかを調査しなければ最終的な結論は導けない。例えば、*-am/-am*, *-amu/-ami*, *-ax/-ah* は、古代ロシア語では女性名詞の複数与格、複数造格、複数前置格の屈折語尾であった。なぜ女性名詞の屈折語尾が、男性と中性名詞のパラダイムまで包含するに至ったのかを検討しなければならない（原 (1996: 247) が言うように、他の格との混同を避けるため、女性名詞の屈折語尾が男性・中性に進出した可能性もある。だが、なぜ女性名詞の屈折語尾に男性と中性のそれが収斂していったのかが問題である）。

このように、屈折のパラダイムが豊かなロシア語の研究において、タイプによる分析は、応用言語学的にも、一般言語学的にも有益な情報を提供してくれる。

2.3.2.2. タイプの問題点

タイプ換算には、例えば、語頭が大文字と小文字で書かれたものを同じ語として扱うか (*High* と *high*) といった問題がある (Nation, Meara 2002: 35)。ただ、これは研究者があらかじめ自ら基準を設定しておけば良いため、大文字・小文字表記の区別の有無はそれほど分析結果に影響を及ぼす事項ではない。なお、本稿のテキスト分析に用いる *Sketch Engine* には大文字と小文字を区別する・しないという設定が備っている（本稿では区別しない立場をとる）。

ロシア語の分析に際してより重大なタイプの問題は、屈折の複雑さがもたらす同形異義語の処

理である。ロシア語は形態的に複雑であるため、タイプで語を捉える際に同形意義語が頻発する (cf. Ляшевская, Шаров 2009: XIV-XV)。例えば、代名詞 *мом/tot* 「その」の男性・中性単数前置格である *мом/tom* と、「巻」を表す名詞 *мом/tom* の単数主格/単数対格は同一の語形をとる。他にも、名詞 *тепло/teplo* 「熱」の単数主格/単数対格は、形容詞 *тёплый/tëplyj* 「温かい」の中性短語尾、(述語) 副詞と語形が重なる。以下に、ruTenTen11 における名詞 *тепло/teplo* の検索結果の例を挙げる。

- (19) a. <...> он излучает ТЕПЛО <...>.
 <...> on izlučaet teplo <...>.
 it release-PRS. warmth-N.SG.ACC.
 「それ（赤い色）は温もりを発している。」
- b. Становится ТЕПЛО <...>.
 Stanovitsâ teplo <...>.
 it_becomes-3.SG.PRS. warm-PRED.ADV.
 「暖かくなってきている。」 (ruTenTen11 より引用：アクセス日 2017/8/4)

a.では、名詞 *тепло/teplo* は単数対格として現れている。b.では、名詞での検索にもかかわらず、述語副詞の *тепло/teplo* が結果としてヒットしている。とはいえ、Sketch Engine や現行 RNC-M の分類精度は高く、全体的に見て上記のような語形の混同は少ないと推測される⁷⁴。

2.3.3. レマと言語研究

2.3.3.1. レマを用いた研究事例

石川 (2008: 79)が述べているように、各語形を集約したレマは「語彙学習という文脈における語の概念に非常に近いものである」。レマ単位で語を数える方針の根底にあるのは、一度屈折のシステムを習得すれば各語形の意味も理解可能だ、という考えである (Nation 2001: 7-8)。確かに、学習負荷 (cf. Swenson, West 1934)の観点からすれば、レマは語彙学習や学習用語彙リストの作成において、もしくは語数を数える上で理にかなった単位である。総語数「1 万語からなるテキストを読むからといって、1 万語の異なる語の知識が必要なわけではない。study を知っている学習者であれば, studies, studying も同時に知っていると考えて差し支えないであろう」(石川 2008: 79)。一般に、不規則変化の過去形は個別の項目として記憶されているのに対し、規則変化の過去形は動詞の原形で記憶され、産出時に形態素 *-ed* が付与され则认为られており、それを裏付ける研

⁷⁴ 自作の 100 万語コーパスにおいて上述の名詞 *тепло/teplo* という語形は 41 回現れるが、Sketch Engine を通してこれらを分析すると、その中で名詞と述語副詞を混同している例は確認されなかった。ただ、*мом/tom* のように生起頻度が 1,000 を超える語形に関しては誤分類がいくつか見受けられた。

究もある (cf. Kirkici 2010). したがって、人間はメンタルレキシコン (脳内辞書) 内で各語形を個別に覚えているわけではないことが予想される. 語彙学習という文脈においてタイプではなくレマを1語の単位とする姿勢は支持できそうである.

そのため、レマと語彙学習の関係は深い. 表5が示すように、レマの利点はテキスト内の語数を大幅に減少させることである (Nation 2001: 8). 教材に導入する語彙数を論じる際、学習負荷の軽減という観点から見出し語の単位にレマが用いられる場合が多く、教材で用いられる一般的な1語の定義は各語形をまとめたレマである. また、通常、辞書で用いられる見出し語の定義はレマ単位に相当する (ただし、2.3.2.1.にて言及したように、特定の語形が見出し語として記載されている場合もある). 派生に比べて屈折は形態的・意味的に規則性が高く例外が少ないため (Bauer 1983: 26-27), この点からも語のレマ単位による提示や計量は妥当であると言えよう.

実際、ロシア語の詳解辞典 (Ожегов, Шведова 1997; Шведова 2007; Ожегов 2010;), Oxford Russian Dictionary (Wheeler et al. (eds.) 2007), ロシア語の頻度辞書 (Штейнфельд 1963; Засорина (ред.) 1977; Лёнгрен 1993; Brown 1996; Ляшевская, Шаров 2009; Sharoff et al. 2013)はもちろん、学習者向けの辞書 (東郷他(編) 1988), TORFL の学習用語彙リスト (Андрюшина (ред.) 2014)も基本的に見出し語の単位にレマを採用している. Лёнгрен (1993: 27)が言うように、基本的な語の単位はタイプではなくレマである⁷⁵. また、文部科学省が規定する中学校学習指導要領解説 (文部科学省 2008: 40)には、「語数については、綴りが同じ語は、品詞にかかわらず1語と数え、動詞の語尾変化や、形容詞や副詞の比較変化などのうち規則的に変化するものは原則として1語とみなすことができる」と記載されており、語の単位としてレマが想定されているようである. 一度屈折のシステムを習得すれば各語形の意味も理解可能だと考えるのが自然であり、この判断は理にかなっていると思われる.

2.3.3.2. レマの問題点

語彙学習におけるレマにはいくつか問題がある. 例えば、「*child* の複数形である *children* や *run* の過去形である *ran* など、不規則変化形はレマ化すべきでないという考え方」(石川 2012: 141)がある. ロシア語の例に関して言えば、例えば、*uđmu/ıdı* 「進む」の現在形と過去形のパラダイムはまったく異なる. そのため、屈折のシステムを習得していたとしても、補充法的な関係にあるこれらの語形を1つのレマに含めて良いのか疑問が残る (補充法の関係は、語幹が異なることを意味するため).

⁷⁵ Лёнгрен (1993)では、各語形をまとめる単位として語彙素 (лексема) という用語を使っているが、これは、記述の内容から判断してレマとほぼ同義であると考えられる.

(20) 動詞 *идти* 「進む」の活用

- a. 現在形 : *иду, идёшь, идёт, идём, идёте, идут* b. 過去形 : *шёл, шла, шло, шли*

иду/идти のように、現在形と過去形において語幹が異なっている場合の学習負荷は、規則的な変化をする語のそれよりも明らかに重い。このように、レマには、パラダイムに不規則な変化がある場合、それらを1つのレマに含めるのかといった問題が存在する (Nation 2001: 8)。

他にも、レマ化に伴う問題として、語のすべての語義が一括りにされてしまうことが挙げられる。語の意味は文脈によって決まる側面があるため、多義語に含まれるそれぞれの意味を1つの語彙項目としてまとめるべきかどうかには疑問が残る (cf. Hatch, Brown 1995: 49-50)。例えば、*сложность/složnost'* 「複雑性」と *сложности/složnosti* 「面倒事」のように (cf. Шведова 2007: 898)、単数形と複数形で意味の異なる場合も、これらはレマ単位では1語として扱われる。動詞 *хлопать/hlopai'* は「打つ、叩く」や「拍手する」といった意味をもつ。ロシア風餃子「ペリメニ」を喉に詰まらせた人が、背中を指して “*Хлопай!/Хлопай*” 「叩いてくれ!」と相手に助けを求めているのに、その相手が拍手をするという小話があるが、学習上この2つの意味は別に捉えた方が良いのかもしれない。

ただ、Nation (2001: 50-51)は、英語の *fork* は1語で複数の意味を表すのに対し、他の言語ではそれらがそれぞれ別の語で表現されるという例を挙げた上で、「*fork* の内在的概念の学習により、学習者は学ぶべき項目が一つで済む」と述べている。つまり、*fork* という形態から表象される3つの意味（食事用のフォーク、分岐点、枝）を学習する代わりに、その内在的概念を学べば良いという考えであるが、「叩く」や「拍手する」といった、一見かけ離れた意味群にもこれは適用できるのであろうか。仮に頻度リストの作成にあたって、同じレマの異なった意味ごとの頻度が取れるならば、その情報は貴重である（例: *free* の「自由な」と「無料の」）(齋藤他(編) 1998: 113)。だが、コーパス言語学の進歩の目覚ましい英語にしても、その作業は極めて難しいのが現状である。

他にも、あらゆる研究に共通した「レマ化」は実現されないという難しさがある。例えば、前出の *ympom/utrom* は、RNC-M では名詞 *ympo/utro* の単数造格形として捉えられており、それ自体は見出し語として扱われていない。一方、Штейнфельд (1963)、Лёнгрен (1993) などでは *ympom/utrom* は別個の見出しを有している。このように、レマ化の基準は研究ごとに異なっており、ある分析結果と他の分析結果を比較する際には注意が必要である。

ただ、上記のような課題は残るものの、辞書・学習用語彙リストの編集や研究において、語の定義や単位としてレマを採用する方針は教育上基本的な姿勢であると言えよう。

2.3.4. ワードファミリーと言語研究

2.3.4.1. ワードファミリーを用いた研究事例

前節で言及したように、一般に最も用いられている語の単位は各語形をまとめたレマであろう。派生に比べて屈折は形態的・意味的に規則性が高く例外が少ないので (Bauer 1983: 26-27), 辞書などでは1語の定義として各語形を集約した単位, すなわち, レマが用いられることが多い。ただ, Laufer, Nation (1995: 312)は, 習熟度の高い学習者は, 「*happy, happiness, happyish, happily*, そして *unhappy* が密接に関係していることを難なく理解する」ため, WF という単位 (概念) は学習者にとって「語」の定義に最も近いとしている。実際, WF という概念は関係する多くの語彙を圧縮して整理するため, 母語話者や第2外国語として英語を学ぶ学習者を対象とした研究・教育に広く用いられている (石川 2008: 81)。

● WF と語彙学習・語彙サイズ

Nation (2001: 46-47)が述べているように, 「語を知ること (knowing a word) には, 他の語においても生起し得る接辞と語幹から語は構成されているという知識が含まれ」, これは, 当然, 語彙の学習負担を軽減する。言い換えると, 「語を知ることには, word family の構成員に関する知識も内包されている」 (Nation 2001: 47)のである。例えば, 既習語 (*coast* 「海岸」) と派生接辞 (形容詞を形成する *-al*) の知識は, 新出単語 (*coastal* 「海岸の」) の意味を推測してその定着を測る際に使用することができる (門田, 池村 2009: 81-82)。また, 学習者の習熟度が増すにつれて, WF 内の構成員の数は増えていくと推測されるため (cf. Schmitt, Meara 1997; Mochizuki, Aizawa 2000), 語彙学習に際して WF への言及は避けられないと思われる。実際, 文部科学省が規定する高等学校学習指導要領解説 (文部科学省 2009: 38)では, 「語の数については, 活用形を全体として1語と数えたり, 派生語をまとめて1語と数えたりすることもできる」としており, 英語の語の単位として WF も想定されているようである。

WF の概念は, 「一度, 元となる語 (base word), もしくは派生語を覚えれば, その word family の他の構成員を理解する労力は少なくて済む, または, まったく労力を要さない」 (Bauer, Nation 1993: 253)という考え方に根ざしている。派生接辞には, 意味的・形態的に規則的な派生を行うものとそうでないものがあるが, その中でも, 例えば, 英語の接尾辞 *-ly, -ness* や接頭辞 *un-*は, 規則的な振る舞いをする派生接辞であり, これらの派生接辞を知っていれば派生語の学習負担は減少する (Nation 2001: 8)。

- (21) local → locally
「地元の」 「地元で」

接尾辞-ly は規則的で生産性が高い (高橋 2009: 233). 一方, 最も数の多いロシア語の副詞は, 形容詞短語尾の中性形と同じ形をしているが (Borras, Christian 1971: 240), 派生元の形容詞を知っていればかなり規則的に副詞を形成できる⁷⁶.

- (22) a. красивый → красиво → красиво
krasivyj krasivo krasivo
beautiful-ADJ. beautiful-ADJ.SF.NE. beautifully-ADV.
「美しい」 「美しい (短語尾)」 「美しく」
- b. интересный → интересно → интересно
interesnyj interesno interesno
interesting-ADJ. interesting-ADJ.SF.NE. interestingly-ADV.
「興味深い」 「興味深い (短語尾)」 「興味深く」

他にも, 職業や何らかの活動に従事する人を表す名詞の形成に使われる-*mel' / -tel'*は, 規則的で生産性が高い派生接辞であるが (Ефремова 1996: 457), この派生接辞と派生元の語が既知であれば, 派生語を受容的に理解することは難しくないであろう.

- (23) грабить → грабитель b. учить → учитель
grabit' grabitel' učit' učitel'
rob-V. robber-N. teach-V. teacher-N.
「強奪する」 「強奪者」 「教える」 「教師」

他にも, WF は語彙サイズを研究する単位としても用いられる (cf. Read 2007: 108). 例えば, Nation, Beglar (2007)では, 学習者の語彙サイズを計測する単位として WF を採用している. また, Goulden et al. (1990)の研究によると, 成人した英語母語話者が知っている語彙数は, WF 換算で 20,000 語であるという (この 20,000 WF という数値は, 発表的な語彙サイズではなく受容的な語彙サイズを指す). Nation (2006)の分析からは, 内容理解の伴ったリーディングが可能な, 習熟度

⁷⁶ (22)の例が示すように, 形容詞の中性短語尾形は屈折によって得られる形である. また, これは-*o / -o* 終わりの副詞と形態が同じである. そのため, -*o / -o* は屈折接辞なのか, 派生接辞なのかを判断するには議論が必要である. ただ, 本稿では-*o / -o* を, 形容詞から副詞を形成する派生接辞として扱う. この接尾辞に関しては 6.3.2.で言及する.

の高い英語学習者は 8,000～9,000 語規模の語彙を知っていなければならないという結果が得られているが、この 8,000～9,000 語は WF 換算によるものである。

● WF 単位の学習用語彙リスト

英語学習者向けに作成された West (1953) の General Service List (以下, GSL) は約 2,000 語で構成されているが、これは WF 換算の数字である。GSL の語彙選定の基準には、500 万語の書き言葉コーパスから得られた生起頻度の情報だけでなく、作成者の主観的判断も含まれている。GSL は学習用語彙リストとして評価が高く、今なお参照され続けている。というのも、GSL は汎用性が高く、書き言葉・話し言葉、学術、小説などの様々な分野のテキストにおいて高いカバー率を実現するからである (cf. Waring, Nation 1997; Nation 2001, 2004)。Coxhead (2000) の Academic Word List (以下, AWL) も WF 単位で構成された学習用の語彙リストである。570WF で構成された AWL には、多くのテキストに共通して現れる高頻度語は含まれておらず、それを除外したうえで汎用性の高い学術用語が載せてある。

なお、現在は GSL を大幅に改定した New General Service List (以下, NGSL)⁷⁷ も存在する。

● WF 単位によるテキストカバー率の計測

Browne (2013, 2014)によると、前出の NGSL は、Cambridge English Corpora (以下, CEC) において GSL よりも高いテキストカバー率を実現する。

表 18. CEC における GSL と NGSL のカバー率 (Browne 2013: 16, 2014: 6-7)

語彙リスト	レマの数	WF の数	テキストカバー率
GSL	3,623	1,964	84.24%
NGSL	2,818	2,368	90.34%

GSL の 1,964WF はレマ換算に直すと 3,623 語であるが、これらの語彙は CEC のテキストの 84.24% をカバーする。一方、NGSL の 2,368WF はレマ換算で 2,818 語であり、CEC において 90.34% のテ

⁷⁷ NGSL とは、Cambridge English Corpora に基づいて作成された学習用語彙リストである。分析元となった Cambridge English Corpora の総語数は約 2 億 7,300 万語である（このコーパスの Newspaper 部門は、総語数が膨大であり、語彙項目の頻度に多大な影響を与えるため分析から除外されている。同様に、巨大な Academic 部門は一般的な英語とは関わりの薄いジャンルであるため、分析対象のコーパスからは除外されている）。また、NGSL の作成に際して、固有名詞、略語、スラングなどは削除してある。さらに、他の重要な語彙リストとの比較を通して NGSL に含める語彙を選定し、Paul Nation との議論も行なっている（詳細は Browne (2013, 2014) を参照）。なお、NGSL は「作成元であるコーパスの性質上、話し言葉というよりも書き言葉を代表していると思われる」（Webb, Nation 2017: 10）。

キストカバー率を実現する。レマ単位で 800 語近く少ない NGSLの方がオリジナルの GSLよりも 6.1%も高いカバー率を達成している。

Nation (2004)は、BNCにおいて高頻度に、かつ、広範囲のテキストに渡って生起している語を対象として 3,000WF の語彙リストを作成し、それによるカバー率を計測した。具体的には、この研究は、BNC の高頻度 3,000WF と GSL + AWL の 2,556WF によるカバー率を様々なコーパスにおいて比較している⁷⁸。Nation (2006)ではさらに語彙リストの規模を拡大し、BNC Word Family 14,000 が作成された。さらに、2013 年にはそこに The Corpus of Contemporary American English (以下、COCA) のデータが加えられ、25,000 語の BNC-COCA へとその規模を増やしている (中條 2015: 26, 37)。

Hu, Nation (2000)は、小説の理解とテキストカバー率の関係を調査した研究である。結果、作品内の 98%の語彙が既知でないと多くの学習者は、十分にその内容を理解することはできなかったが⁷⁹、この 98%という数値をテキスト内の語数に還元すると、50 語に約 1 つが未知語という割合となる。

Nation (2006)はこの数値が WF 単位でどれくらいの語数となるのかを調査した。結果、カバー率が 98%に到達するには、書き言葉のテキストで 8,000～9,000WF、話し言葉のテキストで 6,000～7,000WF が必要であることがわかった。また、閾値説に関する Batia Laufer の研究は、学習者がアカデミックなテキストを読むには少なくとも 3,000 語を習得している必要があるとしているが (Laufer 1992)、この 3,000 語も WF 換算である。

WF 単位による特定語数のテキストカバー率を扱った英語以外の研究に Cobb, Horst (2004)がある。この研究は分析対象の言語がフランス語であり、高頻度の WF 群が実現するカバー率に英仏で差があるのかを調査している。分析の結果、リーディングにおいて英語が高頻度 2,000WF + AWL で到達するテキストカバー率 85%という数値に、フランス語は 2,000WF のみで到達することがわかった。つまり、フランス語の高頻度 2,000WF は英語よりも使用率が高く、日常だけでなく学術の場面にも頻繁に現れているのである。したがって、Cobb, Horst (2004)は、フランス語において AWL のような特定分野に特徴的な語彙のリストは必要ない、もしくはその必要性は低いようであると述べている。この分析結果は、英語の研究成果をそのまま他の言語へ適用してはい

⁷⁸ Nation (2004)は、複数のコーパスにおいて、BNC の 3,000WF と GSL + AWL がどれだけのカバー率を実現するかを比較している。結果は、様々な見方ができるが、BNC の 3,000WF の方がわずかにカバー率が高かった。

⁷⁹ Hu, Nation (2000)では、他のテキストカバー率による内容理解度も提示されている：
a. 80%: 作品の内容を十分に理解できる被験者はいなかった。
b. 90%: ごく一部の被験者しか作品の内容を理解できなかった。
c. 95%: 一部の被験者が作品の内容を理解できた。

けないことを示す一例である。

2.3.4.2. ワードファミリーの問題点

WF の利用には、どの語を WF に含めてどの語を含まないのか、といった線引きの問題が存在する (Nation 2001: 8)。以下の語は、形容詞 *белый/belyj* 「白い」の派生語群であるが、WF にそのすべてを含めていいかどうかは疑問である。

(24) *белый* 「白い」の派生語群

a. <i>беловатый</i>	b. <i>белеть</i>	c. <i>белок</i>	d. <i>бельё</i>
<i>belobatyj</i>	<i>belet'</i>	<i>belok</i>	<i>bel'ë</i>
whitish-ADJ.	grow white-V.	albumen-N.	linen-N.
「白っぽい」	「白くなる」	「白味」	「下着」

質の弱化を意味する a. の接尾辞 *-оват/-ovat* は、派生元の語である *белый/belyj* 「白い」に対して追加的なニュアンス「っぽい」を付加している (Караулов (ред.) 1997: 548)。また、動詞を形成する接尾辞 *-е/-e* は、「派生元の語である形容詞の意味になっていく」(Ефремова 1996: 115)ことを表し、b. の *белеть/belet'* は「白くなる」を意味する。a. と b. に関しては派生元の語と派生接辞に明るければ、その意味を推測することは可能であるし、暗記の際の学習負荷も減少するであろう。

ただ、c. と d. は事情が異なる。接尾辞 *-ок/-ok* は、派生元の形容詞が意味する特性をもった男性名詞を形成するが (Ефремова 1996: 333-334)、派生元の語と接尾辞の意味から *белок/belok* 「白味」の意味を予測することはできないであろう。d. の *бельё/bel'ë* と派生元の語の間には、現代ロシア語では派生の意味的相関の喪失が起きており (Земская 1973: 14-15)、その構成要素から「下着」という意味は導けない。そのため、Тихонов (1985) の語形成辞典では、*бельё/bel'ë* は *белый/belyj* の WF にはまとめられておらず、*бельё/bel'ë* としての見出し語が存在している。

a., b., c. は *белый/belyj* の WF に含まれるであろうが、学習者の習熟度によってどれを含めて、逆に、どれを含まないのかを議論しなければならない。その際、Bauer, Nation (1993) のように、いくつかの条件を設定して、WF の定義を段階的に設定することが望まれる (これに関しては 6.2.1. で詳細に論じる)。他にも、WF の問題点として、外国人学習者にとってこの概念は接辞の知識がない状態では導入しづらいということが挙げられる (石川 2012: 142)。

2.4. 総括

2.1. ではトークン、タイプ、レマ、WF といった「語」の単位について言及した。2.2. では、分

析に使用する単位によって得られる結果に大きな差が生じることを考察した。本章では、英露で書かれた文学作品を比較したが、それにより、両者の言語的な特徴が確認された：トークン単位の元では、英語はロシア語よりも語数が多くなるが、タイプとレマ単位では数値が逆転する。ロシア語のタイプ数の多さは複雑な屈折のパラダイムに起因する。また、レマに関しては、英語が分析的な形を用いて概念・語彙素を増やす傾向にあるのに対し、ロシア語は同様のことをするのに統合的な手法に依存するため、テキストに含まれる語の数が多くなったと考えられる。続く 2.3. では、4 つの単位が言語研究や語彙学習においてどのように応用されているのかを概観した。トークンはコーパスの総語数を示す際に、タイプは特定の語形を分析する際に用いることができる。そして、レマと WF は、語彙リストに含まれる語数や覚えるべき語数を議論する際などに用いられる。

なお、ここまでの考察で、ロシア語には多くの派生語が含まれており、WF という概念を語彙学習に導入する価値は高いということが予想される(その言語学的・数量的な分析は 5 章で行う)。

次章では、これら 4 つの語の単位を踏まえて、現在までに作成されたロシア語のコーパスについて言及する。

3 章. 外国語教育とロシア語コーパス

言語の分析は、主にテキストや音声などの言語資料に基づいている。例えば、新聞記事、小説、学習者の作文といった書き言葉のテキストや、音声を書き起こした話し言葉のテキストは、言語研究において重要な役割を果たしている。

テキストの集合体であるコーパスは、ある言語現象に対してなんらかの証拠を提示してくれるが (Копотев, Мустайоки 2008: 10), コーパス言語学とは「言語研究を行うための一連の分析手順・手段に焦点を当てた領域である」(McEnery, Hardie 2012: 1)と言えよう。コーパス言語学の独自性を強調する研究者もいるが、現在、コーパスはある特定の専門家が使用する特殊なツールであるという敷居は消えつつある。McEnery et al. (2006: 7)が述べているように、「コーパス言語学は、音声学、統語論、意味論、語用論と同じ意味での独立した言語学の分野というよりも方法論」的な側面を持ち、言語研究のあらゆる調査に用いられ得る。つまり「コーパス言語学はそれ自身で完結する閉じた学問体系というよりも、様々な言語研究分野とゆるやかに連関する学際的な研究分野」(石川 2012: 3)なのである。実際、コーパス言語学は、言語使用を強調する機能主義と研究上の親和性が高い(心理言語学, 機能言語学, 認知言語学など)(cf. Deignan 2005; 中本, 李(編) 2011; McEnery, Hardie 2012)。他にも, McEnery, O’Keeffe (2010: 7)によると, 言語教育・言語学習, 談話分析, 文学文体論, 法言語学, 語用論, 音声学, 社会言語学, 健康コミュニケーション学などといった分野でコーパスが分析ツールとして用いられている。

したがって、コーパス言語学は言語学全体に資源を提供する分野として大きな役割を果たしているのである。1 章で言及したが、本稿は、コーパスが提示する頻度情報を判断材料として以下に挙げる 4 つの研究設問に取り組む。

(25) (再掲) 本稿の研究設問

- a. 派生接辞学習による語彙力増加の数量的確認
- b. 学習価値の高い派生接辞の選定
- c. 学習価値の高い意味の選定 – 動詞接頭辞 *нпо-/pro-*を例に –
- d. イメージ・スキーマと放射状カテゴリーの記述整備 – 動詞接頭辞 *нпо-/pro-*を例に –

上記 a.~d.の分析は、コーパスが提示する語彙の頻度データ (Ляшевская, Шаров 2009)に基づく、もしくは関係しており、本稿はその分析結果に基づいて派生接辞を用いた効率的なロシア語の語彙学習法を検討する。この点において本稿はコーパスをツールとして活用している「コーパス検

証型 (corpus-based) の研究」⁸⁰ (cf. McEnergy, Hardie 2012) であると言える。

本稿では主に語彙の頻度分析にコーパスを用いるが、その選定には細心の注意を払わなければならない。論拠となる分析の源が正しく設計されていなければ、導かれた結果に効力や説得力は生まれない、もしくは結果の信頼性は低くなってしまうからである。つまり、頻度や分布といった語彙統計 (3.1.2.参照) の元となるコーパスの構造は、自らの研究において大きな意味を持つのである (投野 2015b: 9)。ロシア語の言語研究の場合、分析対象とするコーパスの選定にはよりいっそうの議論と検討が必要である。Ляшевская (2016: 7)が述べているように、そもそもコーパス言語学自体が言語の学問領域においてまだ若い潮流であり、ロシア語の RNC ですら完成してからまだ 10 数年しか経過していない。そのため、自らの研究目的に合致したロシア語のコーパスを選ぶ、または作成する際には熟考が求められる。

3 章ではコーパスの外国語教育への利用、コーパスの構築に関する諸相、そしてロシア語のコーパス (とそれに基づく頻度辞書) について言及する: まず 3.1.では、これまでに作成された英露の (頻度) 辞書と学習用語彙リストについて俯瞰し、語彙学習の分野でコーパス、またはコーパスから抽出された情報がどのように活用されているのかを確認する。続く 3.2.では、後述のロシア語コーパスの構造を理解するのに必要な概念、用語に触れる。そして、3.3.では作成年代順にロシア語のコーパスを紹介するが、その際、コーパス規模、テキストサンプリング (標本抽出)、語彙リストを中心にそれらの概要を説明する。最後に、3.4.にて本章を総括し、4 章に論を繋げる。

3.1. 外国語教育におけるコーパスの利用

外国語教育とコーパスの関係は深い (cf. Leech 1997; Römer 2006, 2008)。現在、この潮流は世界中で見受けられるが、日本国内でもコーパスを英語教育にどう生かせるかが積極的に論じられており、その応用は語彙学習研究だけでなく、教授法研究、学習者の誤用研究、言語テスト研究、教材作成研究など様々な領域に及ぶ (e.g. 投野 2003, 2005, 2011; 石川 2008; 赤野他 2014; 投野 (編) 2015)。また、近年では、コーパスは CEFR との関係の中で用いられるようになっており (投野 2015b: 12; cf. 投野 2013)、CEFR の普及と相まってますますその影響力を増している。英語教育の分野でコーパスを利用するという流れはすでに確立されたと言える。

この流れはロシア語教育にも波及しており、例えば、RNC-M に基づく頻度辞書 (Ляшевская,

⁸⁰ コーパス言語学における研究手法は、コーパス検証型とコーパス駆動型 (corpus-driven) に大きく二分できる。前者は、コーパスのデータを用いて事前に設定していた仮説や理論を検証する研究手法を意味し (石川 2012: 30)、本稿のアプローチはこれに属する。後者は、コーパスを単なる手法と位置付ける見方を否定し、コーパスそれ自身が言語の仮説を証明する根拠となるべきであると考え。つまり、既存の仮説や理論の検証ではなく、コーパス自体を出発点とし、新たな実証的言語記述を目指す (石川 2012: 27)。詳細は McEnergy, Hardie (2012)を参照されたい。

Шаров 2009)は、コーパスから得られる情報の応用範囲として以下の4つの分野を挙げている。

(26) コーパスの頻度データの応用範囲 (Ляшевская, Шаров 2009: V)

- a. 言語教育 b. 言語学に関する学術研究 c. 辞書の編纂
- d. パソコンでの応用 (特に、情報検索やスパムのフィルタリングシステム)

このように、コーパスの応用範囲は広く、例えば、ロシア語学の研究 (b.) においてコーパスが使われるようになってすでに久しい。一方で、ロシア語教育と辞書の編纂 (a.と c.) の領域では、コーパスはまだ英語ほど活発に利用されていない。

次節から英語の先行研究を中心に、本稿の分析に関係する頻度辞書と学習用語彙リストを概観し、コーパスが提示する頻度データがこれらの編纂にどう生かされているのかを考察する。

3.1.1. 辞書とコーパス

石川 (2012: 113)が述べているように、「コーパス言語学において頻度は語や表現の典型性や標準性の根拠」となる。また、応用言語学の観点からすると、生起頻度は、「言語においてどの語が頻繁に使われているのか、逆にどの語があまり使われないのか」(Ляшевская, Шаров 2009: V)といった情報源として機能するため、辞書や学習用語彙リストの編纂などに活用されている。

英英学習辞典は早い段階でその編纂にコーパスを利用し始めた。コーパスを辞書編纂に初めて導入したのは COBUILD (Collins Birmingham University International Language Database) プロジェクトによる Collins Cobuild English Language Dictionary (Sinclair (ed.) 1987)で、この辞典には Bank of English の分析結果が盛り込まれている (石川 2012: 166)。1995 年には Cambridge International Dictionary of English, Oxford Advanced Learner's Dictionary, Longman Dictionary of Contemporary English, COBUILD といった辞典がコーパス準拠を謳い、改訂・刊行された (投野 2015b: 4)⁸¹。

また、学習用の英和辞典における星マークがコーパスの活用例として挙げられる (cf. Chujo, Hasegawa 2006)。英和辞典には学習重要度に応じて語に***, **, *といったマークが付されており、これは、コーパスから得られる頻度情報を参考にしていると推測される⁸²。ロシア語の辞書に関して言うと、中澤(編) (2015)がコーパスの情報をその内容に反映している。このように、コーパスは重要語の選定に際して客観的なデータを提供してくれる。現在では、コーパスは辞書編纂に

⁸¹ 英英学習辞典の編纂とコーパスの歴史的な関係は、投野 (2015b)が当時の時代背景を論じながら詳細に記述している。

⁸² 石川 (2001)の調査によると、以前の辞書は重要語の判別にばらつきがあり、かつ、その数の設定も辞書によって異なっていた。

において重要な役割を占めるに至っており、新しく出版されるほとんどの学習用の辞書が何らかの形でコーパスに基づいている (齋藤他(編) 2005 : 207). つまり、コーパスはすでに辞書編纂において基本的なツールとしてみなされているのである (O'keeffe et al. 2007: 17).

他にも、通常の学習辞典とは異なる、頻度にのみ特化した頻度辞書 (frequency dictionary) もコーパスから得られるものであり、応用言語学だけでなく言語学全般の情報源として活用されている。英語はこれまでに数多くのコーパスが作られてきたため、それに伴って頻度辞書や頻度リストの数も多いが、ロシア語は数えるほどしか存在しない (3.3.参照)。

3.1.2. 学習用語彙リストとコーパス

学習用語彙リストはシラバスや教材の作成と密に関係している。そのため、例えば、「英語教育において、<...> 電子コーパスが普及する以前から多くの学習用語彙表が作成されて」(中條 2015: 17)きたという歴史がある。齋藤他(編)(2005: 7-8)と中條 (2015: 17)は学習用語彙リストの開発時期を BNC 以前と BNC 以後で分けている：開発前期においては手作業で、もしくは小規模な電子コーパス (Brown Corpus など) の情報を利用して学習用語彙リストは作成されていた (その中には、今なお参照されるものもある)。開発後期には BNC などの巨大コーパスが出現し、大規模な分析に基づいた学習用語彙リストが発表されるようになった。

近年では学習用語彙リストの作成にコーパスの頻度データが用いられることは一般的になってきており、Kilgarriff (2010: 2)は、語彙リストは語の生起頻度に基づくべきであると述べている。ただ、頻度以外にも導入する語彙の選定基準は存在する。以下に、中條 (2015)がまとめた英語の学習用語彙リストの一覧を挙げる。

表 19. 英語の主な学習用語彙リスト (中條 2015: 20-21)⁸³

研究者	年	語数	語彙表名	主な基準	作成方法
Thorndike	1921	1,000	First 1,000 Words	頻+分	調査の上位
Ogden	1930	850	Basic English	主観	同意語の除外
Dale	1931	769	Dale List of 769 Easy Words	分+頻	調査 2 種の共通語
Palmer	1931	3,000	The Standard English Vocabulary	主観	調査+経験
Faucett 他	1932	1,534	Indispensable and Essential Words	頻度	調査 2 種合計の上位
IRET	1936	2,000	The General Service List (Interim Report on Vocabulary Selection)	主観	頻度など 7 種の基準
Dolch	1936	220	Dolch Basic Sight Vocabulary	分+頻	調査 3 種の共通語
Thorndike 他	1944	1,000	First 1,000 Words	頻+分	調査の上位
Dale 他	1948	3,000	Dale 3,000 List	主観	既知語の調査

⁸³ 表内に含まれるリストの書誌情報は中條 (2015)を参照されたい。

West	1953	2,000	A General Service List of English Words	主観	頻度＋主観
Johnson	1971	306	A Basic Vocabulary for Beginning Reading	分布度	調査 2 種の共通語
Otto 他	1972	500	Sight Words for Beginning Reading	頻度	調査の上位
Harris 他	1973	332	Basic Vocabulary for Beginning Reading	分布度	調査のうち 1 年生用読物
van Ek 他	1975	1,600	The Threshold Level	主観	機能、概念の分析から
van Ek	1976	1,495	The Threshold Level for Modern Language Learning in Schools	主観	機能、概念の分析から
清川	1976	278	The 278 Most Frequently Spoken Words	分布度	調査 3 種の共通語
Hindmarsh	1980	4,500	Cambridge English Lexicon	主観	頻度＋直感
全英連	1981	4,800	高校基本英単語活用集	主観	頻、分、主、経験
竹蓋	1981	7,360	白色語彙	分＋頻	調査 2 種の共通語
Engels 他	1981	3,286	L. E. T. Vocabulary-List	分＋頻	調査、語彙表、計 6 種
JACET	1983	3,990	JACET List of Basic Words	分＋頻＋主	調査、語彙表、計 12 種
都中英研	1986	1,860	基本語彙 1,000 語、補足 460 語、 外来語 400 語	分＋主	調査、語彙表、計 12 種
Summers 他	1987	2,100	The Longman Defining Vocabulary	主観	定義
金田	1988	4,000	D4000 学習語彙リスト	分布度	調査、語彙表、計 15 種
竹蓋他	1988	6,546	白色語彙マーク VI	頻度	調査 8 種合計の上位
中條他	1994	7,000	現代英語のキーワード「プラス α 2000」	頻度	調査の上位
北大	1995	7,454	北海道大学英語語彙表	頻＋分	調査、語彙表 12 種
Coxhead	1998	570	Academic Word List	頻＋分	調査 28 分野
アルク	2001	12,000	標準語彙水準 12000	頻＋分＋主	調査の上位＋主観
JACET	2003	8,000	The JACET List of 8000 Basic Words	頻＋主	調査の上位＋主観
Nation	2006	14,000	BNC Word Family List 14000	頻度	調査の上位
投野	2004	100	NHK100 語でスタート！ 英会話	頻度	調査の上位
横川	2006	3,000	日本人英語学習者の英単語親密度	主観	親密度調査
京大	2009	1,110	京大・学術語彙データベース基本英単語 1110	頻(＋主)	調査の上位
Davies 他	2010	5,000	A Frequency Dictionary of Contemporary American English	頻＋分	調査の上位

頻：頻度、分：分布度、主：主観、調査：語彙調査、語彙表：語彙表

表からは、語彙選定の基準として頻度だけでなく、分布度⁸⁴、作成者の主観が用いられていることがわかる。フリーズ、トレイヴァー (1958: 2)が述べているように、頻度などの客観的方法と思弁的・主観的な方法の「いずれか一方のみに偏した方法では、不完全な結果しか得られないことがわかり、<...> 両者を総合した折衷的な (Eclectic) な経験的な方法 (Empirical method) が最も理想的な方法」であると思われる。英語の高頻度語の定義を目的とした研究は長い歴史を持つが (Webb, Nation 2017: 10)、頻度は学習用の語彙選定の絶対的な基準ではない⁸⁵。

とはいえ、高頻度語の学習優先度は高い。Webb, Nation (2017: 6)は、学習者にとって語の価値は均一ではなく、「その価値は典型的にはその言語における頻度により示される。<...> 高頻度語はコミュニケーションに必要であるため低頻度語よりも価値が高い」と述べている。ジップの法則 (Zipf 1935)からも明らかなように、言語には高頻度に用いられるごく少数の語群と低頻度に用いられる膨大な語群が存在し、当然、効率性が求められる学習において前者の重要性は高い。したがって、高頻度語は外国語学習者にとって重要であり (Nation, Hwang 1995; Nation 2001; Webb, Nation 2017)、これまでに高頻度語を含む数多くの学習用語彙リストが作成されてきた。また、Webb, Nation (2017: 10)は、高頻度語のテキストカバー率の高さなどの理由を挙げ、頻度は覚えるべき語彙の最も重要な選定基準であるかもしれない、と述べている。

代表的な英語の学習用語彙リストとして、まず The Teacher's Word Book of 30,000 words (Thorndike, Lorge 1944)が挙げられる。Thorndike, Lorge (1944)は、主に米国内の英語母語話者の学校教育に用いられ、当時としては膨大な 1,800 万語というテキストデータに基づいた 3 万語の語彙頻度表であった (投野 2015b: 2)⁸⁶。West (1953)の GSL⁸⁷は実用性・汎用性の高い語を選んで作成された、英語学習者向けの語彙リストである。GSL では、語の頻度だけでなく、作成者の主観的な判断も語彙選定の基準として用いられた⁸⁸。GSL は学習用語彙リストとして評価が高く、今なお参照され続けている。Coxhead (2000)の AWL には、人文・経済・法律・科学の 4 分野のテキス

⁸⁴ 石川 (2012: 144)が言うように、分布度 (dispersion / range) とは当該の語が生起するテキストの数を意味し、語の汎用性を表す：例えば、ある語が 1 種のテキストで 100 回生起するよりも、100 種のテキストで 1 回ずつ生起している方が一般性が高いと言える。

⁸⁵ 頻度に特化した語彙リストにはいくつかの問題点が見受けられる：例えば、語の頻度はあるコーパスに含まれるテキスト群の内容を反映したに過ぎず、統一性にかけるため、日常に有用な語が頻度リストから抜け落ちてしまうことがある (Stubbs 2001: 41-42)。横川 (2006: 35-36)も同様に、コーパスに基づいた語彙リストの問題点として、学習や日常生活に役立つ *soap* 「石けん」、*bath* 「浴室」、*cushion* 「クッション」などの具象名詞の欠如、異なるコーパス間で見られる頻度のずれ、テキストのテーマによって偏る語彙、コーパスが示す頻度と学習者の直感のずれなどを挙げている。

⁸⁶ この学習用語彙リストは日本の英語教材に長年影響を与えてきたと言われており (中條 2015: 18)、「主に学校教科書の語彙の適不適の客観的な測定尺度として、また語彙・読書・綴字の学力テスト (Achievement test) を作成する基礎として」用いられてきた (フリーズ、トレイヴァー 1958: 27)。

⁸⁷ GSL と後述の AWL、NGSL に関しては 2.3.4.1. を参照されたい。

⁸⁸ 具体的には、GSL は頻度以外に (1) Ease or Difficulty of learning (= cost), (2) Necessity, (3) Cover, (4) Stylistic Level, (5) Intensive and emotional words を考慮して作成された (中條 2015: 23-24)。

トから成る約 350 万語の学術コーパスから頻度と分布度に基づいて選定された、高校生・大学生にとって重要な語彙が含まれている (中條 2015: 28)⁸⁹。当リストには多くのテキストに共通して現れる高頻度語は含まれておらず、それを除外したうえで、汎用性の高い学術用語が掲載されている (Nation 2001: 17) (GSL の語彙項目とは重複しない)。また、近年作成された影響力のある語彙リストとして、Webb, Nation (2017)は NGSL (Brezina, Gablasova 2015)を挙げている。NGSL は CEC の頻度データに基づいて学習用に作成された (分析に使用された CEC のコーパス規模は、約 2 億 7,300 万語である)。日本人向けの学習用語彙リストとしては、JACET8,000 (相澤他 2005) が挙げられる。当リストには重要語として 8,000 語がレベル別に提示されているが、BNC を元に日本の英語教育の現状を考慮して語彙の選定が行われた (中條 2015: 25)。他にも、有名な高頻度語リストとして、英語の the British National Corpus/Contemporary American English lists⁹⁰, BNC word family list 14,000 (Nation 2006)などが挙げられる (cf. Webb, Nation 2017: 10)。

ロシア語にも学習用語彙リストはいくつか存在するが (e.g. 中澤(編) 2005; 中澤 2007; 佐藤, 木島 2009; 柳町 2011), 英語と比べるとその絶対数はかなり少ない。ただ, TORFL 用のレベル別学習用語彙リスト (Андрюшина (ред.) 2014)は, ロシア語教育において非常に大きな影響力を有している。1.1.1.で述べたように, TORFL が設定する各レベルの導入語数は入門レベルで約 780 語 (A1), 基礎レベルで約 1,300 語 (A2), 第 1 レベルで約 2,300 語 (B1), 第 2 レベルで約 5,000 語 (B2), 第 3 レベル (C1) で約 11,000 語である (第 4 レベルはネイティブスピーカーのレベルを想定しているため, 覚えるべき語彙数は設定されていない)。数多くの教材が, 対象とする学習者のレベルを TORFL の基準に合わせるだけでなく, 導入語彙の種類と数の決定に際してこの語彙リストの記述を参考にしている (e.g. Варламов и др. 2005; Жукова 2005; Бондарь, Лутин 2006; Беляева, Луцкая 2008; 沼野他 2012; Богомолов 2012; Головки 2015)。

他にも, TORFL の語彙リストを参考にして, 佐藤, 木島 (2009)は学習に必要な日本人向けの重要語 2,200 を決定している。中澤 (2007)は日常生活に使用される 2,000 語を載せているが, そのほとんどの語彙項目が TORFL のそれと重複していることに言及している。なお, TORFL の学習用語彙リストは, 語彙の選定基準として 5 つの項目を設定しているが, そのうちの 1 つが頻度である (どのようなコーパスに基づいた頻度情報なのかについては記載がない)。

⁸⁹ バトラー後藤 (2011: 123)は, AWL に関して ESL (English as a Second Language) や EFL (English as a Foreign Language) の観点から最も参考になる学術用語のリストであろう, と述べている。

⁹⁰ 参考 URL: <https://www.victoria.ac.nz/lals/about/staff/paul-nation>

(27) TORFL の学習用語彙リストにおける語彙選定の基準 (Андрюшина (ред.) 2014: 5).

- a. 文体的に無標であること b. 語結合に加わることのできる能力
- c. 意味的な価値 (頻繁に出会うものや現象を表すことのできる能力)
- d. 語形成の能力 e. 頻度

また、コーパスのデータに基づいたロシア語の学習用語彙リストとして、Brown (1996) と Sharoff et al. (2013) が挙げられる。これらが基づくコーパスは、現代ロシア語を代表するように設計されている。Brown (1996) は 100 万語のコーパスが提示する頻度データに基づいているが、作成者の主観によって修正が施された学習用語彙リストである (3.3.4. 参照)。Sharoff et al. (2013) は約 1 億 5,000 万語の Internet Corpus が提示する頻度データを元に編まれた学習用語彙リスト (より正確に言えば、頻度辞書) である。Sharoff et al. (2013) はロシア語学習者に必要な場面を想定し、彼らの言語使用に合致するテキストを収集して語彙リストを完成させた (3.3.6. 参照)。

3.2. コーパスの構築

コーパスの分類は様々で、例えば、Tognini-Bonelli (2010) の中では均衡コーパス、比較コーパス、特殊コーパス、時系列コーパス、非母語話者コーパスなどといった分け方が紹介されている⁹¹。他にも、コーパスを構成するテキストの種類やテキストのサンプリング基準などを切り口とすると、書き言葉か話し言葉か、汎用コーパスか特殊目的コーパス⁹²か、共時コーパスか通時コーパスか、そして均衡コーパスかモニターコーパスかといった区分が考えられる (齋藤他(編) 2005: 23-25)。

本稿の 5 章以降では、コーパスの頻度情報を用いてロシア語の効率的な語彙学習法を検討する。そのため、どのコーパスを本稿の分析に採用するのかを議論しなければならない。自らが設定した研究設問の分析に当該のコーパスは適しているのか、そのコーパスから得られる情報に信頼性はあるのかを判断する際、コーパスを構成するテキストのサンプリングとコーパス規模といった

⁹¹ これらのコーパスの概要は以下の通りである (Tognini-Bonelli 2010: 20-26) :

- a. 比較コーパス : 同じ構築基準と同じサイズで作成された、比較可能な 2 つ以上のコーパス。
- b. 特殊コーパス : シェイクスピアの作品を集めたコーパスのように、ある言語を代表するものではなく、通常とは異なる特徴を見るために作成されたコーパス。
- c. 時系列コーパス : 設計思想として、時系列的な特性を含んだコーパス。
- d. 非母語話者コーパス : ネイティブスピーカーではない学習者のテキストを集めたコーパス。

なお、均衡コーパスと後述のモニターコーパスについては 3.2.1. で詳細に述べる。

⁹² 汎用コーパスとは様々な言語研究を想定した総合目的のために編纂されるコーパスで、特殊目的コーパスとは、特定の言語研究のために編まれたコーパスを指す (齋藤他(編) 2005: 23)。

要素が非常に重要な判断材料となる (cf. Biber 1993a; 齋藤他(編) 2005; 石川 2008, 2012; McEnery, Hardie 2012).

そこで、ここではコーパスの作成に際して議論されるデータの収集法、テキストのサンプリング基準（標本抽出基準）、コーパス規模といった諸相が、頻度情報（より広義には言語研究）にどのような影響を及ぼすのかを考察する。まず、本稿 5 章～7 章の分析を検討するにあたって特に重要である均衡コーパスとモニターコーパスという分類に触れ、これらがどのようなデータの収集法に基づくコーパスなのかに言及する。

3.2.1. データの収集法

コーパスを構成するデータの収集に関しては 2 つの手法が提唱されており、1 つは均衡コーパス型データ収集法、もう 1 つはモニターコーパス型データ収集法と呼ばれる (McEnery, Hardie 2012: 6). もしくは、前者を均衡的収集法、後者を大規模収集法と呼称しても良いであろう (cf. 石川 2012: 20)⁹³.

3.2.1.1. 均衡コーパス型データ収集法

コーパスとは、「言語研究の目的のために収集されたテキストの集合体である。通例、研究対象となる母集団⁹⁴を想定して標本抽出がされ、テキストの代表性が確保されていることが望ましい」(投野 2015b: 1). つまり、言語研究の根拠としてコーパスが適切に使用されるためには、単に、設計なしにテキストを収集しただけのものでは不十分であり、対象とする言語を代表するように（その言語の諸相をうまく反映するように）コーパスは設計・構築されていなければならない (cf. Biber 1993a).

コーパスの定義は研究者によって若干異なるが、石川 (2012: 13)がまとめているように、およそその内容は上記指摘と重複している。

(28) コーパスの定義⁹⁵

- a. Biber et al. (1998): コーパスは単なるテキストの集合体ではない。むしろ、コーパスとは、言語もしくは言語のある部分を代表しようとするものである。

⁹³ 石川 (2012)では上記 2 つの収集法の他に悉皆的収集法を挙げている。悉皆的収集法とは、分析対象のデータをすべて収集する方法である。例えば、特定の作家 А.С. Пушкин の全作品を電子テキスト化し、それで構成されたコーパスは、悉皆的収集法でデータを集めたコーパスである。

なお、これ以降で考察するロシア語のコーパスには悉皆的収集法によるものは含まれていないため、本稿では扱わない。

⁹⁴ 収集対象のデータの全体を母集団 (population) という (石川 2012: 20).

⁹⁵ (28)の出典は石川 (2012: 13)であるが、英文で書かれていた引用部は、著者が日本語に訳してある。

- b. Sinclair (1991): 言語の状態や多様性を特徴付けるために抽出された、自然に生起する言語テキストの集合体.
- c. Atkins et al. (1992): 特定の目的のための明白なデザイン基準にしたがって作成された電子テキストの部分集合.
- d. Sinclair (1996): 言語のサンプルとして使用するために、明白な言語的基準に従って集められ、整理された言語のコレクションの集合体.
- e. 前川 (2011): 対象言語の特定の側面の実態を偏りなく反映する設計に基づいて収集された、実際の用例の集合で、電子的な手段での検索が可能であり、規模が大きく、公開されているもの.

(28)の定義から、コーパスとはある基準にしたがって言語を代表するように集められた、電子テキストの標本であると言える. このように、「母集団となる元データの諸特徴を「均衡」的に取り込むことで、母集団全体を「代表」する標本 (sample) となるよう意図された」(石川 2012: 21) コーパスを、均衡コーパス⁹⁶という. したがって、母集団を反映する性質である代表性 (representativeness) が均衡コーパスの作成においては極めて重要であり、均衡コーパスの構築に際して必ず求められる設計思想である. コーパスは単なるテキストの集合体ではなく、研究目的に沿ってあらかじめ設計された特定の収集物であり、McEnery, Hardie (2012: 8)が言うように、均衡コーパスを志向したデータの収集はある時点において存在している言語を反映するように、特定の抽出基準に基づいて行われる.

3.2.1.2. モニターコーパス型データ収集法

モニターコーパス⁹⁷型データ収集法では、コーパスは絶えず拡張され続け、できるだけ多くのデータを収集することを目的としている (石川 2012: 21; McEnery, Hardie 2012: 6). 「モニターコーパスとは、コーパスの内部構成を厳密化せず、その代わりに圧倒的に膨大な量のデータを集めたものであると言えよう」(マケナリー, ハーディー 2014: 9). コーパスの内部構造に関して制約がなければテキストは集めやすく、結果としてその規模は大きくなる.

⁹⁶ 均衡コーパスは、他にも「標本コーパス (sample corpus)」, 「スナップショットコーパス (snapshot corpus)」, 「代表コーパス (representative corpus)」といった呼び方がある (マケナリー, ハーディー 2014: 12). 本稿では均衡コーパスという呼称を用いる.

⁹⁷ ここでいう monitor とは「監視」を指し、長期にわたりテキストを収集することで言語変化を捉えることを意味する (マケナリー, ハーディー 2014: 9).

代表的なモニターコーパスとして、バーミンガム大学により構築された Bank of English⁹⁸や COCA⁹⁹が挙げられる。近年では、web をコーパスと考える発想（Web as Corpus）が普及し、web から得られるテキストを大量に収集して構築された巨大コーパスが現れているが、その中でも Sketch Engine の TenTen シリーズはモニターコーパスに該当すると考えて良いであろう（3.3.7.参照）。

均衡コーパス型データ収集法と異なり、モニターコーパス型データ収集法ではテキストのジャンルなどに細かな配慮はされないが、「巨大なデータを集める過程で母集団がおのずと均衡的に再現されるようになる」（石川 2012: 21）という指摘がある。「追加されるデータが一貫して偏っていることはないため、コーパスが大きくなるにつれてデータの偏りは自己是正していくと考えられる」（McEnery, Hardie 2012: 7）からである。

3.2.2. テキストサンプリング

3.2.1.1. で言及した通り、均衡コーパスの構築にあたっては分析対象の言語の代表性を担保することが重要である。では、どのようにすれば言語の諸相をうまく反映した代表性のあるコーパスを構築できるのだろうか。代表的な均衡コーパスとして英語の Brown Corpus や BNC が挙げられる。前者は現代のアメリカ英語の書き言葉を、後者は現代のイギリス英語をそれぞれ母集団として想定している（石川 2012: 37）。

Brown Corpus¹⁰⁰では、その設計に際して母集団をいくつかの下位区分に層化し、それらのサイズ比率に合わせてサンプルを収集している（石川 2008: 9-10）。具体的には、このコーパスは、1961年に米国で出版された書籍や文献から合計 100 万語のテキストを収集して作られたものであるが、バランスを保つために 15 のジャンルを代表する各 2,000 語のテキストを 500 個集めてコーパスは完成された（石川 2008: 10-11）。

⁹⁸ Bank of English は、John Sinclair の監修の元でイギリスの辞書出版社が構築したコーパスであり、総語数は 6 億 4,500 万語を超えている（石川 2012: 49）。

⁹⁹ このコーパスは、Mark Davies の主導で構築されたアメリカ英語の巨大コーパスで、web から spoken, fiction, magazines, newspaper, academic journals といった 5 種のジャンルのデータを収集し、1 年ごとに 2,000 万語ずつ総語数を増やしている（中條 2015: 25）。2017 年 12 月の時点で、総語数は約 5 億 6,000 万である（参考 URL: <https://corpus.byu.edu/coca/>）。

¹⁰⁰ 以下で言及する Brown Corpus と BNC の概要に関しては主に齋藤他(編)(1998)と石川 (2008)を参考にしている。

表 20. Brown Corpus の構成 (石川 2008: 11)¹⁰¹

大分類	中分類	小分類	テキスト数	推定語数
ノンフィクション	メディア	新聞記事	44	88,000
		新聞社説	27	54,000
		新聞書評等	17	34,000
	一般	宗教関係	17	34,000
		技術・娯楽関係	36	72,000
		一般・実用	48	96,000
		書簡集・伝記・回想記	75	150,000
	学術	雑（政府文書等）	30	60,000
		学術	80	160,000
フィクション	小説	一般小説	29	58,000
		推理小説	24	48,000
		SF 小説	6	12,000
		冒険小説	29	58,000
		恋愛小説	29	58,000
		ユーモア小説	9	18,000

このように設計された Brown Corpus の総語数は 100 万語であり、現在の基準ではこれは小規模であるとされる。だが、各種の言語資料が偏りなく収集されていて言語の諸相がバランスよく反映されているため代表性が担保されていると考えられており、Brown Corpus は今なお信頼できる言語資料として使われている (石川 2008: 9-13)。この画期的なコーパスデザインは後続のコーパスのモデルとなった (齋藤他(編) 1998: 6)。

BNC は約 1 億語から成るイギリス英語のコーパスで、全体の 90%が書き言葉、残りの 10%が話し言葉のテキストで構成されている (齋藤他(編) 1998: 24)。Brown Corpus 以来の標本の代表性の考え方にに基づき、BNC は領域 (ジャンル)、媒体、時代の 3 点で構造が統制されている (石川 2008: 22-25)。ここでは、8,974 万語から成る書き言葉の部について考察する。BNC に含まれるテキストの領域は過去 20 年の出版状況から判断して、文芸作品と情報伝達文という 2 つに大別されたが、その比率は語数で 19:81、サンプル (テキスト) 数で 15:85 となっている (石川 2008: 22)。テキストをサンプリングした媒体の割合は、書籍 60%、新聞・雑誌類 30%、その他 10%という内訳である。過度に硬い文章が集まったり、くだけた文章に偏ったりしないようにこの比率が採用された (石川 2008: 23)。そして、BNC は共時コーパスを意識してつくられたため、テキストは主に 1978 年から 1993 年の間に書かれたものが集められた (石川 2008: 23)。

¹⁰¹ 表は、石川 (2008: 11)の記述に著者が推定語数の欄を加えて、一部加工を施したものである。

表 21. BNC における書き言葉の部の構成 (齋藤他(編) 1998: 24)¹⁰²

領域: 語数 / テキスト数	媒体: 語数 / テキスト数	時代: 語数 / テキスト数
文芸作品: 1,967 万/ 625 情報伝達文 — 自然科学: 375 万/ 144 — 応用化学: 737 万/ 364 — 社会科学: 1,329 万/ 510 — 世界情勢: 1,651 万/ 453 — 商業: 712 万/ 284 — 芸術: 725 万/ 259 — 信仰・思想: 305 万/ 146 — 娯楽: 999 万/ 374 — 未分類: 174 万/ 50	本 — 5,257 万/ 1,488 定期刊行物 (新聞など) — 2,790 万/ 1,167 雑多な印刷物 (パンフレットなど) — 394 万/ 181 雑多な非刊行物 (日記など) — 360 万/ 245 話す目的で書かれたテキスト (スピーチなど) — 137 万/ 49 未分類 — 36 万/ 79	1960 年～74 年 — 204 万/ 53 1975 年～93 年 — 8,008 万/ 2,596 未分類 — 762 万/ 560
合計: 約 8,974 万		

表からは、出典に偏りが生じないように領域と媒体の比率を考慮してテキストをサンプリングしている方針が窺える。Brown Corpus と同様に、BNC も今なお信頼できるデータとして言語研究に用いられている。

このように、均衡コーパスでは設定された基準に沿って、各ジャンルのテキストを一定量サンプリングすることで代表性の担保を目指しているわけであるが、そもそも均衡コーパス型データ収集法が掲げる代表性の実現に対して批判的な立場をとる研究者もいる。例えば、表 20 が示す Brown Corpus の層化法 (ジャンルの区分、数など) は現代アメリカ英語の書き言葉を本当に反映しているのか疑問である、また、集めるテキストの母集団がそもそもはっきりせずに漠然としている、という指摘がある (Clear 1992; Teubert, Čermáková 2007: 59-65)。確かに、他の研究者が同じく現代アメリカ英語の書き言葉均衡コーパスを作成しようとしたら、異なる層化比率を採用する可能性は高い¹⁰³。

研究者は「不定」の母集団を「代表」する標本を検討しなければならないという矛盾に直面するため、前述のように母集団を層化して標本を一定の量で抽出するのであるが (石川 2012: 24)、その層化に対して作為性があったのではという疑問は否定できない (石川 2012: 24)。

結局、「コーパスの作成者は均衡性、代表性、比較可能性の実現を志向するが、それが達成されることはほとんどなく、できたとしても、いくらかである。現実的には、均衡性と代表性は程度の問題なのである」(McEnery, Hardie 2012: 10)。とはいえ、Leech (2007: 143-144) が述べているように、代表性には一定の段階性があることを踏まえつつ、その実現を放棄するのではなく、現実的

¹⁰² 齋藤他(編) (1998: 24) の表を著者が日本語に訳し、かつ、表記の一部を加工した。

¹⁰³ 後述の 3.3. では、現代ロシア語の再現を目標として作成されたコーパスにいくつか言及するが、これらはそれぞれが異なる層化比率を採用している。

に達成可能な段階を目指すべきであろう。

3.2.3. コーパス規模

すべての言語研究に適したコーパス規模というものには存在しない。だが、一般的にコーパスの総語数は多い方が望ましいとされており、規模はコーパスの重要な設計要素の1つと見なされている。というのも、コーパス規模は、そこに含まれる語彙や言語現象の生起数に多大な影響を与えるからである。また、生起頻度の極端に低い語や現象は、巨大なコーパスを用いなければそもそも用例が確認できない。分析に使える一定量の用例が得られるように、コーパスは全体として相応の規模を有していることが望まれるのである (石川 2012: 16)。

例えば, Sinclair (1991: 18)は、コーパス規模はできるだけ大きくなくてはならないと述べている。Kennedy (1998: 68)は、10 万語で (英語の) 韻律の調査、50 万語で動詞の形態調査、50～100 万語で高頻度語や統語変化の過程の調査が可能であると試算している。Biber (1993a: 248-253)は、コーパス規模は調査対象によって確定され、低頻度に観察される言語現象の調査には大規模なコーパスが求められると述べている。他にも、Kilgariff, Grefenstette (2003: 336)は、1 億語規模の BNC は巨大ではあるが、それでも大部分の語は用例が 50 以下しか確認されないため、低頻度語の分析には不十分であるとしている。同様に、頻度データの分析には 1 億語では不十分であり、数十億規模のコーパスが不可欠であるとの意見もある (Pomikalek et al. 2009: 4-5)。

一方で、Bank of English のような巨大コーパスではあまりにも多くの用例が見つかるという問題が生じる。Hunston (2002: 25-26)は、このような場合、研究者はすべての用例を確認することはできないとし、研究に応じたコーパスサイズが必要であると述べている。そのため、仮に言語教育を目的とすれば、数百万規模のコーパスより、小規模でも代表性のあるコーパスの方がその研究に適しているという意見もある (Reppen 2010: 55)。

なお、Brown Corpus, Lancaster-Oslo-Bergen Corpus (以下, LOB Corpus), Freiburg-Brown Corpus of American English, Freiburg-LOB Corpus of British English といった英語コーパスや、後述するロシア語の Uppsala Corpus は 100 万語から成るが、コンピューターの技術革新を経た現在では、これらのコーパスは小規模であると判断される。石川 (2012: 17)は、「小規模」と「大規模」といった定義は一意的に区切れるものではないが、これまでのコーパス言語学史を鑑みると、期待される最低限のコーパス規模は 100 万語であるかもしれない、と述べている。

3.3. ロシア語コーパスと頻度辞書

コーパスの普及という点でロシア語は英語に後塵を拝していた。それに伴い、ロシア語コーパ

スに基づく頻度辞書や学習用語彙リストは、英語に比べると遥かに数が少ない。また、ロシア語は電子コーパスの公開も遅く、BNCに相当する“National”コーパス、すなわち RNC が一般的に使用できるようになったのは 2004 年であった。

ただ、現在ではその状況は改善され、オンライン検索インターフェイスを有したロシア語コーパスもいくつか存在し、これらは言語研究のリソースとして数多くの分析に用いられている。3.3. では、これまでに作成された主要なロシア語コーパスとそれに基づく頻度辞書について年代順に言及する。その際、3.2. で触れたコーパス規模とテキストサンプリング、そして語彙リストの 3 つの観点から各コーパスを概観する。

3.3.1. Штейнфельд (1963)

当時、学習に導入すべき最低限の語彙を選ぶのに、ロシア語は客観的な根拠となる統計的なデータが乏しかった。そのような状況下で、Штейнфельд (1963)¹⁰⁴は頻度辞書の編纂に取り掛かるのであるが、まず以下の場面を設定した：1) 学習者が定期刊行物や小説を読み、辞書を引きすぎることなくその意味を理解する、2) ロシア語の放送を理解する、3) 戯曲や映画を見て理解する、4) ロシア語で初歩的なビジネスのやりとりができ、日常的な話題を話せるようになる。1)～4) を実現するには、これらのジャンルにおいて最も高頻度に使用される語彙を習得しなければならない (Šteinfeldt 2003: 9)。

それまでの研究で比較的少数の語彙が極めて高頻度に使用されていることはわかっていた (Šteinfeldt 2003: 9-10)。例えば、高頻度 2,000 語はテキストの 75～80% をカバーするが、これはチェコ語、英語にも言えることである¹⁰⁵。以前にもロシア語の頻度辞書は作成されているが、それは 20 世紀中頃の標準ロシア語を反映した語彙リストを提示してはいない。例えば、Josselson (1953) には、*церковь/cerkov'*「教会」、*барин/barin*「地主貴族」、*божйй/božij*「神の」、*дама/dama*「婦人」、*дурной/durnoj*「醜い」、*истинный/istinnyj*「真の」、*крест/krest*「十字架」、*оммого/ottogo*「それゆえ」といった語が含まれているが、これらが当時高頻度に用いらていたかどうかは疑問である (Šteinfeldt 2003: 13)。

そのような状況を踏まえ、Evi Šteinfeldt は現代標準ロシア語をうまく反映した頻度辞書の作成を目指した。

¹⁰⁴ 3.3.1.における Штейнфельд (1963)の概要は、主にその英語版 (Šteinfeldt 2003)の記述を参考になっている。

¹⁰⁵ Šteinfeldt (2003: 9-10)には А. С. Пушкин の辞書を用いて、テキストカバー率を計測したとの記載があるが、具体的にどのようなテキストを分析対象としたのか、語の単位は何か、高頻度 2,000 語とはどのようなものかといったことに関する説明はない。

● コーパス規模とテキストサンプリング

Штейнфельд (1963)の頻度辞書は語彙学習用と銘打ってはいないが、教育的な利用を見据えて作成された均衡コーパスに基づいており、このコーパスは当時の標準的な現代ロシア語を代表するように設計されている。

まず、コーパスの構築に際して Штейнфельд (1963)は、1) 規模と 2) テキストサンプリングといった 2 つの問題を提示している (Šteinfeldt 2003: 14-15) : 1) Штейнфельд (1963)のコーパスは現在では小規模とされる 40 万語から構成されている。だが、統計的に 40 万語という値は信頼のおける数字であり (cf. Фрумкина 1959), この総語数は、テキスト全体の 70%を占める 1,100~1,300 の高頻度語を調べるのには十分な規模であると考えられる (Šteinfeldt 2003: 14). 同時に, Šteinfeldt (2003: 14)は、このやり方では相対誤差の可能性が 30%ほど存在し、より正確に計測した場合には高頻度 2,000 番台の語が 3,000 番台に配されている、もしくは、その逆も起こり得るとしている。2) また, Штейнфельд (1963)は、学習者が習得すべき言語のスタイルを考慮して、以下の表が示すジャンルからテキストを収集してコーパスを構築した。

表 22. Штейнфельд (1963)のコーパスにおけるテキストのサンプリング比率 (Šteinfeldt 2003: 15)

	ジャンル	語数	テキスト数	詳細
1.	7~15 歳向けの児童文学	10 万語	100	ソビエト時代の作家の作品 (テキストは異なる作家の作品から収集)
2.	大人向けの小説 (散文)	5 万語	50	1956~1959 年の間に発行された «Звезда», «Знамя», «Октябрь»に含まれる物語 (テキストは異なる作家の作品から収集)
3.	演劇・戯曲	5 万語	25	ソビエト時代の作家の作品 (テキストは異なる作家の作品から収集)
4.	若者向けのラジオニュース	10 万語	100	1958~59 年に放送されたエストニアのロシア語ラジオ
5.	定期刊行物の記事	10 万語	75	1958~60 年の間に発行された新聞«Пионерская правда», «Молодёжь Эстонии», «Комсомольская правда»の記事, 1958~59 年の間に発行された雑誌«Юноша»のエッセイ (ニュースの記事 25 + エッセイ 50 = 75)

コーパスを構成するテキストのジャンルは、7~15 歳向けの児童文学 (10 万語)、大人向けの小説 (5 万語)、演劇・戯曲 (5 万語)、若者向けのラジオニュース (10 万語)、定期刊行物の記事 (10 万語) の 4 つである。また、各ジャンルの合計テキスト数は 350 である。

● 語彙リスト

この 40 万語のコーパスには 24,224 語（レマ換算）が含まれているが、その中から、全 350 のうち最低 14 のテキストに跨って生起する高頻度 2,500 語がリストに挙げられている（つまり、頻度と分布度を基準に語彙を選定した / 3.1.2. 参照）。リストでは高頻度 2,500 語の生起頻度と分布度の情報が確認できる。なお、リストは生起頻度だけでなく、品詞やアルファベット順でもソートされている。また、品詞毎の生起頻度、完了体・不完了体の割合なども提示されている。

Штейнфельд (1963) はレマ単位のリストであるが、一部の形動詞形や副動詞形に関してはロシア語が母語ではない学習者を考慮して、そのままの語形で記載している（例：副動詞と同形の前置詞 *благодаря/blagodarâ* 「のおかげで」）。

3.3.2. Засорина (ред.) (1977)

Засорина (ред.) (1977)¹⁰⁶ の頻度辞書は以下の経緯で作成された：当時、総語数 40～50 万語以上のコーパスに基づいた頻度辞書は存在していなかった。語彙論の分野において最も重要な課題の 1 つは、現代ロシア語の実際の語彙体系を明らかにすることであるが、Засорина (ред.) (1977) は 40～50 万語規模の統計データを用いた分析からは信頼性のある結果は導けないとしている（60 年代にはすでに 100 万語の Brown Corpus が登場している状況を考えると、ロシア語の頻度研究は大きく遅れていた）。だが、大きく総語数を増やすには、テキスト処理の自動化技術が発展する必要があった。

そして、70 年代後半、実際に使用される語彙の境界線を明確に定義するため、Засорина らは、Штейнфельд (1963) の 2 倍以上となる総語数 100 万語のコーパスを作成した。

● コーパス規模とテキストサンプリング

Засорина (ред.) (1977) は、約 100 万語（1,056,382 語）のコーパスを元に作成された頻度辞書である。Засорина (ред.) (1977) のコーパスは、70 年代の現代ロシア語を志向した書き言葉均衡コーパスであると考えて差し支えないであろう。コーパスを構成するテキストのジャンルは、語彙論研究者 Б.А. Ларин¹⁰⁷ による語彙の使用領域の研究に基づき、4 つのグループに分けられた：Ларинによると、現代ロシア語の規範は、芸術文学（художественная литература）、口語体（разговорная речь）、学術・社会評論体（научно-публицистическая речь）、そして、業務体（деловая речь）の 4 分野の影響化で構成されている（Засорина (ред.) 1977: 8）。Засорина (ред.) (1977) は、これらの 4 つの領域に類するテキストをほぼ同じ割合でサンプリングし（つまり、各領域がそれぞれ約 25 万語）、

¹⁰⁶ 3.3.2. の内容は、Засорина (ред.) (1977) の記述に基づいている。

¹⁰⁷ Засорина (1977: 8) では Б.А. Ларин の研究の出典は記載されていない。

100 万語のコーパスを作成した。

表 23. Засорина (ред.) (1977: 9)のコーパスにおけるテキストのサンプリング比率

テキストのサンプリング元のジャンル		割合
1.	芸術散文 (художественная проза)	25.4%
2.	戯曲 (драматургия)	27.2%
3.	学術テキスト (научные тексты) 社会評論テキスト (публицистические тексты)	23.6%
4.	新聞テキスト (газетные тексты) 雑誌テキスト (журнальные тексты)	23.8%
合計		100%

Засорина (ред.) (1977)には Штейнфельд (1963)と同様に、戯曲のテキストが含まれている。これまでの研究で書き言葉と話し言葉の語彙項目は明確に異なっていることがわかっていた (Засорина (ред.) 1977: 9)。そのため、コーパスは口語のテキストを一定数含んでいることが望まれるが、その収集には費用と時間がかかりかかってしまう。そこで、その代用として Засорина (ред.) (1977)は現代リアリズムの戯曲テキストを口語体が具象化したものと捉え、このジャンルのテキストをコーパスに組み込んだ。

また、Засорина (ред.) (1977: 9)によると、現代ロシア語では、芸術散文にくわえて学術テキストの影響力が増していた。そのため、学術領域のテキストとして、ソビエトの著名な研究者の論文 (物理学, 化学, 生物学, 鉱物学, 歴史学) が採用された。また、社会評論テキストの分野には、レーニンや著名な共産主義者の論文・発表、共産党大会の資料が含まれている。

新聞の領域に関しては、「Правда」、「Известия」、「Советская Россия」といった権威のある新聞からテキストを抽出している。具体的には、1968 年 1 月 5 日付の新聞記事からテキストを収集した。テキストの抽出時期の範囲が極めて狭いが、サンプル量が制限されている状況下では何十年にも渡ってテキストをランダムに集めるやり方は妥当とは言えないと判断し、このような方法を取っている。また、雑誌の領域では、当時最も人気のあった«Вокруг света», «Наука и жизнь», «Новое время», «Новый мир», «Юность»からテキストをサンプリングしている。なお、新聞テキストと雑誌テキストの総語数はほぼ同じである。具体的な記載はないが、Засорина (ред.) (1977)のコーパスに含まれるテキストの数はそれほど多くないと推測される。

Засорина (ред.) (1977)は言語のスタイル、著者の筆力、そして規範的なロシア語の発達に役立つ作品の重要性を考慮してテキストをサンプリングしていった。その結果、Засорина (ред.) (1977: 11)は、自らの頻度辞書は様々なテーマやジャンルにおいて広汎に生起して、かつ、中立的な、語彙の不変的な部分を反映している、と述べている。

● 語彙リスト

Засорина (ред.) (1977: 11-19)は1語の捉え方をかなり詳細に定義しているが、基本的にはレマ単位によって頻度が計算されている。特筆すべき点は、*утром/utrom*「朝に」や*включая/vključaâ*「を含めて」といった、異なる統語的機能を獲得した特定の語形が見出し語として設定されておらず(2.3.2.1.参照)、これらはレマ化に際して*УТРО/UTRO*「朝」や*ВКЛЮЧАТЬ/VKLÛČAT'*「含める」に集約されているようである。なお、Засорина (ред.) (1977)のリストは、語の生起頻度だけでなく、4つのジャンル毎(表23)における分布度も提示している。

Засорина (ред.) (1977)のコーパス内には39,268語(レマ換算)が含まれるが、そのうち生起頻度が10を超えるものは9,044語に限られる(全体の23.02%)。この9,044語はコーパスを構成するテキストの92.4%をカバーし、残りの30,224語はわずか7.6%のカバー率しか実現しない。

3.3.3. Лённогрен (1993)

Лённогрен (1993)¹⁰⁸は、ウプサラ大学のLennart Lönngrenの指示によって作成されたUppsala Corpusに基づいている。Uppsala CorpusはBrown Corpusを模して作られた書き言葉均衡コーパスであり、現代ロシア語の幅広い諸相を代表することを目的としている。

Лённогрен (1993)は、Brown CorpusやLOB Corpusといった英語コーパスや、トークン、タイプ、レマといった語の単位に関しても言及しており、レマ化(lemmatization)の原則も事細かに規定している。当時、70年代以降に書かれたテキストを含むコーパスは存在しなかったため、数多くの研究がこのロシア語コーパスを言語資料として用いた(cf. 浦井 1997: 171)。

この点においてUppsala Corpusが登場した意義は大きい。ただ、Лённогрен (1993)の最大の功績は、これまでの頻度研究(Штейнфельд 1963; Засорина (ред.) 1977)とは異なり、頻度辞書のリソースであるコーパスを一般に公開した点にあると言えよう(浦井 1997: 171)(Uppsala Corpusはwebを通じてダウンロードすることができた)¹⁰⁹。

● コーパス規模とテキストサンプリング

Uppsala Corpusは、現代ロシア語を代表するように作られた、100万語の書き言葉均衡コーパスである。コーパス規模が分析に際して十分であるかどうかは研究の目的に左右されるが、Лённогрен (1993: 13-14)は、高頻度に観察される言語現象を調査するには100万語またはそれ以下のコーパス規模で問題ない、と述べている。

¹⁰⁸ 3.3.3.におけるЛённогрен (1993)の概要は、Лённогрен (1993)に加えて浦井 (1997)の記述を参考にした。

¹⁰⁹ 現在、Uppsala Corpusは使用できない状態にある(2017年11月12日)。

Uppsala Corpus は文学散文と情報文（雑誌・新聞のテキスト）¹¹⁰から構成されている。Uppsala Corpus は Brown Corpus や LOB Corpus を参考に行っているが、それらと異なるテキストのサンプリング比率を採用している：Uppsala Corpus では語彙の日常的な断面を十分に反映するため、ジャンルの比率を文学散文 50%・情報文 50%の等分とした（Лёнгрен 1993: 13）。つまり、このコーパスは、文学散文 50 万語と情報文 50 万語の合計 100 万語で構成されている。

また、Uppsala Corpus は標準的な現代ロシア語を代表するように設計されているため、収集したテキストの年代には制限が設けられている。ここまでの記述を総括すると、Uppsala Corpus のテキストサンプリングの概要は以下のようになる。

表 24. Uppsala Corpus におけるテキストのサンプリング比率

テキストのサンプリング元のジャンル		語数	テキストのサンプリング年代
文学散文		50 万語	1960 年以降
情報文	専門的な雑誌テキスト	50 万語	1985 年以降
	専門的な新聞テキスト		1987 年以降

文学散文には、ロシア語を母語とする 40 名の作家の作品が含まれている（浦井 1997: 169-170）（外国の文学作品の翻訳は含まれていない）。一方、情報文は 25 の下位区分から成る（経済、外交、イデオロギー、歴史、言語学、エネルギーなどその区分は多岐に渡る）（Лёнгрен 1993: 15-16; 浦井 1997: 169-170）。Лёнгрен (1993)では、収集したテキストからコーパスへ組み込む具体的な部分を選定する際、統計的な無作為抽出は行われなかった。代わりに、Лёнгрен (1993)はテキストの連続性や全体性を考慮し、手作業によって念入りに該当部を選んでいった。各テキストは約 5,000 語（トークン換算）で構成され、それが 200 個合わさる形で 100 万語のコーパスが作成された（この 5,000 語のデータは 1 個または複数のテキストがまとまったものであり、Uppsala Corpus に含まれる厳密なテキスト数は 600 に昇る（浦井 1997: 170））。なお、情報文の書かれた年代が文学散文のそれよりも新しい設定になっている理由は、専門的な文献の語彙は廃れていく速度が早いいため、当時としては最新のテキストを収集する必要があったためである。

なお、前出の Засорина (ред.) (1977)は戯曲を含むことで、口語体の特徴をコーパスに反映させようと努めている。一方、Лёнгрен (1993)が基づく Uppsala Corpus は口語テキストの収集の難しさ、そして、規範的な文章語を目標とする編集方針の 2 点を考慮して、構成要素から口語テキストを排している（Лёнгрен 1993: 10-11）。このような方針の元、Лёнгрен (1993)は言語の均一性を保ちながら、多様なテーマを反映したコーパスの構築を目指した。

¹¹⁰ 用語は浦井 (1997: 169)を参考にした。

● 語彙リスト

Лённый (1993)は、タイプとレマ単位による頻度順のリストなどを掲載しているが、頻度を計算するにあたって厳密に語の数え方を定義している。例えば、体のペアは、それぞれが別々の見出し語を有している、後接辞-*ся/-sâ* の付いた再帰動詞は派生元の語とは別の語として捉えると述べており、タイプとレマの段階における同形異義語の問題をどのように解決したかについても言及している。テキストを電子化する際にデータは手作業で入力され、全体を通して2回の校正が行われており、Uppsala Corpus が提供する数値の信頼性は高いと思われる。

レマ化の基準は辞書や研究によって異なる。Лённый (1993)では簡潔でコンパクトにまとめられた、権威のある Ожегов の詳解辞典 (Ожегов 1990)の記載に依拠してレマ化を行った。ただ、2.3.2.1.で言及したような、異なる統語的機能を獲得した特定の語形は、ケース・バイ・ケースで頻度を計算している。例えば、名詞とも副詞とも取れる語形に関しては、一致定語を伴う場合は名詞として、そうでない場合は副詞として扱っている。

(29)	a. ранней	весной	b. весной
	rannej	vesnoj	vesnoj
	early-ADJ.INS.	spring-N.INS.	in_the_spring-ADV.
	「早春に」		「春に」

上記 a.の例では形容詞 *ранний/rannij* 「早い」が *весна/vesna* 「春」の造格形に定語として付いている。このような場合、*весной/vesnoj* は副詞ではなく名詞の造格として捉えられ（副詞には定語として形容詞は付かないため）、頻度計算の際にレマ BECHA/VESNA 「春」に集約されている。b.のような、一致定語を伴わない裸の *весной/vesnoj* は、Ожегов (1990)では別個の見出し語を有しているため、BECHA/VESNA に集約することはせず、1つの語として扱っている (Лённый 1993: 32)。

3.3.4. Brown (1996)

Brown (1996)¹¹¹は“Russian Learners’ Dictionary”という名を冠することからわかるように、語彙学習へ転用することを念頭において作成された頻度辞書である。Brown (1996)は、コーパス準拠の純粋な頻度リストではなく、その編集にはロシア語教員としての Nicholas J. Brown の主観的判断が介在している。具体的には、彼は前出の Засорина (ред.) (1977)の頻度辞書を主に参考とし、そこに年月をかけて学習の観点から様々な改良を加えていくことで、ロシア語学習者向けの頻度辞書を完成させた (Brown 1996: 4-5)。つまり、自らコーパスを構築し、そこから頻度を計算してリ

¹¹¹ 3.3.4.における Brown (1996)の概要は、主に Brown (1996: 1-13)の記述を参考にしている。

ストを作成したわけではない。

● コーパス規模とテキストサンプリング

Brown (1996)の頻度辞書は、主に Засорина (ред.) (1977)の頻度辞書のデータを流用して作成された (表 23 参照)。つまり、Brown (1996)は 100 万語規模のコーパスに基づいた頻度辞書である。

くわえて、Brown (1996)は作成者による数量的な分析¹¹²と考察も語彙選定の判断基準として用いている：Засорина (ред.) (1977)の 100 万語コーパスは、構成要素であるテキストのサンプリングに偏りが見受けられる。一例を挙げると、収集されたテキストには、当時の社会的影響力を加味して共産主義に関連して書かれたものが多く含まれている (Brown 1996: 5)。特に、レーニンによるテキストが非常に多いが、当然、そこに日常的に使う語彙は現れない。他にも、Засорина (ред.) (1977)では、*катер/kater*「小型舟艇」と *помнить/pomnit'*「覚えている」といった語が生起頻度で肩を並べるという問題が見受けられる (Brown 1996: 5)。通常の言語使用において *катер/kater* が *помнить/pomnit'*と同程度の頻度で用いられる状況は想定しづらい。これは、テキストサンプリングに付随して起きた現象である。すなわち、*катер/kater* の全生起数の 8 割以上が 1 つのテキストに集中していたため、不当に *катер/kater* の生起頻度が高く記録されたのである (Brown 1996: 5)。このように、Засорина (ред.) (1977)にはテキストのサンプリング元の影響が色濃く出ており、学習者に不向きな語彙が散見される。

そこで、Nicholas J. Brown は、Засорина (ред.) (1977)に修正をくわえた頻度リストを実際に学生に使わせ、彼らから得られたフィードバックや自らの経験によってそれをさらに学習向けに改良していった。1993 年になると、Засорина (ред.) (1977)よりも代表性 (標準的な現代ロシア語を志向) が高く、新しい年代に書かれたテキストで構成される Uppsala Corpus が登場し、それに基づく頻度辞書 Лёнгрен (1993)が出版された。そのため、Nicholas J. Brown は Засорина (ред.) (1977)に加えて、Лёнгрен (1993)の内容も加味しながら頻度辞書を完成させた。

● 語彙リスト

前述の通り、Brown (1996)は Засорина (ред.) (1977)のデータを主として流用しているが、人の手によって幾度となく修正が施されている：Brown (1996: 5-6)は、統計は人の直感によって補う必要があるという考えに基づき、リストから学習者に不必要な語彙の順位を格下げする、日常生活に不可欠な曜日や食べ物といった基本語を上位に繰り上げる、または時としてリストから削除する、といった修正を加えている。

¹¹² どのようなデータに基づくのかについての詳細な記述はない。

Brown (1996)の頻度辞書は高頻度 10,000 語（レマ換算）¹¹³を掲載している。レマ化の基準は前出の Засорина (ред.) (1977)や Лёнгрен (1996)とほぼ同じであり、特筆すべき Brown (1996)特有の基準は存在しない。なお、大学で教育を受けたロシア人が発表的（active）に用いることのできる語の数が 10,000 語であることから、この導入数が採用された (Brown 1996: 1)。また、10,000 語という量を選んだ理由として統計的な根拠も述べている。Brown (1996: 2)は、高頻度 10,000 語を超えた語（10,001 位以下の語）は極端に出会う頻度が低く、すでに基本的な語とは言えない部類に属すとしている。さらに、Brown (1996: 2)は、その 10,000 語の中でも高頻度 2,000 語と 8,000 語は、あらゆるロシア語のテキストのそれぞれ 75%と 90%をカバーすると述べている（固有名詞などを含めると、後者の数値は 97%まで上昇する）¹¹⁴。

この 10,000 語は頻度順に並べられているが、コーパスにおける実際の生起頻度は示されていない。正確性に欠ける情報ではあるが、Brown (1996)は高頻度語を順位でいくつかの階層に区切り、以下のようなやり方で生起頻度を示している。

表 25. Brown (1996)における生起頻度の情報

順位	生起頻度
1～2,000 位	и「そして」や в「中で」の生起頻度は 30,000 を超える。 2,000 位の語の生起頻度は 65 である。
2,001～3,000 位	2,001 位の語の生起頻度は約 65 で、3,000 位の語は約 40 回生起する。
3,001～4,000 位	40～25
4,001～6,000 位	25～15
6,001～8,000 位	15～10
8,001～10,000 位	10～8

表が示すように、Brown (1996)からはおおまかな生起頻度の情報しか得られない。Brown (1996)を語彙学習用のリストとして用いる分には不自由はないかもしれないが、他の研究との比較に用いる際には注意が必要である。

3.3.5. Ляшевская, Шаров (2009)

Ляшевская, Шаров (2009)¹¹⁵は RNC (RNC-M, RNC-S など)に基づく頻度辞書である。ここでは、まず RNC の概要について言及する：近年では、コーパスをオンラインのデータベース形式で公

¹¹³ Brown (1996)では、lexeme という用語が実質レマと同じ概念で使用されている。

¹¹⁴ だが、実際にテキストカバー率を計測する分析を行ったかどうかに関する記述はない。あらゆるテキストにおいて、特定のロシア語の語彙がこれだけ高いカバー率を実現できるかは疑問である。さらに、5 章における高頻度語によるカバー率の分析結果から、この主張の信憑性は低いと推測される。

¹¹⁵ 3.3.5.における RNC の概要は、主に Плунгян (2008), Ляшевская, Шаров (2009: V-XXII)の記述を参照した。

開する研究者が増えており、その場合、コーパスと検索機能は表裏一体である (投野 2015b: 13). RNC¹¹⁶は検索機能を有する大規模コーパスである. RNC の作成は、2001 年に始まったロシア科学アカデミー V.V. ヴィノグラードフ名称ロシア語研究所の巨大プロジェクトに端を発する. National という語を冠したコーパスを作成するにあたって、このプロジェクトは英語の BNC を参考にし、規模が巨大で、かつ様々なジャンルのテキストを含んだコーパスの完成を目指した (cf. Плунгян 2005; Ляшевская, Шаров 2009). そして、RNC は 2004 年 4 月末に公開された.

RNC は高度な言語研究に耐え得る検索機能を備えている. まず、タイプやレマ単位での検索はもちろん、2 語以上からなる語連続の検索も可能である. その際、語と語の距離 (検索対象である語 A と語 B が、何語離れた状態で共起しているか) も指定できる. また、正規表現 (検索条件を絞り込むための特別な表記コード) を使うことで、さらに細かな検索も可能である. 例えば、任意の文字列を表す「*」を用いて *сдела** (*сделать/sdelat'* 「する」の語幹) とすると、*сдела/sdelat* と「何らかの文字」を含む語が検索できる (*сделать/sdelat'* の語形: *сделал/sdelal*, *сделаю/sdelaiu*, *сделав/sdelav* など).

さらに、RNC では「文法特性」、「意味特性」、「テキストの追加パラメーター」、「語形成」といった項目で検索に細かな制限を設けることができる. 文法特性には、品詞、性、格、法、時制、体などの特性が用意されている. 例えば、*сделать/sdelat'* 「する」に対して過去形 (*прошедшее время*) の制限をかけると、*сделать/sdelat'* の過去形だけが検索結果として表示される. 「意味特性」では、語彙素の意味的な特徴を検索条件として追加できる. 例えば、レマの検索ワードを **ytmu/jti* とし、「移動」という特徴を追加すると、*УЙТИ/УЙТИ* 「去る」、*ПРОЙТИ/ПРОЙТИ* 「通る」、*ВЫЙТИ/ВЫЙТИ* 「出る」の各語形がヒットする. 「テキストの追加パラメーター」では、コンマの前後や文の最初/最後など、特定の位置において分析対象の語を検索できる. 例えば、*может/может* は、「できる」を意味する *мочь/мочь* の 3 人称単数現在の場合と、「かもしれない」という挿入語の場合がその語形からは想定されるが、「コンマの前」という条件を追加すれば、基本的に挿入語の例が検索できる. 「語形成」では、[接頭辞]、[接尾辞]などの条件が検索に追加できる. 例えば、「文法特性」で動詞の完了体を、「語形成」で[接頭辞]、[*про-*]を検索条件に追加すると、接頭辞 *про-/pro-* の付いた完了体動詞がヒットする. 他にも、コロケーションの検索・頻度の調査をすることも可能である. なお、RNC の検索結果は excel 形式などで出力が可能ではあるが、全てではなく一部の結果しか保存できない.

一般公開から 13 年が経過した 2017 年 4 月現在、RNC は多種多様なコーパスを提供している.

¹¹⁶ RNC の URL は以下の通りである: <http://www.ruscorpora.ru/index.html>

表 26. RNC における各部門の総語数（アクセス日：2017/4/12）

	コーパスの部門（種類）	総語数
1.	メインコーパス = 現行 RNC-M（Основной корпус）	283,431,966 語
2.	統語コーパス（Синтаксический корпус）	1,031,675 語
3.	新聞コーパス（Газетный корпус）	228,521,421 語
4.	英露パラレルコーパス（Параллельный корпус）	72,533,975 語
5.	教育コーパス（Обучающий корпус）	664,751 語
6.	方言コーパス（Диалектный корпус）	285,281 語
7.	詩コーパス（Поэтический корпус）	10,967,173 語
8.	話し言葉コーパス（Устный корпус）	12,113,491 語
9.	アクセントコーパス（Акцентологический корпус）	31,733,748 語
10.	マルチメディアコーパス（Мультимедийный корпус）	4,751,153 語
11.	マルチメディア・パラレルコーパス （Мультимедийный параллельный корпус）	124,104 語
12.	古ロシア語コーパス（Древнерусский корпус）	504,382 語

RNC を代表する現行 RNC-M は最も総語数が多く、テキストジャンルの比率を考慮して構築された書き言葉均衡コーパス（現代ロシア語を志向）であるが、Ляшевская, Шаров (2009)の頻度辞書は、このコーパスに基づいて作成された。ただ、この頻度辞書が編まれたのは 2009 年であり、その時点での RNC-M の総語数は約 9,200 万語であった。つまり、Ляшевская, Шаров (2009)は、総語数 9,200 万語の書き言葉均衡コーパスに基づく頻度辞書である¹¹⁷。

一方で、2009 年（RNC-M）と 2017 年（現行 RNC-M）では総語数が大きく異なることからわかるように、RNC はモニターコーパス的な側面を有しており、一定のサンプリング比率を保ちながら、コーパス規模を拡大し続けている（コーパス規模の拡大は、表内のすべてのコーパスに当てはまる）。Ляшевская, Шаров (2009)が編纂された際の RNC-M は総語数が 9,200 万語であったので、現行 RNC-M は当時の約 3 倍のコーパス規模（約 2 億 8,300 万語）を有している。ただ、RNC-M と現行 RNC-M は規模こそ違えど、ほぼ同じサンプリング比率で構築されている。したがって、RNC は、COCA と同様に、コーパスを構成するテキストジャンルの比率を一定に保ちながら、総語数を増やし続けるという均衡コーパスとモニターコーパスの両性質を併せ持っている（3.2.1.）。

なお、Ляшевская, Шаров (2009)の頻度辞書の総語数 9,200 万語とは、句読点などを抜かして数えたものであり、それらを語として換算した場合は約 1 億 1,500 万語となる。通常、ピリオドやコンマは語として扱わないが、本稿もこれに従う¹¹⁸。

¹¹⁷ RNC-M の総語数は 2009 年次と 2017 年次では大きく異なる。2 章で言及したが、本稿では、Ляшевская, Шаров (2009)の元となった 9,200 万語の RNC-M を「RNC-M」とし、総語数の増えた今現在の RNC-M を「現行 RNC-M」とする。なお、Ляшевская, Шаров (2009)の頻度辞書には、後述の分析に用いる RNC-S（話し言葉コーパス）の頻度データも含まれている。

¹¹⁸ 本稿でも句読点無しの 9,200 万語を RNC-M の総語数として扱い、他のコーパスに言及する際もこの数え

● コーパス規模とテキストサンプリング

高頻度語のデータの信頼性を保証する要素はコーパスの質と量である。RNC-M は現代ロシア語を代表し、提示する頻度データに信頼性が伴うように設計されたが、コーパス規模とテキストサンプリングに関して、Ляшевская, Шаров (2009: VI)は以下のように述べている：「語の生起頻度に関してより信頼性の高い情報を提供するには、コーパスは規模が大きく、データの包括性において代表的、つまり、ある一定の比率で様々なジャンルや文体のテキストを含んでいなければならない。この点においてロシア語ナショナルコーパスは、British National Corpus<...>などのナショナル・コーパスのよい見本に比肩する」。

まず規模に関して言うと、Ляшевская, Шаров (2009)の頻度辞書が基づく RNC-M は、前述の通り 9,200 万語から成る。RNC-M はロシア語の均衡コーパスとしては他に類を見ないほど規模が大きい。モニターコーパスであれば RNC-M より総語数の多いコーパスは存在するが、均衡コーパスに限って言うと、RNC-M の次に規模が大きく、新しいテキストで構成される Uppsala Corpus ですら総語数が 100 万語にとどまる。

RNC-M を構成するテキストのサンプリング比率は以下の通りである。

表 27. RNC-M におけるテキストのサンプリング比率¹¹⁹

	テキストの機能領域（ジャンル）	比率	総語数	テキスト数
1.	芸術文学	39.04%	35,150,521	2,418
2.	社会・政治評論	42.21%	39,739,644	27,390
3.	芸術文学以外の文献	16.96%	15,478,151	7,495
	— 教育・学術（教育的・学術的に人気のある論文や書籍、教科書、講義等）	— 11.30%		— 3,994
	— 公的・業務文書（法律、法令、声明等）	— 1.62%		— 1,075
	— 電子媒体でのやりとり（メール等）	— 1.49%		— 133
	— 教会・神学	— 1.44%		— 488
	— 広告	— 0.57%		— 1,232
	— 実生活（手紙、日記等）	— 0.48%		— 439
	— 製造技術（解説書、仕様書等）	— 0.26%		— 134
4.	パブリックではない口頭会話	0.88%	758,407	1,005
5.	その他	0.90%	827,580	61
合計		100%	91,954,303	38,369

「現代ロシア語の断面」を再現することを念頭に置き、RNC-M では上記のサンプリング比率を採用した¹²⁰：RNC-M では、1.「芸術文学」の比重が 4 割と非常に大きい。これは、標準ロシア

方を念頭に置いている。

¹¹⁹ 表 27 は、Ляшевская, Шаров (2009: VI)を著者が日本語に訳し、一部加工を加えたものである。なお、「芸術文学以外の文献」の比率の合計は 16.96%にならないが（実際は 17.16%）、表では原文のままとした。

¹²⁰ これ以降、各ジャンル（原文では機能領域）の概要や定義に言及するが、主にその内容は Савчук (2005),

語の完成にロシア文学作品が大きく影響を与えたため、RNC-M は、他言語よりもこの分野のテキストを多く含んでいる¹²¹。このジャンルは、一般的な散文、歴史散文、推理小説、冒険小説、子供向け小説、幻想小説などに細分化される。続く 2.「社会・政治評論」のジャンルのテキストには、政治、経済、芸術、学問、道徳について書かれたテキストが含まれる（インターネットのニュース記事など）。3.「芸術文学以外の文献」にはいくつか下位区分が存在する：まず、「教育・学術」には学術・学術教授法に関するテキストが含まれる。「公的・業務文書」は法律、法令、声明などに関するテキストが含まれる。「電子媒体でのやりとり」は、メールのやり取り、チャット、掲示板から抽出されたテキストで構成される。「教会・神学」は、世界の宗教の叙述、個人の宗教的な生活（祈り、宗教的な儀式、懺悔、説教など）に関するテキストで構成される。「広告」のジャンルは、宣伝されている商品やサービスの利点を伝える、またはその購入を促すテキストなどで構成される。「実生活」は、公的な場面にいない人間（親族、友達、職場の同僚など）間で行われる日常的で、きがねのない、公的ではない交流のテキストが含まれる。この領域のテキストは口語の形式であることが多いが、書き言葉のものもあり得る（個人的なメールのやり取り、日記、メモ、あいさつなど）。最後の「パブリックではない口頭会話」は、バスの中や自宅など、公的ではない場所で交わされた会話のテキストで構成されている。

● 語彙リスト

Ляшевская, Шаров (2009)は高頻度 20,000 語（レマ換算）の頻度リストを、頻度順・アルファベット順に記載している。他にも、品詞毎の頻度リスト、タイプ単位の頻度リストが備わっている。この Ляшевская, Шаров (2009)の頻度データを本稿は後述の分析で使用する。そのため、ここでは RNC におけるレマ化の規則について詳細に言及する。

まず、Ляшевская, Шаров (2009)における語彙の形態的分類は Зализняк (1977)の記述に基づいており、大半の語は一般的なレマ化の規則によって処理される（2.1.3.参照）。ただ、その中には例外的なレマ化の規則がいくつか存在する。以下で、レマ化に関わる特筆すべき事項（①体、②特定の語形、③複数の語から成る単位、④その他）について触れるが、その内容は主に Ляшевская, Шаров (2009: XIII-XV)の記述や著者が自ら現行 RNC-M の検索機能を用いて確認した事項に則している。

その論文の著者である С.О. Савчук へのインタビュー、そして RNC の web ページの解説に基づく。

¹²¹ ロシア語は 1830 年代前後に発表した А.С. Пушкин の散文作品によって理想的な言文一致を果たし、その段階で全国的な標準語のモデルを獲得した（佐藤 2012: 261）。そのため、広義には現代ロシア語とは Пушкин 以降のロシア語を指す（中澤 1998: 379）。その後においても Пушкин の文学作品のロシア語への影響は大きく、現代ロシア語を代表するサンプリング比率を検討した際、文学作品の比率が多く設定された。なお、Ляшевская, Шаров (2009)には、Brown Corpus の構成のように、当時の出版状況を考慮してジャンルの詳しい比率を決めた、といった説明はない。

① Ляшевская, Шаров (2009)における完了体・不完了体

ロシア語の体のペア形成には、接頭辞による完了化、接尾辞による不完了化、補充法といった方法がある (АН СССР 1980: 586-590). この内、不完了化によるものと補充法によるものは体のペアであるとされるが、そこに完了化によるものを加えるかどうかは研究者間で意見が分かれている (中澤 2010: 250). 例えば、完了化に用いられる接頭辞は、*делать/delat' – сделать/sdelat'*「する」の *c-/s-*のように特定の動詞と結びついたとき、語彙的な意味に変化を与えずに体の転換をもたらすことがあるが (АН СССР 1960: 429), 体の研究では、このような接頭辞による完了化を体のペアとして認めるかどうかで意見の相違が見られる (cf. Janda et al. 2013).

頻度の計算に際して、通常、完了体・不完了体は別々の語として扱われ、コーパス準拠の語彙リストに限らず、学習用の語彙リストにおいてそれぞれが1つの語として認識されている。例えば、Ляшевская, Шаров (2009: 74, 328)では頻度を数える際、不完了体 *делать/delat'*と完了体 *сделать/sdelat'*は、それぞれ別の語として頻度がカウントされている。実際に RNC-M の頻度辞書の中を覗いてみると、ipm¹²²換算で前者は701回、後者は744回生起しており、完了体・不完了体を1つの見出し語にまとめずに計算していることが窺える。

ただ、3.3.6.で言及する Sharoff et al. (2013)では体の捉え方が異なり、接尾辞による不完了化のペア (例えば、*переделявать/peredelyvat' – переделывать/peredelat'*「やり直す」、*бросать/brosat' – бросить/brosit'*「投げる」) は、1つの語として扱われている。

② Ляшевская, Шаров (2009)における特定の語形

形動詞・副動詞は基本的に動詞の語形として処理され、元の動詞に集約して頻度が計算されている。例えば、能動形動詞現在 *читающий/citaûšij*「読んでいる」と不完了体副動詞 *читая/citaâ*「読みながら」は、それぞれに見出し語が与えられているのではなく、レマ化に際して元の動詞である *читать/citat'*「読む」にまとめて扱われる。だが、2.3.2.1.で言及したように、特定の語形が固定的に用いられ、異なる統語的機能を果たしている場合はこの限りではない。

例えば、*говорящий/govorâšij*「話し手」や *трудящийся/trudâšijsâ*「勤労者」は、形態的には形動詞であるが、名詞化 (субстантивация) を起こしたために元の動詞とは異なる統語的機能を獲得している。結果、これらはレマ化に際しても元の動詞に集約されず、Ляшевская, Шаров (2009)においてそのまま名詞としての見出し語を有している。また、*соответствующий/sootvetstvuûšij*「し

¹²² ipm とは、instances per million words を指す。コーパスの総語数を100万語に揃えることで、大きさが異なるコーパス間での比較を可能にする指標である。例えば、Ляшевская, Шаров (2009)は約9,200万語、Sharoff et al. (2013)は約1億5,000万語のコーパスで構成されているが、母数である総語数を100万語に揃えることで語の生起頻度が比較できる。

かるべき」や *окружающий/okružaišij* 「周囲の」といった、形容詞としての機能が定着した語形は、元の動詞 *соответствовать/sootvetstvovat'* 「相当する」、*окружать/okružat'* 「囲む」にまとめられるのではなく、そのまま形容詞としての見出し語を有している。

他にも、*говорить/govorit'* 「話す」の 3 人称複数現在の語形 *говорят/govorât* には、Ляшевская, Шаров (2009) では副詞としての見出し語が与えられている。つまり、*говорят/govorât* という語形の見出し語が存在している。*говорят/govorât* 「という話だ」を、英語でいう *probably* 「おそらく」や *hopefully* 「願わくは」といった文副詞 (sentence adverb) のように捉えているのであろう。*казаться/kazat'sâ* 「のように見える」に関しても同様に、3 人称単数現在の語形 *кажется/kažetsâ* 「らしい」が、例外的に見出し語として記載されている。

副動詞の語形は、元の動詞にまとめて頻度が計算されている。ただ、数は少ないものの、*благодаря/blagodarâ* 「のおかげで」や *включая/vklûcââ* 「を含めて」といった副動詞形には、前置詞としての見出し語が与えられている。

③ Ляшевская, Шаров (2009)における複数の語から成る単位

Ляшевская, Шаров (2009)において、2 語以上の組み合わせにより使用される語連続の単位は存在しない (cf. Ляшевская и др. 2005)。複数の語から成る単位は各構成要素に分解され、それぞれが別々の見出し語を有している。

例えば、*идти в горы/idti v goru* 「出世する」という表現は、その構成要素である *идти/idti* 「進む」、*в/v* 「中へ」、*гора/gora* 「山」の 3 語に分解して頻度が数えられる。同様の理由で、*потому что/potomu čto* 「なぜなら」や *может быть/možet byt'* 「もしかして」という単位の見出し語も存在しない。

④ その他

ハイフン (дефис) で繋がれた語は、1 つの語として認識されているものもあれば (例: *кое-как/кое-kak* 「どうにかこうにか」)、2 語に分解して捉えられるものもある (例: *город-спутник/город-sputnik* 「衛星都市」)。つまり、このような語に対して Ляшевская, Шаров (2009) は一律的なレマ化を行っていない。1 語、もしくは 2 語として捉えるかどうかの判断基準は Зализняк (1977) に記載されているかどうかによる。すなわち、Зализняк (1977) にハイフンでつながれた語が記載されていれば 1 つのレマとして認識され、記載されていなければ分解して 2 つのレマとして扱われる (Ляшевская, Шаров 2009: XIV)。

なお、Ляшевская, Шаров (2009) はキリル文字以外で書かれた語をリストから除外している。一方で、キリル文字で書かれた外来語は、ロシア語のパラダイムに沿った語形変化をすれば、ロシ

ア語の語としてリストに加えられている (Ляшевская, Шаров 2009: XIV). 例えば, *шоп/šop* 「ショップ」は男性名詞の格変化をするので, すでにロシア語の語として見なされている¹²³.

3.3.6. Sharoff et al. (2013)

Sharoff et al. (2013)¹²⁴は語彙学習用に編まれた頻度辞書である. Sharoff et al. (2013: 3-5)は語彙学習に頻度辞書を使用する場合, 既存のものには以下のような問題があることを指摘し, 自らのリストの優位性を説いている: コンピューターの技術革新を経た現在の基準では, Штейнфельд (1963), Засорина (ред.) (1977), そして Лёнгрен (1993)が基づくコーパスは規模が小さいと言える (それぞれ総語数は 40 万語, 100 万語, 100 万語). Brown (1996)には作成者の主観による修正が施されているため, 実際の生起頻度を反映しているかどうかは疑わしい. Ляшевская, Шаров (2009)は, 学術的な出版物を多く含んだコーパスに基づいているため語彙学習に用いるポテンシャルは低い.

そこで, Sharoff et al. (2013)はロシア語学習者の言語使用を念頭において Internet Corpus を設計し, それに基づいて頻度辞書を編纂した.

● コーパス規模とテキストサンプリング

Sharoff et al. (2013)の頻度辞書は, 約 1 億 5,000 万語の Internet Corpus に基づいており, 規模の点で 9,200 万語の RNC-M を圧倒している (この 1 億 5,000 万語という値は, キリル文字で書かれた語のみを数えた場合の総語数である. なお, ラテン文字で書かれた語を含めると総語数は約 1 億 6,000 万語となる).

Internet Corpus はテキストのサンプリング元として web を利用したが, その収集はコンピュータプログラムによって自動で行われた. その結果, 約 30,000 の web ページが集められた (Sharoff et al. 2013: 2). 採取されたテキストは, このプログラムにより自動的に各ジャンルへ分類されていくのだが, その分類の精度は 70~75%であり, 得られた数値と実際の数値との間にズレが想定される (Sharoff et al. 2013: 3). それを踏まえた上で, Sharoff et al. (2013: 3)は, 表 28 のサンプリング比率を挙げている.

¹²³ ただし, 不変化名詞 *метро/metro* 「地下鉄」がリストに含まれていることからわかるように, 上述の規則がすべての外来語に適応されている訳ではない.

¹²⁴ 3.3.6.における Sharoff et al. (2013)の概要は, Sharoff et al. (2013: 1-10)と著者が確認した内容に基づく.

表 28. Sharoff et al. (2013)の Internet Corpus におけるテキストのサンプリング比率¹²⁵

	テキストのジャンル	割合
1.	議論（議論が行われているテキスト）	55.12%
2.	小説と人気のある伝承（lore）	27.46%
3.	報道（オンラインニュース）	10.24%
4.	インストラクション（よくある質問や教育）	6.88%
5.	法律文	0.07%
	合計	100%

一般的なコーパスは文学作品や社会・政治評論のテキストを多く含んでいることが多い。だが、Sharoff et al. (2013)で最も割合の高いテキストジャンルは「議論」である。

この比率の採用には、学習に適した語彙を抽出するという狙いがある。Sharoff et al. (2013: 5)によると、語彙学習用の頻度辞書は、その構成要素として個人的なやり取りに関するテキストを多く含んでいる方が良い。伝統的なコーパスと比べて、Internet Corpus には、*давай(ме)/davaj(te)*「しましょう」、*я/а*「私」、*мы/ты*「きみ」、*спасибо/spasibo*「ありがとう」、*пожалуйста/požalujsta*「どうぞ」といった、個人的なやり取りに係る語が多く含まれている (Sharoff et al. 2013: 5)。これは、「議論」のジャンルに学生のエッセイ、掲示板、ブログといったテキストが含まれており、これらの下位区分から多くのテキストをサンプリングした結果である。Sharoff et al. (2013: 5)は、この種のジャンルのテキストは個人的なやり取りに近い性質を有しており、ここに含まれる語彙は学習者にとって有益である、としている (Sharoff et al. 2013: 5)。

また、一般的に、コーパスの作成に際して会話を書き起したテキストの入手は難しい。そのため、コーパス編纂者は書き言葉のテキストに頼らざるを得ない場合が多い。この点に関して Sharoff et al. (2013: 5)は、Internet Corpus 内には口語に近い個人的なやり取りのテキストが多く含まれている、と述べている。

コーパス規模の巨大さとテキストのサンプリング比率を踏まえて、Sharoff et al. (2013)の作成者らは、Internet Corpus に基づいたこの頻度辞書が「ロシア語学習者にとって現在入手可能な、最も信頼に足る頻度リストである」(Sharoff et al. 2013: 5)と述べている。

● 語彙リスト

Sharoff et al. (2013)の頻度辞書には高頻度 5,000 語（レマ換算）が記載されている。この頻度辞書は語彙学習を念頭において作成されたため、ロシア語学習者にとって必要なコアとなる語彙、すなわち、高頻度 5,000 語しか載せていない。Sharoff et al. (2013: 3)によると、これらの語彙は汎

¹²⁵ 表は、著者が Sharoff et al. (2013: 3)を日本語に訳し、一部変更を加えたものである。なお、ジャンルの毎の割合の合計が 100%にはならないが（実際は 99.77%）、表では原文のままにしてある。

用性が高く、高頻度 2,000 語でテキストの 80%, 5,000 語でテキストの 90%をカバーする¹²⁶。また、レマ単位のリスト以外にも、ロシア語の学習に役立つテーマ別語彙集（動物、服、色、飲み物、食べ物など）も掲載されている。

なお、Sharoff et al. (2013)のレマ化には、RNC とは大きく異なる規則が存在する。まず、特筆すべきは動詞の体の捉え方である。Sharoff et al. (2013)は意味的に近い関係にある完了体・不完了体のペアは 1 つの見出し語に集約するとし、接尾辞による体のペアがこれに該当する（例えば、*бросать/brosat' – бросить/brosit'*「投げる」）。ただし、接頭辞による完了化（例：*делать/delat' – сделать/sdelat'*「する」）と補充法（例：*говорить/govorit' – сказать/skazit'*「話す」）による体のペアは別々の語とみなし、それぞれに見出し語を与えている。

また、名詞化した形容詞は、元の形容詞と意味的にほぼ同じであるため、両者は 1 つの項目に集約されている点も特徴的である。例えば、*русский/russkij*「ロシア人」、*гласный/glasnyj*「母音」は、それぞれ形容詞 *русский/russkij*「ロシアの」と *гласный/glasnyj*「母音の」と同じ見出し語にまとめられている。

他にも、Sharoff et al. (2013)は派生語の扱いがかなり特殊である：*республика/respublika*「共和国」と *республиканский/respublikanskij*「共和国の」の関係が示すように、構成要素から容易に意味の想像ができ、形態的にわずかな変化しか伴わない派生語（trivial morphological transformation）はリストから除去してある（つまり、リストには *республика/respublika* しか記載されていない）(Sharoff et al. 2013: 8)。さらに、一般的な外国語学習者には必要のないであろう *дупло/duplo*「(木の) 空洞」などの語をリストから削除するという補正を施している (Sharoff et al. 2013: 8)。

3.3.7. Sketch Engine と ruTenTen11

Sketch Engine は、コーパスの分析に必要な機能を提供してくれる。当初、Sketch Engine は英語コーパスのために企画・作成されたが、現在では様々な言語に対応している。

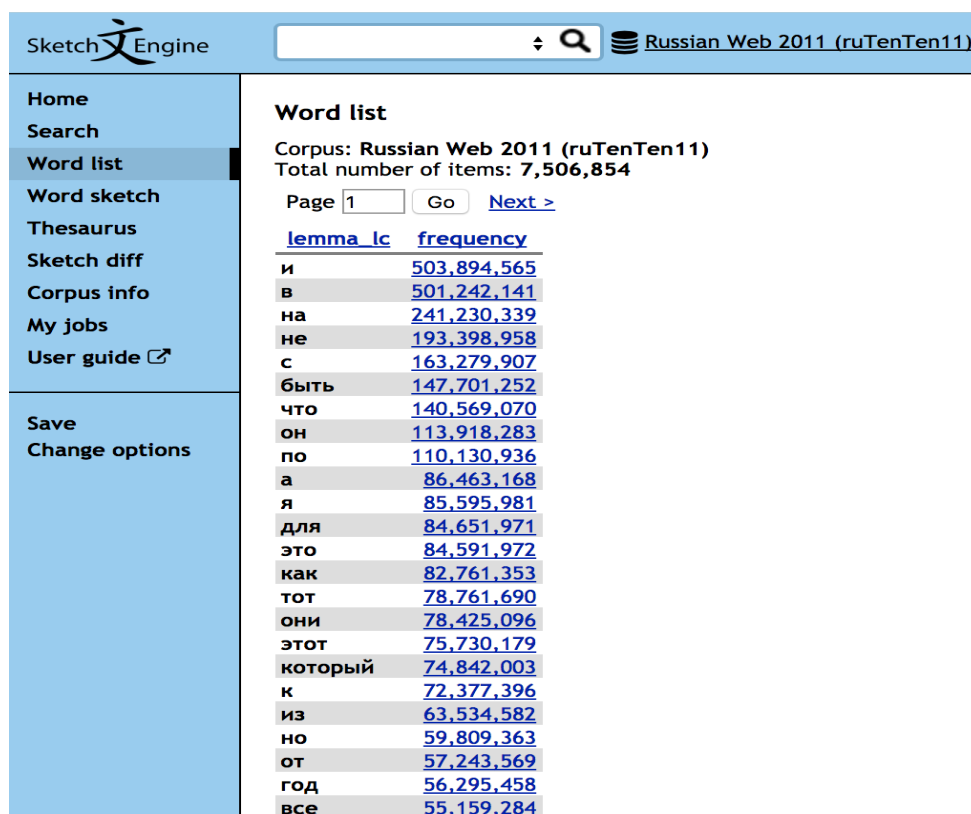
例えば、Sketch Engine は、英語の enTenTen11 や日本語の jpTenTen11 に加えて、これまで小規模なコーパスしか存在しなかった言語の巨大モニターコーパスも備えている。スラヴ語に関して言えば、現在までにロシア語、ウクライナ語、チェコ語、ポーランド語、ブルガリア語などの TenTen

¹²⁶ このカバー率の数値は間違いであると思われる。Sharoff et al. (2013)には、同封の CD に excel 形式で頻度データが入っているが、それによると、高頻度 2,000 語は 66.04%, 5,000 語は 73.76%しかテキストをカバーしないという結果が得られた。これは RNC-M の高頻度語によるカバー率よりも低い数値である（表 2 参照）。

なお、通常、話し言葉コーパスでは少ない語数で高いカバー率が実現されることを考慮すると、Sharoff et al. (2013)の Internet Corpus は、書き言葉コーパスにより近いと言える。

シリーズが作成され、オンラインで検索可能な状態で公開されている¹²⁷。どのスラヴ語の TenTen シリーズも総語数は 1 億を超えている。また、TenTen シリーズ以外にも、コーパス言語学の研究史において重要な役割を果たした BNC や Brown Corpus, そして各言語の様々なコーパスがオンライン上に検索可能な状態で存在している。Sketch Engine の登場が言語研究や教材研究にもたらした寄与は大きい。

Sketch Engine は、RNC と類似の検索機能にくわえて発展的なコーパス分析ツールを提供しており、かつ、その分析結果のデータを excel や txt ファイルで保存する機能も備えている。例えば、Word list という機能では、Sketch Engine 上にあるコーパスを対象とし、タイプ、レマなどの単位での頻度分析が可能であり、その結果をリストとして出力できる。



Sketch Engine		Russian Web 2011 (ruTenTen11)
Home		
Search		
Word list		
Word sketch		
Thesaurus		
Sketch diff		
Corpus info		
My jobs		
User guide		
Save		
Change options		

Word list	
Corpus: Russian Web 2011 (ruTenTen11)	
Total number of items: 7,506,854	
Page	1 Go Next >
lemma_lc	frequency
и	503,894,565
в	501,242,141
на	241,230,339
не	193,398,958
с	163,279,907
быть	147,701,252
что	140,569,070
он	113,918,283
по	110,130,936
а	86,463,168
я	85,595,981
для	84,651,971
это	84,591,972
как	82,761,353
тот	78,761,690
они	78,425,096
этот	75,730,179
который	74,842,003
к	72,377,396
из	63,534,582
но	59,809,363
от	57,243,569
год	56,295,458
все	55,159,284

図 4. ruTenTen11 における Word list 機能の出力結果例（語の単位：レマ）

さらに、分析結果の出力に際して正規表現を使えば、より細かな設定で頻度リストをつくること

¹²⁷ ロシア語の ruTenTen11 は約 145 億 5,400 万 (14,553,856,113) 語から成るが、他のスラヴ語の TenTen シリーズの総語数は、以下の通りである (2017 年 9 月 4 日現在)：

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| a. ウクライナ語：2,194,447,594 語 | b. チェコ語：4,175,089,441 語 |
| c. ポーランド語：7,715,835,214 語 | d. スロバキア語：715,707,053 語 |
| e. ブルガリア語：705,156,683 語 | |

ができる。例えば、2.3.2.1.における名詞の格毎（単数・複数の主格から前置格までの12格）の頻度情報は、Word list 機能において正規表現を用いることで得られたものである。

ある語がテキスト内でどのような語と共起しているのかを分析してくれる Word Sketch も、Sketch Engine が提供する有益な機能の1つである。例えば、*пройти/projti*「通過する、過ぎる、行われる、経る」という動詞が、ruTenTen11においてどのような語と共起しているのかを調べると、以下のような結果が得られる。

Sketch Engine

Russian Web 2011 (ruTenTen11)

Home

Search

Word list

Word sketch

Thesaurus

Sketch diff

Corpus info

My jobs

User guide

Save

Change options

Cluster

Sort by freq

Hide gramrels

More data

Less data

Menu position

пройти (verb) Alternative PoS: [noun](#) (8,900) [pronoun](#) (143) [adverb](#) (78) [adjective](#) (34) [numeral](#) (16)
Russian Web 2011 (ruTenTen11) freq = [4,653,733](#) (254.57 per million)

subject	1,727,328	37.12
соревнование +	36,839	8.52
прошли соревнования		
конференция +	42,094	8.30
церемония +	25,465	8.30
прошла церемония		
презентация +	25,060	8.25
прошла презентация		
встреча +	45,663	8.12
прошла встреча		
мероприятие +	42,251	7.95
фестиваль +	28,674	7.94
выставка +	32,446	7.92
заседание +	34,973	7.88
прошло заседание		
акция +	35,472	7.85
совещание +	17,274	7.64
прошло совещание		
выборы +	15,522	7.32
концерт +	13,732	7.17
все +	17,229	7.14
всё прошло		
дождь +	11,308	7.09
пресс-конференция +	8,881	7.08
прошла пресс-конференция ,		
семинар +	13,202	7.00
награждение +	8,126	7.00
прошло награждение		
слушание +	7,540	6.91
ярмарка +	7,482	6.81
неделя +	17,335	6.80
праздник +	16,464	6.78
детство +	8,053	6.71
детство прошло		
турнир +	9,788	6.68
чемпионат +	11,503	6.66

post_prep	1,134,231	24.37
мимо +	34,598	9.38
прошел мимо		
через +	77,416	7.96
прошли через		
сквозь +	10,662	7.57
прошел сквозь		
около +	13,723	6.82
прошло около		
без +	34,947	6.22
вдоль +	4,362	6.14
прошел вдоль		
под +	36,935	6.13
во +	17,742	5.01
пройдет во		
в +	492,406	4.98
пройдет в		
свыше +	1,206	4.83
прошло свыше		
по +	93,338	4.82
с +	95,803	4.37
пройдет с		
накануне +	908	4.33
прошла накануне		
после +	7,181	3.99
прошло после		
между +	3,576	3.95
над +	3,095	3.94
прошел над		
со +	7,761	3.90
прошло со		
на +	107,401	3.80
при +	13,445	3.73
пройдет при		
перед +	2,617	3.50
до +	8,140	3.43
внутри +	448	3.43
прошли внутри		
возле +	638	3.43
чрез +	345	3.24
прошел чрез		
вблизи +	404	3.21
пройдет вблизи		

object4	807,121	17.34
испытание +	27,400	8.65
семинар +	21,197	8.13
прошел семинар		
митинг +	9,883	7.99
прошел митинг		
сертификация +	9,980	7.96
прошли сертификацию		
обучение +	34,865	7.83
прошли обучение		
стажировка +	6,413	7.70
прошли стажировку		
курс +	31,363	7.52
путь +	39,094	7.45
прошел путь		
турнир +	11,393	7.40
концерт +	11,067	7.36
обследование +	8,957	7.31
отбор +	7,688	7.18
аттестация +	5,008	7.13
прошли аттестацию		
проверка +	16,394	7.08
прошли проверку		
выборы +	9,187	7.06
прошли выборы		
тестирование +	5,966	6.98
прошли тестирование		
экспертиза +	7,721	6.92
апробация +	3,148	6.88
прошли апробацию		
тест +	5,341	6.61
переподготовка +	3,053	6.58
прошли переподготовку		
показ +	4,025	6.57
конкурс +	15,217	6.49
прошел конкурс		
совещание +	5,140	6.46
финал +	3,682	6.44
прошел финал		
месяц +	11,548	6.42
Прошел месяц		

図 5. ruTenTen11 における Word Sketch 機能の出力結果例（пройти を例に）

図 5 からは、例えば、動詞 *пройти/projti* がどのような主語と共起しているのかといった情報が得

られる。図からは, *пройти/projti* は *соревнование/sorevnovanie*「競技, 大会」, *конференция/konferenciâ*「会議」, *церемония/ceremoniâ*「セレモニー」といった名詞（主語）と共起する頻度が極めて高いことがわかる（この場合, *пройти/projti* は「過ぎる, 行われる」の意味で生起している）。また, 前置詞を分析対象とすると, この動詞は *мимо/mimo*「側を, 脇を」, *через/čerez*「通り抜けて」, *сквозь/skvoz'*「貫いて」と頻繁に共起することが確認できる。

Thesaurus と Sketch Difference は, shared triple（共有 3 元）に基づいて統語的に似た振る舞いをする語を抽出する (cf. スルダノヴィチ, 仁科 2008)。例えば, 名詞 *преподаватель/prepodavatel'*「講師」を ruTenTen11 において Thesaurus の分析にかけると, 以下のような語群が浮かび上がる。

преподаватель (noun)

Russian Web 2011 (ruTenTen11) freq = [1,250,313](#) (68.39 per million)

Lemma	Score	Freq
педагог	0.583	809,865
учитель	0.551	2,038,551
студент	0.480	2,870,848
руководитель	0.468	4,210,864
специалист	0.464	5,507,920
сотрудник	0.449	4,398,218
тренер	0.427	1,041,419
профессор	0.427	1,224,895
ученый	0.425	1,966,584
менеджер	0.425	1,281,678
работник	0.415	3,085,338
врач	0.408	3,169,210
выпускник	0.398	785,457
эксперт	0.390	1,882,812
представитель	0.387	4,702,013
организатор	0.375	1,162,629
участник	0.374	5,203,755
юрист	0.374	614,119
мастер	0.371	1,753,236
журналист	0.369	1,369,718

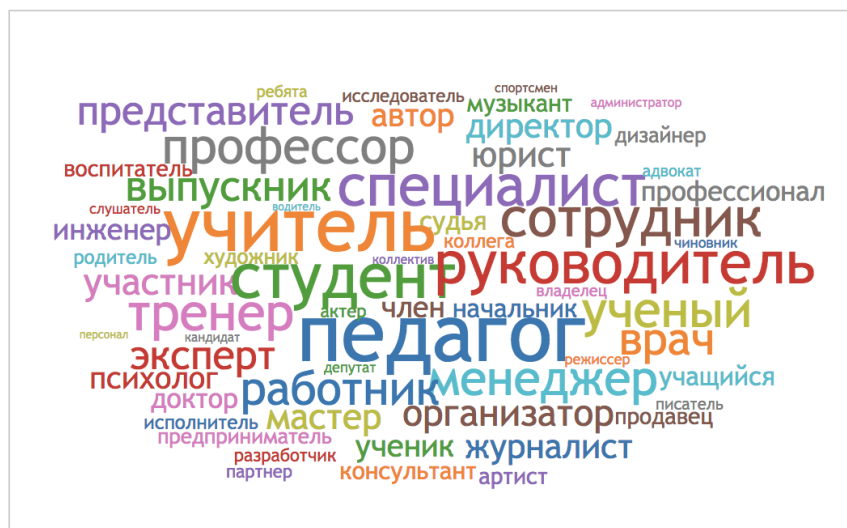


図 6. ruTenTen11 における Thesaurus 機能（преподаватель を例に）

Thesaurus の機能は, 類似度の高さを示すスコアだけでなく, その結果を視覚的に図として提示する。 *преподаватель/prepodavatel'* と類似度の高い語として *педагог/pedagog*「教育者」 *учитель/učitel'*「教師」などの名詞が挙げられる。 Sketch Difference 機能では, 語と語の振る舞いの共通点や差異を調査するといった発展的な分析が可能となる (cf. スルダノヴィチ, 仁科 2008: 6)。

ただ, 言語研究における Sketch Engine の最大の利点は, 自作のコーパスを web 上にアップロードし, かつ, そのコーパスに対してここまで言及した分析機能を活用できる点にある（4 章にて自作の 100 万語コーパスを対象とした分析を行うが, その際, Sketch Engine を用いている）。この機能により, より多くの研究者がコーパス言語学的なアプローチを取れるようになった。

● コーパス規模とテキストサンプリング

ruTenTen11 は、約 145 億 5,400 万語から成るモニターコーパスである。TenTen シリーズのコーパスは、web をコーパスとして用いる Web as Corpus (cf. Kilgariff, Grefenstette 2003; McEnery, Hardie 2012)の進化した形であると言える (石川 2012: 18)。TenTen シリーズプロジェクトは、100 億語以上の規模 (10 の 10 乗) をもつコーパスを作成するという目標を掲げていたが、ruTenTen11 はすでにその語数を優に超えている。

圧倒的な総語数を誇る ruTenTen11 であるが、コーパスを構成するテキストのサンプリング比率は不透明である。ruTenTen11 のテキストは、SpiderLing というプログラムによって集められたが、これは web 上を自動で巡回して web ページを収集するものである。どのようなジャンル比率でテキストを収集するかを考慮しては、これほど巨大なコーパスは構築できない。テキストのサンプリング比率にこだわらずに、web を介して自動でテキストを収集するからこそ、145 億といった規模のコーパスが構築できたのである。

● 語彙リスト

Sketch Engine は、ruTenTen11 に基づく頻度リスト (語彙リスト) を公開していない。ただ、前出の Word list 機能を用いれば自ら頻度リストを作成できるが、ruTenTen11 を分析対象とした場合、高頻度 1,000 語までのリストしか入手できないという制限が設けられている (追加料金を支払えば拡張可能である。なお、自作のコーパスが分析対象であれば、Word list の機能で完全な頻度リストを作成できる)。

Sketch Engine のレマ化は、基本的にはこれまで触れてきたコーパスのそれとほぼ同じ基準を採用している。ただ、別の統語的機能を獲得した特定語形の扱いが他と若干異なる：*может/možet* 「かもしれない」、*кажется/kažetsâ* 「らしい」といった語形は、RNC-M などでは 1 つの項目として扱われていたが、Sketch Engine のレマ化に際しては元の *мочь/мо́ч'*, *казаться/kazat'sâ* にまとめられて頻度がカウントされている。名詞化した同形異義語の *русский/russkij* 「ロシア人」と元の *русский/russkij* 「ロシアの」は、検索をする上では別々に分けて頻度を調べられるが、Word list では両者は 1 つに集約されている。

3.4. 総括

3 章では、7 つのロシア語コーパス (くわえて、それに基づく頻度辞書) に関して、コーパス規模、テキストサンプリング、語彙リストの特性の観点から言及・考察した。作成年代は異なるが、Штейнфельд (1963), Засорина (ред.) (1977), Лёнгрен (1993), Ляшевская, Шаров (2009) が基づく

コーパスは、現代ロシア語の断面を反映させようとして作られた書き言葉均衡コーパスである。一方、ruTenTen11 は、絶えず規模の拡大を図っているモニターコーパスである。Brown (1996)の頻度辞書は、コーパスが提示する頻度情報だけでなく人の主観的判断に基づいた修正が施された学習用語彙リストであると言える。同様に、Sharoff et al. (2013)も語彙学習用の頻度辞書を目指して作成されたが、コーパスを構成するテキストの分類精度は7割程度であった（そのため、Internet Corpus が、自らが設定した、外国人学習者が触れるロシア語を代表しているかどうかの判断は難しい）。以下に、3.3.で扱ったコーパスと頻度辞書の一覧を挙げる。

表 29. 主要ロシア語コーパス・頻度辞書の一覧

	コーパス	規模	コーパスの特徴
1.	Штейнфельд (1963)のコーパス	40 万語	均衡コーパス（現代ロシア語を代表）
2.	Засорина (ред.) (1977)のコーパス	100 万語	均衡コーパス（現代ロシア語を代表）
3.	Лёнгрен (1993)の Uppsala Corpus	100 万語	均衡コーパス（現代ロシア語を代表）
4.	Brown (1996)のコーパス	100 万語	均衡コーパス / 主観による修正 （語彙学習用に作成 / Засорина (ред.) (1977)のデータを流用）
5.	Ляшевская, Шаров (2009)の RNC-M	9,200 万語	均衡コーパス（現代ロシア語を代表） ただし、現行 RNC-M は拡大している。
6.	Sharoff et al. (2013)の Internet Corpus	1 億 5,000 万語	web ページで構成されたコーパス （語彙学習用に作成 / 学習者が触れる ロシア語を代表するように設計）
7.	ruTenTen11	145億 5,400 万語	モニターコーパス

上記の通り、Штейнфельд (1963), Засорина (ред.) (1977), Лёнгрен (1993), Ляшевская, Шаров (2009)のコーパスは現代ロシア語の書き言葉を代表するように設計された。だが、同じ現代ロシア語を志向していても、採用されたテキストのサンプリング比率はそれぞれ異なるため、結果として得られる頻度情報は異なると推測される。Brown (1996)と Sharoff et al. (2013)はともに語彙学習に活用するために作られ、後者は口語に近い個人的なやりとりを多く含んでいるとされる。

分析の手始めに、これらのコーパスは互いにどの程度近いのかをクラスター分析（cluster analysis）で確認する（頻度データの欠如している Brown (1996)と規模の小さすぎる Штейнфельд (1963)を除き、表 26 で言及した RNC の話し言葉コーパス（以下、現行 RNC-S）を加えた合計 7 つのコーパスを分析対象とする）。クラスター分析とは「当初の分類基準が何もないときに、主に量的変数を用いて何らかの対象を幾つかの塊、グループに分類する探索的分析方法である」（小田 2007: 148）。ここでは、7 つのコーパスに共通して高頻度に生起する 50 の内容語の頻度を量的変数とし、分類される対象を各コーパスとした。石川他(編) (2010: 184)が述べているように、「一般

に、基本語頻度はコーパス種別を問わず安定しているとされるが、様々な研究でも示されているように、無作為に選んだ上位 50 語や 100 語であっても、多くの場合、かなり高いテキストの弁別力を持つ¹²⁸。つまり、これらの語数をもってしてテキスト（コーパス）の分類は可能であると思われる。クラスター分析の結果は以下の通りである。

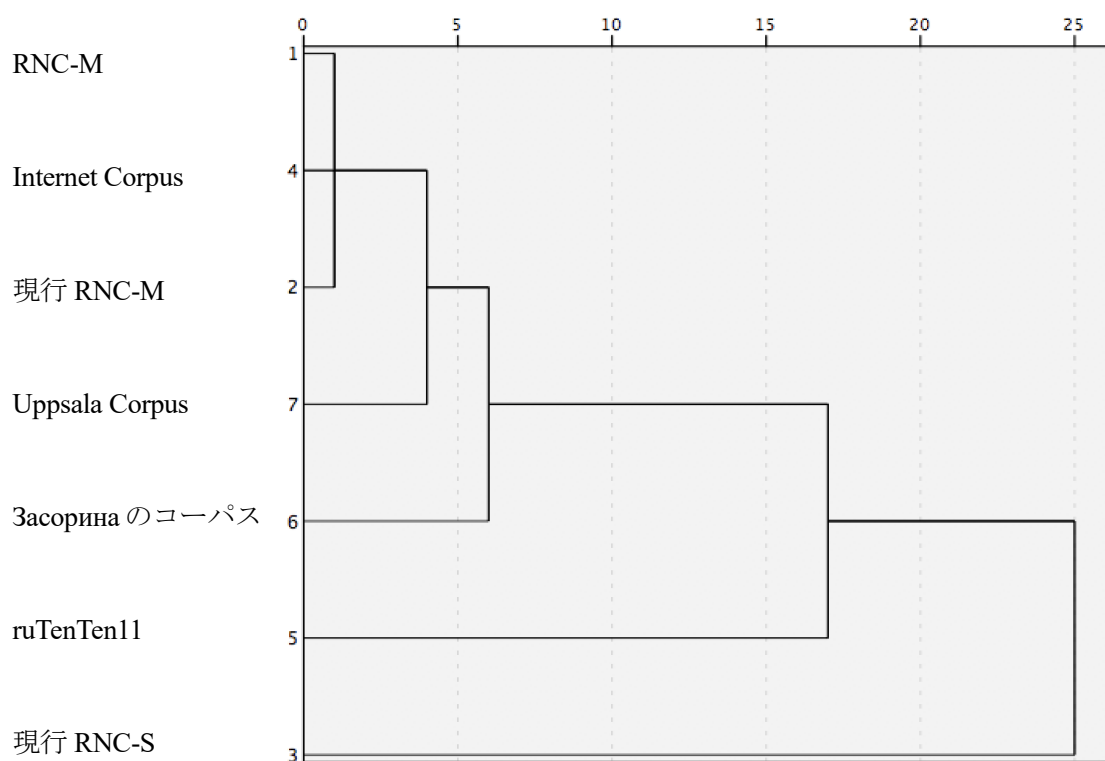


図 7. ロシア語コーパスを対象としたクラスター分析（SPSS: 最遠隣法，相関係数¹²⁸）

Ляшевская, Шаров (2009)の RNC-M, Sharoff et al. (2013)の Internet Corpus, そして現行 RNC-M が早い段階でクラスターを形成している。また、Лёнигрен (1993)の Uppsala Corpus や Засорина (ред.) (1977)のコーパスも上記 3 つのコーパスと近い距離にあり、比較的早い段階でクラスターを形成する。RNC-M, 現行 RNC-M, Uppsala Corpus, Засорина (ред.) (1977)のコーパスは現代ロシア語を代表するよう設計された書き言葉均衡コーパスであるため、これらの間に高い類似性が確認されるのは妥当と言えよう。その中でも Засорина (ред.) (1977)のコーパスが他のコーパスと遠い位置にあるのは、テキストのサンプリング比率に偏りがあったためであると推測される。

Sharoff et al. (2013)は、自身の Internet Corpus は個人的なやりとりを多く含んでおり、RNC-M などの伝統的なコーパスより学習に向いていると述べているが (Sharoff et al. 2013: 5), クラスター

¹²⁸ 高頻度語をケースとした、変数のクラスター化が目的であるため、小田 (2007), 水本 (2007), 水本, 野口 (2009), 石川他(編) (2010)を参考として、ここでは相関係数を使用した。

分析では逆の結果が得られた。すなわち、Internet Corpus は RNC-M や現行 RNC-M と非常に距離が近く、かつ、話し言葉コーパスである現行 RNC-S からはかなり遠くに位置する。このように、必ずしもコーパスの作成者の意図が語彙の頻度に反映されているとは限らないことがわかる。

逆に、巨大モニターコーパス ruTenTen11 は書き言葉均衡コーパスとはかなり異なる性質を示しており、これらとクラスターを組む段階がかなり遅い。コーパスの規模が大きくなる過程で次第に偏りが自己解消され、母集団がおのずと均衡的に再現されるという指摘があるが (cf. 石川 2012: 40; マケナリー, ハーディー 2014: 9-10), ロシア語の ruTenTen11 と他の書き言葉均衡コーパスを比較した場合、ruTenTen11 において均衡性が実現されているとは言えないようである。

4 章. コーパス規模が高頻度語の選定に与える影響

– 100 万語コーパスと高頻度語の関係を例に –

3 章ではロシア語コーパスとそれに基づいた頻度辞書について言及した。代表的なロシア語の頻度辞書として Штейнфельд (1963), Засорина (ред.) (1977), Лёнгрен (1993), Brown (1996), Ляшевская, Шаров (2009), Sharoff et al. (2013) が挙げられる。また, web 経由で使用できる ruTenTen11 といったコーパスからもタイプやレマ単位の頻度リストを作成することが可能である。

表 30. (再掲) 主要ロシア語コーパス・頻度辞書の一覧

	コーパス	規模	コーパスの特徴
1.	Штейнфельд (1963) のコーパス	40 万語	均衡コーパス (現代ロシア語を代表)
2.	Засорина (ред.) (1977) のコーパス	100 万語	均衡コーパス (現代ロシア語を代表)
3.	Лёнгрен (1993) の Uppsala Corpus	100 万語	均衡コーパス (現代ロシア語を代表)
4.	Brown (1996) のコーパス	100 万語	均衡コーパス / 主観による修正 (語彙学習用に作成 / Засорина (ред.) (1977) のデータを流用)
5.	Ляшевская, Шаров (2009) の RNC-M	9,200 万語	均衡コーパス (現代ロシア語を代表) ただし, 現行 RNC-M は拡大している。
6.	Sharoff et al. (2013) の Internet Corpus	1 億 5,000 万語	web ページで構成されたコーパス (語彙学習用に作成 / 学習者が触れるロシア語を代表するように設計)
7.	ruTenTen11	145 億 5,400 万語	モニターコーパス

この中から, 本稿 5 章～7 章の分析に適したコーパス, もしくは頻度辞書を選ばなければならない。本稿のようなコーパス検証型の研究において, 言語調査のリソースとなるコーパスの選択は極めて重要である。本稿は, コーパスが提示する高頻度語リストの頻度データに基づいて効率的なロシア語の語彙学習法を検討するが, 投野 (2015b: 9) が述べているように, 「語彙表の研究で最も重要なのは, 語彙統計をどのようなコーパスに基づいて求めるのか, という語彙表の基準となったコーパスの『中身』の議論である」。つまり, 研究者は, 当該のコーパスが自らの研究目的に合致した構造をしているのか, そして, そのコーパスは信頼性の高い頻度情報を提供してくれるのか, といった問題を吟味しなくてはならないのである。

日本語環境にいる日本人ロシア語学習者を対象として効率的な語彙学習法を検討する際, その分析リソースとしては, 標準的な現代ロシア語を代表する書き言葉コーパスが最適であると考えられる。日本人学習者が読むテキストの大半は標準的な現代ロシア語で書かれており, 彼らは授業で

新聞や小説などの書き言葉のテキストに触れる機会が多い。

この観点からすると、モニターコーパスである ruTenTen11 は選択肢から除外できよう。3.4.におけるクラスター分析は、ruTenTen11 は現代ロシア語を志向して作られた書き言葉均衡コーパスとは生起頻度の点でかなり異なる、という結果を示している。くわえて、ruTenTen11 はその内部構造がはっきりしないため、どのようなテキストが、どのような比率で含まれているのかわからず、外国語学習を念頭においた頻度分析の研究に適しているかどうか判断しづらい。

Sharoff et al. (2013)の Internet Corpus は現代ロシア語を志向して作成されたわけではないが、3.4.の分析において RNC-M、現行 RNC-M、Uppsala Corpus、Засорина (ред.) (1977)のコーパスと早い段階でクラスターを形成しており、書き言葉均衡コーパスと類似の特徴を示している。ただし、Internet Corpus は自動で収集した web ページのテキストで構成されており、ruTenTen11 と同様に、内部構造が不明瞭であり、一般的な現代ロシア語を反映しているかどうか判断できない(Sharoff et al. (2013)は、自動収集の結果得られたテキストのサンプリング比率を公開しているが、その情報の信頼度は低い。詳細は 3.3.6.参照されたい)。

すると、本稿の分析に適しているのは Штейнфельд (1963)、Засорина (ред.) (1977)、Лённгрен (1993)、Ляшевская、Шаров (2009)のコーパスのどれかということになるが、この中のどれが現代ロシア語の諸相をうまく反映しているのであろうか。代表性はテキストのサンプリング比率と関係するが (cf. Biber 1993a; 石川 2012; McEnery, Hardie 2012), Biber (1993a: 243)は、代表性のあるコーパスを作成するには、規模よりも「むしろ、ターゲットとなる母集団の綿密な定義とサンプリング方法の決定の方が優先順位の高い検討事項である」と述べている。

ただし、前章でも言及したように、現代ロシア語を完全に代表する均衡コーパスの実現は不可能である (cf. Clear 1992; Váradi 2001; Teubert, Čermáková 2007)。表 30 が示すように、現代ロシア語を代表するように作られたコーパスはいくつか存在するが、それぞれが自らの基準で現代ロシア語の母集団を想定して代表性を担保しようと試みている。だが、McEnery, Hardie (2012: 10)が述べているように、「コーパスの作成者は均衡性、代表性、比較可能性の実現を志向するが、それが達成されることはほとんどなく、できたとしても、いくらかである。現実的には、均衡性と代表性は程度の問題」なのである。

そのため、本稿の分析に用いるコーパスを選定する上で、テキストのサンプリング比率以外の客観的な根拠が求められる。その際、サンプリング比率と並んで重要な検討事項となるのはコーパスの総語数である。そこで、4 章では規模の観点から、本稿の分析に適したコーパスの選定を試みる。より具体的に言うと、100 万語規模のコーパスからはどの程度の数の高頻度語が安定して抽出できるのかを確認する。

(30) 4 章の研究設問

100 万語のコーパスからはどの程度の数の高頻度語が安定して抽出できるのか。また、100 万語のコーパスからは、本稿の分析に用いる高頻度 5,000 語までの信頼性の高い頻度情報が得られるのか。

ロシア語に限らず総語数 100 万語のコーパスはこれまでに数多く作られてきた。ただ、現在では 100 万語というコーパス規模は最低限の大きさである (石川 2012: 17), もしくは小さいと見なされている (Захаров 2005: 5; Ляшевская, Шаров 2009: VII-VIII; Sharoff et al. 2013: 4; Щипицина 2015: 62). 一方で、言語分析に求められるコーパス規模は研究目的に左右されるため (cf. Kennedy 1998: 68; Reppen 2010: 55), 小規模のコーパスが研究に不向きであるとは一概に言えない。例えば、本稿全体の研究設問は、1 章で言及した通り、派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法の検討である。その具体的な確認方法として、コーパスにおいてレマ単位 (2.1.3.) で計量されたテキストカバー率を WF 単位 (2.1.4.) で数え直すという作業を 5 章で行う。それにより、どれだけテキストカバー率が上昇するかで派生接辞学習の効果を数量的に確認する。その際の分析対象は高頻度 5,000 語に限定している。5,000 位以降の語を排除する理由は、低頻度語を分析対象に含めることで語彙学習の効率性を損ねないようにするためである (低頻度語は学習上の優先順位が低い (cf. Nation 2001: 19-21)). したがって、本稿の分析にどのコーパスが適しているのかを選ぶ際に重要となる判断基準は、当該のコーパスから信頼性の高い高頻度 5,000 語までの頻度情報が得られるかどうかである。

高頻度 5,000 語の選定に際して、100 万語のコーパスから安定して信頼性の高い頻度情報が得られるのであれば、(ややテキストが古い、データを加工する必要があるなどの問題点は残るが) Засорина (ред.) (1977), Лёнгрен (1993), Brown (1996) を本稿の分析に用いる、もしくは新しく規模の大きい RNC-M の頻度データ (Ляшевская, Шаров 2009) の比較対象として、これらの頻度データを使用しても良いであろう。

本章では、(30) の研究設問の答えを検討する上で、まず 4.1. にて、なぜコンピューターの技術革新を経た現在、100 万語コーパスの有用性を確認する必要があるのか、その意義について言及する。続く 4.2. と 4.3. から具体的な分析作業に移り、その結果を考察する：ここでは内部構造が公開されている RNC-M と同じサンプリング比率を採用し、100 万語のコーパスを 5 つ作成する (4.2.)。これら 5 つの自作コーパスは規模こそ 100 万語と小さいが、内部のテキストジャンルの比率は RNC-M と同じであり、いわば「100 万語規模のミニ RNC-M」であると言える。そして、4.3. にて、後述の Kilgariff (1996) の分析手法に倣い、RNC-M と各自作 100 万語コーパスの高頻度語を 500

毎に区切って (1～500 位, 501～1,000 位, 1,001～1,500 位...), 両者の対応する頻度域における語彙の重複数を確認する. 自作 100 万語コーパスを構成するテキストのサンプリング比率は 9,200 万語の RNC-M と同じであるため, 両者の頻度情報の共通性・安定性はコーパス規模に大きく左右される. 例えば, 仮に 1～2,000 位の領域まで RNC-M と自作 100 万語コーパスの重複数がかなり高ければ, 100 万語のコーパスを用いて高頻度 2,000 語までは安定して抽出できると言えよう. その傾向が RNC-M と 5 つの 100 万語コーパスすべてで確認されれば, 分析結果の信憑性は高い. 最後に, 4.4.にてその結果を総括し, 本稿 5 章～7 章の分析にどのコーパスが最適かを議論する¹²⁹.

4.1. 本章の分析の意義：コーパス規模と高頻度語の関係

コーパス規模が高頻度語の選定に際して, 具体的にどの程度影響を与えるのかといったテーマを直接扱った研究はないと思われる. だが, 通常, 規模の大きなコーパスからは, 安定して信頼性の高い頻度情報が得られるとされる (統計学では, 一般的に母集団の推定精度は標本サイズの平方根に比例するとされる (石川 2012: 18)). したがって, コーパスの総語数は多い方が望ましい.

断片的な記述ではあるが, 例えば, 以下の研究はコーパス規模とそこに含まれる語彙の関係について言及している: Sinclair (1991: 18)はコーパス規模はできるだけ大きくなくてはならないとし, Kennedy (1998: 68)は 50～100 万語で高頻度語の調査が可能であると試算している. Biber (1993a)は, コーパス規模は調査対象によって確定され, 低頻度にしか観察されない言語単位の調査には大規模なコーパスが求められると述べている. Reppen (2010: 55)も同様に, あらゆる分析に適したコーパスサイズは規定できないとしているが, 例えば, 言語教育には数百万規模のコーパスより, 小規模でも代表性のあるコーパスの方が適していると述べている. Kilgariff, Grefenstette (2003: 336)は, 1 億語のコーパスでは語彙の大半の生起頻度が 50 を下回るため, これでは統計的に安定した結論を導くことはできないとしている. 他にも, 語彙の大半は低頻度にしか確認されないため (cf. Zipf 1935), これらの頻度データの分析には BNC などの 1 億語のコーパスでも不十分であり, 数十億規模のコーパスが不可欠であるという指摘もある (ただ, BNC は高頻度語の分析には適している) (Pomikalek et al. 2009: 4-5). 上述の意見は主に英語を念頭においていると思われる.

ロシア語に関して, Šteinfeldt (1973: 14)は, 40 万語のコーパス規模は高頻度 1,100 語から 1,300 語を抽出するのには十分であると述べている. また, Пиотровский и др. (1972)は数学的な観点から, 1,600～1,700 の高頻度語を選定するのであれば, 40 万語のコーパス規模で十分であると試算している. だが, Ляшевская, Шаров (2009: VII-VIII)は, Штейнфельд (1963), Засорина (ред.) (1977),

¹²⁹ 本章の分析は Саяма (2018)に基づいているが, いくつかの点でデータを修正, 加工している.

Лёнгрен (1993)のコーパスを意識して、40～100 万語のコーパス規模は頻度の分析には不十分であると述べている¹³⁰。同様に、Sharoff et al. (2013: 4)も、近年の基準では 100 万語のコーパスは小規模であるとし、そこから得られる語彙リストの信頼性は低いとしている。Захаров (2005: 5)とЩипицина (2015: 62)も部分的にコーパス規模に関して言及をしている：前者は、Brown Corpus や Uppsala Corpus を例として挙げ、現在ではコーパスの総語数は 100 万語以上でなければならないとし、後者は、1 億語を超えるコーパスは様々な調査に適用可能であると述べている。このように、高頻度語の選定に求められるコーパス規模の記述は一致を見ていないが、いずれにしても 100 万語コーパスは、現在の基準では小規模であると言えよう。

一方で、石川 (2012: 17)が述べているように、英語の 100 万語コーパスが「現在でも研究に使用されていることを考慮すると、少なくとも 100 万語程度というのがコーパスに期待されるサイズの目安」であると言えるかもしれない。実際、比較的小規模な 100 万語から成るコーパスは数多く存在している。これには、60 年代に登場した英語の Brown Corpus が大きな影響を与えている。Brown Corpus のデザインは後続のコーパスの設計モデルとなり (齋藤他(編) 1998: 6)、例えば、LOB Corpus, Freiburg-Brown Corpus of American English, Freiburg-LOB Corpus of British English といった英語コーパスが産まれる元となったが (cf. McEnery et al. 2006: 61-62), Захаров (2005: 4)が述べているように、ロシア語では Лёнгрен (1993)の Uppsala Corpus が Brown Corpus のデザインを踏襲している。他にも、Brown (1996)と Засорина (ред.) (1977)は 100 万語のコーパスに基づいて編まれている。仮に 100 万語のコーパスから安定して高頻度 5,000 位までの頻度データが得られるのであれば、100 万語コーパスを本稿の分析に用いても問題はないし、より大規模なコーパスの比較対象として用いても良いであろう。

著者の知る限り、100 万語規模のコーパスからどれだけの数の高頻度語を安定して抽出できるのか、といった問題に取り組んだロシア語の研究は存在しない。100 万語コーパスの有用性に関するこれまでの議論は、白か黒か、大きい小さいかという二元論的な考察にとどまっている (実際、上述のロシア語の先行研究における主張も、具体的な分析結果に基づいているわけではない)。高頻度語の選定には小規模な 100 万語コーパスでは不十分であり、より大規模なものが求められると、直接的に、または間接的に主張されるのみである。

総語数が 100 億を超えるコーパスが登場する今だからこそ、単に高頻度語の選定には 100 万語のコーパスでは不十分であると主張するのではなく、100 万語コーパスからどれだけの高頻度語を安定して抽出できるのか、といった議論をしなくてはならないと考える。巨大コーパスでは用

¹³⁰ Ляшевская, Шаров (2009: V)は、これら 3 つの頻度辞書が基づくコーパスには、規模以外にもテキストの作成年代という問題が存在する、と指摘している (例えば、*партия/partiâ* 「政党」と *товарищ/tovariš* 「同志」といったソビエト時代を反映した語彙が、機能語と並ぶほど高頻度に生起している)。

例の全数チェックは不可能であり、その多さゆえにある言語現象や語彙の細かな特徴を見逃しかねない。一方、100 万語コーパスであれば用例の全数チェックは可能である（7 章参照）。Hunston (2002: 25-26)が述べているように、研究によって適したコーパスサイズがあり、用例が確認しきれないほど大きなコーパスは使用すべきではない。

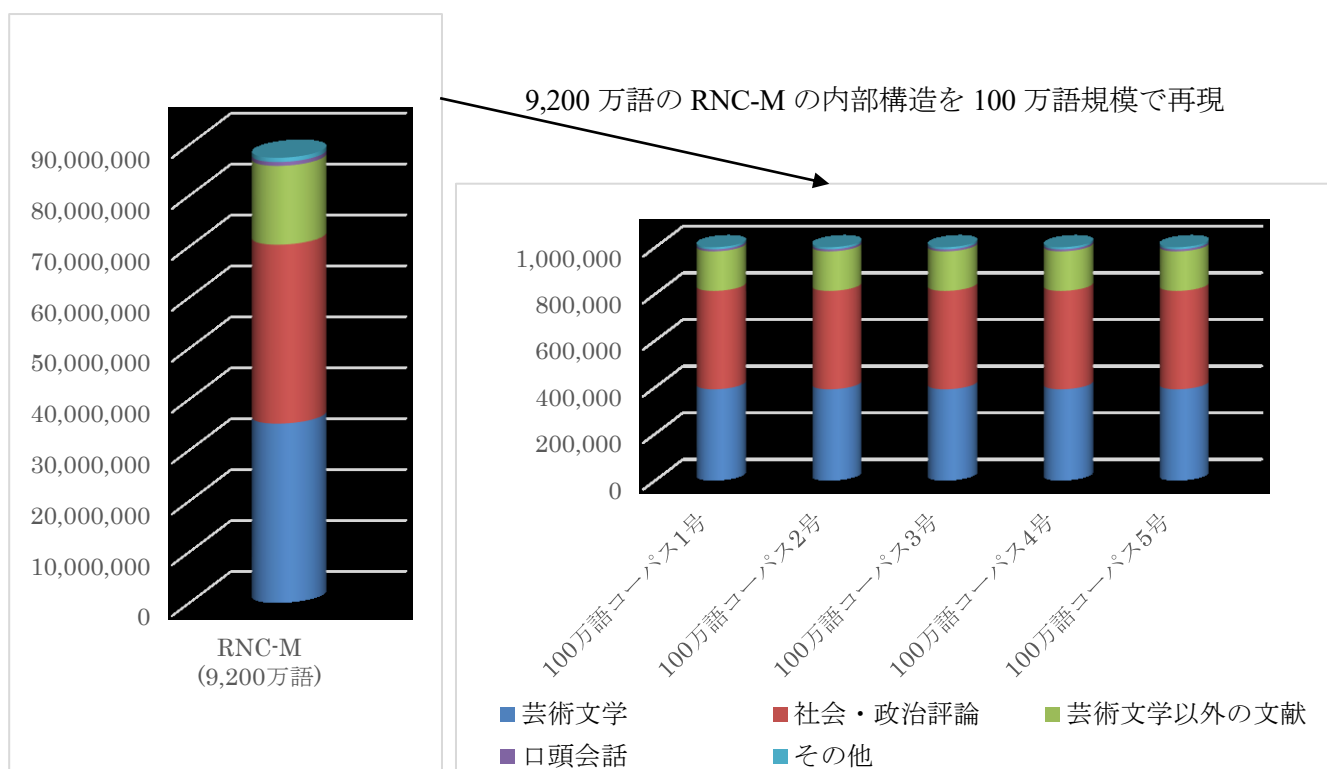
そこで、本章の 4.2.以降で、(30)の研究設問に対する客観的な指標を得るための分析を行う。つまり、高頻度語の選定という観点から 100 万語コーパスの有用性を確認する：例えば、研究者が何らかの代表性を志向して 100 万語の均衡コーパスを構築してそこから高頻度語リストを作成した場合、本章の分析結果は、1,000 語、1,500 語、5,000 語までの高頻度語は、100 万語コーパスから安定して抽出できる、などの答えを提示してくれる。他にも、本章の分析結果には以下のような意義がある：コーパス規模は目標とする代表性とその作成に求められる時間的・物理的な制約という現実的な理由で決定され得るが、研究者個人がコーパスに含まれるテキストを選んでいき、代表性を有した均衡コーパスを作成するのであれば、100 万語規模のコーパスが一つの目安もしくは限界であると言えよう。それ以上大きなコーパスの作成を目指すとなると、手本となるのは BNC や RNC-M などの約 1 億語のコーパスになる。この規模の均衡コーパスを一人で構築するのは難しい。

以上のことから、これまでのコーパス言語学の潮流を纏める上で 100 万語コーパスの有用性を確かめる意義は大きいと考える。

4.2. 自作 100 万語コーパスの概要

(30)の確認方法として、本章では RNC-M と同じテキストのサンプリング比率で構成された 100 万語コーパスを 5 つ作成し、これらと RNC-M における語彙の重複数を確認する（詳細は 4.3.で後述する）。本章は比較対象として RNC-M を採用するが、その理由は、RNC-M は規模が大きく信頼性の高い頻度情報を提供し、かつ、その内部構造が判明していて再現可能な唯一の現代ロシア語の書き言葉均衡コーパスだからである（他の均衡コーパスには、規模が小さい、または内部構造が不明瞭であるという問題がある）。また、RNC-M のデータは頻度辞書 (Ляшевская, Шаров 2009)にまとめられているだけでなく、web 上でも一般に公開されている。

グラフ 1 は、自作 100 万語コーパスの内部構造のイメージを表している。



グラフ 1. 自作 100 万語コーパスの内部構造のイメージ

グラフが示すように、RNC-M を構成するテキストのサンプリング比率を、5 つの自作コーパスにおいて 100 万語規模で再現する。これらのコーパスに含まれるテキストは、約 39%が「芸術文学」、約 42%が「社会・政治評論」、約 17%が「芸術文学以外の文献」、約 1%が「口頭会話」といったジャンルから成る。つまり、5 つの自作コーパスは 100 万語規模の RNC-M であると言える。

4.2.1.以降で RNC-M の内部構造に触れながら、100 万語コーパスの作成について言及する¹³¹。

4.2.1. 自作 100 万語コーパスにおけるテキストのサンプリング比率

ロシア語を対象とした言語学の研究において、統計学を用いた量的な分析手法はよく見受けられる。だが、その適用が「妥当性を有するのは、得られたデータから内容のある（質的な）結果が導ける場合のみである。<...> なぜなら、なんらかの現象の単なる計算からは何も明らかにはならないからである」（Зиндер, Строева 1968: 121）。量的な分析結果は質的に解釈されなければなら

¹³¹ なお、本章はより規模の大きい現行 RNC-M ではなく、RNC-M を自作コーパスの比較対象に採用したが、理由は以下の通りである：現行 RNC-M は、一定の間隔で総語数を増やし続けているためその内部構造は変化している。そのため、現行 RNC-M は web 上で内部構造の比率を公開してはいるものの、そのデータは今のバージョン（検索に使用できる現行 RNC-M）のデータと一致しない（アクセス日 2018 年 2 月 9 日）。また、現行 RNC-M はレマ単位の頻度データを一般に公開しておらず、その頻度辞書も出していない。そのため、本章は RNC-M を自作コーパスの比較対象に用いている。

ず、「理論的な解釈の欠如はその分析から意味を奪って」(Москвин 2015: 82) しまう。したがって、単にテキストを 100 万語集めたコーパスと RNC-M を比較しても、得られた結果にそれほど意味はない。通常、代表性のあるコーパスの設計に際しては、実証的な調査や理論的な分析がコーパスのデザインや実際のテキスト収集に先立たなければならないが (cf Biber 1993a: 255-256)、本章の自作 100 万語コーパスは、Ляшевская, Шаров (2009) が提示している RNC-M の内部構造を模して作成される。したがって、RNC-M と自作 100 万語コーパスとの比較から得られる分析結果は、質的に解釈が可能である。

RNC-M のジャンル毎の総語数 (3.3.5.参照) とテキスト数を約 100 万語サイズに縮小すると、以下のような数値が得られる。

表 31. 自作 100 万語コーパスの内部構造 (計画案)

テキストのジャンル		比率	総語数	テキスト数
1.	芸術文学	39.04%	390,400×5	24×5
2.	社会・政治評論	42.21%	422,100×5	274×5
3.	芸術文学以外の文献	17.16%	171,600×5	75×5
	– 教育・学術	11.30%	113,000×5	40×5
	– 公式・業務文書	1.62%	16,200×5	11×5
	– 電子媒体でのやりとり	1.49%	14,900×5	1×5
	– 教会・神学	1.44%	14,400×5	5×5
	– 広告	0.57%	5,700×5	12×5
	– 実生活	0.48%	4,800×5	4×5
	– 製造技術	0.26%	2,600×5	1×5
4.	パブリックではない口頭会話	0.88%	8,800×5	10×5
5.	その他 (調整用)	0.71%	7,100×5	1×5
合計		100%	1,000,000×5	383×5

表 31 が示すジャンル毎の総語数とテキスト数に基づいて、5 つのコーパスを作成する。

なお、RNC-M では上記のジャンルよりも細かな区分が設定されている。例えば、芸術文学というジャンルの元には「一般的な散文」、「歴史小説」、「冒険小説」といった区分がある。さらに、それらは「長編、中編、短編小説」、「詩」、「物語」、「寓話」などに分かれる。残りのジャンルの下位区分には、「記事」、「インタビュー」、「スピーチ」、「報告書」、「教科書」といった多様な項目が存在する¹³²。

ただ、RNC-M の頻度辞書 (Ляшевская, Шаров 2009) や RNC-M の内部構成に関する論文 (Савчук 2005) からは下位区分の比率までは読み取ることができない。そこで、本章ではまず現行 RNC-M

¹³² 詳細は以下のサイトを参照されたい：URL: <http://www.ruscorpora.ru/corpora-parameter.html>

のアノテーション情報から下位区分の比率を概算した¹³³。そして、自作 100 万語コーパスにおけるジャンル別の下位区分の比率を現行 RNC-M のそれに近づけるようにテキストを収集した。例えば、「社会・政治評論」のジャンルは、「記事」のテキストが全体の半数を占め、「小記事」、「モノグラフ」などに属するテキストが次に続く¹³⁴。

4.2.2. 自作 100 万語コーパスにおけるテキストの収集法

5 つの自作 100 万語コーパスを構成するテキストは、1) web からの抽出、2) OCR による読み取り、そして 3) 自らの打ち込みによってデータ (txt ファイル) 化された。収集に際しては、主に 1) の手法を用いた。なお、テキストの抽出元は、可能な限り RNC-M や現行 RNC-M と同じリソースや類似のリソースを採用した¹³⁵。

まず、サンプリング比率の約 4 割を占める「芸術文学」に関しては、Lib.Ru というサイト (2.2. 参照) から条件に合うテキストを収集した (2,000 年以降に書かれた作品を中心に収集)。そして、同様に全体の約 4 割を構成する「社会・政治評論」のテキストは、現行 RNC-M のアノテーション情報を参考にして、なるべくそこで採用されている雑誌やその電子版、類似の web リソースから収集した。「芸術文学以外の文献」は、1 テキストのサイズが小さいため条件に合うテキストを主に web でその都度探した。口頭会話のテキストは、費用的な問題などで研究に耐え得る量を集めることが困難であったため、現行 RNC-M に含まれる口頭会話のテキストを自作コーパスに採用した¹³⁶。

収集するテキストの性質について以下の 2 点に留意した： 1) RNC-M はテキストの一部を切り取るのではなく、最初から最後まで、つまり、テキストは丸ごと抽出するという方針をとっている (Савчук 2005: 68-70)。これは、語彙は文章の位置によって使われる項目が異なっており、前半、中盤、後半といった一部だけを切り取ると、コーパスが提示する生起頻度の情報が実際のそれと乖離する可能性を考慮しての措置であろう。この点に関して本章は RNC-M の方針に従う。ただ、

¹³³ 下位区分の比率を計算した際のコーパス規模は 265,401,717 語であり、現行のバージョンよりも古い (アクセス日：2017/12/12)。

¹³⁴ 芸術文学以外のジャンルには、「経済」、「政治」、「科学」、「技術」などのさらに細かいテキストのテーマ (тематика текста) という区分も存在する (例：社会・政治評論 → 記事 → 経済)。だが、多くのテキストが複数のテーマを有しており、自作コーパスにおいて現行 RNC-M の比率を再現することは不可能である。そこで、本章ではなるべくテーマが偏らないように配慮してテキストを収集した。

¹³⁵ 著者が過去 (2016 年 10 月から 2017 年 10 月) に所属したロシア科学アカデミー V.V. ヴィノグラードフ名称ロシア語研究所には、RNC-M の頻度辞書の著者である О.Н. Ляшевская と、RNC-M を構成するテキストの収集に従事した С.О. Савчук が在籍している。研究を進めるにあたって、両者にテキストを収集したリソースに関する質問をし、その情報を得ている。

¹³⁶ 5 万語分の口頭会話のテキストの使用許可を、RNC の権利元であるロシア科学アカデミー V.V. ヴィノグラードフ名称ロシア語研究所へ申請した。著者個人として同研究所と契約書を交わし、商業的な理由で当データを使用しないという条件で許可を得ている。

例外として総語数の多いテキストは節や章の単位で抽出した。2) Ляшевская, Шаров (2009)の RNC-M を構成するテキストの作成年は 1950 年から 2007 年までと幅が広い。ただし、本章のコーパスは 100 万語と総語数は決して大きくはない。かつ、古いテキストの収集は難しい。そのため、自作 100 万語コーパスは 21 世紀以降のテキストで大半が構成されるように設計した（なお、9 割以上のテキストが 2015 年、2016 年に作成されたものである）。

4.2.3. 自作 100 万語コーパスにおける総語数の数え方

前述の基準でテキストを収集し、総語数 100 万のコーパスを 5 つ作成した。完成した自作コーパスの総語数は Sketch Engine で計測したが、比較対象である RNC-M と語を数える際の基準がいくつかの点で異なる。そのため、コーパスの総語数やレマ化された頻度リストを比較する場合、RNC-M と Sketch Engine の計量の基準はどちらかに統一しなければならない。

総語数を数えるにあたって RNC-M と Sketch Engine の間に違いがある場合、基本的に前者の基準を優先する：1) RNC-M においてアラビア数字は、コンマやピリオドと異なり、語としてカウントされている。一方、Sketch Engine はこれらを語として扱っていない。そこで、本章では RNC-M の基準に合わせてアラビア数字を語として扱い、総語数や語の頻度を計算した（4.2.4.では、自作コーパスにおける高頻度語のテキストカバー率に言及するが、その際の分析はアラビア数字もカバー率の計算に含んでいる）。ただし、RNC-M の頻度辞書のリストからはアラビア数字は削除されているので、この点も本章は RNC-M の基準に揃えている。2) RNC-M において *рис./ris* や *тел./tel.* といった省略された形態は、元の *рисунок/risok* 「イラスト」と *телефон/telefon* 「電話」として頻度がカウントされているが、Sketch Engine ではその処理は行われずにそのままとなっている。そこで、Григорьева (ред.) (2012)の基準に合わせて、このような省略形は自作 100 万語コーパス内で元の形に戻してある。また、Григорьева (ред.) (2012)に記載がないものの、広く用いられている省略形にも同様の措置を施した。3) ハイフンでつながれた複合語は、RNC-M では Зализняк (1977)の記載に従ってそのまま 1 語とするか、2 語としてカウントするかを決めている（記載されていれば 1 語として、記載が無ければ 2 語として処理）。Sketch Engine ではすべての複合語をそのまま 1 語として扱っているため、本章では手作業で一つひとつ複合語を確認していった（確認の範囲は、分析対象の高頻度 5,000 語内の複合語に限っている。ただ、複合語自体がそれほど多くないので、後述の分析に大きな影響はない）。

なお、RNC-M と Sketch Engine 共に *internet* や *mail* といったラテン文字で書かれた語を総語数に含んでいる。ただ、アラビア数字と同様に、このような語は Ляшевская, Шаров (2009)の頻度リストからは除外されている。ラテン文字で書かれた語は自作コーパスにおいても総語数に含める

が、頻度リストの項目からは除外する。

基本的には前述の通りに RNC-M 側の基準に合わせて総語数を計測するが、この作業は手動で行うためにミスが生じるといった可能性は排除できない。なお、前述の基準に漏れている項目は、そのまま Sketch Engine の処理に従った。このようにして計測した自作 100 万語コーパス 1 号から 5 号（以下、C_1～C_5）のジャンル別総語数とテキスト数は以下の通りである。

表 32. 自作 100 万語コーパスにおけるジャンル別総語数とテキスト数

ジャンル	C_1	C_2	C_3	C_4	C_5
芸術文学	390,556 (24)	404,145 (24)	396,611 (24)	391,967 (24)	394,475 (24)
社会・政治評論	432,433 (277)	421,425 (277)	429,837 (277)	431,646 (277)	426,851 (277)
教育・学術	116,811 (40)	115,109 (40)	117,838 (40)	119,135 (40)	115,423 (40)
公式・業務文書	16,964 (11)	16,224 (11)	17,021 (11)	17,546 (11)	16,822 (11)
電子媒体	17,662 (1)	16,981 (1)	16,849 (1)	16,721 (1)	17,540 (1)
教会・神学	16,456 (5)	15,051 (5)	15,397 (5)	15,063 (5)	13,888 (5)
広告	5,651 (12)	5,816 (12)	6,056 (12)	5,654 (12)	5,817 (12)
実生活	5,349 (4)	4,282 (4)	5,004 (4)	4,794 (4)	4,801 (4)
製造技術	2,430 (1)	2,904 (1)	2,876 (1)	2,552 (1)	2,910 (1)
口頭会話	11,810 (8)	11,021 (8)	9,425 (8)	10,433 (8)	9,758 (8)
合計	1,016,122 (383)	1,012,958 (383)	1,016,914 (383)	1,015,511 (383)	1,008,285 (383)

表内の数値はジャンル毎に見た総語数を、また、括弧内の数値はテキストの数を表す。例えば、C_1 の芸術文学のジャンルは 24 のテキストから構成され、その総語数は 390,556 語である。同様に、C_1 の社会・政治評論のジャンルは 277 のテキストから成り、その総語数は合わせて 432,433 語となる。表 31 で示した計画に概ね沿ったコーパス総語数とテキスト数が実現できたと言える。

4.2.4. 自作 100 万語コーパスにおけるテキストカバー率

ここでは、各コーパスの高頻度語によるテキストカバー率を確認する。カバー率はコーパス規模とテキストのジャンル比率に左右される場合が多い。例えば、書き言葉コーパスである 9,200 万語の RNC-M では、高頻度 2,000 語がテキストの約 69.4% をカバーする（後述の表 33 参照）。一方、100 万語に満たない話し言葉コーパスである RNC-S の高頻度 2,000 語は、10% 以上高い 80.3% のカバー率を実現する（5.3.1. 参照）。5 つの自作 100 万語コーパスはほぼ同じ総語数と同じテキストジャンルの比率で構成されている。そのため、C_1～C_5 のテキストサンプリングが首尾よく行われていれば、理論的には 5 つに共通して類似のカバー率が確認されるはずである。

RNC-M と C_1～C_5 の高頻度語によるテキストカバー率は次の通りである。

表 33. RNC-M と C_1～C_5 の高頻度語によるテキストカバー率（語の単位：レマ¹³⁷）

語数	RNC-M	自作 100 万語コーパス					参考
		C_1	C_2	C_3	C_4	C_5	C_All
1,000 語	60.94%	62.59%	62.45%	62.58%	63.35%	63.25%	62.31%
2,000 語	69.37%	71.88%	71.85%	72.05%	72.72%	72.84%	71.53%
3,000 語	74.06%	77.08%	77.05%	77.27%	77.88%	78.12%	76.61%
4,000 語	77.19%	80.49%	80.49%	80.73%	81.29%	81.57%	79.93%
5,000 語	79.47%	82.98%	82.99%	83.25%	83.77%	84.04%	82.37%

C_1 における高頻度 1,000 語, 2,000 語, 3,000 語は, それぞれコーパスを構成するテキストの 62.59%, 71.88%, 77.08% をカバーする. 表が示す通り, C_1 から C_5 に共通して, 各高頻度域において類似のカバー率が確認された. 例えば, 高頻度 1,000 語域では約 62.5～63.4%, 2,000 語域では約 71.9～72.8% のテキストカバー率が実現される. この結果は, コーパスを構成するテキストのサンプリングがうまく行われたことを示している.

なお, RNC-M と C_1～C_5 を比べた場合, 両者のテキストカバー率には若干の差が観察される (RNC-M の方がすべての高頻度域を通してカバー率が低い). C_1 から C_5 において高頻度 1,000 語はテキストの約 62.5～63.4% をカバーするが, RNC-M の高頻度 1,000 語によるカバー率は約 60.9% である. この傾向は 1,000 語から 5,000 語のすべての高頻度域で観察される. このカバー率の差はコーパス規模が関係していると推測される. すなわち, コーパスの規模が大きいほど, ほとんど使われることのない, もしくは 1 回しか使われないような語彙項目 (低頻度語) の含有率が高くなる. 例えば, RNC-M には *дробилка/drobilka* 「粉碎機」 (生起頻度は ipm 換算で 2.6), *немыслимо/nemyslimo* 「思いもよらぬほど」 (生起頻度は ipm 換算で 3.3) という語が含まれるが, これらは C_1 から C_5 には含まれていない. 大規模コーパスにはこのような低頻度語が数多く含まれているため, RNC-M と C_1～C_5 の 1,000 語, 2,000 語といった特定語数によるテキストカ

¹³⁷ C_1～C_5 のレマ化は Sketch Engine の Word list 機能を用いて行った. Sketch Engine のレマ化は, RNC-M と概ね同じ基準 (3.3.5.参照) で行われる. ただ, 他の統語的機能を獲得した特定語形 (2.3.2.1.参照) の処理に関して両者には違いが見受けられる. RNC-M はその種の語形を 1 つのレマとして捉えている

(例: *мочь/моџ'* の 3 人称単数現在の語形 *можем/моџет* は, 通常の「できる」以外にも「かもしれない」を意味する場合があるが, RNC-M では後者に 1 つの見出し語が与えられている). 一方, Sketch Engine では, この語形はレマ *«МОЧЬ/МОѢ»* 「できる」に集約されて頻度が計算されている. 頻度データからこの語形が「できる」か「かもしれない」のどちらを意味するのかは判断できないため, 本章の分析において上述のような語形は, 例外的に Sketch Engine 側の基準に合わせて元のレマに集約する.

なお, Sketch Engine のレマ化には, いくつか誤りがあることがわかった. 例えば, C_1 において 2 次的完了化による *прочитывать/pročityvat'* 「読み終える」が高頻度に生起しているが, これは, 実際は派生元の *прочитать/pročitat'* の生起例であった. 他にも, *использоваться/ispol'zovat'sâ* 「使用される」が *использовать/ispol'zovat'* 「利用する」として扱われていた. 本稿の執筆にあたり, 高頻度 5,000 語を対象として, 手動でこのようなミスを可能な限り訂正している (ただし, 厳密には表のカバー率は若干上下するであろう).

バー率に差が生じたのである。参考までに C_1 から C_5 までのコーパスを 1 つに統合し、500 万語のコーパスを作成してカバー率を計算した (表内の C_ALL)。結果、C_ALL における各高頻度域のテキストカバー率は、100 万語の C_1～C_5 におけるそれよりも若干低いことがわかる。

4.3. RNC-M と自作 100 万語コーパスにおける高頻度語の重複数

複数のコーパス間の高頻度語を比較した場合、一般的に同じものが含まれている場合が多く、その傾向は頻度順が高いほどに顕著である。例えば、Ляшевская, Шаров (2009) の RNC-M と Sharoff et al. (2013) の Internet Corpus では、共通して *и/и* 「そして」、*в/в* 「中で」、*не/не* 「でない」、*на/на* 「上で」、*я/я* 「私」、*быть/быт'* 「いる、ある」といった語が最上位の 6 つを占めている。他にも、*сделать/sdelat'* 「する」、*думать/dumat'* 「考える」といった基本語はふつうどのコーパスにおいても 1 位～500 位の高頻度域に含まれている。

本章ではこの特性を利用して研究設問(30)の答えを検討する：様々なジャンルのテキストをバランスよく含み、総語数が 9,200 万語に昇る RNC-M は、現在あるロシア語コーパスの中で最も信頼性が高い頻度情報を提示するコーパスの 1 つである。一方、4.2. で作成した C_1～C_5 は総語数こそ 100 万語ではあるが、その内部構造は RNC-M と同じである。仮に 100 万語という規模の均衡コーパスから安定した頻度情報が得られるのであれば、両者の間の語彙の重複数は多いはずである。その安定した重複数が高頻度の何位まで確認されるのかを調査する。

以下の 4.3.1. で本章が参考とする先行研究の分析手法に触れ、4.3.2. では RNC-M と C_1～C_5 のデータを用いて実際に重複数を確認し、結果の考察を行う。

4.3.1. 重複数の分析手法

複数のテキストやコーパス間の類似度を測る手法はいくつか存在する。例えば、頻度情報を用いることで、異なる領域のテキストやコーパス間における文法的・語彙的特徴の類似度や相違度を調査できる (cf. Biber 1991, 1993b; Sekine 1997)。Kilgariff (1997: 232) も同様に頻度を用いて 2 つのコーパス間の均一性を測る手法を提案している：ある 1 つのコーパスに対して、無作為にそのテキストを分配することで 2 つのサブコーパスを作成する；それぞれのサブコーパスで頻度リストを作成する；サブコーパス間の差異についてカイ二乗の統計値を計算し、統計的な処理を行う；最後に、得られた値を比較することで結果を解釈する。

本章では RNC-M と C_1～C_5 (RNC-M と同じテキストのサンプリング比率で構成されたコーパス) を比較する。もともと類似性が高いと推測されるコーパス間の類似度を計測するにあたり、本章は Kilgariff (1996) の分析手法を参考にする：Kilgariff (1996: 12-14) は、総語数 1 億の BNC を

同じ総語数と同じテキストジャンルの比率になるよう 2 つに分割した (以下, half-1 と half-2). つまり, half-1 と half-2 はそれぞれ約 5,000 万語から成り, 同じ比率で特定のジャンルのテキストを含んでいる. 次に, この 2 つのサブコーパスの高頻度 3,000 語を分析対象として, 両コーパスの語彙を高頻度順に 500 語ずつに区切り (1~500 位, 501~1,000 位, 1,001~1,500 位...), 対となる頻度域を比較してその重複数を確認した. 結果は以下の通りである.

表 34. BNC の half-1 と half-2 における対応する高頻度域の重複数 (Kilgarriiff 1996: 13)

		Rank order in half-1						
		1-500	501-1000	1001-1500	1501-2000	2001-2500	2501-3000	over 3000
Rank order in half-2	1-500	482	17	1	0	0	0	0
	501-1000	18	440	39	2	0	1	0
	1001-1500	0	43	400	51	3	0	3
	1501-2000	0	0	56	356	79	5	4
	2001-2500	0	0	4	79	314	87	16
	2501-3000	0	0	0	9	81	303	107
	over 3000	0	0	0	3	23	104	

half-2 の高頻度 1~500 位の 500 語すべてが half-1 の高頻度 1~500 位の中に含まれていたら, 表内の数は最大値である 500 となる (つまり, 類似度が高いほど, 表内の太字の数値が 500 に近くなる). 表からわかるように, 両コーパスの重複数は極めて高い. 例えば, half-2 の 1~500 位に属する 500 語のうち, 482 語は half-1 の 1~500 位の中に含まれている. 同様に, half-2 の 501~1,000 位の間にある 500 語のうち, 440 語は対応する half-1 の 501~1,000 位に含まれている. half-1 と half-2 の高頻度 3,000 語を対象として両方のコーパスに含まれていない, つまり, 両者の間で異なっている語の数はわずか 130 である (over 3,000 の欄の累計数).

他の見方として, half-2 の 1~2,500 位の 2,500 語は, half-1 の高頻度 3,000 語内にそのほとんどが含まれていることも両コーパスの類似度の高さを物語っている (含まれていない語は $3+4+16=23$ 語). この分析結果を総括すると, 両コーパスの高頻度語は安定してもう一方のコーパスにおいても高頻度に生起しているのである. Kilgarriiff (1996: 13)が述べているように, 「より大きな総数に基づく主張の方がより信頼性が高いというのは, 一般に統計的な事実」であり, この高い重複数は, 5,000 万語という巨大なコーパス規模と同一のテキストジャンルの比率によって実現された数値である. この比較から, コーパスにおける高頻度語の選定には, その規模が重要であることが窺える.

4.3.2. 重複数の分析と考察

同様の分析を 100 万語規模のコーパスを用いて行った場合、どの頻度域まで安定した重複数が確認されるのであろうか。ここでは、前出の Kilgariff (1996) の手法を用いて、9,200 万語の RNC-M と 100 万語版 RNC-M である C_1～C_5 における高頻度語の重複数を計測する。分析結果は以下の通りである。

表 35. RNC-M と C_1 における対応する高頻度域の重複数

順位		C_1						
		1-500	501-1,000	1,001-1,500	1,501-2,000	2,001-2,500	2,501-3,000	over 3,000
RNC-M	1-500	423	58	9	2	1	2	5
	501-1,000	70	286	94	24	8	3	15
	1,001-1,500	4	117	201	94	35	15	34
	1,501-2,000	2	27	119	156	81	44	71
	2,001-2,500	0	5	45	116	118	72	144
	2,501-3,000	0	2	17	47	107	89	238
	over 3,000	1	5	15	61	150	275	

RNC-M のトップ 500 語のうち、423 語が対応する C_1 のトップ 500 位に、次の 500 語 (501～1,000 位) の中には 58 語が含まれている。また、RNC-M の 501～1,000 位の 500 語のうち、286 語が対応する C_1 の 501～1,000 位の中に含まれている。1～500 位と 501～1,000 位は最上位の高頻度域であるが、BNC の half-1 と half-2 と比べると、本章の RNC-M と C_1 の分析結果は重複数の点で大きく劣っていることがわかる。

表 36. Kilgariff (1996) と本章の分析における対応する高頻度域の重複数

高頻度域	1-500	501-1,000	1,001-1,500	1,501-2,000	2,001-2,500	2,501-3,000
half-1 と half-2	482	440	400	356	314	303
RNC-M と C_1	423	286	201	156	118	89

表は、対応する頻度域にて重複数が 500 に近いほど語彙的な類似度が高いことを示しているが、1～500 位、501 位～1,000 位と順位を下る毎にその数値は減少していく。ただ、その重複数の減少度は RNC-M と C_1 の方が、half-1 と half-2 よりも遥かに急である。つまり、この数値は、頻度域を 1～500 位、501～1,000 位、1,001～1,500 位と下っていくにつれて、RNC-M と C_1 における語彙的な類似度も下がっていることを示している。

次に、高頻度 3,000 語を対象に RNC-M には含まれてはいるが、もう一方の C_1 には含まれていない「範囲外語」(over 3,000 の語) に関して言及する。Kilgariff (1996) の分析では、half-2 の高

頻度語の大半は、half-1 に含まれており、全体として範囲外語の累計数は少ない。だが、本章の RNC-M と C_1 の間には範囲外語の数が多く、その累計数は Kilgariff (1996)における half-1 と half-2 のそれよりもはるかに多い。

表 37. Kilgariff (1996)と本章における各高頻度域の範囲外語の数（括弧内は累計）

高頻度域	1-500	501-1,000	1,001-1,500	1,501-2,000	2,001-2,500	2,501-3,000
half-1 と half-2	0(0)	0(0)	3(3)	4(7)	16(23)	107(130)
RNC-M と C_1	5(5)	15(20)	34(54)	71(125)	144(269)	238(507)

RNC-M の高頻度 1～1,500 位の範囲であれば、そのほとんどが C_1 の高頻度 3,000 語内に含まれているが（範囲外語：5+15+34=54 語）、1,501 位以降は範囲外語の数値が急激に増えていく。

同様の分析を RNC-M と C_2～C_4 に対して行った。すると、重複数に関して RNC-M と C_1 の場合とほぼ同様の分析結果が得られた。

表 38. RNC-M と C_2 における対応する高頻度域の重複数

順位		C_2						
		1-500	501-1,000	1,001-1,500	1,501-2,000	2,001-2,500	2,501-3,000	over 3,000
RNC-M	1-500	421	61	11	0	1	1	5
	501-1,000	70	279	93	30	13	1	14
	1,001-1,500	8	124	188	89	38	19	34
	1,501-2,000	1	23	125	139	78	44	90
	2,001-2,500	0	4	40	111	120	71	154
	2,501-3,000	0	3	23	65	103	76	230
	over 3,000	0	6	20	66	147	288	

表 39. RNC-M と C_3 における対応する高頻度域の重複数

順位		C_3						
		1-500	501-1,000	1,001-1,500	1,501-2,000	2,001-2,500	2,501-3,000	over 3,000
RNC-M	1-500	415	61	11	1	1	2	9
	501-1,000	77	276	87	25	13	4	18
	1,001-1,500	6	130	201	72	43	18	30
	1,501-2,000	2	23	121	154	81	42	77
	2,001-2,500	0	3	50	122	108	62	155
	2,501-3,000	0	3	15	56	104	91	231
	over 3,000	0	4	15	70	150	281	

表 40. RNC-M と C_4 における対応する高頻度域の重複数

順位		C_4						
		1-500	501-1,000	1,001-1,500	1,501-2,000	2,001-2,500	2,501-3,000	over 3,000
RNC-M	1-500	420	63	8	0	1	1	7
	501-1,000	73	270	101	26	8	4	18
	1,001-1,500	4	125	185	91	43	17	35
	1,501-2,000	2	30	125	148	80	39	76
	2,001-2,500	1	5	41	102	118	76	157
	2,501-3,000	0	4	17	64	92	76	247
	over 3,000	0	3	23	69	158	287	

表 41. RNC-M と C_5 における対応する高頻度域の重複数

順位		C_5						
		1-500	501-1,000	1,001-1,500	1,501-2,000	2,001-2,500	2,501-3,000	over 3,000
RNC-M	1-500	404	72	9	2	1	2	10
	501-1,000	85	257	93	35	10	2	18
	1,001-1,500	8	120	167	79	51	25	50
	1,501-2,000	1	30	120	131	86	34	98
	2,001-2,500	1	10	59	115	89	62	164
	2,501-3,000	0	0	25	61	86	88	240
	over 3,000	1	11	27	77	177	287	

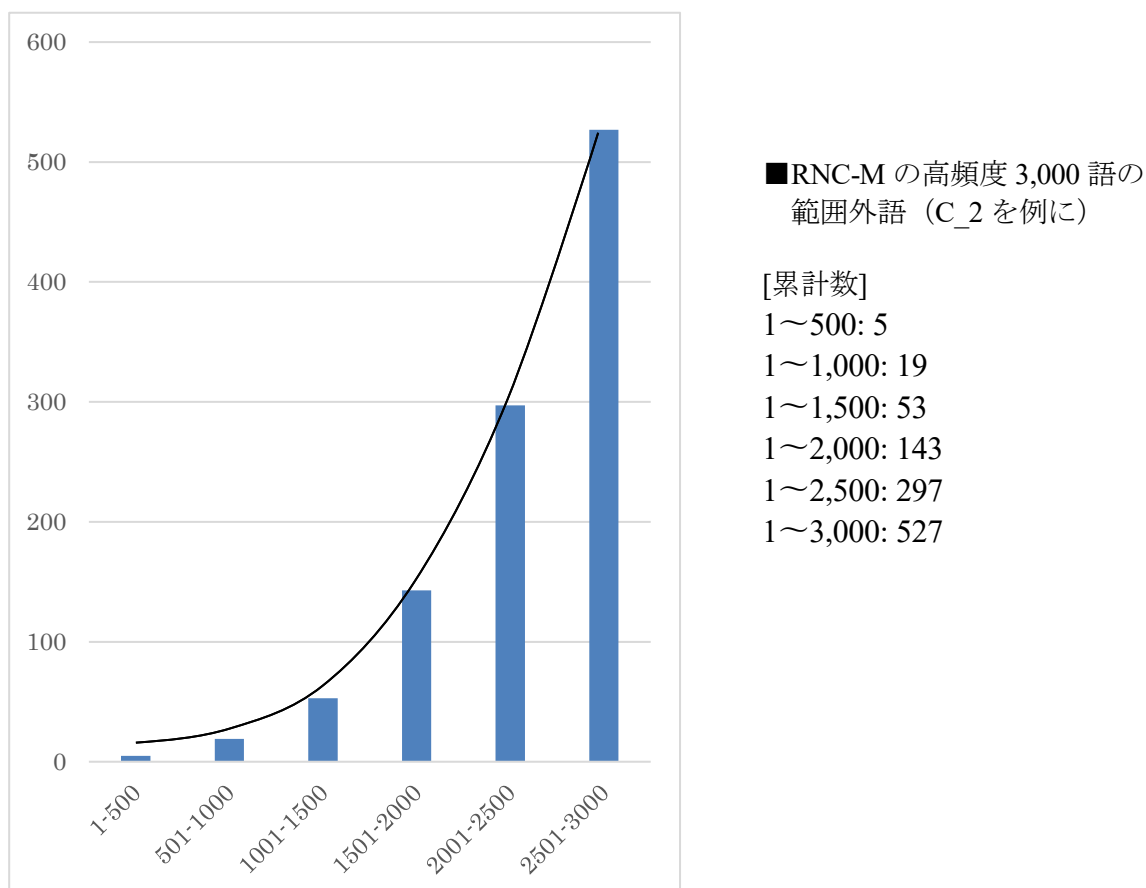
また、範囲外語の累計数に関しても RNC-M と C_1 の場合と同様の結果が得られた。すなわち、RNC-M の高頻度 1～1,500 位の 1,500 語は、C_2～C_4 の高頻度 3,000 語内に安定して含まれている。逆に、1,500 位を超えると、C_2～C_4 には含まれていない範囲外語が急激に増えていく。

表 42. RNC-M と C_2～C_5 における各高頻度域の範囲外語の数（括弧内は累計）

	1-500	501-1,000	1,001-1,500	1,501-2,000	2,001-2,500	2,501-3,000
RNC-M と C_2	5(5)	14(19)	34(53)	90(143)	154(297)	230(527)
RNC-M と C_3	9(9)	18(27)	30(57)	77(134)	155(289)	231(520)
RNC-M と C_4	7(7)	18(25)	35(60)	76(136)	157(293)	247(540)
RNC-M と C_5	10(10)	18(28)	50(78)	98(176)	164(340)	240(580)

ここまで確認された累計数と重複数の傾向は、RNC-M と C_1～C_5 のすべての分析に共通している（なお、ここでは、「RNC-M の高頻度語が C_1～C_5 において」といったように、RNC-M を基準に重複数と範囲外語の数値を計算したが、逆に、C_1～C_5 を基準に表のデータを分析しても結果はほぼ同じである）。

次に、C_2 と RNC-M における範囲外語の数をグラフ化すると、1,500 位以降に範囲外語の累計数が急増の様が見て取れる。



グラフ 2. C_2 に含まれていない RNC-M の高頻度語（範囲外語）の累計数

RNC-M の高頻度 1 位から 1,500 位の 1,500 語は、53 語を除いて C_2 の高頻度 3,000 語内に含まれている。分析範囲を 2,000 位まで広げると、範囲外語の数は 2 倍以上の 143 にまで増加する。それ以降の順位に下ると、範囲外語の累計数は、2,500 位までで 297、3,000 位までで 527 となる。

ここまでの分析から、RNC-M の高頻度 1 位～1,500 位までの 1,500 語は、自作 100 万語コーパスにおいても安定して高頻度に生起している傾向が窺える。一方、1,501～2,000 位から、範囲外語の数が C_1～C_5 に共通して急激に増え始める。

なお、Kilgariff (1996) の分析では、5,000 万語から成る 2 つのサブコーパスを比較しているが、表 34 が示す通り、各高頻度域において両者の重複数は高い。これは、コーパス規模の大きさに関係していると推測される。つまり、コーパスの総語数が増えるほど上位にくる語の生起頻度（もしくは語彙）は安定していき、その結果、2 つのコーパス間の重複数は高くなるのである。実際、C_1 から C_5 を 1 つに統合した 500 万語のコーパス (C_ALL) を作成し、同様の分析を行うと、

RNC-M と C_ALL における対応する各頻度域の重複数は増加する。

表 43. RNC-M と 500 万語の C_ALL における対応する高頻度域の重複数

順位		C_ALL						
		1-500	501-1,000	1,001-1,500	1,501-2,000	2,001-2,500	2,501-3,000	over 3,000
RNC-M	1-500	430	58	5	0	1	1	5
	501-1,000	65	300	98	24	5	1	7
	1,001-1,500	3	115	209	90	39	21	23
	1,501-2,000	2	18	130	167	78	35	70
	2,001-2,500	0	2	30	121	148	74	125
	2,501-3,000	0	2	14	51	108	100	225
	Over 3,000	0	5	14	47	121	268	

RNC-M の 1～500 位の 500 語のうち、430 語が対応する C_ALL の頻度域に含まれている。それ以降も 300, 209, 167, 148, 100 といった具合に、RNC-M と C_ALL の間では、RNC-M と C_1～C_5 のどれよりも高い重複数が記録されている。

また、重複数の増加に伴い、範囲外語の数は減少している。

表 44. RNC-M と C_All における各高頻度域の範囲外語の数（括弧内は累計）

	1-500	501-1,000	1,001-1,500	1,501-2,000	2,001-2,500	2,501-3,000
RNC-M と C_ALL	5(5)	7(12)	23(35)	70(105)	125(230)	225(455)

この傾向は、コーパスの総語数が 5000 万、1 億、10 億と増えていくにつれて顕著になっていくと予想される。この分析結果は、コーパス間の高頻度語の重複数が安定するには、より大きなコーパス規模が求められる、ということを示している。言い換えると、コーパス規模は高頻度語の選定に大きな影響を与えるのである。

4.4. 総括

4.4.1. 高頻度語の選定における 100 万語コーパスの有用性

これまで、高頻度語の選定の観点から、100 万語規模のコーパスの有用性について具体的には論じられてこなかった (4.1.)。そこで、4 章では、コーパスの総語数が高頻度語の選定にどの程度影響を与えるのかを分析・考察した。その確認方法として RNC-M と同じテキストのサンプリング比率をもつ 100 万語のコーパスを 5 つ作成した (4.2.)。この自作 100 万語コーパスと RNC-M の大きな違いはコーパスの規模、すなわち、総語数である。RNC-M の規模は 9,200 万語であるの

に対し、自作コーパスのそれは 100 万語である。Kilgariff (1996)の分析が示すように、コーパスを構成するテキストのジャンル比率が同じで、かつ、規模が大きいと、2 つのコーパス間において高頻度語の重複数は高くなる (4.3.1./ 表 34 参照)。一方、本章はテキストのジャンル比率が同じではあるが、規模が異なるコーパスを比較した。総語数 9,200 万語の RNC-M は信頼性の高い頻度データを安定して提示するが、この分析の目的は C_1~C_5 がどこまで比較対象である RNC-M と語彙的な類似度を有しているのかを確認することにあった。

比較の結果、RNC-M と C_1~C_5 における高頻度語の重複数は上位 1,500 語までは安定しているということがわかった (4.3.2./ 表 35, 表 38~表 41 参照)。具体的には、RNC-M の高頻度 1 位~1,500 位の 1,500 語は、そのほとんどが C_1~C_5 の高頻度 3,000 位の中に含まれている。だが、それ以降になると範囲外語の数が急激に増えていく。したがって、本章の分析から、ロシア語の 100 万語のコーパスを用いて高頻度語を抽出する場合、高頻度順に 1,500 語までは安定した結果が得られる、ということがわかった。

本章の研究設問(30)に答えると、100 万語規模のコーパスからは、高頻度 1,500 語までしか安定した頻度データは得られない。そのため、100 万語のコーパスから抽出した高頻度 5,000 語までの頻度データの信頼性は低いと言える。

4.4.2. 本稿 5 章~7 章で用いるコーパスの選定

4.3.の分析結果を受けて、後述の 5 章~7 章で用いるロシア語のコーパスについて検討する。本章の冒頭で述べたように、後述の分析は高頻度 5,000 語を対象としている。そのため、100 万語コーパスが提示する頻度情報ではこの分析には対応しきれない。より大きな総語数を有するコーパスが求められる。したがって、Штейнфельд (1963), Засорина (ред.) (1977), Лёнгрен (1993), Brown (1996)が提示する頻度情報は、本稿の分析に用いることはできない。

コーパス規模の観点のみから判断すると、選択肢としては書き言葉均衡コーパスである RNC-M (Ляшевская, Шаров 2009)か、書き言葉に類似の特徴を示す Sharoff et al. 2013 (2013)の Internet Corpus, そして圧倒的な総語数を誇る ruTenTen11 のどれかを選ばなければいけない、ということになる。Sharoff et al. (2013)の Internet Corpus と ruTenTen11 はテキストを web から自動で収集しているため、テキストジャンルの比率などの情報が不明であり、現代ロシア語を代表しているとは言えない。また、これらのコーパスは内部構造が不透明であるため再現性がなく、4 章のような比較研究が実施できない。くわえて、これらのコーパスに含まれるテキストは、日本語環境にいる日本人ロシア語学習者が触れる一般的なロシア語を反映しているとも言いづらい。

このような理由や今後の発展研究を見据えて、後述の分析には RNC-M (Ляшевская, Шаров

2009)の頻度データを採用する。McCarthy, Carter (2001)が述べているように、あらゆる研究に適用可能なコーパスサイズを決めることは不可能であるが、本章の結果から、高頻度 5,000 語の分析には総語数が 9,200 万語で、かつ、内部構造が明らかで、書き言葉の現代ロシア語を代表するように設計された RNC-M が最適であると考ええる。

5 章. 派生接辞学習による語彙力増加の数量的確認

2 章では、語を数える際の 4 つの単位（トークン、タイプ、レマ、WF）に言及し、テキストがどのように計量されるのかを確認した。続く 3 章において、主にコーパス規模とテキストサンプリングの観点から、これまでに作成されたロシア語コーパスとそれに基づく頻度辞書に言及した。4 章では、それらの中からどのコーパス（もしくは頻度辞書）が本稿の分析に適しているのかを議論した。結果、本稿が対象とする高頻度 5,000 語の分析には 100 万語規模のコーパスでは不十分であり、テキストジャンルのバランスと規模の点で優れる RNC-M の頻度データ (Ляшевская, Шаров 2009) を用いるという結論に至った。ここまでの前提を踏まえ、5 章から 7 章にかけて本稿全体の研究設問の分析・考察を行う。

5 章から 7 章に共通する分析の目的は、派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法の検討である。まず、5 章では(31)の研究設問に取り組む。

(31) 5 章の研究設問

- a. 派生接辞の学習は語彙力増加に効果的か否かを言語学的に確認する。
- b. 効果的であるとすれば、派生接辞の知識は語彙力増加にどの程度寄与するのかを数量的に確認する。

以下の手順でこの研究設問にアプローチする：5.1.において、まず研究設問 a. と b. の前提となる派生接辞学習の必要性を確認する。具体的には、RNC-M などの高頻度語や TORFL の語彙リストによるテキストカバー率が低いことを示し、ロシア語学習者の大半が語彙力不足の問題を抱えている状況を把握する（分析の結果、ロシア語の高頻度語によるテキストカバー率は、英語のそれよりも大幅に低いことがわかった）。そして、続く 5.2. では、ロシア語のテキストカバー率の低さの理由を言語学的に考察する（研究設問 a.）。本章では、このカバー率の差は英露の概念・語彙素の増やし方の違いに起因すると考えた。英語は新しく語を形成するのではなく、既存の語を用いた語連続という分析的な形で概念・語彙素を増やし得る（*go in* 「入る」, *go out* 「出る」）。ロシア語は、同様のことを実現するのに派生という統合的な手段を用いる（*ходить/hodit'* 「進む」 + *в-/вн-, вы-/вы-* → *входить/vhodit'* 「入る」, *выходить/vyhodit'* 「出る」）。そのため、概念・語彙素の形成に伴って、ロシア語における派生語の数は増えていく。ロシア語のこの言語的特徴は、派生接辞の学習が語彙力増加に役立つことを示唆している。そこで、5.3. では、派生接辞の知識が実際にどれだけ語彙力を伸ばし得るのかを数量的に確認する。その方法としてレマ単位の頻度データ

(Ляшевская, Шаров 2009)を WF 単位で数え直し, どの程度カバー率が上昇するのかを確かめる(研究設問 b.). 仮に, WF 単位で語を捉えて大幅にカバー率が上昇すれば, それはロシア語の派生接辞の学習が, 語彙力増加に有効であることを意味する. 最後に, 5.4.にて 5 章の総括を行う.

5.1. ロシア語の語彙によるテキストカバー率

テキストカバー率は, 学習者が十分な理解を伴ったリーディングを行うには, テキスト内の語彙の何%を知っている必要があるのか, 何語の知識が求められるのか, といった問題を論じる際の指標として用いられる. 「リーディングの内容理解は語彙の知識と強く関係しており, その関係はリーディングの他の要素よりも強い」(Laufer 1997: 20)ためである. 5.1.では先行研究を概観しながら, 可読性 (readability) などの研究分野におけるテキストカバー率の観点から, ロシア語学習者の目指すべき語彙サイズを考察する.

Laufer (1989)は読書後に実施した理解力テストを通じて, リーディングに際して十分な理解度を得るには, 既知語の割合はテキスト全体の 95%以上でなければならないと結論づけた. 例えば, この 95%をテキスト内の語数に還元すると, 未知の語が 20 語に 1 語という割合を表す. 他の研究も同様に, リーディングに際して内容を理解するには 95%以上のカバー率が必要であるとしている (e.g. Hirsh, Nation 1992; Carver 1994; Hu, Nation 2000; Nation 2001; 小森他 2004).

他にも, 辞書や教師の助けがあり, テキストのトピックに明るいという条件下では, 既知語の割合が 75~80%でも内容の理解は可能である (De Bot et al. 2005: 59-60)とする経験則的な意見もある. 以下に, テキストの 80%の語彙が既知語である場合の例を示す.

- (32) a. xxxxx hush fell over the xxxxx in the Stathakion Center in xxxxx, Queens, on Friday evening. xxxxx 200 Greek-Americans there xxxxx and bowed their heads. xxxxx Mrs. Halo finished, they appeared. (De Bot et al. 2005: 60)
- b. Вся моя жизнь состояла xxxxx из позора. Да я, xxxxx, так и не смог xxxxx, что это такое – xxxxx жизнь... Я xxxxx в деревне на северо-востоке страны. xxxxx увидел впервые уже xxxxx. (『人間失格』¹³⁸より引用)

上記の例は全体の約 20%が未知語 (下線部の xxxxx¹³⁹) で構成されている. 仮に xxxxx 以外のす

¹³⁸ 『人間失格』, 1948 年, 太宰治作: «Исповедь “неполноценного” человека» の電子版を Lib.Ru から引用.

¹³⁹ 例文に含まれる下線部 xxxxx は, 学習者にとって未知の語を表している. なお, b.のロシア語の例に関しては, 太宰治作『人間失格』のロシア語訳の文を引用し, テキストカバー率が 80%になるように著者が加工した.

すべての語が既知であっても、a.と b.の全体の意味は非常に不透明である。いくら辞書や他人の助けがあったとしても、この段階の学習者はまだ語彙力不足の状態にあると言えよう。

Hu, Nation (2000)は、物語の内容理解度とテキストカバー率の関係を調査した研究である：この研究では、80%の語彙が既知語の状態の被験者に対して、内容理解に関する選択問題と手がかり再生問題を課したところ、十分な理解度を得られた者はいなかった。結論として、十分な理解を伴うリーディングには、約98%の語彙が既知語でなければならないとしている¹⁴⁰。この98%というカバー率をテキスト内の語数に還元すると、50語のうち約1語が未知という割合を表す。

Nation (2006)はこの数値がWF単位でどれくらいの語数になるのかを調査した。結果、カバー率が98%に到達するには、書き言葉のテキストで8,000～9,000WF、話し言葉のテキストで6,000～7,000WFが必要であるとしている。

上記研究は英語を分析対象としている。では、実際に上述の75～80%や95～98%というカバー率をロシア語で実現するには、どれほどの語数を要するのであろうか。まず、英語のBrown Corpus, BNC, そしてロシア語のRNC-M, Internet Corpusにおいて、高頻度語がどれだけのテキストカバー率を実現するのかを確認する。

表 45. 英露のコーパスにおける高頻度語のテキストカバー率（レマ単位）

語数	英語 ¹⁴¹		ロシア語 ¹⁴²	
	Brown Corpus	BNC	RNC-M	Internet Corpus
1,000	72.0%	70.8%	60.9%	58.3%
2,000	79.7%	77.5%	69.4%	66.0%
3,000	84.0%	80.9%	74.1%	70.2%
4,000	86.7%	83.0%	77.2%	72.6%
5,000	88.6%	84.3%	79.5%	73.8%

1,000語から5,000語までの高頻度域すべてを通して、ロシア語は英語よりもテキストカバー率が低い。例えば、英語の高頻度2,000語はコーパス内でおおよそ8割のカバー率を実現するが、ロシア語のそれは7割未満にとどまる。ロシア語で80%のカバー率に到達するには5,000語以上が必

¹⁴⁰ 2.3.4.1.で言及したが、Hu, Nation (2000)は他のテキストカバー率による内容理解度も提示している：

a. 90%: ごく一部の被験者しか作品の内容を理解できなかった。
b. 95%: 一部の被験者が作品の内容を理解できた。

¹⁴¹ 1章で言及したが、Brown Corpusの高頻度語によるカバー率はNation (2001)より引用した。BNCにおける高頻度語のカバー率は、Adam Kilgariffが公開している頻度リストを元に著者が計算した（参考URL: <https://www.kilgariff.co.uk/>）。

¹⁴² RNC-Mにおける高頻度語のカバー率はЛяшевская, Шаров (2009: 1063-1064)に基づく。Internet Corpusの高頻度語によるカバー率は、Sharoff et al. (2013)が提示している頻度リストを元に著者が計算した。

要である。また、表には記載しきれていないが、本節の冒頭で言及した 95% のテキストカバー率を RNC-M において実現するには、レマ単位で 50,000 語以上が求められる (cf. Ляшевская, Шаров 2009: 1064)。このように、英語と同じテキストカバー率に比肩するのに、ロシア語はより多くの語数を要する。議論を単純化すると、この結果は、ロシア語学習者は言語活動に際してより多くの語を覚えなければならないことを意味する。

次に、TORFL の学習用語彙リストがロシア語コーパスにおいてどの程度のテキストカバー率を実現するのかを確認する。ロシア語教育において TORFL の影響力は大きい。多くの教材がこの学習用語彙リストを参考にしているだけでなく (e.g. Варламов и др. 2005; Жукова 2005; Бондарь, Лутин 2006; Беляева, Луцкая 2008; 沼野他 2012; Богомолов 2012; Головки 2015), 大阪大学では TORFL はカリキュラムに正規導入されている (cf. 林田 2016)。そのため、TORFL の学習用語彙リストがどれだけ有用なのかを、カバー率を通して確認する意義は大きい。

CEFR (Council of Europe 2001) では学習目標が詳細に規定されており、その内容は、外国語学習者が日常生活においてコミュニケーション行動ができることを目的に作成されている。そのため、CEFR を元に作られた TORFL の語彙リストは、頻度だけを重視したリストと性質が異なる。つまり、TORFL の語彙リストは、RNC-M の頻度リストと語彙のラインナップが異なっているのである。このリストに含まれる語彙の選定基準は、頻度以外に 4 つある。

(33) (再掲) TORFL の学習用語彙リストにおける語彙選定の基準 (Андрюшина (ред.) 2014: 5)

- a. 文体的に無標であること b. 語結合に加わることのできる能力
- c. 意味的な価値 (頻繁に出会うものや現象を表すことのできる能力)
- d. 語形成の能力 e. 頻度

教育を軸に据えるのであれば、この 5 つの基準はどれも重要である¹⁴³。

では、TORFL-1 級 (Андрюшина (ред.) 2014) と 2 級 (Андрюшина (ред.) 2015) の語彙リストはコーパスにおいてどれだけのカバー率を実現できるのであろうか。TORFL-1 級 (CEFR の B1 に相当) の到達基準は、日常生活や社会的・文化的場面でコミュニケーションがとられることであり、このレベルの試験の合格者はロシア語学習を続けることを条件にロシアの大学への入学が認められる¹⁴⁴。TORFL-1 級が設定する習得語彙数は約 2,300 語である。TORFL-2 級 (CEFR の B2 に相

¹⁴³ a.~d. の基準を何に求めたのかといった具体的な記述はない。なお、e. の頻度に関しては、いくつかの頻度辞書を参考にしているという記述はあるが、具体的にどの辞書であるかの説明はない。

¹⁴⁴ JCA 日本対外文化協会のサイト「ロシア語検定レベル判定基準」を参照した (後述の 2 級の説明に関しても同様である) : 参考 URL: <http://taibunkyo.jp/staticpages/index.php/exam-level>

当)の到達基準は、あらゆる面で非常に高度なコミュニケーション能力を有していることであり、ロシアの大学で学士、修士、博士候補の資格を取得するには 2 級に合格しなければならない。TORFL-2 級が設定する習得語彙数は約 5,000 語である。

以下に、RNC-M における両語彙リストのテキストカバー率を挙げる。

表 46. RNC-M における TORFL-1 級・2 級の語彙リストのテキストカバー率（レマ単位）¹⁴⁵

RNC-M	TORFL-1（約 2,300 語）	TORFL-2（約 5,000 語）
テキストカバー率	63.5%	73.0%

表が示すように、TORFL-1 級と 2 級の語彙リストは、それぞれ RNC-M のテキストの 63.5%、73.0% をカバーする。これらのリストは頻度以外の基準も含めて語彙を選んでいるため、純粋に頻度だけで選定された高頻度語のリストに比べてカバー率が低いのは当然である。ただ、可読性などの研究が示すように、80%に満たないこのカバー率では理解の伴ったリーディングは実現されないし、辞書を用いた読書にも困難がつきまとう。日本のロシア語教材が広く TORFL の語彙リストを採用している状況を考慮すると、多くのロシア語学習者の語彙力は不足していると言えよう。

5.2. 概念・語彙素の形成における英露の分析的・統合的な度合い

ここでは、なぜロシア語は英語よりも特定語数によるテキストカバー率が大幅に低いのかを考察する。当然、英語とロシア語は異なる言語体系を有しているので、特定語数によるカバー率に差が生じていても言語学的に何らおかしくはない。

表 45 の結果から推測するに、（ロシア語側から見て）英語は少ない語数で多くの概念・語彙素を表現しているのに対し、ロシア語は同様のことを実現するのによりたくさんの語数を必要とするようである。本章では、その原因は概念・語彙素の形成における英露の分析的・統合的な度合いの違いにあると考えた。

統合型言語は語を作りあげる上で形態論を豊富に使うという特徴がある（リンゼイ 2006: 134）。ロシア語は接辞の付加によって派生語を生産的に形成していくため、語形成において統合的な手法を用いる傾向の強い言語である。一方、この点において英語は、ロシア語と比べると分析的な

¹⁴⁵ TORFL-1 級と 2 級の語彙リストは、多くの場合、異形態を記載していない（例：чтобы/čtoby「するために」はあるが、異形態 что/čto の記載ない）。本章では、表 46 のカバー率の計算に際して異形態の頻度もカバー率に含めている。また、両語彙リストには複数の語から成る句が記載されているが、本章は基本的に、これをそれぞれの語に分けて捉えている（例：nomomy čto/potomu čto「なぜなら」は、nomomy/potomu と čto/čto に分けて頻度を計算し、それをカバー率に含めている）。カバー率の計算に際してこのような作業を独自に行っているため、数え方の解釈の違いで数値は若干上下するであろう。

度合いの強い言語である。もともと「古英語は、本来、同じゲルマン系言語のドイツ語と同様に、豊かな屈折体系を備えた統合的¹⁴⁶タイプの言語であった。ところが、中期英語を経る間に、それらの屈折変化がどんどん消失してしまい、最終的に屈折変化の極めて乏しいタイプの言語になってしまった。したがって、従来は名詞の屈折変化によって示されていた文法関係が前置詞に依存して表示されるようになったり、動詞の活用変化で表されていたことが助動詞を使って表示されるようになったのである。<...> 歴史的発達過程で、統合的タイプの言語から分析的タイプの言語へ」(馬場 1998: 29-30) 英語は変化していった。分析型言語の特色として語順が厳密に決まっていることも挙げられるが(リンゼイ 2006: 134)、英語はこの点も当てはまる。そして、英語は概念・語彙素の形成に際しても(ロシア語と比較すると)、分析的な度合いが強い言語であると考えられる。以下に、本章の仮説をまとめる。

(34) 英露におけるテキストカバー率の差の原因

英語は概念・語彙素の数を増やす手段として、語連続という分析的な手法を生産的に用いることができる。つまり、既存の語の連なりで新しい概念・語彙素を形成していくため、少ない語数で高いテキストカバー率が実現される。一方、ロシア語はそれらの数を拡張する手段として、派生という統合的な手法に依存する。概念・語彙素の形成に際してその都度新しく派生語を作っていくため、ロシア語は1,000語、2,000語といった特定語数によるテキストカバー率が低くでてしまう。

(34)の具体例を以下に挙げる。

表 47. (再掲) 概念・語彙素の増え方のイメージ: 英露の「読む」を例に(下線部は派生接辞)

概念・語彙素の例	英語	ロシア語
読む	read	читать
1) 読んでしまう	have read	<u>пр</u> читать
2) 読まれる	be read	чит <u>а</u> ться
3) 読み返す / たくさん読む	read over / read a number of	<u>пер</u> читать / <u>на</u> читать
概念・語彙素の表し方	語連続(分析的な形)	派生(統合的な形)

表からは、英語では分析的な形で表現されている概念・語彙素¹⁴⁷が、ロシア語では統合的な形で

¹⁴⁶ 原文は「総合的」と書かれているが、用語を揃えるために統合的とした。

¹⁴⁷ 本稿では、「読んでしまう」、「読まれる」、「読み返す / たくさん読む」といった項目を捉える単位として概念・語彙素という用語を便宜的に使用している。英語の *have read* と *be read* は、それぞれ語連続で完了体と受動態の概念を表現している。通常、これらの例において新しい語彙素が形成されたとは考え

実現していることがわかる。この概念・語彙素の形成法の違いが、英露間のテキストカバー率に差を生み出していると考えられる。本章ではこの傾向が強く出ていると推測される項目として、動詞の体 (5.2.1.)、受動態 (5.2.2)、句動詞/動詞句 (5.2.3.) を取り上げる。

なお、体、受動態、句動詞/動詞句はすべて動詞に関わる項目である。後述の 6 章の分析からわかることであるが、ロシア語の高頻度語の中に含まれる派生接辞は、その大半が動詞に付加されるものである。例えば、RNC-M の高頻度 5,000 語内に含まれる接頭辞を生起頻度の高さの観点から抽出すると、上位 25 のうち 19 が動詞接頭辞である (詳細は 6.3.1 参照)。したがって、動詞接頭辞はカバー率に大きな影響を与えており、動詞の派生は分析対象としての優先度が高い。

また、派生接辞の付いた他の品詞の語も、元は動詞から派生したものである場合が多い。

(35) 動詞接頭辞の付いた名詞 (выбор 「選択」 を例に) ¹⁴⁸

a. брать	→	b. выбрать	→	c. выбор
brat'		vybrat'		vybor
take-V.		select-V.		selection-N.
「取る」		「選ぶ」		「選択」

例えば、c. *выбор/vybor* 「選択」は、a. *брать/brat'* 「取る」に接頭辞 *вы/vy-* が付いた b. *выбрать/vybrat'* 「選ぶ」から派生した名詞であり、*выбор/vybor* 内の *вы/vy-* は、名詞ではなく、動詞に付加された接頭辞である。高頻度語の中には、この派生の流れで形成された名詞が数多く含まれている。

以下で、動詞の体、受動態、句動詞/動詞句といった項目に対象を絞り、これらを掘り下げて分析・考察する。

5.2.1. 英露における体の表現方法

英語には体系的な完了体・不完了体の対立が存在しないため、動詞単体ではなく迂言的に体の概念が表される (cf. Comrie 1976)。例えば、「完了相 (体) ¹⁴⁹は『have + 過去分詞』で表

ない (cf. Lyons 1968; Bauer 1988)。ここでは、完了体と受動態の概念が語連続という分析的な形により表現されている。一方、英語の句動詞は語連続で新しい語彙素を形成している (なお、英語の動詞句もロシア語では派生語として現れる場合があり、ロシア語の観点からすると、新しい語彙素が生じていると言える)。

そして、これらの英語の例は、表が示す通りロシア語では派生語として現れる。厳密には、英語は語連続で概念 (完了体と受動態)・語彙素 (句動詞) の数を増やしているのに対し、ロシア語は派生により語彙素を増やしていく、と言える。

¹⁴⁸ 本稿は、派生の順番に関して Тихонов (1985) の記述に従う。

¹⁴⁹ () 内は著者が追加した。なお、1 章で言及した通り、本稿はロシア語学の伝統に従って aspect に対して「体」という用語を用いる。

わし、進行相（体）は『be +現在分詞』で表わすが、現在・過去の時制変化と合わせることによって、様々な意味を表現し分けることが可能になっている」（馬場 1998: 32）。一方、ロシア語は体の対立が文法カテゴリーとして体系化されており、すべての動詞は体のカテゴリーに属している（cf. АН СССР 1980; Зализняк, Шмелёв 2000）。基本的にロシア語の完了体・不完了体は形態的な対立で表現される。

- | | |
|---|--|
| <p>(36) a. Я <u>пил</u> молоко.
 Â pil moloko.
 I drink-IPFV.PST. milk
 b. I <u>was drinking</u> milk.
 「私は牛乳を飲んでいた。」</p> | <p>(37) a. Я <u>выпил</u> молоко.
 Â vypil moloko.
 I drink-PFV.PST. milk
 b. I <u>have drunk</u> the milk.
 「私は牛乳を飲みほした。」</p> |
|---|--|
- (Wade 2011: 269)

ロシア語には「飲む」という語彙的な意味に対して、(36) a. の *пил/pil* (< *пить/pit'*) と (37) a. の *выпил/vypil* (< *выпить/vypit'*) といった2つの語が対応しており、前者が不完了体、後者が完了体動詞である。完了体 *выпить/vypit'* は、不完了体 *пить/pit'* に接頭辞 *вы-/vy-* が付いた派生動詞である。一方、英語の(36) b. では *be* 動詞+現在分詞、(37) b. では *have*+過去分詞という分析的な形で同じ内容が表されている。つまり、ロシア語は体の対立を形態的に実現しており、2語 (*пить/pit'* – *выпить/vypit'*) で完了体・不完了体の概念を表している。それに対して、英語は1つの語 (*drink*) と他の超高頻度語 (*be* と *have*) を用いて同じ内容を表現している。

以下に、同様の英露の対応例をいくつか挙げる。

- (38) a. Он долго уговаривал меня, но не уговорил.
 On dolgo ugovarival menâ, no ne ugovoril.
 he long-ADV. persuade-IPFV.PST. me but not persuade-PFV.PST.
 b. He spent a long time trying to persuade me, but didn't actually persuade me.
 「彼は長いこと僕を説得しようとしていたが、説得できなかった。」
- (Comrie 1976: 19)¹⁵⁰

a. の不完了体 *уговаривал/ugovarival* (< *уговаривать/ugovarivat'*) は、b. において (*spent*)...*trying to persuade*, また、a. の完了体 *уговорил/ugovoril* (< *уговорить/ugovorit'*) は、b. において (*actually*) *persuade*

¹⁵⁰ Comrie (1976: 19)によれば、「完了体の形式は、不完了体の形式と明確に対比される場合、しばしば場面の完成 (completion) を示す」が、(38)の例はこれに当たる。

となって現れている。つまり、英語は *persuade* と他の語の組み合わせで、つまり、分析的な形で完了体・不完了の対立を表現しているが、それに対してロシア語は *уговорить/ugovorit'* と *уговаривать/ugovarivat'* という 2 つの語を用いている。なお、語形成の流れとしては、完了体 *уговорить* の接尾辞 *-u/-i-* を *-ива-/-iva-* に交替することで不完了体 *уговаривать/ugovarivat'* が形成される (cf. Тихонов 1985)。

- (39) a 1) Анна Сергеевна забыла о нём.
 Anna Sergeevna zabyła o něm.
 Anna-NAME. Sergeyevna-NAME. forget-PFV.PST. about him

2) Anna Sergeyevna had forgotten him.

「アンナ・セルゲエヴナは彼のことを忘れてしまった。」

- b 1) <...> когда забываем о высших целях бытия, о
 kogda zabybaem o vyšših celâh bytiâ, o
 when-CONJN. forget-IPFV.1.PL.PRS. about supreme aim existence about
 своём человеческом достоинстве.
 svoëm čelovečeskom dostoinstve.
 our human dignity

2) <...> when we forget our human dignity and the higher aims of our existence.

「(私たちが) 私たち人間の尊厳、存在の高尚な目的について忘れるとき<...>」

(『犬を連れた奥さん』より引用)

a の 1) の完了体 *забыла/zabyła* (< *забыть/zabyt'*) は a の 2) において *had forgotten* として、また、b の 1) の不完了体 *забываем/zabybaem* (< *забывать/zabyvat'*) は b の 2) で *forget* として現れている。英語は語連続を用いて分析的に完了・不完了の対立を表しているのに対し、ロシア語は接尾辞 *-ва-/-va-* を用いて *забыть/zabyt'* から *забывать/zabyvat'* を派生し、体の対立を統合的な手法で表している。

- (40) a 1) Он вошёл в дом, поднялся по лестнице, открыл дверь,
 On vošel v dom, podnâlsâ po lestnice, otkryl dver',
 he enter-PFV.PST. in house climb-PFV.PST. on stairs open-PFV.PST. door
поставил чемодан <...>.
 postavil čemodan <...>.
 put_down-PFV.PST. suitcase

- 2) He went in the house, climbed the stairs, opened the door, put down the suitcase <...>.

「彼は家に入って、階段を上がり、ドアを開け、トランクを置き <...>」

- b 1) Он входил в дом, поднимался по лестнице, открывал дверь,
On vkhodil v dom podnimalsâ po lestnice otkryval dver'
he enter-IPFV.PST. into house climb-IPFV.PST. on stairs open-IPFV.PST. door
ставил чемодан <...>.
stavil čemodan <...>.
put_down-IPFV.PST. suitcase

- 2) He would come into the house, climb the stairs, open the door, put down the suitcase <...>.

「彼は（習慣的に）家に入って、階段を上がり、ドアを開け、トランクを置き...」

(Timberlake 2011: 409-410)¹⁵¹

(40)の例においても同様に、ロシア語の完了体と不完了体の対立は、基本的には統合的な手法で表現されている。例えば、「置く」を意味する b の 1)の不完了体 *ставил/stavil* (< *ставить/stavit'*) は、a の 1)の完了体の例では *поставил/postavil* (< *поставить/postavit'*) となっている。*поставить/postavit'*は、*ставить/stavit'*に接頭辞 *no-/po-*を付加して形成された派生動詞である。つまり、ロシア語では、2 語によって完了体・不完了体の対立が表されている。一方、英語の a の 2)と b の 2)の例では、完了体・不完了体の対立が *would* の有無によって表現されている（ここでは、*would* +動詞の原形で過去の反復行動が表されている）。

Ремчукова (2004: 66)によると、ロシア語の動詞は全体の 75%が、*ставить/stavit'* – *поставить/postavit'*, *уговаривать/ugovarivat'* – *уговорить/ugovorit'*のように、完了体・不完了体のペアを成して存在しているという。そのため、ロシア語は体の使い分けに際して、必要となる動詞の数が膨らんでいく。この言語的特性は、1,000 語、2,000 語といった特定語数によるカバー率を低くする一因であると推測される。

5.2.2. 英露における受動態の表現方法

英語は、基本的に受動態を *be* 動詞+過去分詞形によって表現する¹⁵²。分析的・統合的という用語を用いるなら、英語の受動態は「ドイツ語やフランス語などと同様に、動詞の活用変化という

¹⁵¹ Timberlake (2011: 409)によると、「ある不完了体動詞が、出来事が反復される文脈において完了体動詞の代わりに用いられるのであれば、その完了体動詞のパートナーであると見なされる」が、(40)の対応例はこれに当たる。

¹⁵² 英語の受動態は、*be* 動詞+過去分詞形の他に、*get*+過去分詞形でも表現されるが、両者は用法の点でかなり重複している (Stubbs 2001: 211-212)。ただ、後者はその使用に制限（公的な英語では避けられる、動作主に生物がとれない）がある (Quirk et al. 1972: 802)。ここでは、ニュートラルな *be* 動詞+過去分詞形を分析対象とする。

統合的な形ではなく、be 動詞＋動詞の過去分詞(+by 名詞句)という分析的な形で表現される」(二枝 2009: 106). 一方、ロシア語は統合的に受動態を表し得る言語である。ロシア語における態は体の文法カテゴリーと密接な関係にあり、不完了体に関していうと、後接辞¹⁵³-ся/-sâ の付いた再帰動詞によってその受動態は表現される (AH CCCP 1980: 616) ¹⁵⁴.

- (41) a. Дом будет краситься каждый год.
Dom budet krasit'sâ každyj god.
house-NOM. will be_painted-IPFV.PASS.INF. every year
- b. The house will be painted every year.
- 「家はこれから毎年塗装される。」 (Borras, Christian 1971: 165)

- (42) a. Согласно статистике, ежегодно публикуется несколько
 Soglasno statistike, ežegodno publikuetsâ neskol'ko
 according_to statistics every_year-ADV. be_published-IPFV.PASS.PRS. some
 сот сообщений о пропавших без вести.
 sot soobšenij o propavših bez vesti.
 hundred report about missing_person without news
- b. According to the statistics, several hundred disappearances are reported every year.
 「統計によると、毎年、何百もの失踪届けが報告されている。」
 (『砂の女』¹⁵⁵より引用)

¹⁵³ 2章で言及したが、-ся/-sâを含む постфикс の訳は、木二会会員共訳(1998: 81)に倣って「後接辞」とする。

публиковать/publikovat'「報告する」に後接辞-ся/-sâ が付いた派生動詞である。

- (43) a. <...> такие рассказы в большинстве сочиняются людьми, которые <...>
 <...> takie rassказы v bol'sinstve sočinâutsâ lûd'mi, kotorye <...>
 such-PRN.NOM. story-N.NOM. in majority be_made_up-IPFV.PASS.PRS. people-INS. who
 b. <...> such stories were for the most part made up by persons, who...
 「その種の話はたいていが, <...>といった人々の手によって作られるものである。」
 (『犬を連れた奥さん』より引用)

「作られる」は, a.では *сочиняются/sočinâutsâ* (< *сочиняться/sočinât'sâ*), b.では *were...made up* によって表現されている。再帰動詞 *сочиняться/sočinât'sâ* は, *сочинять/sočinât'*「作る」に後接辞-ся/-sâ が付いた派生動詞である。

総括すると, 英語は *be* 動詞+過去分詞という分析的な形によって, 新しく語を形成せずに受動態を表現し得る。一方, ロシア語はその役割を派生が担っている。その結果, ロシア語における派生動詞の数は増え, 特定語数によるテキストカバー率が低くなったと推測される。

5.2.3. 英語の句動詞/動詞句とロシア語の接頭辞付き派生動詞の対応

ドイツ語の *essen*「食べる」と, これに接頭辞が付加された *aufessen*「食べ尽くす」の英訳は, それぞれ *eat* と *eat up* が対応するが (cf. Comrie 1976: 46), このような対応例 (複合的な動作を英語では句動詞, ドイツ語では派生語で表す) は英露間にも頻繁に見受けられる。

英語は基本的な動作の多様化を図る際に, 動詞と不変化詞の組み合わせである句動詞¹⁵⁶が用いられ得る。 *go in*「入る」, *go out*「出る」, *go across*「渡る」といった句動詞を例にとると, 動詞 *go*「行く」に *in, out, across* といった不変化詞が加わることで新しい語彙素が形成されている。一方, ロシア語は, 接頭辞の付加によって動詞の表す動作の多様化を図る。例えば, 動詞 *идти/idti*「進む」に接頭辞が付加されると, *войти/voiti*「入る」, *выйти/vyiti*「出る」, *перейти/pereiti*「渡る」¹⁵⁷といった, 新しい語彙素の派生動詞が形成される。

以下で, Oxford Russian Dictionary (Wheeler et al. (eds.) 2007)における *идти/idti* の接頭辞付き派生動詞とその英訳を比較する。

¹⁵⁶ 句動詞には, 構成要素からその意味を推測できない慣用的なものと, 推測の可能な自由表現的なものがあるが (嶋田 1985: 3; 亀井他(編) 2001: 310), 前者しか句動詞として認めない姿勢もある。本稿では, 句動詞の定義の議論には深入りせず, 両方とも句動詞として扱う。

¹⁵⁷ *идти/idti* は接頭辞が付くと形態が *-ïmul/-jti* に変化する。ここでは, *идти/idti* に接頭辞 *в-/в-* (*во-/vo-*は異形態), *вы-/vy-*, *пере-/pere-*が付加されている。

表 48. *uđmu/ıdı* 「進む」の接頭辞付き派生動詞とその英訳

接頭辞（括弧内は異形態）	接頭辞付き派生動詞	意味	対応する英訳
в- (во-)	войти	入る	enter / go in
вы-	выйти	出る	go out / come out
за-	зайти	寄る	look in / drop in
о- (об-, обо-)	обойти	回る	go round
от- (ото-)	отойти	離れる	move away / move off
пере-	перейти	渡る	cross / get across
под- (подо-)	подойти	近寄る	approach / come up
при-	прийти	来る, 着く	come / arrive
про-	пройти	通る	pass / go through
с- (со-)	сойти	下りる	go down / come down
у-	уйти	去る	go away / go off

表右端の列が示す通り, ロシア語の接頭辞付き派生動詞は, 英語では句動詞として実現している場合が多い. なお, *uđmu/ıdı* のような極めて高頻度に生起する基本動詞以外に関しても, 上述のような英露の対応は頻繁に起こり得る.

表 49. ロシア語の接頭辞付き派生動詞とその英訳 (*крытуть/krutit'* 「回す」, *лезть/lezt'* 「這う」, *скользнуть/skol'znut'* 「滑る」を例に)¹⁵⁸

接頭辞（括弧内は異形態）	接頭辞付き派生動詞	意味	対応する英訳
на-	накрутить	巻きつける	twist onto
при-	прикрутить	締めつける	tie up
вы-	выкрутить	絞り出す	wring out
с- (со-)	слезть	這い下りる	climb down
у-	ускользнуть	滑り去る	slide away

ただし, 表 48 と表 49 は, 実際のテキスト内で確認された接頭辞付き派生動詞と句動詞の対応例ではなく, あくまで辞書レベルにおける対応を示しているにすぎない. そこで, 次に上述の対応例を実際のテキスト (小説の英露版) で確認する.

- (44) a. Почему?.. Почему вы уходите, так ничего и не сказав?!
- Počemu?.. Počemu vy uhodite, tak ničego i ne skazav?!
- why why you go_off-IPFV.PRS. so nothing even not say-PFV.PTCP.
- b. Why? Why do you go off like that without saying a word?

¹⁵⁸ 表は, Timberlake (2011: 403-405)の記述を著者がまとめたものである.

「どうして？どうしてあなたは何も言わずに去ろうとするの!？」

(『砂の女』より引用)

a. のロシア語では「去る」という意味が, *ходить/hodit'*¹⁵⁹ 「進む」に接頭辞 *y-/u-* の付いた派生動詞 *уходить/uhodit'* によって, つまり統合的な形で表されている. 一方, b. の英語では, 「去る」は *go off* という分析的な形によって表現されている.

- (45) a. Это хорошо, что я уезжаю, — говорила она Гурову.
Èto horošo, čto â uezzaû, — govorila ona Gurovu.
it good that-CONJN. I leave-IPFV.PRS. say-IPFV.3.SG.PST. she Gurov-NAME.DAT.

b. "It's a good thing I am going away," she said to Gurov.

「私が行ってしまうのはいいことだわ」と彼女はグーロフに言った.

(『犬を連れた奥さん』)

a. のロシア語では, 「出発する」が *ехать/ehat'* 「(乗り物で) 進む」に接頭辞 *y-/u-* と接尾辞 *-a/-a-* が付いた派生動詞 *уезжать/uezžat'* によって表現されている. 一方, b. の英語では, それが *go* と *away* の語連続によって表されている.

なお, 5.2.1., 5.2.2., 5.2.3. では, 英露の対応例をいくつかの異なる出典から引用した. だが, 1 つの作品に範囲を絞っても上記 3 つの分析項目は確認される. 例えば, 『アンナ・カレーニナ』において *делать/delat'* 「する, 行う」と *do* に関する完了体, 受動態, 句動詞/動詞句の現れ方を確認すると, ロシア語は統合的, 英語は分析的な形でそれらに対応している.

(46) 完了体の対応例

- a. <...> он сделал что-то нехорошее.
on sdelał čto-to nehoroshee.
he do-PFV.PST. something bad

b. <...> he had done something wrong.

「彼は何か悪いことをした。」

¹⁵⁹ ここまでに「進む」を意味する動詞として *идти/idi* と *ходить/hodit'* が出てきた. 両者とも不完了体動詞であるが, 前者は定動詞 (determinate verb), 後者は不定動詞 (indeterminate verb) であるという違いがある. 定動詞は一定方向への移動を表し, 不定動詞は, 不定の様々な方向への移動を表す.

ただし, 定動詞と不定動詞に接頭辞が付くと, 前者は完了体動詞に, 後者は不完了体動詞になるといった特徴がある.

(47) 受動態の対応例

- a. И дворянское дело наше делается не здесь,
 I dvorânskoe delo naše delaetsâ ne zdes',
 and aristocratic-ADJ.NOM. work-N.NOM. our-PRN.NOM. be_done-IPFV.PASS.PRS. not here
 на выборах, а там, в своём углу.
 na vyborah, a tam, v svoëm uglu.
 in election, but there in our corner
- b. And our work as noblemen isn't done here at the elections, but yonder, each in our corner.
 「そして、われわれ貴族の仕事はこちらの選挙ではなく、あちらの我々の隠れ家で行われている。」

(48) ロシア語の接頭辞付き派生動詞と英語の動詞句¹⁶⁰の対応例

- a. <...> если б¹⁶¹ она была мужчиною, она бы наделала за
 Esli b ona byla mužčinoû, ona by nadelala za
 if (PART) she be-IPFV.PST. man ona (PART) do_all_sorts_of-PFV.PST. for
 вас тысячу глупостей.
 vas tycâçu. glupostej.
 you thousand-NUM.ACC. stupid_thing-N.GEN.
- b. <...> if she were a man she would do all sorts of mad things for your sake.
 「<...>もし彼女が男だったら、あなたのためにバカなことをたくさんしでかしたでしょう。」
 (『アンナ・カレーニナ』より引用)

(46)の a.では、完了の「してしまう」が *делать/delat'*「する」に接頭辞 *c-/s-*の付いた *сделать/sdelat'* (> *сделал/sdelal*)という統合的な形で表されている (なお, *делать/delat'*は不完了体動詞である)。それに対応する b.の英語の例では, *have+do* の過去分詞という分析的な形が用いられている。(47)の「される, 行われる」は, ロシア語では *делать/delat'*「する」に後接辞 *-ся/-sâ* が付加された *делаться/delat'sâ* (> *делается/delaetsâ*) (統合的な形) で, 英語では *be+過去分詞*の *be done* (分析的な形) で表されている。(48)の「たくさんする」は, ロシア語では *делать/delat'*に接頭辞 *на-/na-*の付いた *наделать/nadelat'* (> *наделала/nadelala*)という統合的な形, 英語では *do* と *all sorts of*を組み合わせた分析的な形となって現れている。

¹⁶⁰ *наделать/nadelat'*に対応する *do all sorts of*は句動詞ではなく動詞句である。ロシア語では *делать/delat'*に接頭辞 *на-/na-*の付いた派生語が, 英語では語連続 *do all sorts of*として現れており, 本章では, これを 5.2.3.の例として挙げている。

なお, 動詞接頭辞 *на-/na-*は多数/大量のものに及ぶ動作を表す (東郷他(編) 1988; Ефремова 1996)。例えば, *сказать/skazat'*「言う」に *на-/na-*の付いた *насказать/naskazat'*「たくさん言う」は, 英語では *say a lot of*が対応する (cf. Wheeler et al. (eds.) 2007)。

¹⁶¹ *бы/by* (*б/б*)は, 動詞の過去形と用いて仮定法を表す助詞である。

なお、ロシア語でも分析的な形が用いられる場合がある。例えば、*пустить/пустить'*「放す、通す」からは、*впустить/впустить'*「入れる」、*выпустить/выпустить'*「出す」、*отпустить/отпустить'*「解放する」といった接頭辞付き派生動詞が形成されるが、それぞれ以下のように分析的に言うこともできる。

(49) ロシア語における分析的な形の例 (cf. Исаченко 1960: 153).

a.	впустить	→	пустить	внутри	b.	выпустить	→	пустить	вон
	vpustit'		pustit'	vnutr'		vypustit'		pustit'	von
	let_in-V.		let_go-V.	inside-ADV.		let_out-V.		let_go-V.	out-ADV.
	「入れる」		「入れる」			「出す」		「出す」	
c.	отпустить	→	пустить	прочь					
	otpustit'		pustit'	proč'					
	let_loose-V.		let_go-V.	off-ADV.					
	「解放する」		「解放する」						

上記のような分析的な形はロシア語でも可能である。ただ、現行 RNC-M にてこれらのコロケーションがどれだけ生起しているのかを調べた結果、1 例も確認できなかった（アクセス日：2017/12/25）。したがって、この場合、ロシア語でも分析的な形は存在するが、接頭辞を付加した派生動詞を用いる方が一般的であると言えよう¹⁶²。

5.2.4. 5.2.のまとめ

英語の *have* + 過去分詞形、*be* 動詞 + 過去分詞形は、例えば前出の *do* 以外の動詞にも生産的に適用することができる。また、英語は句動詞や動詞句によって、動詞が表す意味の多様化を図るが、このような語連続による表現方法が、ロシア語では派生という統合的な形で現れ得る。

通常、コーパスに基づく頻度リストに *have* + 過去分詞形、*be* 動詞 + 過去分詞形、句動詞/動詞句の単位は存在しない。例えば、頻度を計算する際、句動詞はその構成要素に分解される。レマ化に際して *go out* 「出る」は *go* と *out* に分解され、それぞれ別に頻度が計算される。ここに、ロシア語の特定語数によるテキストカバー率の低さの原因が潜んでいると考えられる。英語は、新しく語を形成するのではなく、既存の語の連続で新しい概念・語彙素をつくり出しているのに対し、ロシア語は同様のことを行う際、派生に依存する。これに連動して、ロシア語内の派生語の数は

¹⁶² 逆に、英語でも統合的な形で新しい語彙素を作り出す例は数多く観察される。例えば、*play* 「遊ぶ」からは、接辞付加によって *player* 「選手」、*playable* 「競技できる」、*replay* 「リプレイ」といった派生語が形成される。新しい概念・語彙素を形成する際、英語は分析的な度合いが強いというのは、あくまでロシア語と比べた場合である。

増えていく。結果、英語は少ない語数で多くの概念・語彙素を表すことができるため、表 45 が示すように、ロシア語よりも高いカバー率を実現できるのである。

5.2.の分析・考察は、ロシア語は派生動詞の数が非常に多いことを示唆している。また、ロシア語は接頭辞付き派生動詞から、他の品詞の派生語も数多く形成されるため (cf. Тихонов 1985)、動詞に限らず各品詞の派生語が多いと考えられる。ロシア語のこの特徴もまた、1,000 語や 2,000 語といった特定語数によるロシア語のテキストカバー率の低さを説明する。

以下に、体 (5.2.1)、受動態 (5.2.2)、英語の句動詞/動詞句とロシア語の接頭辞付き派生動詞 (5.2.3.) の分析を総括する。

(50) 5.2.における言語学的な分析のまとめ

- a. 体と受動態に関して、英語はその概念を語連続という分析的な形によって、ロシア語はそれを派生という統合的な形によって表す。
- b. 英語の句動詞/動詞句は、ロシア語では接頭辞付き派生動詞として現れる場合が多い。以上のことから、ロシア語は派生動詞の数が多いと推測される。
- c. また、接頭辞付き派生動詞を基準にして、さらに様々な品詞の派生語が形成されるため、ロシア語は動詞に限らず、派生語が多いと推測される。
- d. 結果、派生語の多いロシア語は特定語数によるテキストカバー率が低くなる。一方、英語は新しく語を形成するのではなく、既存の語を用いた語連続で概念・語彙素を作り出す傾向がロシア語よりも強いため、少ない語数で高いカバー率を実現される。

(50)のイメージを図式化すると、以下のようになる。

(51) 概念・語彙素の形成におけるロシア語の統合的特徴と英語の分析的特徴

(читать「読む」を例に) ¹⁶³

露: читать – прочитать 「読む」 a. (完了)体

英: read have read

└ 露: читаться 「読まれる」 a. 受動態

英: be read

¹⁶³ читать – прочитать 「読む」と читаться 「読まれる」の英訳は、前述の分析を踏まえて著者がつけた。また、начитать「たくさん読む」と перечитать「読み返す」、そして、これらの派生語の英訳は、Oxford Russian Dictionary (Wheeler et al. (eds.) 2007)で確認した。

1. 露: *начитать* 「たくさん読む」 b. 接頭辞付き派生動詞
 英: *read a number of*
 2. 露: *начитанный* 「多読の」 / *начитанность* 「多読」 c. さらになる派生語
 英: *widely read* *wide reading*
2. 露: *перечитать* 「読み返す」 b. 接頭辞付き派生動詞
 英: *read over, reread*
 3. 露: *перечитка* 「読み返すこと」 c. さらになる派生語
 英: *reread*

以上の分析・考察を通して、ある程度英露におけるテキストカバー率の差の原因を言語学に説明できたと考える。次節では、コーパスの提示する頻度データを用いて、ロシア語の高頻度語内にどれだけ派生接辞が含まれているかを確認し、また同時に、その学習がどれだけ語彙力増加に効果的かを数量的に確認する。

5.3. 分析：派生接辞学習による語彙力の増加

英語における派生語の形成は「実に多彩で、英語の語彙が豊かになることに大いに貢献して」(西川 2013: 11)いる。「英語の語を豊かにしているのは、複合語の生成と並んで、接辞付与による派生語の生成が大きな役割を果たして」(西川 2013: 180)おり、そのため、語形成の知識を活かした語彙学習に言及する研究書や教材も存在する (e.g. Bauer, Nation 1993; 太田垣 1999; Nation 2001; 望月他 2003; 西川 2006, 2013; 酒井 2009; Webb, Nation 2017)。

派生接辞の知識は、派生語の学習負荷を軽減する、もしくはその意味の予測に役立つ (Bauer, Nation 1993; Nation 2001)。派生元の語は1つずつ覚えなければならないが、接辞は同じ働きをしながら他の語に付加されるものもあるため、その活用価値は非常に高い (太田垣 1999: 44)。例えば、形容詞を副詞にする *-ly* (*highly* 「高く」、*happily* 「幸せに」、*brightly* 「明るく」) は極めて生産性が高く (西川 2006: 277)、数多くの語に含まれているため語彙力増加の目的で学ぶ価値は大きいと言える。

ロシア語は語形成における形態的手法が英語よりも豊かである。したがって、ロシア語の語彙力増加の一手段として派生接辞を学ぶことには、よりいっそうの効果が期待される。西川 (2006) による英語接辞の研究は、155 の接頭辞、133 の接尾辞を提示しているが、Ефремова (1996) のロシア語語形成要素辞典には 306 の接頭辞、1,013 の接尾辞が記載されている。単純な数値の比較ではあるが、このことからロシア語の派生接辞の知識が語彙力増加へもたらす貢献度は大きいと

考えられる。また、Тихонов (1985)の語形成辞典において、本源形に対して派生語の数は全体の約9割に昇る事実からも、派生接辞学習の有効性を推し量ることができる。

つまり、ロシア語の語彙は大半が派生語なのである (Янко-Триницкая 2001: 242)¹⁶⁴。そのため、上原 (2005: 64)が述べているように、「ロシア語教育における語形成論とくに接辞論の重要性はおそらく議論の余地がないであろう」。実際、ロシア語にも語形成に関する教材や辞典は少なからず存在しており、例えば、Тихонов (1985)に基づく学習者向けの語形成辞典 (Козлова 2014)や、語形成を扱った教材 (Амиантова (ред.) 2016; Киселёва 2016)、動詞接頭辞に特化した教材 (Барыкина, Добровольская 2015)などがある¹⁶⁵。

5.2.の言語学的な考察から、ロシア語には派生語が数多く存在していることが見て取れた。ただ、この派生語の多さとは、あくまで項目数としての派生語の豊富さを示しているにすぎない。派生語が実際の言語使用の場で頻繁に用いられていない限り、語彙学習の文脈において派生接辞学習の重要性を説くことはできないのである。言い換えると、派生接辞の知識を活かして派生語を覚えていたとしても、その派生語が実際に頻繁に用いられていなければ、学習者にとって派生接辞の学習意義は低いと言える。

そこで、5.3.では、まずコーパスの頻度データ (Ляшевская, Шаров 2009)を用いて、高頻度語内において実際に派生語が数多く含まれているのかを調査する。そして、その結果に基づいて、語彙力増加を目的とした派生接辞学習に意味があるのかどうかを客観的に、数量的に確認する。その具体的な方法として、5.3.1.にてレマ単位の頻度データを、本源形とその派生語群を1つとして捉える WF 単位 (2.1.4 参照) で数え直す。

5.3.1. 頻度データのワードファミリー化

2.3.4.で言及したが、WF という単位は応用言語学の分野で用いられる。WF の概念は、「一度、元となる語 (base word)、もしくは派生語を覚えれば、その word family の他の構成員を理解する労力は少なくて済む、または、まったく労力を要さない」(Bauer, Nation 1993: 253)という考えに根ざしている。例えば、Nation (2004)は BNC の頻度データから高頻度の WF リストを作成し、これが様々な分野で高いテキストカバー率を実現することを確認している。また、学習者の習熟度・語彙サイズと派生接辞の知識には相関があることを示す研究もある (cf. Schmitt, Meara 1997; Mochizuki, Aizawa 2000)。Nation (2001: 47)によると、「word family は心理学的に実在的なものであ

¹⁶⁴ 例えば、本源形 *зима/zima*「冬」には、*зимний/zimnij*「冬の」、*зимовать/zimovat'*「冬眠する」、*зимовка/zimovka*「越冬」、*озимье/ozim'e*「冬麦」などの派生語がある (Янко-Триницкая 2001: 242)。

¹⁶⁵ ただ、これらの教材にはいくつかの問題があり、少なくとも日本語環境にいる日本人ロシア語学習者には不向きであると考えられる。詳細は6章にて言及する。

り、語を知ることについて論じる場合、実際には word family を知ることについて論じなければならない、という考えを支持する研究成果も存在する」(cf. Nagy et al. 1989). そのため、英語の語彙学習に際して WF への言及は必要であろう。派生の豊かなロシア語教育においてはなおさらであり、その語彙学習に WF という概念を導入する価値は高いと考えられる。

ここでは、RNC-M と RNC-S の頻度データを対象とした WF 化を行う¹⁶⁶。なお、両コーパスの頻度データ (Ляшевская, Шаров 2009)はレマ単位で数えられている。具体的な WF 化の作業は、以下の3つの手順を通して行う。

(52) WF 化の手順

- a. RNC-M と RNC-S におけるそれぞれの高頻度 5,000 語 (レマ単位) を、Тихонов (1985)¹⁶⁷の記述に基づいて、本源形とその派生語群が1つに集約された WF 単位にまとめ直す。

- ・本源形 *начать* 「(完了体) 始める」
- ・派生語群 *начинать* 「(不完了体) 始める」, *начаться* 「(完了体) 始まる」, *начинаться* 「(不完了体) 始まる」, *начало* 「始まり」, *начальный* 「初めの」, *сначала* 「最初」
→ «начать» の WF

- b. 本源形と派生語群の生起頻度を合計する。

начать – 444, *начинать* – 309, *начаться* – 108, *начинаться* – 129, *начало* – 131, *начальный* – 16, *сначала* – 336
→ «начать» の WF の生起頻度 : 1,473

- c. a. と b. の手順を踏んだ WF 単位の頻度データを元に、特定語数によるテキストカバー率の上昇度合いを確認する。

まず、a. の段階では、Тихонов (1985) の語形成辞典の記述に基づいて、高頻度 5,000 語内に含まれる本源形と同一語根の派生語群を1つに集約する。例えば、RNC-S の高頻度 5,000 語内には、本源形 *начать/начат'* 「(完了体) 始める」と、その派生語 *начинать/начина́т'* 「(不完了体) 始める」, *начаться/начат'sâ* 「(完了体) 始まる」, *начинаться/начина́т'sâ* 「(不完了体) 始まる」, *начало/начало* 「始まり」, *начальный/начал'nyj* 「初めの」, *сначала/сначала* 「最初」が含まれるが、a. の段階では

¹⁶⁶ 4章の考察結果から、5章～7章の分析には規模とテキストジャンルのバランスの点で優れる RNC-M の頻度データ (Ляшевская, Шаров 2009)を採用するという結論に至った。また、規模は小さいが (約 76 万語)、参考として話し言葉コーパスである RNC-S の頻度データ (Ляшевская, Шаров 2009)に対しても、同様の分析を行う。その狙いは書き言葉と話し言葉において派生語 (派生接辞) の使用に違いがあるのかどうかを確認することにある。

¹⁶⁷ Козырев, Черняк (2016: 118)が述べているように、「語形成辞典の中で、<...> 2 巻から成る А.Н. Тихонов のロシア語語形成辞典が中心的である」ため、本章では Тихонов (1985)の記述に沿って WF 化を行う。

これらを1つとして捉える。なお、a.の分析対象数はコーパスにおける高頻度 5,000 語¹⁶⁸に限定している。本章の WF 化は、派生接辞による語彙力増加の効果を数量的に確認することを目的としている。WF 化した際のカバー率の上昇度を応用言語学の観点から議論・考察するには、実際に頻繁に生起している語のみを分析対象とする必要がある。仮に分析対象数を高頻度 10,000 語まで広げ、生起頻度の低い語まで WF 化に含めてしまうと、分析結果の数値が過度に高くなってしまいう可能性があり、かつ、1WF の中に含まれる派生語の数も増えてしまう。これでは学習者が出会う機会のほぼない語まで覚える対象として扱うこととなる。そのため、恣意的ではあるが、分析対象数は高頻度 5,000 語に限定した。理由は以下の通りである：1) 英語の高頻度 2,000 語はテキストの約 80%をカバーするのに対し、RNC-M の高頻度語はその数値に達するのに約 5,000 語を要する（表 45 参照）。2) 高頻度 5,000 語以降の各 1,000 語によるカバー率は極端に低くなる。

なお、Тихонов (1985)に記載のない語に関しては、WF 化せずにレマ単位のままにしてある。この作業を RNC-M と RNC-S の各 5,000 語に対して行った。結果、RNC-M と RNC-S におけるレマ単位の高頻度 5,000 語は、WF 化によってそれぞれ 2,472 語と 2,622 語に減少した。

次の b.では、a.の分析で1つにまとめられた本源形と派生語群の頻度を合計し、WF 単位での頻度リストを作成した。前述の RNC-S の«начать/начат'»の WF を例にとれば、それぞれの生起頻度を合わせると ipm 換算で 1,437 となる。この作業を WF 化によって得られた RNC-M の 2,472 語と RNC-S の 2,622 語に対して実施した。

最後に、c.の段階では、レマ単位で計算された頻度データ (Ляшевская, Шаров 2009)と WF 化された頻度データを比較し、特定語数によるテキストカバー率がどれだけ異なるのかを確認する。以下がその結果である。

表 50. RNC-M と RNC-S におけるレマ単位と WF 単位の高頻度語によるテキストカバー率¹⁶⁹

語数	RNC-M (書き言葉コーパス)			RNC-S (話し言葉コーパス)		
	レマ	WF		レマ	WF	
500 語	53.0%	63.3%	(=レマ単位の 1,212 語)	69.4%	76.2%	(=レマ単位の 1,132 語)
1,000 語	60.9%	72.1%	(=レマ単位の 2,533 語)	75.3%	81.4%	(=レマ単位の 2,364 語)
1,500 語	65.9%	76.1%	(=レマ単位の 3,627 語)	78.3%	83.5%	(=レマ単位の 3,400 語)
2,000 語	69.4%	78.2%	(=レマ単位の 4,397 語)	80.3%	84.6%	(=レマ単位の 4,206 語)
2,500 語	72.0%	79.3%	(=レマ単位の 4,927 語)	81.7%	85.3%	(=レマ単位の 4,801 語)

¹⁶⁸ RNC-M と RNC-S における分析対象数は、正確にはそれぞれ 4,927 語である。Ляшевская, Шаров (2009) は RNC-S の高頻度語を 4,927 位までしか提示していないため、RNC-M の分析対象数もこれに合わせた。

¹⁶⁹ RNC-M は WF 化した際に 2,472 語まで数が減少した。そのため、表内の 2,500 語による 79.3%というテキストカバー率は、実際には 2,472 語によるものである。

表の結果からわかるように、WF 化によってテキストカバー率は大幅に上昇することがわかった。次節でこの結果を詳細に分析・考察する。

5.3.2. テキストカバー率の考察

RNC-M においてレマ単位の高頻度 1,000 語と 2,000 語は、それぞれ 60.9%と 69.4%のテキストカバー率を実現する。一方、WF 単位の 1,000 語と 2,000 語によるカバー率は、72.1%と 78.2%である。レマ単位でこの 72.1%と 78.2%のカバー率に到達するには、それぞれ 2,533 語と 4,397 語を要する（つまり、カバー率の観点からすると、WF 単位の 1,000 語と 2,000 語は、それぞれレマ単位の 2,533 語と 4,397 語に相当する）。したがって、WF 化によってカバー率は大幅に上昇したと言える。RNC-S においても同様の結果が得られた。WF 単位の 500 語と 1,000 語は、それぞれ 76.2%と 81.4%のカバー率を実現する。これらはレマ単位でそれぞれ 1,132 語と 2,364 語に相当する。

ただ、この WF 化は分析対象を高頻度 5,000 語に絞っているため、WF 単位にまとめられた語をすべて一律的に同じものと捉えることはできない。WF 化した後の語は、より細かく見ると、以下の 3 種類に分かれる。

(53) WF 化後の語の種類

- a. 単体語
- b. 孤立 WF
- c. 派生語持ち WF

上記 3 つの呼称は著者が便宜的に付けた：a.の単体語とは、Тихонов (1985)の記述によるとそもそも派生語を有さず、孤立して単体で存在している語を指す。例として、接続詞 *a/a* 「一方で」、代名詞 *она/она* 「彼女」などが挙げられる。これらはそもそも派生語を有していないため、WF 化することができず、リストの中では単体で存在している（実質的にはレマと同じ単位である）。

同様に、同一語根の派生語群の中で 1 語だけがコーパスの高頻度 5,000 位以内に入っている場合、それを WF 化しても 1 語のままである。例えば、*месяц/mesâc* 「(暦の) 月」、*месячный/mesâčnyj* 「月の」、*полумесяц/polumesâc* 「半月」といった語は«*месяц/mesâc*»の WF に属すが、RNC-S の高頻度 5,000 語内には本源形の *месяц/mesâc* しか含まれていない。潜在的には同一語根の派生語が存在しているものの、分析対象の 5,000 語の中には 1 語しか含まれていない場合、それを孤立 WF と呼ぶ。孤立 WF は語彙リストにおいて 1 語で存在しているため、実質的にレマと同じ単位である。

そして、高頻度 5,000 語内に 2 つ以上の同一語根の語が含まれている場合、それらまとめた単位を派生語持ち WF とする。例えば、《*скорый/skoryj*》の WF を例として挙げると、RNC-S の高頻度 5,000 語内には本源形 *скорый/skoryj* 「早い」と、その派生語 *скоро/skoro* 「早く」、*скорость/skorost'* 「早さ」の合わせて 3 語が含まれるため、本章の分析ではこれらをまとめた《*скорый/skoryj*》を派生語持ち WF と呼ぶ¹⁷⁰。

次に、WF 化したデータを高頻度 500 位毎に区切り、上記 3 種類の語が各頻度域にどれだけ含まれているかを確認する。まず、RNC-M の分析結果は以下の通りである。

表 51. RNC-M における単体語、孤立 WF、派生語持ち WF の比率（括弧内は累積数）

順位	単体語	孤立 WF	派生語持ち WF		累積テキスト カバー率	
			語数	WF 構成員 の平均数		
1～500 位	67 語	62 語	371 語 (371)	5.3 語	1～500 語	63.3%
501～1,000 位	36 語	126 語	338 語 (709)	2.7 語	1～1,000 語	72.1%
1,001～1,500 位	36 語	251 語	213 語 (922)	2.2 語	1～1,500 語	76.1%
1,501～2,000 位	43 語	407 語	50 語 (972)	2.0 語	1～2,000 語	78.2%
2,001～2,500 位	37 語	435 語	0 語 (972)	0 語	1～2,500 語	79.3%

表からは、順位が高い領域に派生語持ち WF が多く含まれていることがわかる。例えば、高頻度 1～500 位の領域には派生語持ち WF が 371 語存在し、単体語と孤立 WF の合計は 129 語である。逆に、順位を下っていくと、単体語と孤立 WF の数が増えていく。これは、WF 内の構成員が多いほど生起頻度が上昇することに起因する。また、RNC-M の高頻度 5,000 語は、本源形とその派生語群をまとめると 972WF（派生語持ち WF）と 1,500 レマ（単体語と孤立 WF）へと形を変える。より細かく見ていくと、WF 化した RNC-M の上位 1,000 語は 709WF と 291 レマから構成され、テキストの 72.1%をカバーする。また、WF 化した上位 2,000 語は、972WF と 1,028 レマから構成され、テキストの 78.2%をカバーする。

同様の傾向が RNC-S においても観察される。

¹⁷⁰ なお、ある WF において必ずしも本源形の生起頻度が最も高いわけではない。例えば、《*скорый/skoryj*》の WF を例に挙げると、RNC-S では派生語の *скоро/skoro* の方が、本源形の *скорый/skoryj* よりも生起頻度が高い。このような WF は数多く存在する。

表 52. RNC-S における単体語，孤立 WF，派生語持ち WF の比率（括弧内は累積数）

順位	単体語	孤立 WF	派生語持ち WF		累積テキスト カバー率	
			語数	WF 構成員の 平均数		
1～500 位	94 語	67 語	339 語 (339)	5.2 語	1～500 語	76.2%
501～1,000 位	55 語	140 語	305 語 (644)	2.8 語	1～1,000 語	81.4%
1,001～1,500 位	45 語	241 語	214 語 (858)	2.2 語	1～1,500 語	83.5%
1,501～2,000 位	74 語	370 語	56 語 (914)	2.0 語	1～2,000 語	84.6%
2,001～2,500 位	106 語	394 語	0 語 (914)	0 語	1～2,500 語	85.3%

RNC-S でも同様に，高頻度域には派生語持ち WF の数が多く，逆に低頻度域では単体語と孤立 WF の数が増えていく．また，派生語持ち WF の構成員の平均数も RNC-S と RNC-M は同じ推移を見せている．WF 化によって得られた上位 2,500 語は，914WF（派生語持ち WF）と 1,586 レマ（単体語と孤立 WF）から成る．WF 化した上位 500 語は 339WF と 161 レマから成り，テキストの 76.2%をカバーする．また，WF 化した上位 1,000 語には 644WF と 356 レマが含まれているが，この 1,000 語で 81.4%のテキストカバー率が実現される．

5.4. 総括

5.1 の分析・考察から，ロシア語で理解の伴った言語活動を行うには，英語よりも多くの語数が求められることがわかった：ロシア語は，英語よりもコーパスの高頻度語・基本語によるテキストカバー率が大幅に低い．例えば，仮に TORFL-2 級の学習用語彙リストに含まれる語をすべて知っていたとしても，RNC-M のテキストの約 73%しか既知語にはならない．可読性の研究からわかるように，このカバー率では理解の伴った言語活動の実現は難しい．

続く 5.2.では，このロシア語のテキストカバー率の低さを，概念・語彙素の形成における分析的・統合的度合いの観点から言語学的に考察した．結果，ロシア語は新しい概念・語彙素を形成する際の統合的性質（接頭辞，接尾辞などの付加による派生）が強く，結果的に派生語の数が多くなってしまったため，1,000 語，2,000 語といった特定語数によるテキストカバー率が低くなっているという考えに至った．つまり，ロシア語は派生語の含有量が多いのである．

ただ，高頻度語に分析対象を絞った場合，これらの中にはどれだけの派生語が含まれているのかは不明瞭であり，派生接辞の知識がどの程度語彙力増加に寄与するのかもわからない．そこで，5.3.では，RNC-M と RNC-S の高頻度 5,000 語を対象に，レマ単位の頻度データ（Ляшевская, Шаров 2009）を WF 単位で数え直し，テキストカバー率の上昇度合いを確認した．分析の結果，WF 化によって 1,000 語，2,000 語といった特定語数によるテキストカバー率は大幅に上昇することがわかった（表 50 参照）．この結果は派生接辞の知識が語彙力増加に効果的であることを数量的に示し

ている。

本章の冒頭で掲げた(31)の研究設問に答える：a. ロシア語は語形成における形態的手法が豊かである。そのため、言語学的な観点から、派生接辞の学習は語彙力増加に効果的であると言える(5.2.4.)。b. その効果の度合いに関してであるが、例えば、WF 化した RNC-M の高頻度約 2,500 語 (972WF+1,500 レマ) はそのテキストの約 8 割をカバーする。この数値は、レマ単位の 4,927 語によるカバー率に相当する(5.3.2.)。他にも、RNC-M の上位 500 語 (レマ単位) は、テキストの 53.0%をカバーするが、WF 化後の 500 語によるカバー率はそれを約 10%も上回る。RNC-S も同様に、WF 化後の高頻度 500 語はテキストの 76.2%をカバーし、この数値はレマ単位の 1,132 語に相当する。なお、WF 化した高頻度 500 語の中には、RNC-M と RNC-S 共に派生語持ち WF が数多く含まれており、かつ、それぞれの WF は平均して 5 語 (レマ) の構成員から成る。

総括すると、WF 単位でコーパスの高頻度 5,000 語を捉え直すことで、特定語数のテキストカバー率は大幅に上昇した。つまり、ロシア語の語彙の全体の中には無数の派生語が存在しているが (cf. Тихонов 1985: 4), 頻繁に使われる語彙に対象を絞ってもその中で数多くの派生語が確認された。したがって、派生接辞の知識は語彙力増加に大きな役割を果たすと言える。時間的制約の厳しいロシア語教育において、派生接辞の学習は効率的に語彙力を伸ばす一つの手段である。

これまで教員の経験則やロシア語の言語的特徴から、語形成の知識は語彙学習に有益であるとされてきたが、その効果を数量的な言語データに基づいて示した研究は存在しない。本章の分析結果は、派生接辞学習の有効性を示す客観的な指標として用いることができよう。

6 章. 学習価値の高い派生接辞の選定

5 章ではコーパスが提示する頻度データ (Ляшевская, Шаров 2009)を用いて, 派生接辞の学習が語彙力増加に効果的であることを言語学的に, かつ, 数量的に確認した. 具体的には, RNC-M と RNC-S から得られたレマ単位の頻度データを, 本源形とその派生語群を 1 語として捉える WF 単位 (2.1.4.参照) で数え直した. その結果, 特定語数によるテキストカバー率は大幅に上昇した. これは, 派生接辞の知識が語彙力増加に寄与することを示唆している. これまで経験的に語形成の知識は語彙力増加に効果的であると考えられてきたが, 5 章における分析・考察によりそれが客観的に確認された.

ただし, 現段階では, この成果を学習に応用するところまでには至っていない. 5 章の分析から派生接辞の学習が語彙力を効率的に伸ばし得るということはわかったが, 実際にどのように学ぶのか, どのような派生接辞を学べばいいのか, といった問題は未解決のままである. 西川 (2006) には 288 の英語の派生接辞 (接頭辞と接尾辞) が提示されているが, 語形成における統合的な度合いが強いロシア語には, より多くの派生接辞が存在すると推測される. 例えば, Ефремова (1996) の研究は, 約 1,900 の語形成要素を挙げている.

表 53. Ефремова (1996: 9)におけるロシア語の語形成要素一覧 (著者が表記の一部を変更)

品詞	接頭辞	接周辞 ¹⁷¹	接尾辞	合計
名詞	60	168	690	918
形容詞	54	191	201	446
動詞	173	127	68	368
副詞	19	70	71	160
合計	306	556	1,030	1,892

これらすべての接辞を覚えることは時間的にかなり難しい. そもそも日本ではロシア語の授業のコマ数が少ないという環境的な問題が存在する (cf. 金子 2016; 黒岩 2016; Подалко 2016; Хаясида 2016). また, 大半の学習者が大学入学時からロシア語を始めるが, 英語のようにそれまでの知識の貯蓄がないため, ロシア語教育は基礎学習に時間を費やさなければならない.

¹⁷¹ 接周辞(циркумфиксы)とは, «接頭辞-...-接尾辞»という形式で示される接辞を指す (Ефремова 1996:11). 例えば, *на-...-ся/на-...-sâ* は不完了体動詞に付いて, その動作をかなりの程度に行うことを表す (Ефремова 1996: 27) : *есть/est'* 「食べる」に *на-...-ся/на-...-sâ* が付加された *наестся/naest'sâ* は「たくさん食べる, 飽食する」を意味する. 本稿は, Ефремова (1996)に倣い, このような派生接辞に対して接周辞という用語を用いる.

なお, Ефремова (1996)は *-ся/-sâ* を後接辞ではなく接尾辞として扱っている. だが, 本稿は АН СССР (1980)などに倣って *-ся/-sâ* を後接辞に分類する.

このような状況下では、学習の導入項目の数や質に制限を設けなければならない。そのため、もし派生接辞による語彙力増加を検討するのであれば、それらに学習上の優先順位をつける必要がある。つまり、時間が限られた環境では派生接辞を「学習価値が高いもの」、「学習価値が中程度のもの」、「学習価値が低いもの」に区分した上で、前者から学習者に提示していくべきである。例えば、英語において *un-*（否定を表す）、*-ly*（容態・様子を表す副詞を形成）、*-ness*（状態や特徴を意味する名詞を形成）は数多くの派生語の中に含まれており、語彙力増加の目的でこれらを覚える価値は高いと言えよう（cf. 太田垣 1999: 44; Nation 2001: 8）。一方で、接頭辞 *agri-* はギリシヤ語の名詞 *agros* に由来し、「土」、「畑」を意味するが（西川 2006: 10-11）、*un-*、*-ly*、*-ness* といった頻繁に出会う派生接辞よりも学習優先度は低い（cf. Bauer, Nation 1993）¹⁷²。ロシア語で言えば、主に形容詞から抽象名詞を形成する接尾辞 *-ост' / -ost'*¹⁷³に出会う頻度が高いことは感覚的に理解できるが¹⁷⁴、学習上これを覚える価値が高いと推測される。一方で、動詞の不定形語幹に付いて、その動作を行う女性を表す *-лк- / -lk-*¹⁷⁵は、この接尾辞を含んだ派生語には滅多に出会わないことから考えて、覚えなくても良いと判断できる。

だが、これはあくまで経験的な意見にすぎない。そこで、6章では、5章の言語学的な成果をより学習に適した形で提示できるように、以下の研究設問に取り組む。

(54) 6章の研究設問

数ある派生接辞の中から、具体的にどれを覚えることで効率的に語彙力を伸ばせるのかを確認する。

本章では、数ある派生接辞に学習上の優先順位をつける客観的なデータの獲得を目指す。具体的には、5章に引き続き RNC-M と RNC-S における高頻度 5,000 語を分析対象として、これらに含まれる派生接辞をすべて抽出する。そして、各派生接辞の生起頻度（当該の派生接辞が含まれる派生語の生起頻度の合算）と実質的生産性（当該の派生接辞が含まれる派生語の個数）を計測する。この分析結果の数値が高い派生接辞は、実際に学習者が会う機会が多いため、語彙力増加の目的で覚える価値は高いと言える。

¹⁷² Bauer, Nation (1993)は、学習価値の観点から英語の接辞を7つにレベル分けしていった研究である。その中で、接頭辞 *agri-* は学習優先度が一番低いレベル7に分類されている。Bauer, Nation (1993)の研究は6.2.1.にて詳細に言及する。

¹⁷³ 1章で言及したが、本稿の派生接辞の表記方法は、主に Ефремова (1996)の記述に倣う。

¹⁷⁴ 例えば、形容詞 *мягкий / mágkij*「柔らかい」に接尾辞 *-ост' / -ost'*が付いて、名詞 *мягкость / mágkost'*「柔らかさ」が形成される。

¹⁷⁵ 例えば、動詞 *гадать / gadat'*「占う」に接尾辞 *-лк- / -lk-*が付いて名詞 *гадалка / gadalka*「(女性の) 占い師」が形成される。

本章の構成は以下の通りである：まず 6.1.にて、語形成（もしくは派生接辞）に関するロシア語の教材を概観して、その問題点を指摘する。そして、本章の分析から得られる客観的指標が教材作成においてどう活かせるのかに言及する。続く 6.2.では、各派生接辞の生起頻度と実質的生産性を計測する。その結果を 6.3.にて詳細に分析し、どのような派生接辞が語彙学習上有益であるのかを考察する。そして、6.4.にて語形成の知識を用いた語彙学習の課題について言及し、最後に、6.5.にて本章の総括を行う。

6.1. 教材の問題点と本章の意義

派生語を派生接辞と基本形¹⁷⁶に分析する能力は、「第一に学生が語彙の大部分を覚えることを樂にし、そして第二に、未知語の意味を明らかにすることを可能にする」(Корокова 1973: 29)¹⁷⁷。ロシア語の教授者は、ロシア語は接頭辞や接尾辞などによる派生が豊かであり、その知識が語彙力を伸ばす上で有益であろうということは理解している。ただ、現状、その認識が教科書の内容に反映されるまでには至っていない。

Плотникова (2011: 4)によると、これには「第一に学問としての語形成論が比較的新しい言語学の部門であること、第二に、外国語としてのロシア語教授法自体が形成期にあること」が関係している。他に、派生接辞の知識が実際に語彙力を増加させるという事実を示した客観的な研究成果がないことも、語形成が教材で扱われない大きな要因として挙げられるであろう。派生接辞の意味的・文法的特徴に関する言語学的な記述は整備されているが (e.g. АН СССР 1960, 1980; Виноградов 1972; Земская 1973, 2007; Тихонов 1985; Ефремова 1996; Улукханов 1996; Янко-Триницкая 2001; Janda et al. 2013), その成果を応用言語学的な観点に落とし込んで学習に反映するまでには至っていないのである。

一方で、日本で出版されている教材は語形成や派生接辞をどのように取り上げているのであろ

¹⁷⁶ 6章から「基本形」という用語を導入する。基本形は、ある派生語に対しての派生元の語を指す。派生元の語を基体、語基、基語と呼ぶことがあるが (cf. 西川 2006: 1), 本稿は亀井他(編) (2001: 1067)を参考にして基本形という用語を使う。

基本形は、WF の解説で扱った本源形とは以下の点で異なる。

a. интерес interes interest-N. 「興味」	→	b. интересный interesnyj interesting-ADJ. 「面白い」	→	c. интересно interesno interestingly-ADV. 「面白く」
--	---	--	---	--

例えば、c. 派生副詞 *интересно/interesno* の基本形は、a. *интерес/interes* ではなく、語形成の過程において 1 つ前の語 b. *интересный/interesnyj* である。なお、これら 3 つの語は同一の WF に属するが、その本源形 (WF の頂点に位置する語) は a. *интерес/interes* である。

¹⁷⁷ Корокова (1973: 29) は原典が入手できなかったため、Плотникова (2011) が直接引用している文章を本稿でも引用した。

うか。日本の教材では派生接辞はほとんど扱われておらず、主に移動動詞の項目で接頭辞が、体のペアの項目で接頭辞・接尾辞が若干言及されるのみである (e.g. 戸辺 1990; 佐藤 2001; 前木 2004; 中澤 2010; 安岡 2011; 東, 東 2012; 古賀, 鴻野 2012; 沼野他 2012; 秦野, トルストグゾフ 2012; 西中村, 朝妻 2017)。

(55) 教材で導入されている接頭辞・接尾辞の例

a. 移動動詞：到着を意味する接頭辞 *при-* の例

<i>ехать</i>	→	<i>приехать</i>
<i>ehat'</i>		<i>priehat'</i>
go-IPFV.		arrive-PFV.
「(乗り物で) 進む」		「(乗り物で) 着く」

b. 体のペア

1) 接頭辞 *c-* の例

<i>делать</i>	→	<i>сделать</i>
<i>delat'</i>		<i>sdelat'</i>
do-IPFV.		do-PFV.
「する」		「する」

2) 接尾辞 *-ва-* の例

<i>встать</i>	→	<i>вставать</i>
<i>vstat'</i>		<i>vstavat'</i>
get_up-PFV.		get_up-IPFV.
「起きる」		「起きる」

宇多 (2009: 235)が言うように、a.の移動動詞と接頭辞の関係は、他の一般動詞と接頭辞のそれよりも（意味的な）規則性が高いため語彙力を増やす上で重要である。また、b.の体のペアにおける接頭辞と接尾辞は、大半の動詞に関わる重要な文法事項であるため、多くの教科書で導入対象となっているのであろう。ただ、これらは、語彙力増加ではなく、あくまで文法の理解のために導入されているという側面が強い。くわえて、上記移動動詞と体のペアを除けば、日本のロシア語教材の中に語形成の記述はほぼ見受けられない。

一方、ロシアで出版されている教材には語形成に焦点を当てたものが少なからず存在する。だが、これらの教材には、1) 大量の派生語が一举に導入されている、2) 派生接辞に関する説明が欠如している、という問題が存在する：1) *Амиантова (ред.) (2016)*や *Киселёва (2016)*といった語形成を扱った教科書は、派生語を一举に提示しているため、どの語が重要なのかを把握しづらい。また、これらの教科書はほとんど使うことのない派生語まで例として記載している。例えば、*Амиантова (ред.) (2016)*は、*бить/bit'*「打つ」に接頭辞、接尾辞、後接辞 *-ся/-sâ* が付いた派生語を48個導入しているが、そこには生起頻度が低いものも含まれている。*Киселёва (2016)*は重要な本源形として9つの動詞を挙げ、同様にこれらの派生語群を大量に列挙している。また、その内の

本源形の1つである *гадать/gadat'*「占う」はそもそも生起頻度が低く、RNC-Mの高頻度5,000語内には含まれていない。くわえて、その派生語群の多くが低頻度語に属しており、それらを覚えることが学習者にとって有益であるかどうかは不明瞭である。2) Амиантова (ред.) (2016)では、*бить/bit'*「打つ」、*брать/brat'*「取る」、*говорить/govorit'*「言う」といった重要な本源形とその派生語群に焦点が当てられており、派生接辞に関する説明が非常に乏しい。Киселёва (2016)も同様に、派生接辞に関する体系的な解説は欠如しており、数多くの派生語に触れながら帰納的に派生接辞の意味と用法を学ばなければならない。

Козлова (2014)は、Тихонов (1985)の記述に基づいて作成された語彙学習用の語形成辞典である。この語形成辞典は、TORFL-1 級 (CEFR における B1 に相当) の語彙を基礎としているが、固有名詞、新たなレアリアを反映している語、そして日常的・文化的に意味のある語を含めることでその内容を拡張している (収録語数はレマ換算で 3,700 語、WF 換算で 1,920 語に昇る)。Козлова (2014)も数多くの派生語を一挙に導入しており、この提示の仕方ではどの派生語が重要なのが不明瞭である。また、この語形成辞典も派生語群に焦点を当てているため、派生接辞の解説は欠如している¹⁷⁸。

他にも、動詞接頭辞に特化した教材 (Эндрюс 2014; Барыкина, Добровольская 2015)も存在するが、これらには *над-/nad-*、*недо-/nedo-*、*обез-/obez-*、*пред-/pred-*といった、出会う頻度が極端に少ないと感覚的に推測される動詞接頭辞まで含まれている。時間的制約の厳しいロシア語教育において、これらの接頭辞を導入するべきかどうかは判断が難しい (なお、後述の 6.2. の分析から、RNC-M と RNC-S においてこれらの接頭辞が付加された派生動詞は数が非常に少ないことがわかった)。このように、どの派生接辞を優先的に学ぶべきなのか、また、派生接辞をどう提示すべきなのか、といった問いの答えは、経験的・主観的な判断によって決められているところが多い。

この問題を解決するには、当該の派生接辞を導入するかどうかを判断する際の指標となる客観的なデータが必要となる。ロシア語の教授者であれば、抽象名詞を形成する *-ост' /-ost'* や、「～する人」を意味する接尾辞 *-тель /-tel'* の頻度が高いことは経験的に想像できる。このような主張を裏付ける数量的なデータは、派生接辞を教材や授業へ導入する際の根拠として、また、学習者が実際に覚えるべき派生接辞を選定する際の根拠として役立つ。本章ではこのようなデータの獲得を目指す。

¹⁷⁸ 日本の学習環境では、語彙学習に割り当てられた時間が限られているため、数多くの派生語に触れて、そこから帰納的に派生接辞の意味を習得させるやり方は難しいと思われる。そのため、教材に派生接辞の説明がまったく欠如しているのは問題であろう。ただ、帰納的・演繹的アプローチのどちらで派生接辞を導入するのが良いのか、といった議論には実証研究が求められる。これは今後の課題としたい。

6.2. 学習価値の高い派生接辞

学習価値の高い派生接辞はどのような基準で選ぶべきであろうか。本章では、Bauer, Nation (1993)を参考にして、生起頻度と実質的生産性¹⁷⁹といった2つの選定基準を設定する。ここでは、まず6.2.1.にて先行研究の概要に触れ、上記2つの基準を設けるに至った経緯に言及する。そして、6.2.2.にて、実際にRNC-MとRNC-Sの高頻度5,000語を分析対象として、そこに含まれる各派生接辞の生起頻度と実質的生産性を計測し、学習価値の高い派生接辞を選定するための根拠となるデータを獲得する。

6.2.1. 先行研究 (Bauer, Nation 1993)の概要

Bauer, Nation (1993)は派生接辞を用いた語彙学習を念頭において¹⁸⁰、リーディングに必要な英語の屈折・派生接辞をレベル分けした研究である。英語にも接辞は数多く存在するが、Bauer, Nation (1993)は、学習に必要な接辞をレベル分けする際、a. 頻度、b. (潜在的) 生産性、c. 予測性、d. 規則性といった選定基準を設定している。

(56) 接辞の重要度を定める8つの基準 (Bauer, Nation 1993: 255-257 / 著者が一部改変)

- a. 頻度 (frequency / 接辞が現れる語の数) : 初期レベルに配される接辞は、かなり多くの語の中に生起している (例 : *-er*) .
- b. 生産性 (productivity / 接辞が新しい語の形成に用いられる可能性) : 初期レベルに配される接辞は極めて生産的である (例 : *-ly* と *-ness*) .
- c. 予測性 (predictability / 接辞がもつ意味の透明性の程度) : 初期レベルに配される接辞は意味の予測が容易である。たとえば、*-less* は意味を2つしか意味を有しておらず、片方の意味 (「～を欠いた」) で使う場合がほとんどである。
- d. 規則性 (regularity)
 - 1) 基本形の綴り形態の規則性: 接辞が付加された際に、基本形の綴りの形態の変化が予測可能かを示す指標を意味する (例 : *green + ish = greenish* → 規則性が高い /

¹⁷⁹ 生産性 (productivity) という用語は、一般的に新しい語の形成に用いる能力 (潜在的な生産性) を意味する。Bauer, Nation (1993)は、派生接辞に学習優先度を付ける基準として、この意味での生産性を用いている。また、Ефремова (1996)の語形成要素辞典には各派生接辞の生産性に関する記述があるが、これも潜在的なものを意味している。

ただ、本章では、実際に高頻度に生起した既存の派生語とそこに含まれる派生接辞を対象に分析を行うため、「当該の派生接辞が含まれる派生語の個数」という選定基準を設定し、これを「実質的」生産性と便宜的に呼称する (詳細は本節と6.2.2.で後述する)。

¹⁸⁰ この論文のタイトルは“Word families”であるが、Bauer, Nation (1993: 253)曰く、「word family」という概念の背景にある重要な原理は、一度、元となる語 (base word)、もしくは派生語を覚えれば、その word family の他の構成員を理解する労力は少なく済む、または、まったく労力を要さない」。

sacrilege + *-ous* = *sacrilegious* → 規則性が低い) .

- 2) 基本形の発音形態の規則性: 接辞が付加された際, どの程度発音が変化するか. 接辞を除去した際, 残った形態が自由形態素 (free form) であるかどうか (例: *-ify* の付加は, *quantify* のように, 語幹の前の音節の脱落をもたらすため, 規則的ではない).
- 3) 接辞の綴り形態の規則性: 初期レベルに配される接辞は極めて正書法に忠実である. 例えば, *pre-* は綴りの形態が 1 つしかない. 一方, ネガティブな内容を表す *in-* には, *im-*, *il-*, *ir-* といった異形態が存在する. これらは, 一見関係しているようには見えない.
- 4) 接辞の発音形態の規則性: 初期レベルの接辞は, 予測可能な音声形態を有しており, 比較的理解が簡単である (例: レベルの設定に際して, 屈折接辞の *-s* と *-ed* には 3 つの形態があることを考慮する).
- 5) 機能の規則性: 接辞がどの品詞に付いて, 派生語の品詞は何になるのかといった規則性を指す (例: *-ess* は常に名詞に付いて名詞を形成する) .

このような基準を設定した上で, Bauer, Nation (1993) は書き言葉に焦点を当てて英語の接辞を 7 つにレベル分けしていった. 以下に 7 つのうち 6 つのレベルを挙げる¹⁸¹.

表 54. 英語接辞のレベル分けの例 (Bauer, Nation 1993: 254) (著者が一部改変)

Lv.	例			レベルの概要
	develop	wood	bright	
1	各語形はすべて異なる語 ¹⁸²			
2	develop develops developed developing	wood wood's woods	bright brighter brightest	【屈折接辞】 ¹⁸³ 複数形, 3 人称単数現在, 過去形, 過去分詞, <i>-ing</i> 形, 比較級, 最上級, 所有格
3	developable undevlopable developer undeveloped	woody woodiness	brightly brightish brightness	【最も頻度が高く, 規則的な派生接辞】 <u>接尾辞</u> : <i>-able, -er, -ish, -less, -ly, -ness, -th, -y</i> <u>接頭辞</u> : <i>non-, un-</i> ・全ての基準がここでは適用されている.

¹⁸¹ Bauer, Nation (1993) は, レベル 7 に属す接辞を表に含めて記載していないが, そこには古典的な語根や接辞 (classical roots and affixes) が含まれる (例: *Franco-, ab-*).

¹⁸² このレベルの語の単位は, 事実上, 2.1.1. で扱ったトークンと同じであるが, Bauer, Nation (1993: 258) 自らが述べているように, 書き言葉に関してこのレベルに属する学習者はいないであろう.

¹⁸³ このレベルの語の単位は, 事実上, 2.1.3. で扱ったレマと同じである. Bauer, Nation (1993: 271) が述べているように, このレベルには, どこまでを屈折接辞として扱うかなどの問題が残る (例えば, *-ing* 形は屈折接辞としてだけでなく, 派生接辞としても機能し得る). ロシア語に関して言うと, 英語と比べて屈折のパラダイムが複雑であるため, レベル 2 の幅が広く, 学習負荷はかなり重い.

4	development developmental developmentally			【頻度が高く、綴りの規則的な派生接辞】 接尾辞: <i>-al, -ation, -ess, -ful, -ism, -ist, -ity, -ize, -ment, -ous</i> 接頭辞: <i>in-</i> ・このレベルでは、8 つの基準に優先順位がつけられている（潜在的生産性よりも頻度を重視 / 発音よりも綴りの基準を重視 → これは、話し言葉よりも書き言葉の理解に焦点が向けられているためである。
5	developmentwise semideveloed antidevelopment	wooden	brighten	【規則的だが、頻度の低い派生接辞】 ・ここに含まれる派生接辞の数はかなり多い: <i>-wise, -en, -ette, -ian, semi-, anti-</i> など
6	redevelop predevelopment			【頻度は高いが、規則的ではない派生接辞】 接尾辞: <i>-able, -ee, -ic, -ify, -ion, -ist, -ition, -ive, -th, -y</i> 接頭辞: <i>pre-, re-</i>

なお、上記派生接辞の中には、複数のレベルに重複して含まれているものがあるが、これらは意味が異なる。

Bauer, Nation (1993: 257)が述べているように、各レベルは「実用的な理由から定められており、理論的な価値を有してはいない。<...> レベル間の区分は恣意的であり、単に連続体の間に簡単に認識できるステップをつくることを目的としている」。表 54 からはレベル分けの指標として、Bauer, Nation (1993)で言うところの頻度が特に重要視されていることがわかる。学習者が会える機会を考えれば、これは妥当な判断であろう。

本章では、まず派生接辞の生起頻度（当該の派生接辞が含まれる派生語の生起頻度の合算）と実質的生产性（当該の派生接辞が含まれる派生語の個数）を計測する。この2つの基準が、効率的にロシア語の語彙力を伸ばすという観点からは最も重要であると考えた：派生語を分析する力を養うには、当該の派生接辞を伴った数多くの派生語に触れる必要があり、かつ、それらが高頻度に生起していることが望ましい。例えば、後述の分析から、形容詞を形成する *-ан/-ан-*（例：*кожаный/kožanij*「肌の」）という接尾辞は、RNC-Mにおいて生起頻度が約 240 (ipm 換算)、実質的生产性が6であることがわかる。それに対して、副詞を形成する接尾辞 *-о/-о*（例：*сильно/sil'no*「強く」）は生起頻度が約 1 万 5,000、実質的生产性が約 200 である。前者は、派生接辞の生起頻度の点では高い部類に入るが、少数の派生語の中でしか確認されない。一方、後者は生起頻度が高く、かつ、数多くの派生語に含まれている。そのため、接尾辞 *-о/-о* の方が学習優先度は高いと言える。

また、今回、綴りや発音の規則性の重要度は上記2つほど高くはないと判断した：まず、接頭辞が付加されることで基本形の形態や発音が変わる語はそれほど多くはない（分析対象の高頻度語内では *идти/idi*「進む」などの基本語に限られる）。ただし、接尾辞の付加は、語幹との繋ぎ目に頻繁に子音の交代を引き起こす（例：*г/g → ж/ž*：*книжа/kniga*「本」→ *книжный/knižnyj*「本

の」)。この現象は動詞の活用や名詞の格変化に際しても頻繁に見受けられるため、語彙学習だけでなく、文法理解のためにそもそも必要な知識である。Земская (1973: 82)が言うように、ロシア語の語形成にとって語幹と接尾辞のつなぎ目における子音の交代は最も特徴的な現象である。数多くの派生接辞においてこの現象は起こり得るため、綴りや発音が派生に際して変化することを前提として最初から学習者に導入すべきであろう。また、接辞の綴りの規則性に関して言うと、ロシア語は大幅に形態が変化する派生接辞は少ない。上記内容を考慮して、ロシア語の接辞のレベル設定において、今回は規則性という項目を設定しないこととした。

なお、受容的な語彙の学習を検討するにあたり、潜在的な生産性はかなり優先順位が低いと考える。語彙力増加でまず重要なのは、まず既存の高頻度語・基本語をいかに効率的に覚えるかである。くわえて、後述する本章の分析結果からわかることであるが、高頻度 5,000 語内で生起頻度と実質的生产性の値が高い派生接辞は、必ずしも先行研究 (cf. Земская 1973, 2007; Ефремова 1996)において潜在的生産性が高いとされる派生接辞と一致してはいない (6.3.参照)。潜在的生産性が高くとも、高頻度語内で多くの派生接辞に含まれていなければ覚える価値は低い¹⁸⁴。

一方で、意味の予測性は今後検討していかなければいけない重要な項目である。というのも、ロシア語の派生接辞、特に動詞接頭辞は多義的であるため、どの意味を学習者に提示すべきかを議論する必要がある (これに関しては本章の 6.4 にて言及する)。

本章は、生起頻度と実質的生产性の高低に基づいて、学習優先度が高い派生接辞を選定する。細かな接辞のレベル分けは、本研究のようなリストを作る段階で検討すべきではない。無理にレベルを設定しても、Bauer, Nation (1993: 257)が述べているように、そのレベル分けは恣意的なものになってしまうし、理論的価値を有していない。なにより細かなレベル設定は、実証研究や実際の教育実践を経てから実現されるべきであると考え。そのため、今回は客観的に重要性が確認できる生起頻度と実質的生产性を判断基準として用いる。

6.2.2. 分析：生起頻度と実質的生产性の計測

本章ではRNC-MとRNC-Sの高頻度 5,000 語内において確認される派生接辞すべてを対象とし、それぞれの生起頻度と実質的生产性の数値を計測する。本章における生起頻度とは、当該の派生接辞を含む派生語がコーパス内で生起した回数を意味し、実質的生产性とは、それを含む派生語の個数を意味する。

¹⁸⁴ なお、Ефремова (1996)は接辞の潜在的生産性や規則性について記述している。この研究を参考にすれば潜在的生産性や(綴りの)形態的な規則性の指標を考慮に入れた、派生接辞の学習上のレベル分けも可能である。だが、そもそもЕфремова (1996)の判断基準自体が不明瞭であるため、上記理由と合わせて、今回はこれらの指標を考慮していない。

(57) 分析手順

- a. RNC-M と RNC-S の各高頻度 5,000 語すべてを対象とし、Тихонов (1985)の記述に基づいて、派生語から派生接辞を抽出する。
- b. 各派生接辞の生起頻度と実質的生産性を計算する。
- c. 考察のためにその結果をリスト化する。

a.の段階では Тихонов (1985)の記述に基づいて、高頻度 5,000 語の中に含まれる派生語から派生接辞をすべて抜き出した。例えば、*проходить/prohodit'*「通過する」は、基本形 *ходить/hodit'*「進む」に動詞接頭辞 *про-/pro-*が付いた派生動詞であり、ここからは接頭辞 *про-/pro-*が抽出される。なお、*про-/pro-*という接頭辞は動詞だけでなく、名詞、形容詞、副詞に付加される場合があるが (cf. Ефремова 1996: 410-418), 本章の分析ではこれらを別物として扱う (*американский/amerikanskij*「アメリカの」から形成される *проамериканский/proamerikanskij*「アメリカ支持の」の *про-/pro-*は形容詞に付いており、上記のような動詞に付加される *про-/pro-*とは異なるものとして頻度を数える)。このような派生接辞の抽出作業を RNC-M と RNC-S の各高頻度 5,000 語に対して行なった¹⁸⁵。

Тихонов (1985)に記載がない語に関しては、基本的に¹⁸⁶派生接辞を抽出することはせず、そのままにしている。また、ある派生語が同形異義語として本源形としても存在している場合は、Тихонов (1985)の記述に従って分析せずにそのままとする。例えば、*перевести/perevesti*は「移す」の意味では派生語であるが (*непе-/pere- + вести/vesti*「導く」)、「翻訳する」の意味では本源形として別個に記載されている。このような場合、*перевести/perevesti*を本源形と考え、*непе-/pere-*と *вести/vesti*に分析することはしない¹⁸⁷。

次に (b.の段階)、a.の段階で抽出された派生接辞毎に生起頻度と実質的生産性を計測する。例えば、RNC-M と RNC-S における動詞接頭辞 *про-/pro-*の両値は次の通りである。

¹⁸⁵ 自動で派生接辞の頻度や個数を計算するコンピューターのプログラムは、著者の知る限りロシア語には存在しない。そのため、本章では、RNC-M と RNC-S の計 10,000 語を Тихонов (1985)の記述に従って手動で分析した。

¹⁸⁶ Тихонов (1985)に記載がなくとも、明らかに派生の関係が確認できる場合は、当該の派生語から派生接辞を抽出する。例えば、*вкусный/vkusnyj*「美味しい」に指小形を形成する接尾辞 *-еньк/-en'k-*が付加されてできる *вкусненький/vkusnen'kij*は、*вкусный/vkusnyj*の派生語として Тихонов (1985)に記載されていないが、本章では両者は派生の関係にあると考え、分析に際してこの接尾辞を抽出する。

¹⁸⁷ a.の作業は共時的な観点から行う。Земская (1973: 8)が言うように、派生語の分析の解釈に関して共時的・通時的観点は必ずしも一致しない。例えば、本章の分析対象に含まれる *зонтик/zontik*「小さな傘」は、共時的には *зонт/zont*「傘」に指小形をつくる *-ик/-ik*が付いた派生語と解釈される (cf. Тихонов 1985)。ただ、歴史的には *зонтик/zontik*は *зонт/zont*よりも発生が早く、後に語末の *-ик/-ik*が指小形を形成する要素だと解釈されるようになり、結果、*зонт/zont*という語が生まれた (Земская 1973: 8-9)。本章は、このような語形成の過程の共時的・通時的な解釈の違い (ここでは逆成の例)に際して、語の分析基準をあくまで共時的な観点に求める (つまり、*-ик/-ik*を抽出する)。

表 55. RNC-M と RNC-S における動詞接頭辞 *npo-/pro-* の生起頻度と実質的生産性

	RNC-M	RNC-S
生起頻度 (ipm)	1,942.4	1,615.3
実質的生産性	29	40

上記の表は、動詞接頭辞 *npo-/pro-* が RNC-M にて 29 個の動詞に含まれており、その生起頻度が ipm 換算で 1,942.4 であることを示している。RNC-S では 40 の動詞の中で *npo-/pro-* は確認され、その生起頻度の合計は 1,615.3 である。このような作業を、分析対象の語に含まれる派生接辞すべてに対して行なった。

最後に (c. の段階)、後述の考察のためにその結果をリストにまとめた。ただ、b. の分析作業において特記すべき事項がいくつか存在する。そのため、次節からそれらに関する特筆事項を確認しながら、派生接辞を接頭辞、接尾辞、そしてその他に分けて分析結果を提示する。

6.2.2.1. 接頭辞の分析と結果

6.3.1. で詳細に述べるが、分析の結果、RNC-M と RNC-S の高頻度 5,000 語内には動詞に付加される接頭辞が非常に多く含まれていることがわかった。語形成の過程を考えた場合、動詞接頭辞は 2 つに大別される。そこで、分析の結果をまとめた表には、「動詞①」と「動詞②」という項目を設定した。

(58) 動詞①と動詞②の欄の見方

a. 動詞① 1) брать → 2) убирать b. 動詞② 1) брать → 2) убирать → 3) уборка

brat'	ubrat'	brat'	ubrat'	uborka
take-V.	clean-V.	take-V.	clean-V.	cleaning-N.
「取る」	「掃除する」	「取る」	「掃除する」	「掃除」

例えば、a. の 2) *убирать/ubrat'* 「掃除する」は、基本形である動詞 1) *брать/brat'* 「取る」に動詞接頭辞 *y-/u-*¹⁸⁸ が付いた派生語である。このように、「動詞に付いている」動詞接頭辞だけを対象として生起頻度と実質的生産性をカウントするやり方を「動詞①」とする。一方、b. の 3) *уборка/uborka* 「掃除」は、1) *брать/brat'* に動詞接頭辞 *y-/u-* が付いた 2) *убирать/ubrat'* に対して、さらに接尾辞 *-к/-k-*¹⁸⁹ が付加されてできた派生語である。この語は動詞 *убирать/ubrat'* からの派生名詞であるが、

¹⁸⁸ 動詞接頭辞 *y-/u-* はさまざまな意味を有するが (cf. АН СССР 1980: 371-372; Ефремова 1996: 467-469), その基本的・空間的な意味は「MOVE AWAY / 去る・去らせる」である (cf. Janda et al. 2013: 30-41). *убирать/ubrat'* において *y-/u-* はこの意味で基本形に付加されている。

¹⁸⁹ ここでは、接尾辞 *-к/-k-* は基本形である動詞に付いて、その基本形が表す行為の特徴をもった名詞を形

ここに含まれる *y-/u-* は名詞ではなく動詞に付加された接頭辞である。b. のように、他の品詞の語に動詞接頭辞が存在する場合は「動詞②」に分類して生起頻度と実質的生産性を計測する (6.3.2. で言及するゼロ接尾辞化に際して動詞②の例は頻繁に観察される / 例: *ходить/hodit'* 「進む」 → *приходить/prihodit'* 「着く」 → *приход/prihod* 「到着」)。

また、1 つの派生語に 2 つの動詞接頭辞が付いている場合、語形成の過程において最後に付加された方のみを計測の対象とする。

(59) 動詞接頭辞が 2 つ付いている派生語

a. водить	→	b. проводить	→	c. сопровождать
vodit'	→	provodit'	→	soprovodit'
take-V.		lead-V.		accompany-V.
「連れていく」		「送る」		「同伴する」

上記 c. *сопроводить/soprovodit'* 「同伴する」は、まず a. *водить/vodit'* 「連れていく」に動詞接頭辞 *про-/pro-* が付き、その結果形成された b. *проводить/provodit'* 「送る」にさらに動詞接頭辞 *c-/s-* (*co-/so-*)¹⁹⁰ が付加されてできた派生動詞である¹⁹¹。この場合、*сопроводить/soprovodit'* の基本形は a. *водить/vodit'* ではなく b. *проводить/provodit'* である。*сопроводить/soprovodit'* を理解するのに、動詞接頭辞 2 つと基本形の知識が必要と考えると、その学習負荷はかなり大きいと推測される。そのため、基本形から数えて 1 つ目の接頭辞、つまり、本源形から 2 つ目の動詞接頭辞のみを分析対象とした (*сопроводить/soprovodit'* であれば、*c-/s-* (*co-/so-*) がこれに該当する)。ただ、RNC-M と RNC-S 両方においてこのような例は 10 を下回る¹⁹²。

他にも、生起頻度と実質的生産性の計測上の問題として、語形成の過程が 2 通り想定される場合が挙げられる。例えば、否定の意味を表す接頭辞 *не-/ne-* は、形容詞と副詞の両方に付加され得

成している (АН СССР 1980: 130)。

¹⁹⁰ *c-/s-* (*co-/so-*) のように、本稿は異形態を()内に記す。

¹⁹¹ ここでは、*про-/pro-* は「DISTANCE / ある距離を通過する動作」の意味で *водить/vodit'* に付加されている (なお、この接頭辞の意味に関しては 7 章で詳細に扱う)。また、2 つ目の接頭辞 *c-/s-* (*co-/so-*) は、「共同で行う動作」の意味で基本形に付加されていると考えられる (cf. Ефремова 1996: 438)。

¹⁹² この場合における *co-/so-* のような 2 つ目の動詞接頭辞は、あまり盛んに研究されておらず、記述も少ない。ただ、Beliakov, Guiraud-Weber (1997) は、2 つ目の動詞接頭辞は空間的な意味を示すことはないと言っている。また、1 つ目の動詞接頭辞と異なり、動詞語幹と直接関係していないため、動詞に与える意味が限定的である、といった特徴も挙げている。

接頭辞は接尾辞よりも語彙的であるため、ふつう他の接頭辞と結びついた時でもその意味は弱くならないとされるが (Янко-Триницкая 2001: 250)、上記のような 1 つ目と 2 つ目の接頭辞で異なる特徴も指摘されている。本稿では、2 つ目の動詞接頭辞が付いた動詞の例は非常に少ないため、深い議論は行わないが、本来、1 つ目の動詞接頭辞とは分けて扱うべきであろう。

る (АН СССР 1980: 402). そのため、副詞 *неинтересно/neinteresno* 「面白くなく」がどのような過程で形成されたかに関しては、以下の2通りの解釈が考えられる。

(60) 2通りの解釈が可能な語形成の過程の例

- a. 解釈①: 1) интересный → 2) неинтересный → 3) неинтересно
- | | | |
|------------------|----------------------|------------------------|
| interesnyj | neinteresnyj | neinteresno |
| interesting-ADJ. | not_interesting-ADJ. | not_interestingly-ADV. |
| 「面白い」 | 「面白くない」 | 「面白くなく」 |
- b. 解釈②: 1) интересный → 2) интересно → 3) неинтересно
- | | | |
|------------------|--------------------|------------------------|
| interesnyj | interesno | neinteresno |
| interesting-ADJ. | interestingly-ADV. | not_interestingly-ADV. |
| 「面白い」 | 「面白く」 | 「面白くなく」 |

a.における3) *неинтересно/neinteresno* 「面白くなく」は、形容詞である2) *неинтересный/neinteresnyj* 「面白くない」を基本形とし、そこに接尾辞 *-o/-o* (6.3.2.参照) が付いて形成された副詞である。一方、b.における3) *неинтересно/neinteresno* は、副詞である2) *интересно/interesno* 「面白く」に接頭辞 *не-/ne-* (6.3.1.参照) が付加されたできた副詞である。

上記のケースが本稿の分析対象内には大量に確認される。これが、例えば、b.の副詞に対する接頭辞付加の例であるという確固たる根拠はないが (Янко-Триницкая 2001: 314-315), 本章では便宜的に b.の例として処理する (つまり、形容詞ではなく、副詞に付いた *не-/ne-* として扱う)。

なお、本稿では生起頻度と実質的生産性の計測に際して、異形態は主に Ефремова (1996) に基づいて1つにまとめている (例: 動詞接頭辞 *o-/o-* と *об-/ob-* は1つに集約する) ¹⁹³。

以上の注意事項を踏まえて各接頭辞の生起頻度と実質的生産性を計算した。結果は以下の通りである。

¹⁹³ Янда (2013: 12) が述べているように、接頭辞の異形態に関して数多くの理論的研究や記述がなされてきた: 例えば, Townsend (1975: 127), Барыкина и др. (1989: 29), Зализняк, Шмелёв (2000: 83), Timberlake (2011: 404), Wade (2011: 287) などは、動詞接頭辞 *o-/o-* と *об-/ob-* を異形態の関係にあるとして1つの接頭辞と捉えているが、АН СССР (1980) は逆の立場を取っている。ただ、異形態のそれぞれ (*o-/o-* と *об-/ob-*) に当該の接頭辞のすべての意味が備わっているかどうかは難しい問題である。

o-/o- と *об-/ob-* を1つにまとめるにはこの問題を検討しなければならないが、これは本稿の議論の範囲外である。また、語彙学習に派生接辞の知識を利用する上で、このような厳密な区分が必要であるとも思えない。ここでは、上記参考文献に倣って接頭辞の異形態を認め、例えば、*o-/o-* と *об-/ob-* を1つの接頭辞として扱う。

表 56. RNC-M の高頻度 5,000 語内における接頭辞の生起頻度と実質的生産性¹⁹⁴

接頭辞 ¹⁹⁵	基本形の品詞 ¹⁹⁶	例	RNC-M	
			生起頻度 (ipm)	実質的生産性
без-	名詞	/	0	0
	形容詞	безопасный	161.1	2
	副詞	/	0	0
в-	動詞①	войти	661.8	9
	動詞②		871.2	14
	副詞	/	0	0
вз-	動詞①	вспомнить	559.1	6
	動詞②		981.1	10
	名詞	/	0	0
воз-	動詞①	возмущаться	185.0	6
	動詞②		378.1	10
вы-	動詞①	выйти	2,818.7	40
	動詞②		3,750.5	54
до-	動詞①	допить	309.0	7
	動詞②		412.6	8
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	/	0	0
за-	動詞①	заговорить	1,918.4	48
	動詞②		2,987.0	67
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	заранее	63.0	1
из-	動詞①	изучить	378.1	9
	動詞②		666.5	17
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	/	0	0
кое-	代名詞	кое-что	42.4	1
на-	動詞①	написать	1,632.0	22
	動詞②		2,487.6	30
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0

¹⁹⁴ АН СССР (1980)には 90 近い接頭辞が記載されているが、表には RNC-M において確認されたものしか記載していない：「反，非，対」を意味する接頭辞 *антн-/-anti-* は名詞と形容詞に付き得るが、本章の分析対象内で確認されなかったため、表にはそもそも記載がない。なお、表 57 にもこれは適用される。

¹⁹⁵ この欄には異形態を記載せずに、Ефремова (1996) が代表的であるとしている形態を載せている。また、表 57 にも同様のことが当てはまる。なお、各異形態を代表する形態は、生起する位置に汎用性がある、もしくは生起頻度が高いものであるなどの決め方がある (Янко-Триницкая 2001: 51-52) (例えば、*c-/s-* と *co-/so-* であれば *c-/s-*)。

¹⁹⁶ 接頭辞が付加される品詞の情報は、アカデミー文法 (АН СССР 1980) の記述に基づく。また、表には当該の接頭辞が付加され得る品詞すべてを列挙してある。なお、表 57 にもこれは当てはまる。

	副詞	навсегда	98.5	2
над-	動詞①	надписать	49.9	1
	動詞②		49.9	1
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
най-	形容詞	наибольший	32.5	1
не-	名詞	неудача	130.3	4
	形容詞	небольшой	1,473.6	27
	副詞	неплохо	1,000.8	20
	代名詞	негде	918.8	6
ни-	代名詞	нигде	2,484.4	7
о-	動詞①	обойти	772.8	22
	動詞②		1,742.2	39
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	/	0	0
от-	動詞①	открыть	1,261.4	21
	動詞②		2,141.1	33
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	откуда	336.9	4
пере-	動詞①	перевести	569.0	11
	動詞②		973.7	19
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
по-	動詞①	поставить	5,479.9	73
	動詞②		7,498.3	108
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	/	0	0
под-	動詞①	подготовить	883.5	15
	動詞②		1,462.0	24
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	/	0	0
пре-	動詞①	прервать	84.3	3
	動詞②		152.3	5
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
пред-	動詞①	предстоять	228.7	4
	動詞②		256.8	5
	名詞	/	0	0
	形容詞	предыдущий	55.3	1
при-	動詞①	прибежать	2,628.5	31
	動詞②		3,012.4	42

	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
про-	動詞①	пропустить	1,628.3	21
	動詞②		1,942.4	29
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	/	0	0
противо-	動詞①	противоположить	43.4	1
	動詞②		43.4	1
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
раз-	動詞①	разбить	1,454.2	27
	動詞②		2,400.5	43
	名詞	разум	84.7	3
	形容詞	/	0	0
с-	動詞①	сделать	3,808.5	47
	動詞②		5,468.8	70
	名詞	/	0	0
	副詞	свыше	24.2	1
у-	動詞①	увидеть	3,047.2	38
	動詞②		4,658.3	62
	名詞	/	0	0

表 57. RNC-S の高頻度 5,000 語内における接頭辞の生起頻度と実質的生産性

接頭辞	基本形の品詞	例	RNC-S	
			生起頻度 (ipm)	実質的生産性
без-	名詞	/	0	0
	形容詞	безопасный	18.9	1
	副詞	/	0	0
в-	動詞①	войти	400.7	12
	動詞②		486.5	16
	副詞	/	0	0
вз-	動詞①	вспомнить	252.0	4
	動詞②		330.0	7
	名詞	/	0	0
воз-	動詞①	возмущаться	10.1	1
	動詞②		41.6	2
вы-	動詞①	выйти	2,774.4	61
	動詞②		3,148.7	72
до-	動詞①	допить	551.9	16
	動詞②		567.0	17
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	/	0	0

за-	動詞①	заговорить	2,947.5	71
	動詞②		3,257.4	81
	名詞	заграница	10.1	1
	形容詞	заочный	26.5	2
	副詞	заранее	55.5	2
из-	動詞①	изучить	354.0	11
	動詞②		375.4	12
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	/	0	0
кое-	代名詞	кое-что	54.2	2
на-	動詞①	написать	1,982.9	34
	動詞②		2,224.7	40
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	навсегда	93.2	3
над-	動詞①	надписать	0	0
	動詞②		12.6	1
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
не-	名詞	несчастье	50.4	2
	形容詞	небольшой	845.6	24
	副詞	неплохо	1,223.2	22
	代名詞	негде	312.5	6
ни-	代名詞	нигде	3,957.4	9
о-	動詞①	обойти	338.9	19
	動詞②		589.7	33
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	/	0	0
от-	動詞①	открыть	1,246.2	28
	動詞②		1,734.0	41
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	откуда	492.6	4
пере-	動詞①	перевести	840.3	27
	動詞②		1,034.4	33
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
по-	動詞①	поставить	9,217.1	122
	動詞②		9,694.5	140
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	/	0	0
под-	動詞①	подготовить	1,044.4	19

	動詞②	подготовить	1,244.9	28
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	/	0	0
поза-	形容詞	/	0	0
	副詞	позавчера	26.5	1
после-	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	послезавтра	22.7	1
пра-	名詞	прадед	12.6	1
пред-	動詞①	/	0	0
	動詞②		0	0
	名詞	/	0	0
	形容詞	предыдущий	23.9	1
при-	動詞①	прибежать	4,166.6	30
	動詞②		4,388.3	37
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
про-	動詞①	пропустить	1,388.4	31
	動詞②		1,615.3	40
	名詞	/	0	0
	形容詞	/	0	0
	副詞	/	0	0
раз-	動詞①	разбить	1,589.9	33
	動詞②		1,868.4	38
	名詞	разум	22.7	2
	形容詞	/	0	0
с-	動詞①	сделать	5,053.6	65
	動詞②		5,794.4	79
	名詞	/	0	0
	副詞	/	0	0
у-	動詞①	увидеть	3,101.0	43
	動詞②		3,431.0	56
	名詞	/	0	0

この結果は 6.3.1. で考察する.

6.2.2.2. 接尾辞の分析と結果

接頭辞と同様に、接尾辞の異形態も、主に Ефремова (1996) の記述に基づいて 1 つにまとめて扱う。例えば、接尾辞 *-а/-а-* と *-я/-я-* は、対応する完了体動詞から第 1 変化の不完了体動詞や多回性を有した不完了体動詞を形成するが、これらは異形態の関係にある (cf. АН СССР 1980: 350; Ефремова 1996: 26-27).

(61) 接尾辞の異形態の例 (不完了体を形成する接尾辞-aと-я-)

- | | | | | |
|----|------|--------------------------|---|---------------------------|
| a. | -a-: | воскликнуть | → | воскликать |
| | | voskliknut' | | vosklikat' |
| | | feel_admiration-PFV. | | feel_admiration-IPFV. |
| | | 「感嘆する」 | | 「感嘆する」 |
| b. | -я-: | оформить | → | оформлять |
| | | oformit' | | oformlât' |
| | | make_an_arrangement-PFV. | | make_an_arrangement-IPFV. |
| | | 「手続きする」 | | 「手続きする」 |

上記接尾辞は、異形態として両者の関連性がはっきりとしており、本章ではこれらを1つにまとめて扱う。なお、異形態をすべて別物として扱うと分析対象数が増えすぎて（特に、ロシア語の接尾辞には異形態を持つものが多い）、どの派生接辞の優先順位が高いのか議論しづらいという現実的な理由もある¹⁹⁷。

また、接尾辞の生起頻度と実質的生産性を計測するにあたっていくつか注意点がある。まず、ある派生語が本源形からどのように形成されたのかを見ると、複数の接尾辞付加を経ている場合が多い。例えば副詞 *интересно/interesno* 「面白く」と *бегом/begom* 「走って」は以下のような過程を経て形成されている。

(62) 複数の接尾辞が付加されている派生語の例 (ТИХОНОВ (1985)の記述に基づく)

- | | | | | | | | |
|----|-------------|---|------------------|---|--------------------|---|--------------|
| a. | 1) интерес | → | 2) интересный | → | 3) интересно | | |
| | interes | | interesnyj | | interesno | | |
| | interest-N. | | interesting-ADJ. | | interestingly-ADV. | | |
| | 「興味」 | | 「面白い」 | | 「面白く」 | | |
| b. | 1) бежать | → | 2) бегать | → | 3) бег | → | 4) бегом |
| | bežat' | | begat' | | beg | | begom |
| | run-DTV. | | run-IDTV. | | running-N. | | running-ADV. |
| | 「走る」 | | 「走る」 | | 「走り」 | | 「走って」 |

197 接尾辞の中には形態的に異なっているものの、類似の意味を有したものが多い。そのため、「意味的に同じで、形態的に異なっている派生接辞を、それらがたとえ自由変異や相補分布の関係になくとも、1つの形態素にまとめる言語学者もいる。これは、意味的に同じ形態は、音素構成の近似性に関係なく1つの形態素にまとめるべきであるという考えに基づく」(Земская 1973: 166)。例えば、Г.С. Зенковは名詞を形成する *-тел'/'tel'* と *-льщик/'l'sik*, *-ний/'-nij-* と *-к-* を1つに集約している (Земская 1973: 166)。

ただ、Лопатин (1977: 262)が言うように、*-mel'/-tel'*と*-лыцук/-l'sik*のような形態的近似性を持たないペアは、本質的に*-mel'/-tel'*と*-umel'/-itel'*とは異なっているため、本章でも形態的・意味的に類似性のある異形態しか認めない。

a.の3) *интересно/interesno*「面白く」に関して言うと、まず1) *интерес/interes*「興味」に形容詞を形成する接尾辞-н/-н-が付いて2) *интересный/interesnyj*「面白い」が形成される。次に、副詞を形成する接尾辞-о/-о が2)に付加されることで3) *интересно/interesno* が作られる。本稿は派生接辞を用いた語彙学習法を検討しているが、接尾辞の生起頻度と実質的生産性をカウントする際、対象とするのは最後の接尾辞、すなわち、この場合で言えば-о/-о のみとする¹⁹⁸。3) *интересно/interesno* の内部には-н/-н-は見えているが、この副詞が *интерес/interes* → *интересный/interesnyj* → *интересно/interesno* という語形成の過程を経てできた語であると捉えるのは、学習者には難しいと思われる。-н/-н-を考慮せずに、形容詞の基本形である2) *интересный/interesnyj* と副詞を派生する接尾辞-о/-о の知識があれば、3) *интересно/interesno* の意味が予想可能である、または暗記の負担が減ると考える方が妥当であろう。

b.の例からもこの措置が妥当であることがわかる。4) *бегом/бегом*「走って」に関しては、まず定動詞1) *бежать/bežat'*「走る」から接尾辞-а/-а-によって不定動詞の2) *бегать/begat'*「走る」が形成される。次に、それがゼロ接尾辞化 (нулевая суффиксация / 6.3.2.にて言及する) によって3) *бег/beg*「走り」となり、そこに接尾辞-ом/-ом が付加されて4) *бегом/begom* が形成される。副詞 *бегом/begom* の形態から、その前までに用いられている-а/-а-とゼロ接尾辞の存在に気づくのは、専門的な知識がない限りは無理であろう。本章では、名詞 *бег/beg* と副詞を形成する-ом/-ом の知識があれば、*бегом/begom* の意味の暗記がしやすくなる、または意味が予測できると考える。そのため、このような場合も最後の接尾辞である-ом/-ом しか計算の対象としない。

なお、ごくわずかではあるが、接尾辞には Тихонов (1980)や Ефремова (1996)でその記述を確認できないものがある (特に形容詞を形成するゼロ接尾辞)。その場合、АН СССР (1980)などを参考にして著者が自ら判断し、それらの派生接辞の生起頻度と実質的生産性を計算した (それでも、判別不能の接尾辞は分析せずにそのままとする)。

上記分析手法に基づいて、接尾辞の生起頻度と実質的生産性をカウントすると、次のような結果が得られる (なお、接尾辞は数が多いため、実質的生産性が5よりも上のものを記載の対象とした¹⁹⁹)。

¹⁹⁸ 2章で言及したが、-о/-о は形容詞の短語尾中性形と同形であり (Borras, Christian 1971: 240)、派生ではなく屈折を表す語尾としても捉えられる。同様に、b.の *бегом/begom* における-ом/-ом は男性名詞の単数造格の語尾としても解釈できる。ただ、これらの接尾辞を Тихонов (1985), Ефремова (1996)は派生接辞として分析しているため、本章もこれに従う。なお、-о/-о に関しては6.3.2で再度言及する。

¹⁹⁹ 接頭辞と同様に、表には Ефремова (1996)が規定する最も代表的な形態を記載する (これは、表59～表62にも当てはまる)。接尾辞の異形態に関しては6.3.2.の考察で言及する。

表 58. RNC-M における接尾辞の生起頻度と実質的生産性

	接尾辞	例	生起頻度 (ipm 換算)	実質的生産性	概要
1.	-а-	вступать	11,994.3	194	動詞を形成
2.	-альн-	идеальный	1,165.2	20	形容詞を形成
3.	-ан-	кожаный	237.9	6	形容詞を形成
4.	-ациј-	организация	1,725.5	22	名詞を形成
5.	-ая	столовая	174.2	6	名詞を形成
6.	-б-	дружба	611.4	6	名詞を形成
7.	-ва-	давать	2,674.9	40	動詞を形成
8.	-ениј-	падение	10,161.4	164	名詞を形成
9.	-енн-	жизненный	2,260.1	35	形容詞を形成
10.	-еств-	одиночество	766.3	8	名詞を形成
11.	-ец	японец	210.4	7	名詞を形成
12.	-и-	верить	3,781.8	69	動詞を形成
13.	-иј- [-ие]	отличие	1,688.7	21	名詞を形成
14.	-иј- [-ия]	претензия	348.4	6	名詞を形成
15.	-ива-	оценивать	2,451.2	49	動詞を形成
16.	-ик	историк	736.6	16	名詞を形成
17.	-ин-	глубина	437.8	7	名詞を形成
18.	-иц-	красавица	321.6	6	名詞を形成
19.	-ическ-	исторический	875.1	22	形容詞を形成
20.	-к-	шутка	3,872.4	81	名詞を形成
21.	-н-	западный	9,548.5	183	形容詞を形成
22.	-н’-	вечерний	922.0	14	形容詞を形成
23.	-ниј-	понимание	4,824.7	72	名詞を形成
24.	-ник	охранник	856.6	19	名詞を形成
25.	-нн-	указанный	506.3	6	形容詞を形成
26.	-ну-	махнуть	1,179.9	24	動詞を形成
27.	-о	сильно	14,711.6	197	副詞を形成
28.	-ов-	торговый	1,165.6	21	形容詞を形成
29.	-ова-	голосовать	1,408.2	22	動詞を形成
30.	-ое	главное	885.8	12	名詞を形成
31.	-ок	звонок	1,094.4	23	名詞を形成
32.	-ор	редактор	466.6	10	名詞を形成
33.	-ост’	усталость	3,977.0	66	名詞を形成
34.	-от-	высота	419.6	9	名詞を形成
35.	-ск-	английский	4,953.6	68	形容詞を形成
36.	-ств-	знакомство	1,599.6	23	名詞を形成
37.	-т-	закрытый	347.9	8	形容詞を形成
38.	-тел’	водитель	1,968.0	28	名詞を形成
39.	-тель/ств-	издательство	597.8	6	名詞を形成
40.	-тельн-	строительный	716.6	15	形容詞を形成
41.	-тиј-	открытие	1,100.4	8	名詞を形成
42.	-ч-	удача	517.6	6	名詞を形成
43.	-ые	родные	433.1	6	名詞を形成
44.	-ющ-	окружающий	660.5	8	形容詞を形成
45.	ゼロ接尾辞 (形容詞)	добрый	732.2	12	形容詞を形成
46.	ゼロ接尾辞 (名詞)	приход	16,498.6	169	名詞を形成

表 59. RNC-S における接尾辞の生起頻度と実質的生産性

	接尾辞	例	生起頻度 (ipm 換算)	実質的生産性	概要
1.	-а-	вступать	10,581.8	207	動詞を形成
2.	-альн-	идеальный	679.1	10	形容詞を形成
3.	-ациј-	организация	237.0	8	名詞を形成
4.	-ая	столовая	194.0	10	名詞を形成
5.	-ва-	давать	3,447.2	50	動詞を形成
6.	-е-	болеть	415.8	7	動詞を形成
7.	-ениј-	падение	1,547.4	49	名詞を形成
8.	-енн-	жизненный	384.4	14	形容詞を形成
9.	-еньк-	вкусненький	919.8	18	形容詞を形成
10.	-и-	верить	4,868.4	94	動詞を形成
11.	-иј-	участие	102.1	6	名詞を形成
12.	-ива-	оценивать	3,069.2	72	動詞を形成
13.	-ик	историк	706.9	35	名詞を形成
14.	-ирова-	фотографировать	112.1	7	動詞を形成
15.	-иц-	красавица	316.3	8	名詞を形成
16.	-ическ-	исторический	108.4	8	形容詞を形成
17.	-к- [-ка]	шутка	4,780.4	158	名詞を形成
18.	-к- [-ко]	молочко	102.0	7	名詞を形成
19.	-н-	западный	4,412.8	132	形容詞を形成
20.	-надцать	семнадцать	686.7	9	数詞を形成
21.	-н’-	вечерний	427.2	11	形容詞を形成
22.	-ниј-	понимание	918.5	35	名詞を形成
23.	-ник	охранник	352.8	15	名詞を形成
24.	-ниц-	учительница	259.5	7	名詞を形成
25.	-ну-	махнуть	619.9	21	動詞を形成
26.	-о	сильно	20,621.3	185	副詞を形成
27.	-ов-	торговый	389.4	22	形容詞を形成
28.	-ова-	голосовать	778.8	21	動詞を形成
29.	-ое	главное	786.2	17	名詞を形成
30.	-ок	звонок	900.8	35	名詞を形成
31.	-ор	редактор	136.0	11	名詞を形成
32.	-ост’	усталость	607.1	29	名詞を形成
33.	-очк-	лампочка	137.4	8	名詞を形成
34.	-ск-	английский	1,449.1	51	形容詞を形成
35.	-ств-	знакомство	288.5	11	名詞を形成
36.	-тел’	водитель	617.3	13	名詞を形成
37.	-щик	поставщик	162.5	10	名詞を形成
38.	ゼロ接尾辞 (形容詞)	добрый	1,347.1	21	形容詞を形成
38.	ゼロ接尾辞 (名詞)	приход	7,650.3	135	名詞を形成

この分析結果は 6.3.2. で考察する。

6.2.2.3. 後接辞, 接周辞, 連接辞の分析と結果

ここでは, 後接辞, 接周辞, 連接辞 (интерфикс) の生起頻度と実質的生産性を計測するが,

これら 3 つの分析は Тихонов (1985) の記述に依拠する。まず, АН СССР (1980) が後接辞として挙げていて, 本章の分析対象に含まれているものは以下の 4 つのみである。

表 60. RNC-M と RNC-S における後接辞の生起頻度と実質的生産性

	後接辞	例	RNC-M		RNC-S	
			生起頻度 (ipm 換算)	実質的 生産性	生起頻度 (ipm 換算)	実質的 生産性
1.	-либо	что-либо	89.2	2	0	0
2.	-нибудь	какой-нибудь	469.0	6	1,393.5	7
3.	-то	кто-то	2,524.4	11	6,477.4	18
4.	-ся	кончаться	12,536.5	207	9,690.1	245

RNC-M と RNC-S において確認された, 5 以上の実質的生産性をもつ接周辞は, 次の 5 つのみである (なお, 両コーパスに共通して確認された接周辞は 2 つのみである)。

表 61. RNC-M と RNC-S における接周辞の生起頻度と実質的生産性

	接周辞	例	RNC-M		RNC-S	
			生起頻度 (ipm 換算)	実質的 生産性	生起頻度 (ipm 換算)	実質的 生産性
1.	в-...-ゼロ接尾辞	вконец	549.7	8	0	0
2.	о-...-и-	освободить	394.4	8	0	0
3.	по-...-ому	по-другому	225.5	6	350.3	6
4.	с-...-а	сначала	711.4	6	505.3	6
5.	у-...-и-	улучшить	0	0	136.1	6

最後に, 接続辞の分析結果を挙げる。接続辞は, 分析対象内においてそもそも確認された種類が少なく, 実質的生産性が 5 を超えたものは *-о-/-о-* のみである。

表 62. RNC-M と RNC-S における接続辞の生起頻度と実質的生産性

	接続辞	例	RNC-M		RNC-S	
			生起頻度 (ipm 換算)	実質的 生産性	生起頻度 (ipm 換算)	実質的 生産性
1.	-о-	языкознание	776.9	20	417.0	14

これらの分析結果は 6.3.3. で考察する。

6.3. 分析結果の考察

ここでは²⁰⁰, 6.2.2 の分析によって抽出された派生接辞の生起頻度と実質的生産性を、接頭辞、接尾辞、その他（後接辞、接周辞、連接辞）に分けて考察する。

6.3.1. 分析結果の考察：接頭辞

ロシア語の接頭辞は、基本形に付加される際に派生語の品詞を変えない (Земская 1973: 33). そして、接頭辞は必ずしも特定の品詞と密接な関係にあるというわけではなく、名詞、形容詞、動詞、副詞、代名詞など様々な品詞と結び付く (cf. АН СССР 1980). Земская (1973: 35)は、ロシア語の接頭辞は、主に動作を表す動詞、特徴を表す形容詞や副詞と結び付きが強く、一方で名詞との結合はあまり典型的ではない、としている。

また、Земская (2007: 77)によると、新語の形成に関しては、過去数十年から現在まで名詞や形容詞に付加される接頭辞（例：「否定」を意味する *не-/ne-*, 「超過」を意味する *сверх-/sverh-*, 「反」を意味する *противо-/protivo-*, 「超」を意味する *супер-/super-*）が活発に用いられている²⁰¹.

ただ、表 56 と表 57 の結果からわかるように、RNC-M と RNC-S における高頻度 5,000 語内で確認される接頭辞は動詞に付くものが大半を占めており、名詞、形容詞、副詞、代名詞に付く接頭辞の生起頻度と実質的生産性はいくつかの例外を除けば極めて低い。生起頻度の高低に基づいて、表 56 と表 57 の順位を入れ替えると、以下のような結果が得られる（表には上位 25 の接頭辞を記載した）。

²⁰⁰ 6.3.では、ここまでに得られた分析結果を考察するが、生起頻度と実質的生産性に基づいて、客観的に言えることだけでなく、若干ではあるが、主観的に言えることも合わせて記述する。当然、後者の意見は、教育経験や実証研究を経て醸成されるべきであるが、これは今後の課題としたい。

²⁰¹ Земская (2007)の研究は、現代ロシア語で新しく生まれてくる語を分析対象とし、潜在的な生産性、つまり、新語を形成する能力を考察しており、例えば、以下の動詞接頭辞は新語の形成において活動的であるとしている：

- | | |
|-----------------------|---|
| a. <i>за-/za-</i> | (動作の開始) : <i>закуковать/zakukovat'</i> 「(かっこうが) 鳴き始める」 |
| b. <i>по-/po-</i> | (軽度・短時間で終わる動作) : <i>поослабнуть/pooslabnut'</i> 「徐々に、少し弱まる」 |
| c. <i>под-/pod-</i> | (軽度の動作) : <i>подустать/podustat'</i> 「少し疲れる」 |
| d. <i>пере-/pere-</i> | (再び) : <i>перепрописать/perepropisat'</i> 「再登記する」 |
| e. <i>от-/ot-</i> | (過程の終了) : <i>отголубеть/otgolubet'</i> 「水色ではなくなる」 |
| f. <i>на-/na-</i> | (強度の動作) : <i>накрутить/nakrutit'</i> 「しっかりと締める」 |
| g. <i>раз-/raz-</i> | (廃止) : <i>размонтировать/razmontirovat'</i> 「分解する」 |

表 63. RNC-M と RNC-S の高頻度 5,000 語内における接頭辞の生起頻度と実質的生産性（頻度順）

順位	接頭辞 ²⁰²	基本形の品詞	RNC-M		順位	接頭辞	基本形の品詞	RNC-S	
			生起頻度 (ipm)	実質的 生産性				生起頻度 (ipm)	実質的 生産性
1	по-	動詞	7,498.3	108	1	по-	動詞	9,694.5	140
2	с- (со-)	動詞	5,468.8	70	2	с- (со-)	動詞	5,794.4	79
3	у-	動詞	4,658.3	62	3	при-	動詞	4,388.3	37
4	вы-	動詞	3,750.5	54	4	ни-	代名詞	3,957.4	9
5	при-	動詞	3,012.4	42	5	у-	動詞	3,431.0	56
6	за-	動詞	2,987.0	67	6	за-	動詞	3,257.4	81
7	на-	動詞	2,487.6	30	7	вы-	動詞	3,148.7	72
8	ни-	代名詞	2,484.4	7	8	на-	動詞	2,224.7	40
9	раз- (разо-, рас-)	動詞	2,400.5	43	9	раз- (разо-, рас-)	動詞	1,868.4	38
10	от- (ото-)	動詞	2,141.1	33	10	от- (ото-)	動詞	1,734.0	41
11	про-	動詞	1,942.4	29	11	про-	動詞	1,615.3	40
12	о- (об-, обо-)	動詞	1,742.2	39	12	под- (подо-)	動詞	1,244.9	28
13	не-	形容詞	1,473.6	27	13	не-	副詞	1,223.2	22
14	под- (подо-)	動詞	1,462.0	24	14	пере-	動詞	1,034.4	33
15	не-	副詞	1,000.8	20	15	не-	形容詞	845.6	24
16	вз- (взо-, вс-)	動詞	981.1	10	16	о- (об-, обо-)	動詞	589.7	33
17	пере-	動詞	973.7	19	17	до-	動詞	567.0	17
18	не-	代名詞	918.8	6	18	от- (ото-)	副詞	492.6	4
19	в- (во-)	動詞	871.2	14	19	в- (во-)	動詞	486.5	16
20	из- (изо-, ис-)	動詞	666.5	17	20	из- (изо-, ис-)	動詞	375.4	12
21	до-	動詞	412.6	8	21	вз- (взо-, вс-)	動詞	330.0	7
22	воз- (возо-, вос-)	動詞	378.1	10	22	не-	代名詞	312.5	6
23	от- (ото-)	副詞	336.9	4	23	на-	副詞	93.2	3
24	пред- (предо-)	動詞	256.8	5	24	за-	副詞	55.5	2
25	без- (бес-)	形容詞	161.1	2	25	кое-	代名詞	54.2	2

²⁰² ()内は異形態を意味する。

動詞接頭辞の項目は灰色に塗ってあるが、上位 25 の接頭辞の内そのほとんどがこれに該当する。また、順位は若干上下するが、ほぼ同じ接頭辞が RNC-M と RNC-S の両方に共通して高頻度に生起しており、かつ、これらの実質的生産性も高い。例えば、RNC-M の 20 位以内には 16 の動詞接頭辞が含まれているが、その内 *63-/vz-*を除いた 15 の接頭辞は RNC-S の 20 位以内にも入っている。また、両者に共通する接頭辞の順位相関係数はかなり強い値を示している ($r = .933, p < 0.1$)。分析結果から、動詞接頭辞は数多くの派生動詞の形成に用いられており、ロシア語における語彙の拡充の役を担っていることがわかる (cf. Исаченко 1960: 152-153; Wade 2011: 283)。

また、RNC-M (書き言葉) と RNC-S (話し言葉) の間で、使用されている接頭辞の種類に関して大きな差異がないこともわかった。したがって、書き言葉と話し言葉で分けた個別の学習用接頭辞リストは必要ないと思われる²⁰³。以下で、重要な接頭辞を個別に考察する。

● 動詞接頭辞 *no-/po-*²⁰⁴

動詞接頭辞 *no-/po-*は群を抜いて生起頻度と実質的生産性が高い。研究によって呼び名や分類は様々であるが、*no-/po-*は「結果に及ぶ動作」、「短時間に行われる動作」、「開始を表す動作」などを表す (cf. АН СССР 1980; Ефремова 1996; Janda et al. 2013)。Janda et al. (2013: 93)の用語を借りるのであれば、上記 3 つの意味はそれぞれ RESULT, SOME, START となり、RESULT と SOME は動詞接頭辞 *no-/po-*の主要な意味であるとされる²⁰⁵。

(63) 動詞接頭辞 *no-*の意味の例

a. RESULT:	благодарить → поблагодарить
	blagodarit' poblagodarit'
	thank-IPFV. thank-PFV.
	「感謝する」 「感謝する」
b. SOME:	читать → почитать
	čitat' počitat'
	read-IPFV. read_for_a_while-PFV.
	「読む」 「少しの間読む」

²⁰³ ただし、RNC-M と RNC-S で高頻度で使用されている語彙自体は異なっている。そのため、書き言葉と話し言葉で頻繁に使われている語彙を個別に考慮する必要がある（例えば、接頭辞の意味・用法を理解するための例文作成）、書き言葉用と話し言葉用で分けた記述が望まれる。また、RNC-S のコーパス規模は 100 万語に満たないため、今後、より大きなコーパスでの再調査が必要である。

²⁰⁴ この動詞接頭辞の生起頻度と実質的生産性は以下の通りである：

RNC-M/RNC-S – 生起頻度 7,498.3 / 9,694.5 実質的生産性 108 / 140

²⁰⁵ АН СССР (1980)は、他にも「軽度に行われる動作」(*попортить/попортит'*「少し損傷する」)や「全てまたは多数の対象に及ぶ多回・順々の動作」(*поглотать/поглотат'*「多数を幾度にも飲み込む」)といった意味を挙げている。

c. START:	ехать	→	поехать
	chat'		poechat'
	go-IPFV.		depart-PFV.
	「(乗り物で) 進む」		「出発する」

接頭辞は複数の意味で基本形に付加され得るので厳密な数値は挙げられないが²⁰⁶、本章の分析対象の中ではこれら3つの意味で *no-/po-* は基本形に付加されていることが多いと推測される。Janda et al. (2013)で言うところの RESULT, AH CCCP (1980: 367)で言うところの「結果に及ぶ動作」の意味での *no-/po-* は、体のペアとなる完了体動詞を形成する際に最も用いられる接頭辞である (Janda et al. 2013: 15)²⁰⁷。このような理由から、動詞接頭辞 *no-/po-* は語彙力を増やすだけでなく、文法カテゴリーである体を理解するという目的でも学ぶ意義は大きい。

● 移動動詞に付加される接頭辞

上位を占める動詞接頭辞は移動動詞に付加されるものである。Земская (1973: 35)が述べているように、「語への接頭辞の付加は、ふつう語の意味を根本的には変えず、いくらかの意味的なニュアンスを追加するにとどまる。例えば, *улететь/uletet'* 『飛び去る』, *прилететь/priletet'* 『飛んで着く』 <...> は *лететь/letet'* 『飛ぶ』と同様の動作を表す。接頭辞は、その意味に動作の方向性への表示を追加しただけである」が、この特徴は移動動詞と接頭辞の関係に顕著に現れている。動詞を基本形として接頭辞が付加される場合の語形成的意味は、主に変容²⁰⁸であるが (cf. AH CCCP 1980: 395-397), 宇多 (2009: 235)が言うように、移動動詞と接頭辞の関係は、他の動詞と接頭辞のそれよりも(意味的な)規則性が高いため語彙力を増やす上で重要である。以下で、移動動詞 *ходить/hodit'* 「進む」, *нести/nest'* 「運ぶ」への接頭辞の付加の例を挙げる。

²⁰⁶ 例えば, *послушать/poslušat'* 「聴く」において、動詞接頭辞 *no-/po-* は(63)の a. と b. の意味 (「(完了体の) 聴く」と「しばらく聴く」) で基本形に付加され得る (cf. Ожегов 2010)。そのため、どの意味がどの程度用いられているかを厳密に計測するには、実際のテキスト内で文脈を確認するしかない。なお、本稿7章では、このような分析を動詞接頭辞 *no-/po-* に対して行う。

²⁰⁷ Janda et al. (2013)は、いわゆる空の接頭辞が付いた約2,000の完了体動詞(例: *написать/napisat'* 「書く」)を認知言語学の観点から分析した研究である。これらの動詞は3つの辞書に共通して記載され、かつ、ネイティブスピーカーの判断を経て抽出された。分析の結果、全体の20%にあたる約400語が、*no-/po-*の付加された完了体動詞であることがわかった(つまり、*no-/po-* は完了体を形成する際の空の接頭辞として最もよく用いられる)。

²⁰⁸ 変容は6.4にて詳細に扱う。この語形成的意味をもった派生語には、基本形の意味にくわえて、追加的な意味が含まれている (Улуханов 1996: 149)。例えば、形容詞 *белый/belyj* 「白い」に質の弱化を表す *-оват/-ovat-* が付いた *беловатый/belovatyj* は「白っぽい」を意味するが、この際の語形成的意味が変容である。

(64) 移動動詞への接頭辞の付加の例

a. при-:	1) ходить	→	приходить.	2) нести	→	принести
	hodit'		prihodit'	nesti		prinesti
	go-V.		arrive-V.	carry-V.		bring-V.
	「進む」		「着く」	「運ぶ」		「持ってくる」
b. от-:	1) ходить	→	отходить.	2) нести	→	отнести
	hodit'		othodit'	nesti		otnesti
	go-V.		move_away-V.	carry-V.		carry_away-V.
	「進む」		「離れる」	「運ぶ」		「持ち去る」
c. за-:	1) ходить	→	заходить	2) нести	→	занести
	hodit'		zahodit'	nesti		zanesti
	go-V.		call_on-V.	carry-V.		drop_off-V.
	「進む」		「立ち寄る」	「運ぶ」		「ついでに届ける」

a.の *при-/pri-*は「到着」を意味するが (АН СССР 1980: 368; Ефремова 1996: 408), 基本形の移動動詞に付いて *приходить/prihodit'*「着く」, *принести/prinesti'*「持ってくる」が形成される. b.の *от-/ot-*はある距離を「遠ざかる動作」を意味し (АН СССР 1980: 364; Ефремова 1996: 347), 基本形に付いて *отходить/othodit'*「離れる」, *отнести/otnesti*「持ち去る」が作られる. c.の接頭辞 *за-/za-*は「本筋から外れた動作」を意味し (АН СССР 1980: 360; Ефремова 1996: 153), *ходить/hodit'*「進む」, *нести/nesti*「運ぶ」に付加されると, それぞれ *заходить/zahodit'*「立ち寄る」, *занести/zanesti*「ついでに届ける」が形成される. これらの例における基本形と派生語の規則的な対応からわかるように, 移動動詞への接頭辞の付加は, 派生後の意味の予測がしやすい.

ただ, 本章の分析対象を確認すると, 上記の中心的・空間的な意味以外でも接頭辞は基本形に頻繁に付加されている. 例えば, 以下の例が本章の分析対象内には含まれている.

(65) *при-*, *от-*, *за-*が付いた派生動詞の例

a. при- :	дать	→	придать	b. от- :	везти	→	отвезти
	dat'		pridat'		vezti		otvezti
	give-V.		add-V.		convey-V.		deliver-V.
	「与える」		「足す」		「運ぶ」		「運び届ける」
c. за- :	говорить	→	заговорить				
	govorit'		zagovorit'				
	speak-V.		begin_to_speak-V.				
	「話す」		「話し始める」				

*npu-/pri-*は「到着」の他に「追加的な動作」という意味を持つ (АН СССР 1980: 368; Ефремова 1996: 408; Janda et al. 2013: 53). この意味で *npu-/pri-*が *дать/dat'*「与える」に付加されて *придать/pridat'*「足す」が形成される. *om-/ot-*は他に、基本形が表す動作を通して「向かう、届ける動作」を意味するが (АН СССР 1980: 364; Ефремова 1996: 349), この意味で *vezmu/vezti*「運ぶ」に付くと *отвезму/otvezti*「運び届ける」が形成される. *za-/za-*は他に「動作の開始」を表し (АН СССР 1980: 360; Ефремова 1996: 153), この意味で *говорить/govorit'*「話す」に付加されると, *заговорить/zagovorit'*「話し始める」が形成される. Исаченко (1960: 152-153)²⁰⁹や Wade (2011: 283)²¹⁰が指摘しているように、動詞接頭辞は多様な意味をもった動詞を形成し、ロシア語の語彙を豊かにしているのである.

このように、接頭辞は複数の意味で基本形である動詞に付加され得るため、この現象は高頻度語内でも頻繁に確認される. 接頭辞の複数の意味を覚えることは、未知の派生語に出会った際にその意味を暗記しやすくする、もしくは予測することを可能にするであろう.

現在、日本の教科書において動詞接頭辞は主に移動動詞の項目で言及されるが、その際、導入対象とされる意味は(64)のような空間的なものに限られる. 当然、接頭辞の中心的・空間的な意味を学習することは重要であるが、それ以外の(65)のような意味で接頭辞が付加された派生動詞も、実際のテキストにおいて頻繁に生起している. 動詞接頭辞の知識は語彙力増加に極めて効果的であるため学習優先度が高く、より体系的な意味記述が教材に導入されても良いであろう.

● 形容詞、副詞、代名詞に付加される接頭辞

動詞以外では、形容詞と副詞に付加される接頭辞 *не-/не-*の生起頻度と実質的生産性が共に高い²¹¹. この接頭辞は基本形と反対の意味をもった形容詞・副詞を形成する (АН СССР 1980: 412; Ефремова 1996: 283, 289). Земская (2007: 79)によると、*не-/не-*は新語を形成する際、関係形容詞や

²⁰⁹ 語形成における接頭辞の役割に関して、Исаченко (1960: 152-153)は以下のように述べている (括弧は著者が加えた): ロシア語は「動詞接頭辞によって、対応する単純動詞 (無接頭辞の基本形) の意味とは異なる意味を有した様々な動詞が形成される. 動詞接頭辞は、動詞内語形成の生産的な要素であり、第一に語彙の拡張に役立つ. 生産的な動詞接頭辞を使えば、理論的にはあらゆる単純動詞から 18 の接頭辞付き動詞の形成が可能である. 多くの接頭辞が複数の意味を有していること、また、接頭辞を用いて自立した再帰動詞が形成されることを考慮した場合、1 つの単純動詞から理論的に可能な接頭辞による語の形成数は著しく増加する.」その例として Исаченко (1960)は、単純動詞 *писать/pisat'*「書く」から 23 個の派生動詞の形成が可能であることを挙げている.

²¹⁰ Wade (2011: 283)は、基本形 *вязать/vâzat'*「結ぶ」に対して、「分離」の *om-/ot-*が付いた *отвязать/otvâzat'*「ほどく」、「付着」の意味の *npu-/pri-*が付いた *привязать/privâzat'*「結び付ける」、「覆う動作」の意味をもった *za-/za-*が付いた *завязать/zavâzat'*「くくる」を例に挙げ、ロシア語の語形成における動詞接頭辞の重要性に言及している.

²¹¹ *не-/не-*の生起頻度と実質的生産性は以下の通りである:

a. 形容詞に付加される *не-*: RNC-M/RNC-S – 生起頻度 1,473.6 / 845.6 実質的生産性 27 / 24
b. 副詞に付加される *не-*: RNC-M/RNC-S – 生起頻度 1,000.8 / 1,223.2 実質的生産性 20 / 22

性質形容詞，標準語や専門用語に関係なく自由に形容詞と結び付く。

(66) 形容詞・副詞に付加される接頭辞 не-の例

a. 形容詞に付加される не-:	интересный	→	неинтересный
	interesnyj		neinteresnyj
	interesting-ADJ.		not_interesting-ADJ.
	「面白い」		「面白くない」
b. 副詞に付加される не-:	интересно	→	неинтересно
	interesno		neinteresno
	interestingly-ADV.		not_interestingly-ADV.
	「面白く」		「面白くなく」

他にも，代名詞に付加される ни-/ni-は極めて生起頻度が高いが，一方で，その実質的生産性は低い分類に属する²¹²。接頭辞 ни-/ni-は，否定（基本形が示すものや特徴の欠如）を意味する（АН СССР 1980: 412）。

(67) 代名詞に付加される接頭辞 ни-の例

a. что	→	ничто	b. кто	→	никто
čto		ničto	kto		nikto
what-PRN.		nothing-PRN.	who-PRN.		nobody-PRN.
「何」		「何も～ない」	「誰」		「誰も～ない」

не-/ne-に関して言うと，この接頭辞を伴った派生語の意味は非常に予想しやすく，生起頻度と実質的生産性の値が高い。また，ни-/ni-は実質的生産性こそ低いものの，что/čto「何」などの重要な代名詞に否定の意味を付与するため，言語運用に際して ни-/ni-を習得することは非常に重要である。したがって，これらは学習優先度が高い接頭辞であると言える。

分析の結果，語形成に際して，特定の接頭辞，特に動詞接頭辞が高頻度に用いられ，かつ，多くの派生語に含まれていることがわかった。効率的な語彙力増加を目的とした場合，動詞接頭辞は優先的に学習すべき派生接辞の筆頭である。また，Земская (2007)の研究が示す「潜在的な生産性の高さ」と本章の分析が示す「実質的生産性の高さ」を比較した場合，両者は必ずしも一致し

²¹² 代名詞に付加される ни-/ni-の生起頻度と実質的生産性は以下の通りである：

RNC-M/RNC-S – 生起頻度 2,484.4 / 3,957.4 実質的生産性 7 / 9

ていない点も重要である（6.3.1.の冒頭で言及した潜在的生産性が高いとされる *сверх-/sverh-*, *супер-/super-*は、本章の分析対象内ではそもそも生起しておらず, *противо-/protivo-*は RNC-M で 1 例確認されたのみであった）。なお, АН СССР (1980)は 90 近い接頭辞を記述しているが, そのうち, RNC-M と RNC-S の高頻度 5,000 語において確認されたのはその半分にも満たない²¹³。

6.3.2. 分析結果の考察：接尾辞

Земская (1973: 33)が述べているように, 接尾辞の付加は, 派生語を他の品詞に変え得る点で接頭辞のそれとは異なる。接尾辞は接頭辞に比べて数が多く (cf. Ефремова 1996), また, 1 つの派生語に複数の接尾辞が含まれている場合があるため, RNC-M と RNC-S の高頻度 5,000 語内においても, 接尾辞は接頭辞よりも多く確認される (例えば, 本章の分析対象の中で 2 つの接頭辞が含まれる派生語は数例しか確認されない。これに対し, 1 つの派生語に含まれる接尾辞の数は 1 ~ 4 つまで幅がある。ただ, 6.2.2.2.で言及したように, 生起頻度と実質的生産性をカウントするのは, 語形成の過程において最後に付加された接尾辞だけである)。

ここでは, 実質的生産性が 5 を超えていて, 生起頻度が高い 25 の接尾辞を取り上げる (全体を通して RNC-M の接尾辞の生起頻度と実質的生産性は, RNC-S のそれよりも高い)。

²¹³ АН СССР (1980)が挙げていて, 本章の分析対象内で確認されなかった接頭辞の一覧は, 以下の通りである: *а-, анти-, архи-, вдоль-, вице-, вне-, внутри-, гипер-, де-, дез-, дис-, им-, интер-, ир-, испод-, к-, кой-, контр-, меж-, между-, небез-, недо-, низ-, обез-, обер-, около-, па-, перед-, пост-, преди-, прото-, ре-, сверх-, среди-, су-, суб-, супер-, сыз-, транс-, ультра-, через-, чрез-, экс-, экстра-*。

表 64. RNC-M と RNC-S の高頻度 5,000 語内における接尾辞の生起頻度と実質的生産性（頻度順）

順位	接尾辞 ²¹⁴	付加後の品詞 ²¹⁵	RNC-N		順位	接尾辞	付加後の品詞	RNC-S	
			生起頻度 (ipm)	実質的生産性				生起頻度 (ipm)	実質的生産性
1	ゼロ接尾辞	名詞	16,498.6	169	1	-o	副詞	20,621.3	185
2	-o	副詞	14,711.6	197	2	-a-	動詞	10,581.8	207
3	-a-	動詞	11,994.3	194	3	ゼロ接尾辞	名詞	7,650.3	135
4	-ениј-	名詞	10,161.4	164	4	-и-	動詞	4,868.4	94
5	-н-	形容詞	9,548.5	183	5	-к- [-ка]	名詞	4,780.4	158
6	-ск-	形容詞	4,953.6	68	6	-н-	形容詞	4,412.8	132
7	-ниј-	名詞	4,824.7	72	7	-ва-	動詞	3,447.2	50
8	-ост'	名詞	3,977.0	66	8	-ива-	動詞	3,069.2	72
9	-к- [-ка]	名詞	3,872.4	81	9	-ениј-	名詞	1,547.4	49
10	-и-	動詞	3,781.8	69	10	-ск-	形容詞	1,449.1	51
11	-ва-	動詞	2,674.9	40	11	ゼロ接尾辞	形容詞	1,347.1	21
12	-ива-	動詞	2,451.2	49	12	-еньк-	形容詞	919.8	18
13	-енн-	形容詞	2,260.1	35	13	-ниј-	名詞	918.5	35
14	-тел'	名詞	1,968.0	28	14	-ок	名詞	900.8	35
15	-ациј-	名詞	1,725.5	22	15	-ое	名詞	786.2	17
16	-иј- [-ие]	名詞	1,688.7	21	16	-ова-	動詞	778.8	21
17	-ств-	名詞	1,599.6	23	17	-ик	名詞	706.9	35
18	-ова-	動詞	1,408.2	22	18	-надцать	数詞	686.7	9
19	-ну-	動詞	1,179.9	24	19	-альн-	形容詞	679.1	10
20	-ов-	形容詞	1,165.6	21	20	-ну-	動詞	619.9	21
21	-альн-	形容詞	1,165.2	20	21	-тел'	名詞	617.3	13
22	-тиј-	名詞	1,100.4	8	22	-ост'	名詞	607.1	29
23	-ок	名詞	1,094.4	23	23	-н'-	形容詞	427.2	11
24	-н'-	形容詞	922.0	14	24	-е-	動詞	415.8	7
25	-ое	名詞	885.8	12	25	-ов-	形容詞	389.4	22

²¹⁴ 異形態が表に入り切らない場合があるため、ここには代表的な形態 (cf. Ефремова 1996) を記載する。

²¹⁵ Земская (1973: 33)によると、-ива-/iva- (-ыва-/yva-)は必ず動詞を、-еу/-ec は必ず名詞を形成するように、ロシア語の接尾辞には異なる品詞にまたがった派生語を形成するものは存在しない。

表 64 から、接頭辞と同様に、高頻度域で使われている接尾辞の大半は RNC-M と RNC-S において共通していることが窺える。RNC-M の上位 25 の接尾辞のうち、20 が RNC-S 側の上位 25 の接尾辞の中にも含まれている。この分析結果は、頻繁に用いられる接尾辞自体には話し言葉と書き言葉でそれほど違いがないことを示している（ただし、全体として、RNC-M の生起頻度と実質的生産性の値の方が高い。つまり、書き言葉で使われる語彙の方が、より多く派生接辞を含んでいるようである）。また、RNC-M と RNC-S に共通する接尾辞の順位相関係数は十分に高いが（ $r = .664, p < 0.1$ ）、接頭辞のそれよりも劣る（6.3.1.参照）。

以下で、特に重要な接尾辞を個別に考察する。

● 副詞を形成する -o (-e)²¹⁶

この接尾辞は基本形である形容詞に付いて副詞を形成する。Borras, Christian (1971: 240)が言うように、「ロシア語で最も数の多い副詞は、形容詞短語尾の中性形と同じ形態のもの」、すなわち、この -o/-o (-e/-e) によるものであるが²¹⁷、分析対象の高頻度語内にも数多く含まれていた。また、既存の語だけでなく、新語の形成における潜在的な生産性も高く、「過去数十年と同様に、-o/-o で終わる副詞のタイプが最も活動的である」（Земская 2007: 75）。

この接尾辞は書き言葉、話し言葉に関係なく高頻度に生起し、実質的生産性も高い。また、-o/-o (-e/-e) による派生は、「強い」→「強く」、「極端な」→「極端に」といったように派生後の意味の予測がしやすく（ここでの語形成的意味は転換²¹⁸である）、かつ、形態的にも規則的である。

(68) -o (-e)による副詞の形成の例

a. -o: сильный	→	сильно	b. -e: крайний	→	крайне
sil'nyj		sil'no	krajnij		krajne
strong-ADJ.		strongly-ADV.	extreme-ADJ.		extremely-ADV.
「強い」		「強く」	「極端な」		「極端に」

教科書によっては学習の早い段階から -o/-o (-e/-e) を導入しているものもあるが（cf 沼野他 2012:

²¹⁶ この接尾辞の生起頻度と実質的生産性は以下の通りである：

RNC-M/RNC-S – 生起頻度 14,711.6 / 20,621.3 実質的生産性 197 / 185

²¹⁷ 本章では便宜的ではあるが、以下の点を考慮して -o/-o (-e/-e) を屈折接辞ではなく、派生接辞として扱う：1) Ефремова (1996: 311) はこの接辞を語形成要素（словообразовательная единица）として捉えている。2) 品詞が形容詞から副詞へと変わっている。3) 多くの辞書がこの接尾辞をもった語に副詞としての見出しを与えている。

²¹⁸ 転換という語形成的意味は、派生語の意味が品詞の違いを除いて基本形の意味と同じことを表す。例えば, смелый/smelyj 「勇敢な」 – смелость/smelost' 「勇敢さ」の関係が転換に当たる（Улуханов 1996: 149）。転換については 6.4.にて論じる。

122), この接尾辞は生起頻度・実質的生産性の高さだけでなく, 意味の予測性や形態的な規則性の高さの観点からして, 最も学習価値が高い派生接辞の1つである²¹⁹.

● 名詞を形成するゼロ接尾辞²²⁰

Земская (1973: 176)によると, 「ゼロ接尾辞化とは, ゼロ接尾辞を用いて派生語における派生の意味を表現するものである」. そして, 基本形には動詞と形容詞があり得る (cf. Земская 1973: 176; АН СССР 1980: 219-226).

(69) ゼロ接尾辞による名詞の形成の例

a. 動詞から: 1) <i>приходить</i> → <i>приход</i> 2) <i>вздохнуть</i> → <i>вздох</i>			
<i>prihodit'</i>	<i>prihod</i>	<i>vzdohnut'</i>	<i>vzdoh</i>
arrive-V.	arrival-N.	sigh-V.	sigh-N.
「着く」	「到着」	「ため息をつく」	「ため息」
b. 形容詞から: 1) <i>синий</i> → <i>синь</i> 2) <i>глубокий</i> → <i>глубь</i>			
<i>sinij</i>	<i>sin'</i>	<i>glubokij</i>	<i>glub'</i>
blue-ADJ.	blue-N.	deep-ADJ.	depth-N.
「青い」	「青」	「深い」	「深さ」

分析対象の高頻度語内においては, a.のゼロ接尾辞化の名詞(動詞が基本形)が大半を占める(例: *пустить/pustit'*「放つ」→ *пуск/pusk*「放つこと」; *заказать/zakazat'*「予約する」→ *заказ/zakaz*「予約」; *вызвать/vyzvat'*「呼び出す」→ *вызов/vyzov*「呼び出し」; *потерять/poterât'*「失う」→ *потеря/poterâ*「損失」). 形容詞から形成される b.の例は合計4例しか確認されなかった(RNC-M: *зелёный/zelënyj*「緑の」→ *зелень/zelen'*「緑」 / RNC-S: *дальний/dal'nij*「遠い」→ *даль/dal'*「遠方」; *жуткий/žutkij*「不気味な」→ *жуть/žut'*「不気味さ」; *мутный/mutnyj*「濁った」→ *муть/mut'*「沈殿」).

ゼロ接尾辞化による語形成的意味は転換が多く, 上述の例が示すように, 派生後の意味が予測しやすい. ただ, 基本形である動詞や形容詞の語幹などの要素によって名詞の作り方が異なるため (cf. АН СССР 1980), 形態的な規則性は低いと言える. いずれにしてもゼロ接尾辞の生起頻度と

²¹⁹ Borras, Christian (1971: 240-241)は, この接尾辞の他に *-u/-i* による副詞の数も膨大であると述べている. だが, 本章の分析対象内ではこの接尾辞による副詞はほとんど確認されなかった:

a. RNC-M: 生起頻度 - 225.4 / 実質的生産性 - 3 (例: *фактически/faktičeski*「事実上」)
b. RNC-S: 生起頻度 - 133.5 / 実質的生産性 - 3 (例: *практически/praktičeski*「实际的に」)

²²⁰ この接尾辞の生起頻度と実質的生産性は以下の通りである:

RNC-M/RNC-S - 生起頻度 16,498.6 / 7,650.3 実質的生産性 169 / 135

実質的生産性は極めて高いため、受容的な理解を目的として、(動詞を基本形とする)ゼロ接尾辞化は導入すべきであろう。

● 動詞を形成する-a- (-я-), -ва-, -ива- (-ыва-)²²¹

接尾辞-a-/-a- (-я-/-â-), -ва-/-va-, -ива-/-iva- (-ыва-/-yva-)は、主に完了体動詞に動機づけされた不完了体動詞を形成する (АН СССР 1980: 350)。

(70) -a- (-я-), -ва-, -ива- (-ыва-)による不完了体動詞の形成の例

a. -a- (-я-):	обидеть	→	обижать	b. -ва-:	забыть	→	забывать
	obidet'		obižat'		zabyt'		zabyvat'
	hurt-PFV.		hurt-IPFV.		forget-PFV.		forget-IPFV.
	「傷つける」		「傷つける」		「忘れる」		「忘れる」
c. -ива- (-ыва-):	закончить	→	заканчивать				
	zakončit'		zakančivat'				
	finish-PFV.		finish-IPFV.				
	「終える」		「終える」				

Ремчукова (2004: 66)によると、ロシア語の動詞は全体の 75%が不完了体と完了体がペアを成して存在しているという²²²。現代ロシア語における体のペア形成のタイプは、接頭辞による完了化、接尾辞による不完了化、そして補充法の 3 つで (АН СССР 1980: 586)、アクセントの違いによるペア (Wade 2011: 268)を仮に含めれば 4 つから成るが²²³、上記接尾辞は体のペア形成において大きな役割を果たしている。

ロシア語の動詞はすべて体のカテゴリーに関係しており、必ず完了体・不完了体のどちらかに属しているため、語彙力増加の目的に限らずとも、これらの接尾辞を学ぶ意義は大きい。なお、実際の教材において、これらの接尾辞に関する記述はまれに見受けられるが、その内容は体系的であるとは言えず、断片的である。これらは学習価値が高いため記述の改善が求められよう。

²²¹ これらの接尾辞の生起頻度と実質的生産性は以下の通りである：

a. -a- (-я-):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 11,994.3 / 10,581.8	実質的生産性 194 / 207
b. -ва-:	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 2,674.9 / 3,447.2	実質的生産性 40 / 50
c. -ива- (-ыва-):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 2,451.2 / 3,069.2	実質的生産性 49 / 72

²²² Ремчукова (2004: 66)によると、残りの 5-6%は両体動詞 (完了体・不完了体の双方で用いられる動詞)、20%は単体動詞 (ペアとなる完了体・不完了体を持たない動詞) であるという。

²²³ 例えば、不完了体 насы́пать/nasýpát' – 完了体 насы́пать/nasýpat' 「振りかける」のようなペアを指す。

● 動詞を形成する-ова- (-ева-), -и-, -ну-²²⁴

接尾辞-ова-/-ova- (-ева-/-eva-)は主に名詞に付いて動詞を形成し、基本形によって表されることに
関係した動作を示す (АН СССР 1989: 337-338; Ефремова 1996: 316-317).

(71) -ова- (-ева-)による動詞の形成の例

a. -ова-:	1) голос	→	голосовать	2) аренда	→	арендовать
	golos		golosovat'	arenda		arendovat'
	vote-N.		vote-V.	lease-N.		lease-V.
	「票」		「投票する」	「賃借料」		「賃借する」
c. -ева-:	1) ночь	→	ночевать	2) танец	→	танцевать
	noč'		nočevat'	tanec	→	tancevat'
	night-N.		stay-V.	dance-N.		dance-V.
	「夜」		「宿泊する」	「踊り」		「踊る」

なお、-ова-/-ova- (-ева-/-eva-)には類似の意味・用法をもった接尾辞 (-изова-/-izova-, -ирова-/-irova-,
-изирова-/-izirova-, -ствова-/-stvova-) が数多く存在する (cf. Ефремова 1996).

-и-/-i-は主に名詞、形容詞を基本形として不完了体動詞を形成し、基本形によって示される物事
と関係した動作や特徴を表す (АН СССР 1980: 333-337, 353-354; Ефремова 1996: 158-159). -ну-/
-nu-は主に接頭辞無しの不完了体動詞に付いて、瞬間性や一回性を意味する完了体動詞を形成す
る (АН СССР 1980: 347-348; Ефремова 1996: 300).

(72) -и-と-ну-による動詞の形成の例

a. -и-:	1) друг	→	дружить	2) гладкий	→	гладить
	drug		družít'	gladkij		gladit'
	friend-N.		be_friend-IPFV.	smooth-ADJ.		iron-IPFV.
	「友達」		「親交がある」	「滑らかな」		「アイロンをかける」
b. -ну-:	1) толкать	→	толкнуть	2) рисковать	→	рискнуть
	tolkat'		tolknut'	riskovat'		risknut'
	push-IPFV.		push-PFV.	take_the_risk-IPFV.		take_the_risk-PFV.
	「押す」		「(一回) 押す」	「リスクを冒す」		「(一回) リスクを冒す」

²²⁴ これらの接尾辞の生起頻度と実質的生産性は以下の通りである：

a. -ова- (-ева-):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 1,408.2 / 778.8	実質的生産性 22 / 21
b. -и-:	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 3,781.8 / 4,868.4	実質的生産性 69 / 94
c. -ну-:	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 1,179.9 / 619.9	実質的生産性 24 / 21

これら3つの接尾辞も書き言葉、話し言葉に関係なく高頻度に生起し、かつ、多くの動詞の中で確認されているため、学習優先度が高いと言える²²⁵。

● 名詞を形成する-ениј- (-ен'ј-), -ниј- (-н'ј-), -иј- (-ј-) / -ост' (-ест')²²⁶

接尾辞-ениј-/-ениј- (-ен'ј-/ен'ј-), -ниј-/-ниј- (-н'ј-/н'ј-), -иј-/-иј- (-ј-/ј-)は、基本形によって示される動作に特徴的な物事（その動作の主体、目的語、もしくは結果）を表す (АН СССР 1980: 152)。3つとも動詞に付加される。

(73) -ениј- (-ен'ј-), -ниј- (-н'ј-), -иј- (-ј-)による名詞の形成の例

a. -ениј- (-ен'ј-):	1) курить	→	курение	2) спасать	→	спасение
	kurit'		kurenje	spasat'		spasenie
	smoke-V.		smoking-N.	save-V.		saving-N.
	「タバコを吸う」		「喫煙」	「救う」		「救い」
b. -ниј- (-н'ј-):	1) наказать	→	наказание	2) петь	→	пение
	nakazat'		nakazanie	pet'		penie
	panish-V.		panishment-N.	sing-V.		singing-N.
	「罰する」		「罰」	「歌う」		「歌うこと」
c. -иј- (-ј-):	1) известить	→	известие	2) пособить	→	пособие
	izvestit'		izvestie	posobit'		posobie
	inform-V.		news-N.	aid-V.		benefit-N.
	「知らせる」		「知らせ」	「扶助する」		「手当」

機能的・意味的に似ている接尾辞として、-осм'/-ост' (-есм'/-ест')が挙げられる。この接尾辞は、形容詞や動詞を基本形として、抽象的な特徴や状態などを表す名詞を形成する (АН СССР 1980: 164, 177-178; Ефремова 1996: 345-346)。

²²⁵ 生起頻度と実質的生産性がそれほど高くないため本文では扱わないが、他に動詞を形成する接尾辞として -е-/е-がある。この接尾辞は主に形容詞から不完了体動詞を形成する (例: *весёлый/veselyj* 「楽しい」 → *веселеть/veselet'* 「陽気になる」 / cf. Ефремова (1996: 115))。

²²⁶ これらの接尾辞の生起頻度と実質的生産性は以下の通りである：

a. -ениј- (-ен'ј-):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 10,161.4 / 1,547.4	実質的生産性 164 / 49
b. -ниј- (-н'ј-):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 4,824.7 / 918.5	実質的生産性 72 / 35
c. -иј- (-ј-):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 1,688.7 / 102.1	実質的生産性 21 / 6
d. -ост' (-ест'):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 3,977.0 / 607.1	実質的生産性 66 / 29

(74) -ост' (-ест')による名詞の形成の例

a. 形容詞から :	смелый	→	смелость	b. 動詞から :	жалеть	→	жалость
	smelyj		smelost'		žalet'		žalost'
	brave-ADJ.		bravery-N.		pity-V.		pity-N.
	「勇敢な」		「勇敢さ」		「憐れむ」		「憐れみ」

分析対象内で確認された例は、ほぼすべてが a. の形容詞を基本形とする派生名詞であった。

これら 4 つの接尾辞による名詞の派生は、派生語の統語的機能を変えるが（動詞→名詞 / 形容詞 → 名詞）、その意味の予測はしやすい。АН СССР (1980)において -ениj/-enij-, -ниj/-nij-, -иj/-ij-, -ост'/-ost' の付加がもたらす語形成的意味は主に転換であり、派生語の学習負荷は低いと思われる。これらの接尾辞は学習優先度が高いと言えよう。

● 形容詞を形成する -н- (-ен-), -ск- (-еск-), -ов- (-ев-), -енн- (-онн-), -альн- (-ален-)²²⁷

これら 5 つの接尾辞は基本形に付いて形容詞を形成するが、-н-/-н- (-ен-/-ен-), -ск-/-ск- (-еск-/-еск-) を筆頭に生起頻度と実質的生産性が共に高い。また、Земская (2007: 73-74) は、現代ロシア語において性質形容詞の派生はそれほど活発ではないが、一方で、関係形容詞の派生は活発であり、その際、-н-/-н-, -ск-/-ск-, -ов-/-ов- が最も生産的であると述べている。これら 3 つの接尾辞は、主に基本形の名詞によって表される内容との関係を示す (cf. Земская 1973: 36)。

(75) -н- (-ен-), -ск- (-еск-), -ов- (-ев-) による形容詞の形成の例

a. -н- (-ен-):	шум	→	шумный	b. -ск- (-еск-):	город	→	городской
	šum		šumnyj		gorod		gorodskoj
	noise-V.		noisy-ADJ.		town-N.		town-ADJ.
	「騒音」		「騒々しい」		「町」		「町の」
c. -ов- (-ев-):	класс	→	классовый				
	klass		klassovyj				
	class-N.		class-ADJ.				
	「学級」		「学級の」				

²²⁷ これらの接尾辞の生起頻度と実質的生産性は以下の通りである：

a. -н- (-ен-):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度	9,548.5 / 4,412.8	実質的生産性	183 / 132
b. -ск- (-еск-):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度	4,953.6 / 1,449.1	実質的生産性	68 / 51
c. -ов- (-ев-):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度	1,165.6 / 389.4	実質的生産性	21 / 22
d. -енн- (-онн-):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度	2,260.1 / 384.4	実質的生産性	35 / 14
e. -альн- (-ален-):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度	1,165.2 / 679.1	実質的生産性	20 / 10

他にも、*-енн-/-енн-* (*-онн-/-онн-*)や*-альн-/-ал'н-* (*-ален-/-ален-*)といった接尾辞が比較的高頻度に、かつ、多くの派生語の中に含まれているが、これらの接尾辞も主に名詞を基本形として形容詞を形成する。

(76) *-енн-* (*-онн-*)と*-альн-* (*-ален-*)による形容詞の形成の例

a. <i>-енн-</i> (<i>-онн-</i>):	количество	→	количественный
	količestvo		količestvennyj
	quantity-N.		quantitative-ADJ.
	「量」		「量的な」
b. <i>-альн-</i> (<i>-ален-</i>):	театр	→	театральный
	teatr		teatral'nyj
	theater-N.		theatrical-ADJ.
	「劇場」		「劇場の」

これら 5 つの接尾辞は主に名詞である基本形に付いて性質形容詞・関係形容詞を形成する。また、これらの付加により形成された形容詞には、基本形が示す物事と関係した特徴や性質を表すという共通点が存在する。

生起頻度と実質的生産性の観点からして、これらの接尾辞は学習価値が高いと言えよう。

● 名詞を形成するその他の接尾辞：-к- (*-ек-*, *-ок-*), -тел²²⁸

接尾辞*-к-/-k-* (*-ек-/-ek-*, *-ок-/-ok-*)は、主に動詞に付いてその意味と関係した事物を表す(下記 a.)、もしくは、名詞に付いてその指小形(下記 b.)を形成する (Ефремова 1996: 232-235)。

(77) *-к-* (*-ек-*, *-ок-*)による名詞の形成の例

a. ВЫСТАВИТЬ	→	выставка	b. ГОЛОВА	→	головка
vystavit'		vystavka	golova		golovka
exhibit-V.		exhibition-N.	head-N.		small_head-N.
「展示する」		「展覧会」	「頭」		「小さい頭」

この接尾辞は非常に多義的であるが、分析対象において*-к-/-k-*は a. と b. の意味で付加されている場

²²⁸ これらの接尾辞の生起頻度と実質的生産性は以下の通りである：

a. <i>-к-</i> (<i>-ек-</i> , <i>-ок-</i>):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 3,872.4 / 4,780.4	実質的生産性 81 / 158
b. <i>-тел'</i> :	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 1,968.0 / 617.3	実質的生産性 28 / 13

合が多い²²⁹.

-*тел' /-tel'*は主に他動詞に付いて、その動詞に示される行為を実施する人や物、もしくは行為の遂行の向けられた人や物を表す (АН СССР 1980: 142; Ефремова 1996: 457)²³⁰.

(78) -тел'による名詞の形成の例

a. писать	→	писатель	b. учить	→	учитель
pisat'		pisatel'	učit'		učitel'
write-V.		writer-N.	teach-V.		teacher-N.
「書く」		「作家」	「教える」		「教師」

Земская (2007: 119)が言うように、「形態的な点において接尾辞-*тел' /-tel'*の振る舞いに特有なのは高い規則性である：この接尾辞は、<...> 動詞語幹の最後の母音に、それが削除されることなく付加される」。形態的な規則性、そして生起頻度・実質的生産性の高さを考慮すると、この接尾辞の学習優先度は高いと言えよう。

6.3.3. 分析結果の考察：後接辞，接周辞，連接辞

6.3.3.1. 後接辞

本章の分析で確認された後接辞は-*либо/-libo*, -*нибудь/-nibud'*, -*то/-to*, -*ся/-sâ* の4つである²³¹.

-*либо/-libo*, -*нибудь/-nibud'*, -*то/-to* は疑問詞に付いて、*что-либо/čto-libo* 「何か」, *кто-то/kto-to* 「誰

²²⁹ ロシア語の教材で-*к/-k*に焦点が当てられることはあまりない。だが、女性の「日本人」, 「アメリカ人」などの国籍を表す女性名詞の形成において導入されることがある (例: *японец/âronec* 「男性の日本人」- *японка/âronka* 「女性の日本人」)。この接尾辞は、-*ист/-ist*, -*ец/-ec*, -*ик/-ik*, -*овик/-ovik* などの接尾辞を持った男性名詞に対しての女性名詞を作り出す (Земская 2007: 151)。ただし、分析対象の高頻度語の中では、この意味で-*к/-k*が付加された例は *еврейка/evrejka* 「女性のユダヤ人」しか確認されなかった。もちろん、学習上、国籍を表す語の男性・女性の知識は非常に重要であり、(77)に加えてこの意味も導入する価値はあると思われる。

3.1.2.で言及したが、横川 (2006: 33-34)はコーパスに基づいた語彙リストの問題点として、学習や日常生活に役立つ *soup* 「石けん」, *bath* 「浴室」, *cushion* 「クッション」などの具象名詞の欠如を挙げている。語の頻度はあるコーパスに含まれるテキスト群の内容を反映したに過ぎず、統一性にかけるため、日常に有用な語が頻度リストから抜け落ちてしまうことがある (Stubbs 2001: 41-42)。国籍を表す名詞群もコーパスには反映されづらい重要語と言えるであろう。

²³⁰ Земская (2007: 118-119)によると、現代ロシア語においては接尾辞-*тел' /-tel'*は、上記意味では潜在的な生産性が低く、-*щик/-šik* や-*льщик/-l'sik* よりも活動的ではない、とされる。だが、既存の高頻度語に限って言えば、-*тел' /-tel'*の方が生起頻度と実質的生産性の点で優っている。

²³¹ これらの後接辞の生起頻度と実質的生産性は以下の通りである：

a. -либо:	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 89.2 / 0	実質的生産性 2 / 0
b. -нибудь:	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 469.0 / 1,393.5	実質的生産性 6 / 7
c. -то:	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 2,524.4 / 6,477.4	実質的生産性 11 / 18
d. -ся:	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 12,536.5 / 9,690.1	実質的生産性 207 / 245

か」, *где-нибудь/gde-nibud'* 「どこか」といった不定代名詞を形成する (АН СССР 1980: 412-413). *-нибудь/-nibud'* と *-то/-to* は実質的生産性こそ低いが生起頻度は高い. 両者は用法に違いがあり, その使い分けは言語運用上極めて重要であるため, 多くの教材がその説明を導入している.

なお, *-либо/-libo* は *-нибудь/-nibud'* と類似の意味を表す. ただ, Wade (2011: 164) が言うように, *-либо/-libo* はより不定性が強いニュアンスを示し, *-нибудь/-nibud'* の文語的な形態として機能する. 実際, *-либо/-libo* を含んだ不定代名詞は文法書などには頻繁に現れる. ただ, 本章の分析からは, 後接辞 *-нибудь/-nibud'* と *-то/-to* の方が学習優先度は高いと言える.

後接辞 *-ся/-sâ* は生起頻度と実質的生産性が極めて高い. Ефремова (1996: 454-455) は, この後接辞の「すべての場合に共通する役割は他動性の除去 (これは, *одевать/odevat'* 「着せる」 – *одеваться/odevat'sâ* 「着る」 <...> などの他動詞から形成される動詞に最も特徴的である), もしくは非他動性の強化 (*белеть/belet'* 「白く見える」 – *белеться/belet'sâ* 「ぼんやり白く見える」, <...> などの動詞における)」であるとし, 細分化した 12 の意味を挙げている (再帰, 一般再帰, 受動, 相互再帰, 間接再帰など).

多くの教材は後接辞 *-ся/-sâ* について言及しているが, その焦点は特殊な活用であり, 意味ではない. ただ, 沼野他 (2012: 108) は後接辞 *-ся/-sâ* がもたらす意味に関して以下の 4 つを導入している.

(79) 後接辞 *-ся* の意味の例

a. 再帰:	одевать → одеваться	b. 受動:	читать → читаться
	odevat' odevat'sâ		čitat' čitat'sâ
	apparel-V. dress-V.		read-V. be_read-V.PASS.
	「着せる」 「着る」		「読む」 「読まれる」
c. 相互再帰:	целовать → целоваться	d. 自発:	кончать → кончаться
	celovat' celovat'sâ		končat' končat'sâ
	kiss-V. kiss_one_another-V.		finish-V. end-V.
	「キスする」 「互いにキスする」		「終える」 「終わる」

上記 *-ся/-sâ* の意味と基本形である動詞の意味が既知であれば, 派生語の意味は予想できる, もしくは暗記しやすくなるであろう. 分析対象内において, 後接辞 *-ся/-sâ* は上記 4 つの意味で頻繁に付加されており, 生起頻度と実質的生産性の点でこれらが中心的であると思われる. 語彙力増加の目的で後接辞 *-ся/-sâ* を導入する価値は高いと言える.

6.3.3.2. 接周辞

分析対象内において、接周辞の生起頻度と実質的生産性はそれほど高くはない。RNC-M と RNC-S の各高頻度 5,000 語内において、それぞれ約 170 例、約 150 例しか確認されない。その中で実質的生産性が 5 を超え、かつ、両コーパスに共通して生起している接周辞は、*no-...-ому/po-...-ому* (*no-...-ему/po-...-ему*), *c-...-a/s-...-a* の 2 つのみであった²³²。

(80) RNC-M と RNC-S の両方で確認され、実質的生産性が 5 を超える接周辞

a. *по-...-ому* (*по-...-ему*):

1) <i>другой</i>	→	<i>по-другому</i>	2) <i>хороший</i>	→	<i>по-хорошему</i>
<i>drugoj</i>		<i>po-drugomu</i>	<i>horosij</i>		<i>po-horošemu</i>
different-ADJ.		differently-ADV.	good-ADJ.		proficiently-ADV.
「他の」		「異なるやり方で」	「良い」		「うまく」

b. <i>c-...-a:</i>	1) <i>высокий</i>	→	<i>свысока</i>	2) <i>лёгкий</i>	→	<i>слегка</i>
	<i>vysokij</i>	→	<i>svysoka</i>	<i>lëgkij</i>	→	<i>slegka</i>
	high-ADJ.		condescendingly-ADV.	light-ADJ.		lightly-ADV.
	「高い」		「上から」	「軽い」		「軽く」

no-...-ому/po-...-ому (*no-...-ему/po-...-ему*)は基本形である形容詞から副詞を形成し、その形容詞が表す特徴の状況的な意味を表す (Ефремова 1996: 380). *c-...-a/s-...-a* も形容詞から副詞を形成し、その形容詞によって示される時間、場所、動作の状況的な意味を表す (Ефремова 1996: 439).

生起頻度と実質的生産性の観点から、これらの接周辞の学習優先度は低い。また、接周辞自体が高頻度語内であり使用されていないのであれば、そもそもこのカテゴリーを設定しない方がよいのかもしれない。

6.3.3.3. 接続辞

Wade (2011: 31)が言うように、ロシア語において「合成語の構成要素は通常*-o-/-o-*によって繋が

²³² これらの接周辞の生起頻度と実質的生産性は以下の通りである：

a. <i>по-...-ому</i> (<i>по-...-ему</i>):	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 225.5 / 350.3	実質的生産性 6 / 6
b. <i>c-...-a:</i>	RNC-M/RNC-S – 生起頻度 711.4 / 505.3	実質的生産性 6 / 6

なお、片方のコーパスにしか確認されないが、実質的生産性が 5 を超える接周辞は 3 つ存在する：
 1) *в-...-* ゼロ接尾辞 *в-...-* ゼロ接尾辞 (状況を表す副詞を形成する：*конец/копес* 「終わり」 → *вконец/вкопес* 「すっかり」). 2) *о-...-u/-o-...-i-* (基本形の特徴を対象に付与するという意味をもった他動詞を形成する：*свобода/svoboda* 「自由」 → *освободить/osvobodit'* 「解放する」). 3) *у-...-u/-u-...-i-* (基本形の特徴を対象に付与する、という意味などをもった他動詞を形成する：*лучший/lučšij* 「さらに良い」 → *улучшить/ulučšit'* 「改良する」).

れる」。この接続辞-*o*-/*o*-は合成語の連結部分として機能し (Тихонов 1985: 23), 接続辞の中で最も潜在的な生産性が高い (АН СССР 1980: 253)。また, 分析対象の高頻度語内においても, 合成語の形成に際しては-*o*-/*o*- (-*e*-/*e*-)が最も頻繁に用いられており, かつ, 実質的な生産性が高いことがわかった²³³。

(81) -*o*- (-*e*-)による合成語の形成の例

a.	язык	+	знание	→	языкознание	b.	пеший	+	ход	→	пешеход
	âzyk		znanie		âzykoznanie		pešij		hod		pešehod
	language-N.		knowledge-N.		linguistics-N.		pedestrian-ADJ.		going-N.		pedestrian-N.
	「言語」		「知識」		「言語学」		「歩行用の」		「進行」		「歩行者」

-*o*-/*o*- (-*e*-/*e*-)が語と語のつなぎ目に現れる接辞であるという知識は, 合成語の理解を促進するであろう。したがって, この接続辞の学習優先度は高いと言える。

6.4. 派生接辞を用いた語彙学習の課題

ここまで高頻度に生起し, 実質的な生産性の高い派生接辞を考察してきた。派生接辞を用いた効率的な語彙学習を検討した場合, これらの学習優先度は高いと言えるが, 実際に教材や授業に導入するためには, いくつか議論しなければならない課題が残っている。6.4.では派生接辞学習に伴う問題点に言及する。

6.4.1. 語形成的意味

接辞付加が基本形にもたらす語形成的意味 (словообразовательное значение) は一様ではない。Улуханов (1996)は語形成的意味を以下の4つに分類している。

(82) Улуханов (1996)による語形成的意味の分類²³⁴

- 語形成的変容の意味 (модификационное словообразовательное значение)
- 語形成的転換の意味 (транспозиционное словообразовательное значение)
- 語形成的変異の意味 (мутационное словообразовательное значение)
- 語形成的複合の意味 (соединительное словообразовательное значение)

²³³ この接続辞の生起頻度と実質的な生産性は以下の通りである：

-*o*-/*o*- (-*e*-/*e*-): RNC-M/RNC-S – 生起頻度 776.9 / 417.0 実質的な生産性 20 / 14

²³⁴ a., b., c.の日本語訳は木二会会員共訳 (1998: 104)に従って「語形成的変容の意味」, 「語形成的転換の意味」, 「語形成的変異の意味」とした。また, d.は三浦 (1999: 72)に倣って「語形成的複合の意味」とした。

a.の変容の語形成的意味をもった語は、全体の意味の中に、基本形の意味の他に追加的な意味を含んでいる (Улукханов 1996: 149). 以下に変容の例を挙げる.

(83) 変容の例

a. за-:	1) петь	→ 2) запеть	b. -оват-:	1) белый	→ 2) беловатый
	pet'	zapet'		belyj	belovatyj
	sing-V.	begin_to_sing-V.		white-ADJ.	whitish-ADJ.
	「歌う」	「歌い始める」		「白い」	「白っぽい」

a.の2) *запеть/zapet'*「歌い始める」では、1) *петь/pet'*「歌う」に動作の開始を意味する接頭辞 *за-/za-* が付加されている。つまり、全体の意味の中に、基本形である「歌う」に加えて接頭辞の意味「し始める」が追加的に含まれている。b.の接尾辞 *-оват-/ovat-*は、「っぽい」という質の弱化を表す。2)の形容詞 *беловатый/belovatyj*「白っぽい」には、1) 基本形 *белый/belyj* の「白い」という意味の他に、接尾辞の意味「っぽい」が含まれている。つまり、ここでの接尾辞は追加的なニュアンスを表現している (cf. Караулов 1997: 548).

b.の転換の語形成的意味とは、品詞の違いを除いて基本形と派生語の意味が同一であることを指す (Улукханов 1996: 149). 以下に、転換の例を挙げる.

(84) 転換の例

a. 1) смелый	→ 2) смелость	b. 1) ремонт	→ 2) ремонтировать
smelyj	smelost'	remont	remontirovat'
brave-ADJ.	bravery-N.	repair-N.	repair-V.
「勇敢な」	「勇敢さ」	「修理」	「修理する」

接尾辞 *-ость/-ost'*は、6.3.2.で触れたように、形容詞や動詞を基本形として抽象的な特徴や状態などを表す名詞を形成する。a.の2) 派生名詞 *смелость/smelost'*「勇敢さ」は、基本形である1) 形容詞 *смелый/smelyj*「勇敢な」と品詞以外の語彙的な意味が同じである。b.の「修理」-「修理する」でも同様に、基本形と派生語の意味が、接辞付加によってもたらされる品詞の違いを除いて同一である。他の例として、*красный/krasnyj*「赤い」と *краснота/krasnota*「赤さ」が挙げられる。*красный* と *краснота* の意味は、前者が形容詞、後者が名詞に属しているという文法的意味（品詞）以外において同じであるため、この例も転換に分類される (АН СССР 1980: 267).

c.の変異とは、*чай/čaj*「ティー」-*чайник/čajnik*「ティーポット」のように、派生語が基本形と

まったく異なる本質, 特徴, 動作を示している意味関係を表す (Улуханов 1996: 149). つまり, 「基本形と比べて, まったく新しい概念を意味する語を作り出す」 (Караулов (ред.) 1997: 548) ことが, 語形成的変異の意味である.

(85) 変異の例

a. чай	→	чайник	b. старый	→	старик
čaj		čajnik	staryj		starik
tea-N.		teapot-N.	old-ADJ.		old_man-N.
「ティー」		「ティーポット」	「古い」		「老人」

a. と b. の例では基本形と派生語の間に意味的な関連性はあるものの, 転換や変容とは異なり, 派生の後に新しい概念が生まれている.

d. の語形成的複合は, хлеб/hleb 「パン」と завод/zavod 「工場」の結合による хлебозавод/hlebozavod 「パン工場」のように, 基本形の複数の語幹が 1 つにまとまった意味関係を表す (Улуханов 1996: 149). 他にも, западносибирский/zapadnosibirskij 「西シベリアの」 (западный/zapadnyj 「西の」 + сибирский/sibirskij 「シベリアの」) といった語も d. の複合に含まれる (Караулов (ред.) 1997: 502).

なお, Земская (1973) は, 派生の相関関係を統語的派生 (синтактическая деривация) と語彙的派生 (лексическая деривация) に二分している.

(86) Земская (1973) による語形成的意味の分類

- a. 統語的派生 (синтактическая деривация)
- b. 語彙的派生 (лексическая деривация)

a. の統語的派生は, 派生語の語彙的意味がその基本形と等しく, 派生語と基本形はどの品詞に帰属するか (つまり, 統語的機能) においてのみ異なる関係を表し, b. の語彙的派生は, 派生語の語彙的意味が基本形の意味と等しくない関係を表す (Земская 1973: 184-185).

統語的派生の例として, весёлый/vesëlyj 「楽しい」 – весёлость/vesëlost' 「楽しさ」, белый/belyj 「白い」 – белизна/belizna 「白さ」などが挙げられるが, 品詞の帰属を除けば派生語とその基本形の語彙的意味は等しい (Земская 1973: 185). 一方, белый/belyj 「白い」 – белок/belok 「卵白」のような, b. の語彙的派生は, a. の統語的派生と比べた場合, 意味的にまったく異なる関係を表している (Земская 1973: 186). 三浦 (1999: 67) は, Улуханов (1996) と Земская (1973) の分類は似通っており, 前者の語形成的転換は後者の統語的派生, また, 前者の語形成的変容・変異は, 後者の語彙

的派生に対応しているように見える、と述べている²³⁵。

教育的観点からすれば、Земская (1973)の統語的派生、つまり、Улуханов (1996)で言うところの語形成的転換による派生語に関しては、接辞と基本形の知識があればその意味は推測しやすいであろう。抽象的な特徴をもった名詞を形成する派生接辞-ост'/-ost'と смелый/smelyj「勇敢な」を知っていれば、смелость/smelost'「勇敢さ」の理解は容易い。

語彙的派生、すなわち、Улуханов (1996)の変容に分類される派生語の意味も、基本形と派生接辞の知識があれば、暗記はしやすいであろうし、意味の予想が成功する場合も考えられる。例えば、英語の不変化詞 *out*「外へ」に相当する動詞接頭辞 *вы-/vy-*が *ходить/hodit'*「進む」に付加された *выходить/vyhodit'*はその意味が「出る」であるが、基本形と接頭辞の意味に明るれば、その意味は予測可能であろう。また、語彙的派生のうち、Улуханов (1999)で言うところの語形成的変異による意味をもった派生語に関しても、派生接辞の知識は語彙学習に際して有効であると思われる。例えば、учитель/učitel'「教師」は、基本形である учить/učit'「教える」と接尾辞-тел'/'-tel'の知識があれば、暗記の負荷が減ると思われる。

ただ、派生接辞と基本形の知識がもたらす意味の予測可能性と暗記の負荷の軽減は、程度の問題である：基本形と派生接辞の知識だけでは派生語の意味にたどり着けない場合もある。例えば、下記の придумать/pridumat'「考えつく」と веснушка/vesnuška「そばかす」は、基本形と接頭辞の意味が既知であっても、その意味の予測は難しいと考えられる。

(87) 意味の予測可能性が低い派生語の例

a. 変容: 1) думать → 2) придумать	b. 変異: 1) весна → 2) веснушка
dumat'	pridumat'
think-V.	think_of-V.
「考える」	「考えつく」
	vesna
	spring-N.
	「春」
	vesnuška
	freckle-N.
	「そばかす」

a.の 2) придумать/pridumat'「考えつく」は、1) думать/dumat'「考える」に「到着」を意味する *при-/pri-*が付加されてできた派生動詞である。ただ、ここでの接頭辞 *при-/pri-*は、прибежать/pribežat'「走って来る」（基本形：бежать/bežat'「走る」）における空間的な「到着」ではなく、メタファー的な「到着」として解釈される（考えが到着する → 考えつく）(cf. Janda et al. 2013: 52)。このメタファー的な「到着」は、空間的な「到着」よりも理解が難しいと思われる²³⁶。b.の 2) веснушка/vesnuška

²³⁵ また、(82)の a.～d.とは異なる用語が用いられているものの、Караулов (ред.) (1997)や АН СССР (1980)においても Улуханов (1996)と類似の分類が採用されている。

²³⁶ 2014 年と 2017 年 8 月に東京外国語大学ロシア語サマースクールにて派生接辞に焦点を当てた語彙学習講座を開講した。その際、*при-/pri-*を含めた動詞接頭辞を講義で導入したが、メタファー的な意味に関

「そばかす」に関しても同様である。そばかすは春に集中してできる肌のしみであるが、1) 基本形 *весна/vesna* の「春」という意味は、その発生時期として派生語の中に追加的に内包されるのみである (Янко-Триницкая 2001: 244)。基本形と派生接辞 *-ушк-/ušk-* の知識から「そばかす」という意味は導けないであろう。

前述の通り、派生接辞が基本形にもたらす語形成的意味はいくつかあり、これによって、派生後の意味の予想可能性や暗記負荷の軽減の程度に差が生まれる。実際に、派生接辞を用いた語彙学習を教材や授業に導入する際には、このような問題を検討しなければならない。これらに対する具体的な対策や方針を定めるには実証研究や教育実践が求められる。

6.4.2. その他の課題

語形成の知識を用いた語彙学習を検討するには、前提として派生語を基本形と派生接辞に分析する能力が求められる。だが、逆に、この知識が障害となる場合がある。例えば、現代ロシア語では *забыть/zabyt'* 「忘れる」は動詞接頭辞 *за-/za-* と *быть/byt'* 「いる、ある」に分析することはできない。Земская (1973: 10) が述べているように、「共時的な語形成が研究対象としているのは語と語の間における生きた関係である。現代ロシア語における共時的な語形成の観点から言うと、*быть/byt'* と *забыть/zabyt'* <...> は派生の関係で結び付いてはいない」。*забыть/zabyt'* における動詞接頭辞 *за-/za-* と基本形 *быть/byt'* の間には簡素化 (опрощение) が起きており、これらの要素から「忘れる」という意味になることを共時的には説明ができない (Земская 1973: 10, 14)。

他にも、語頭、もしくは語末が派生接辞の形態と重なっている場合、誤った分析をしてしまう可能性がある。例えば、「*известь/izvest'* 「知らせ」という語には接頭辞 *из-/iz-* は含まれていないし、*потолок/potolok* 「天井」という語には接頭辞 *по-/po-* と接尾辞 *-ок/-ok* は含まれていない」 (Янко-Триницкая 2001: 36) が、そこに派生接辞の存在を見出す可能性は否定できない。他にも、*исчезнуть/isčeznut'* 「消える」や *застрясть/zastrât'* 「詰まる」といった動詞は、現代語の観点から言うと、語根と接頭辞を区分できない。母語話者はこれらの接頭辞の存在を感じはするが、どのような語根に付いているのかがはっきりしないために区分できないのである (Исаченко 1960: 142-143)。同様に、現代語には *обнять/obnât'* 「抱く」、*принять/prinât'* 「受け入れる」に含まれる **нять/nât'* という語根は存在しない (Исаченко 1960: 142-143)。

さらに、派生語の文法的な振る舞いが基本形のそれと異なる点にも注意しなければならない。例えば、動詞接頭辞が付加された後、基本形と派生語が、体の点において同じものと異なるものが存在する。移動動詞の定動詞と不定動詞は両方とも不完了体動詞であるが、接頭辞が付くと前

してはテストにおける学習者の正答率が低かった。

者が完了体動詞，後者が不完了体動詞に変化する²³⁷。

(88) 接頭辞の付加による移動動詞の体の変化

a. 定動詞:1) идти → 2) прийти	b. 不定動詞: 1) ходить → 2) приходиться		
idti	prijti	hodit'	prihodit'
go-DTV.IPFV.	arrive-PFV.	go-IDTV.IPFV.	arrive-IPFV.
「進む」	「着く」	「進む」	「着く」

「到着」を意味する接頭辞 *npri-/pri-*が，a.の 1) *iditi* (定動詞) に付いた 2) *prijti* は完了体動詞，b. 1) *ходить/hodit'* (不定動詞) に付いた 2) *приходить/prihodit'* は不完了体動詞となる。

また，接頭辞の付加によって派生語と基本形の自他が異なる場合がある。以下の例では，基本形である自動詞は，接頭辞が付くと他動詞に変化する。自動詞 *работать/rabotat'* 「働く」と *жить/žit'* 「生きる」に接頭辞 *pere-/pere-*が付いた *переработать/pererabotat'* 「加工する」と *пережить/perežit'* 「体験する」は他動詞である。

(89) 接頭辞の付加後に自他が変化する例

a.	<i>переработать</i>	нефть	b.	<i>пережить</i>	кризис
	pererabotat'	neft'		perežit'	krizis
	process-V.	oil-N.ACC.		experience-V.	crisis-N.ACC.
	「石油を加工する。」			「危機を体験する。」	
					(on the web)

a. と b. における接頭辞付き派生動詞は他動詞であり，対格の目的語をとることができる。

派生接辞を用いた語彙学習を検討する場合，6.4.1.で言及した語形成的意味以外にも，このような項目が学習へどう影響するかを考慮しなければならない。

6.5. 総括

本章では，派生接辞を接頭辞，接尾辞，その他（後接辞，接周辞，連接辞）に分けて分析・考察した。具体的には，5章で用いた RNC-M と RNC-S の各高頻度 5,000 語を対象として，そこか

²³⁷ Janda (2010)の研究は，認知言語学の観点からこの現象に関して以下のように述べている：定動詞の語幹は完了体動詞の形成に用いられる。これは，定動詞の語幹が，ロシア語の体のシステムにおいてプロトタイプの完了体動詞を動機付けする概念，つまり，完結性 (completability) を明らかに表現しているからである (完結性のある状況は進行しており，もしそれが続けばふつう自然な結果へとたどり着く)。一方，非完結性 (non-completability) は不完了体動詞がもつプロトタイプの概念であり，そのため，不定動詞の語幹が不完了体動詞の形成に用いられることには道理が通っている (非完結性は，必ずしも進展を伴わないで行われ得る状況を指す)。

ら派生接辞をすべて抽出し、それらの生起頻度と実質的生産性を計測した。それにより、派生接辞は、生起頻度と実質的生産性が高いもの、中程度のもの、低いものが連続体を成して存在していることがわかった (6.2.)。その分析結果に基づいて、(恣意的ではあるが) 学習優先度の高い派生接辞を選定し、個別にいくつかの派生接辞を考察した (6.3.)。ここで、6 章冒頭で言及した研究設問の答えを検討する。

(90) (再掲) 6 章の研究設問

数ある派生接辞の中から、具体的にどれを覚えることで効率的に語彙力を伸ばせるのかを確認する。

接頭辞に関して言うと、動詞に付加されるものの生起頻度と実質的生産性が圧倒的に高かった。ここには、*no-/po-*や *c-/s-*、そして *в-/v-*、*вы-/vy-*、*пу-/pri-*、*про-/pro-*、*у-/u-*といった移動動詞に付加される接頭辞が含まれる。この結果は、効率的に語彙力を伸ばすにはまず動詞接頭辞を学習すべきであることを示している。なお、動詞接頭辞以外には、形容詞・副詞に付加される *не-/не-*が生起頻度と実質的生産性が高く、学習価値が高いと言える (6.3.1.)。

接尾辞に関して言うと、副詞を形成する *-o/-o*、名詞を形成するゼロ接尾辞、動詞を形成する *-a/-a-*、*-ва-/va-*、*-ива-/iva-*、名詞を形成する *-ениj-/enij-*、*-ниj-/nij-*、*-иj-/ij-*、*-ост'/-ost'*、形容詞を形成する *-н-/n-*、*-ск-/sk-*、*-ов-/ov-*、*-енн-/enn-*、*-альн-/al'n-*などが高頻度に生起し、かつ、実質的生産性が高かった (6.3.2.)。

後接辞の *-нибудь/-nibud'*、*-mo/-to* は、実質的生産性こそ低いものの、生起頻度は高い (これらの後接辞は言語を運用する上で非常に重要な不定代名詞の形成に用いられるため、その学習は語彙力増加以外の目的でも重要である)。後接辞 *-ся/-sâ* は非常に生起頻度が高く、数多くの動詞に含まれていた。この後接辞は多義的であるが、重要な意味に絞ってそれらを学習者に提示することで、効率的な語彙力増加が見込めるであろう。接周辞に関しては、RNC-M と RNC-S に共通して実質的生産性が 5 を超えるものは、*no-...-ому/po-...-ому*、*c-...-a/s-...-a* の 2 つしか確認されなかった。したがって、接周辞という単位をあえて導入する必要はないのかもしれない。連接辞は、合成語を形成する際に用いられる *-o/-o-* の生起頻度と実質的生産性が高かった (6.3.3.)。

上記の分析結果は RNC-M と RNC-S、つまり、書き言葉と話し言葉の両方に当てはまる (ただし、接尾辞の生起頻度と実質的生産性は、全体として RNC-M の方が、RNC-S よりも高かった)。したがって、書き言葉用と話し言葉用に別々の派生接辞リストは用意しなくても良いと言える²³⁸。

²³⁸ 書き言葉や話し言葉といった区別の他に、テキストのジャンル毎にどのような派生接辞が高頻度に用い

また、潜在的な生産性と本稿の実質的な生産性の高さは、必ずしも一致しないという分析結果も重要である。Земская (2007)の研究では、Котелова (ред.) (1986)の辞書において記載されている約3,000語の新語を分析し、どの語形成の型（接頭辞化、接尾辞化など）が新語の形成において活動的かを確認している。この分析により活動性が高いとされる派生接辞、つまり、新語の形成に頻繁に用いられている派生接辞は、必ずしも本章の分析で高い数値を出した派生接辞とは一致していなかった。また、高頻度語の中に含まれる新語の数は少ないため、語彙力を増やすには、まず既存の語を覚えることの方がより重要である。そのため、学習価値の高い派生接辞の選定には、潜在的な生産性よりも実質的な個数としての生産性を用いるべきであると考える。

6.4.では派生接辞を用いた語彙学習の課題を考察した。語形成的意味にはいくつか種類があり、それによって派生語の意味の予測可能性や暗記負荷の程度は異なる (6.4.1.)。他にも、基本形と派生語の文法的な特徴が異なるなどの問題に言及した (6.4.2.)。ただ、ここでは深く触れていないが、派生接辞を用いた語彙学習における最大の問題点として接辞の多義性が挙げられる。ロシア語の派生接辞、特に動詞接頭辞は多義的であり、実際のテキストにおいてはそれぞれの意味で基本形に付加され得る。現在、日本の教材で導入されているのは、動詞接頭辞の中心的・空間的な意味のみであり、接辞を用いた語彙学習の観点からすると、その内容は不十分である。

そのため、真に効率的な語彙学習を検討するには、学習価値の高い派生接辞だけではなく、その意味も選定しなければならないのである。特に、動詞接頭辞の学習を検討するにあたっては、学習価値の高い意味の選定が大きな意味をもつ：接頭辞は多義的であり、Янко-Триницкая (2001: 250)が言うように、接尾辞よりも語彙的であるため、どの意味で基本形に付加されているのかという情報は、派生語を理解する上で非常に重要な役割を果たす。また、5章の(35)が示すように、語形成の過程の観点からすると、ロシア語の派生語はまず基本形に動詞接頭辞が付いて (*брать/brat'*「取る」→ *выбрать/выbrat'*「選択する」)、さらにその接頭辞付き派生動詞に接尾辞が付加されることによって他の品詞の派生語が形成される (*выбрать/выbrat'* → *выбор/выbor*「選択」→ *выборы/выборы*「選挙」、*выборный/выборный*「選挙の」) 傾向が強い (cf. Тихонов 1985)。つまり語形成の過程を追って派生語を理解しようとする場合、まず動詞接頭辞の知識が求められるのである (RNC-M と RNC-S における接頭辞の順位相関係数は極めて高かったが、特定の接頭辞が安定して語形成に用いられていることがわかる)。

7章では、動詞接頭辞 *про-/pro-*を対象として学習価値の高い意味の選定という問題に取り組む。

られているかも調べる必要がある。

また、6章の分析で得られた学習価値の高い派生接辞が、RNC-M と RNC-S 以外のテキスト (例：ロシア語の教材を集めたコーパスなど / cf. Coxhead 2000) においてどの程度のカバー率を実現できるのかという効果検証を行う必要がある。これらは今後の課題としたい。

7 章. 学習価値の高い意味の選定

– 動詞接頭辞 *по-*/*pro-*を例に –

Ефремова (1996)の研究によると、ロシア語には約 1,900 の接頭辞が存在しているが、Ляшевская, Шаров (2009)の頻度データを用いた 6 章の分析によって、派生接頭辞は、生起頻度と実質的生産性が高いものから低いものまで連続体を成して存在していることが確認された。両方の値が高い派生接頭辞は出会う頻度が高く、かつ、多くの派生語の中に含まれているため、学習価値は高いと言える。6 章の分析で得られたこのデータは、派生接頭辞を用いた語彙学習法を検討する上で（導入項目の選定、学習上の優先度の決定など）大きな意義を持つと考える。日本のようにロシア語の学習時間が確保しづらい環境においてはなおさらである。

ただ、派生接頭辞の多義性を考慮した場合、生起頻度と実質的生産性の高いものをリスト化しただけでは効率的な語彙学習法の基盤を整備したとは言えない：ロシア語の派生接頭辞、特に動詞接頭辞は多義的である。現在、日本の教材において動詞接頭辞は、移動動詞の学習項目としてその中心的・空間的な意味が言及されるだけにとどまる。だが、実際の言語使用において、接頭辞はそれ以外の意味でも頻繁に動詞に付加されている（6.3.1.参照）。

例えば、АН СССР (1980)によると、動詞接頭辞 *по-*/*po-*は 5, *вы-*/*vy-*は 5, *пере-*/*pere-*は 10, *про-*/*pro-*は 8, *у-*/*u-*は 8 の意味を有している。以下に、RNC-M と RNC-S で最も生起頻度・実質的生産性が高かった動詞接頭辞 *по-*/*po-*の意味を挙げる。

(91) 動詞接頭辞 *по-*の意味 (cf. АН СССР 1980: 366-367)

- a. 「軽度に行われる動作」：попортить 「少し損傷する」
- b. 「全てまたは多数の対象に及ぶ多回・順々の動作」：поглотать 「多数を幾度にも飲み込む」
- c. 「短時間に行われる動作」：покурить 「しばらく喫煙する」
- d. 「開始を表す動作」：подуть 「吹き始める」
- e. 「結果に及ぶ動作」²³⁹：послушать 「聴く」

АН СССР (1980)の分類によると、*по-*/*po-*は上記 5 つの意味で基本形に付加され得るが、本稿の分析対象である RNC-M と RNC-S の高頻度 5,000 語内では、この接頭辞は c.～e.の意味で頻繁に用

²³⁹ e.の *по-*/*po-*は、ある不完了体動詞のペアとなる完了体動詞を形成する際に用いられる接頭辞（いわゆる空の接頭辞）として動詞に付加されている。ここには、他に、поблагодарить/поблагодарит' 「感謝する」、построить/построит' 「建てる」などが含まれる (АН СССР 1980: 367)。

いられていると「推測される」。

なぜ断言できないのかと言うと、(6章で若干の言及をしたが) 動詞接頭辞は1つの動詞に複数の意味をもって付加され得るからである。例えば、(91) a.の *nonormitʹ/poportitʹ* の *no-/po-* は、a. だけでなく b. の意味でも基本形 *normitʹ/portitʹ* 「損なう」に付加される（「(全部・多数)を損傷する」）。また、*nodutʹ/podutʹ* には「吹き始める」と「しばらく吹く」という意味があり、d. だけでなく c. の意味でも *no-/po-* は基本形 *dutʹ/dutʹ* 「吹く」に付加される。他にも、e. の *poslušatʹ/poslušatʹ* は「しばらく聴く」という意味を有しており、この場合の *no-/po-* は c. の意味で付加されている（基本形 *slušatʹ/slušatʹ* 「聴く」）。

このように、1つの動詞に対して接頭辞は複数の意味で付加され得るため (cf. Зализняк 1995), 高頻度語リストに含まれる派生動詞の一覧を眺めただけでは、接頭辞が実際にどの意味で頻繁に生起しているのかまでは測れないのである。したがって、理想的な派生接辞学習は、生起頻度と実質的生産性が高い派生接辞をリスト化するだけでなく、さらに、当該の派生接辞がどの意味で頻繁に用いられているのかまでを記述することで実現されると考える。辞書のように接頭辞の意味群を列挙するやり方は非効率的であり、かつ、どの意味を覚えればいいのか不明瞭であるため、教育という文脈においては学習に特化した意味の記述整備が求められる（例えば、仮に *no-/po-* が d. と e. の意味でしかほぼ使われない、基本形に付加されないのであれば、両者を優先的に記述し、その旨を用法の欄に加える、など）。

そこで、本章では6章の分析で生起頻度と実質的生産性の値が高かった動詞接頭辞 *npo-/pro-* を分析対象として²⁴⁰以下の研究設問に取り組む。

(92) 7章の研究設問

- a. 動詞接頭辞 *npo-/pro-* を対象として、意味毎の解釈構造、意味的・統語的特徴、イメージ・スキーマを記述する。その上で、実際のテキストにおいて *npo-/pro-* のどの意味の生起頻度が高いかを確認し、学習価値の高い意味を選定する。
- b. *npo-/pro-* の放射状カテゴリーを作成し、多義的な接頭辞の意味学習の基盤を整備する。

まず、4章で作成した100万語コーパスの1つ (C_1) を用いて、その中で確認される *npo-/pro-*

²⁴⁰ 他に、動詞接頭辞 *npo-/pro-* を分析対象に選んだ理由は2つある：1) *npo-/pro-* は「最も生産性のある接頭辞であり、同時に、あまり研究されてこなかった接頭辞のうちの1つである」(Кронгауз 1995: 43)。2) 後述の7.4.では放射状カテゴリーという認知言語学の枠組みを語彙学習に用いることを検討する。その際の主要参考文献である Janda et al. (2013) は、*npo-/pro-* の意味に関して部分的な記述しか行っておらず、また、*npo-/pro-* の放射状カテゴリーを分析対象外としている。このような状況を踏まえ、本章は学習価値は高いが、まだ記述が整備されていない動詞接頭辞 *npo-/pro-* を分析対象とした。

が付いた派生動詞の全数調査を行う（約 2,350）。具体的には、*npo-/pro-*がどの意味で基本形に付加されているのかを、解釈構造と意味的・統語的特徴（7.1.2.1.）、そしてイメージ・スキーマ（7.1.2.2.）といった判断基準に基づいて分析し、この接頭辞の意味毎の生起頻度を計測する。そして、その分析結果に基づいて学習価値の高い意味を選定する（研究設問 a.）。この分析により数値の高かった意味は、言語活動に際して学習者が出会う機会が多いため、優先的に覚える価値が高いものである。同時に、これまで研究で触れられてこなかった *npo-/pro-*の放射状カテゴリー²⁴¹の記述を整備し、認知言語学の観点から多義的な接頭辞の意味学習の基盤を構築する（研究設問 b.）。

本章の構成は以下の通りである：まず 7.1.にて、本章の分析に用いる動詞接頭辞 *npo-/pro-*の意味分類を紹介する。同時に、その分類の判断基準である解釈構造、意味的・統語的特徴、イメージ・スキーマという道具立てを導入する。続く 7.2.では *npo-/pro-*の各意味に言及し、その解釈構造、意味的・統語的特徴、イメージ・スキーマの観点から、本章の分類の妥当性を考察する。そして、7.3.では実際に *npo-/pro-*の各意味の生起頻度を C_1 において計測し、学習価値の高い *npo-/pro-*の意味を選定する。そして、7.4.では、*npo-/pro-*の放射状カテゴリーを検討・作成し、イメージ・スキーマと合わせて認知言語学の観点から多義的な接頭辞の意味学習の基盤を整備する。最後に、7.5.にて本章の総括を行う。

7.1. 動詞接頭辞 *npo-/pro-*の意味分類と分類手法

ここでは、まず 7.1.1.にて本章の分析に用いる *npo-/pro-*の意味分類を提示する。そして、7.1.2.において、その分類に至った判断基準である解釈構造、意味的・統語的特徴、イメージ・スキーマを導入する。

7.1.1. 動詞接頭辞 *npo-/pro-*の意味分類

接頭辞の意味の数は設定された何らかの基準により決まるため、本質的な問題としてではなく、副次的な問題として議論すべきである。Кронгауз (1995: 38)が述べているように、接頭辞の「意味は多くもあり、同時に少なくもあるが、これらの意味は異なるレベルにおいて規定されているのである。より正確に言うと、多くの具体的な意味はより抽象的な意味に統合され、さらに1つのレベルの意味群としても、異なるレベルの意味群としても互いに作用し合っている」。例えば、次の2つの例に含まれる *npo-/pro-*の意味は、AH CCCP (1980: 369)では異なるものとして提示されているが、Janda et al. (2013: 107)では同じものとして1つに集約されている。

²⁴¹ 放射状カテゴリーは、主に認知言語学において多義語の意味分析などに用いられる（7.4.にて詳細に扱う）。

(93) *pro-/pro-*の異なる意味分類の例

- a. По пути мы проехали небольшую станцию <...>.
 Po puti my proehali nebol'suû stanciû <...>.
 on_the_way we ride_past-V.PST. small-ADJ.ACC. station-N.ACC.
 「途中で私たちは小さな駅を通り過ぎた。」
- b. Главное, не проглядеть нужный момент <...>.
 Glavnoe, ne proglâdet' nužnyj moment <...>.
 important_thing not look_over-V.INF. necessary-ADJ.ACC. moment-N.ACC.
 「重要なことは、必要な瞬間を見逃さないことである。」

(現行 RNC-M より引用: アクセス日 2017/10/30)

АН СССР (1980: 369)によると、a.の下線部 *проехать/proehat'* (> *проехали/proehali*) 「(乗り物で) 通過する」の *pro-/pro-*は何らかの対象の側を通る動作を、b.の下線部 *проглядеть/proglâdet'* 「見落とす」の *pro-/pro-*は逃す・逸する動作を意味する。一方、Janda et al. (2013)では、その記述から判断してこの2つの意味は PASS という1つのグループにまとめられている。

広く捉えれば、側を通り過ぎる動作と逃す・逸する動作の類似性は高い。Janda et al. (2013)はより抽象的なレベルでこれらを1つに集約しているものと推測される。一方で、より細かく、具体的に意味を分類する立場からすると、この2つの意味を分けて扱うという判断が成り立つ(後述の7.2.2で詳細に述べる)。

つまり、接頭辞の意味分類に関して厳密な規定は存在しないため、「『複数の意味、もしくは1つの意味のどちらが良いのか?』という問題には終わりが無い」(Кронгауз 1995: 34-35)のである。他にも、Зализняк (1995: 144)は、意味の分類に際してそもそも「どの接頭辞も1つの意味、それとも、複数の意味を有しているのか? もし接頭辞が多義と認められるなら、異なる意味の間にしっかりとした関係性は存在するのか? <...> 接頭辞の意味間にどう境界線を引くのか?」といった問題が提起されると述べており、意味の個数に関する議論は成立自体が難しいと言える。

そのため、意味の分類には、必然的に便宜的にはなるが、研究者によって事前に設定された何らかの基準が求められる。本章では、動詞接頭辞 *pro-/pro-*の意味分類を行うにあたって、まず先行研究の記述 (АН СССР 1960, 1980; Кронгауз 1995, 1998; Ефремова 1996; Ожегов, Шведова 1997; Janda et al. 2013)を参考とする。そして、その際、7.1.2.で言及する各意味の解釈構造、意味的・統語的特徴、イメージ・スキーマという判断基準を設定し、分類の妥当性を裏付ける。

先に分類の結果を提示する (本章は *pro-/pro-*が持つ意味群を次の9つに分類した)。

表 65. 本章における動詞接頭辞 *pro-/pro-* の意味分類

	用語 ²⁴²	意味	基本形と接頭辞付き派生動詞の例	
1.	THROUGH	何かを通過・貫通する動作	ломать 「壊す」 break	проломать 「穴を開ける」 bore
2.	PASS	何かの脇・側を通過する動作	ехать 「(乗り物で) 進む」 ride	проехать 「(乗り物で) 通過する」 ride past
3.	MISS	何かを逃す・逸する動作	спать 「寝る」 sleep	проспать 「寝過ごす」 miss...due to being asleep
4.	DISTANCE	ある距離を通過する動作	бежать 「走る」 run	пробежать 「ある距離を走って通り過ぎる」 run through a certain distance
5.	DURATION	ある時間を通して何かに 従事する動作	сидеть 「座っている」 sit	просидеть 「ある時間座っている」 sit for a certain time
6.	EXTENSION	何かが伸びる動作	тянуть 「張る, 引く」 pull, draw	протянуть 「差し出す, 伸ばす」 extend
7.	THOROUGH	何かを徹底的に, 通して 行う動作	варить 「煮る」 boil	проварить 「十分煮る」 boil enough
8.	EXPEND	何かを消費する・使い尽くす 動作	пить 「飲む」 drink	пропить 「飲酒に費やす」 waste money on drinking
9.	HARM	何かに害・損傷を与える動作	студить 「冷やす」 cool	простудить 「風邪を引かせる」 let catch cold

1～5, 7～8 の意味は, АН СССР (1980) の記述に基づく (ただし, 用語は著者による). 6. EXTENSION, 9. HARM の意味は АН СССР (1980) には欠如している. だが, 例えば, 東郷他(編) (1988) では EXTENSION に相当する意味は個別に記載されている. また, HARM に相当する意味に関しては, АН СССР (1960), Кронгауз (1995), Ожегов, Шведова (1997), Барыкина, Добровольская (2015) において部分的な記述が確認される (各意味の詳細は 7.2. を通して詳細に論じる).

なお, 本章では, АН СССР (1980) に記載されている「基本形の動詞によって表される動作を (結果に至るまで行う) 遂行する」という, いわゆる体の転換を担う意味 ((91) の e.) は設定してい

²⁴² 1, 2, 4, 5, 7 の用語は, Janda et al. (2013) における *pro-/pro-* の記述に倣っている. 他の用語は, Janda et al. (2013) における他の接頭辞の意味分類に用いられている用語や, 該当する意味に分類される動詞の語義を参考にして著者が考えた. なお, Зализняк (1995) や Janda et al. (2013) に倣って用語は英語の大文字で記すこととする.

ない²⁴³.

7.1.2. 動詞接頭辞 *про-/pro-*の意味群の分類手法

ここでは、表 65 で挙げられている *про-/pro-*の各意味がどのようにして分類されたのかに言及する。具体的には、以下の手順で9つの意味を設定するに至った。

(94) 本章における *про-/pro-*の意味分類の手順

- a. 分類の出発点として、АН СССР (1980)の記述に従って7つの意味を設定する。
- b. 現行 RNC-M において確認された *про-/pro-*付きの派生動詞に対して、a.の枠組みを用いて接頭辞がどの意味で付加されているのかを確認する。なお、この枠組みでうまく分類できない派生動詞は未分類とする。
- c. b.の分類作業と同時に、各意味の解釈構造、意味的・統語的特徴、イメージ・スキーマを検討する。
- d. b.において未分類とされた派生動詞を対象にして、АН СССР (1980)には欠如しているが、b.と c.がうまく実行できる新たな意味を設定する。

手順 a. では、分類の出発点として АН СССР (1980)の記述に基づいて7つの意味を設定する (表

²⁴³ АН СССР (1980)は、*про-/pro-*に限らず、“совершить (довести до результата) действие, названное мотивирующим глаголом”「基本形の動詞によって表される動作を(結果に至るまで行う)遂行する」という意味を設定している。本章の分析はこの意味を除外している。АН СССР (1980)の記述の内容から判断して、この意味の接頭辞は、無接頭辞の不完了体に付いてペアとなる完了体を形成するものとして機能している(例: *звучать/zvučat'* – *прозвучать/prozvučat'*「響く」; *делать/delat'* – *сделать/sdelat'*「する」; *благодарить/blagodarit'* – *поблагодарить/poblagodarit'*「感謝する」)。これらの例における接頭辞は、語彙的な意味を変えずに体の転換だけを行う、いわゆる空の接頭辞・純粋に体的な接頭辞に相当する。

Кронгауз (1995: 39)が述べているように、「特に、アカデミー文法によって提示されている、ロシア語語形成論の伝統において、接頭辞の意味は、一連の接頭辞付き動詞の意味と対応する無接頭辞動詞の一般的な違いとして事実上理解される。別の言い方をすると、接頭辞付き動詞の意味から派生元の無接頭辞動詞の意味が差し引かれ、残ったものが語形成の意味として現れるが、その担い手が接頭辞である。このようなアプローチでは空の接頭辞・純粋に体的な接頭辞の存在は当然の結果として認められる」。

Janda et al. (2013)は、体のペア形成におけるこのような空の接頭辞/純粋に体的な接頭辞の存在を認めていない。この研究は、接頭辞の意味と基本形の意味が重なっている場合、接頭辞の意味が感じられないために、接頭辞が空として機能しているように見える、と主張している(例えば、不完了体 *бурить/burit'*「穿孔する」のペアである完了体は、接頭辞 *про-/pro-*が付いた *пробурить/proburit'*である。つまり、接頭辞の意味 (THROUGH) と *бурить/burit'*の意味が重なっているため、この派生動詞において *про-/pro-*は空の接頭辞に見えるのである)。これを重複仮説 (overlap hypothesis) という (この考えでは、「基本形の動詞によって表される動作を(結果に至るまで行う)遂行する」という意味は想定されない)。詳細は Janda et al. (2013)を参照されたい。

本章では *про-/pro-*の意味分類や放射状カテゴリーを検討している。その際の分析は、重複仮説を支持する Janda et al. (2013)や彼女らの一連の研究に依拠している。そのため、本章の分析からも、「基本形の動詞によって表される動作を(結果に至るまで行う)遂行する」という意味を除外する。

65 における 1. THROUGH, 2. PASS, 3. MISS, 4. DISTANCE, 5. DURATION, 7. THOROUGH, 8. EXPEND).

次の手順 b.では, *npo-/pro-*が上記 7 つのうちどの意味で派生動詞に付加されているのかを, コーパスのデータを用いて確認する: まず, 現行 RNC-M で 100 回以上生起している *npo-/pro-*の付いた派生動詞 (約 300) を分析対象として抽出した²⁴⁴ (なお, 本章は後接辞-*ся/-sâ* が付いた再帰動詞を分析対象外とする²⁴⁵). 次に, 電子版 Ожегов と Ушаков の詳解辞典²⁴⁶が提示する 300 の派生動詞の語義 (約 590) を対象とし, これらにおいて接頭辞 *npo-/pro-*が 7 つのうちどの意味で付加されているのかを検討する. ただ, その際, うまく判断できない派生動詞 (とその語義) に関しては未分類とする.

そして手順 c.では, b.の作業と並行して *npo-/pro-*の各意味の解釈構造, 意味的・統語的特徴 (7.1.2.1.), イメージ・スキーマ (7.1.2.2.) を検討する. これらは, *npo-/pro-*の意味を設定する際の判断基準として機能し, また, 後述の C_1 における意味毎の頻度の計測 (7.3.参照) における分類の基準としても使用される. そして, 手順 d.ではこれら 3 つの観点から, b.の段階で未分類とした派生動詞を処理するために新たな意味を 2 つ設定し (6. EXTENSION, 9. HARM), この 2 つの意味に対しても手順 c.を実行した.

このようにして設定された *npo-/pro-*の意味分類が表 65 である. つまり, 現行 RNC-M で確認される *npo-/pro-*付きの派生動詞の分析に基づいて, この接頭辞の意味分類の記述を整備した結果が表 65 であり²⁴⁷, 後述の C_1 における意味毎の生起頻度の計測にもこの枠組みを用いる.

次節において手順 c.の解釈構造, 意味的・統語的特徴, そしてイメージ・スキーマの概要に言

²⁴⁴ このデータは, 2016 年 4 月に作成された (当時の現行 RNC-M の規模は, 句読点を含めて 192,689,044 語であった): 具体的には, 現行 RNC-M が提示しているタイプ単位の頻度データをレマ単位で再計算した. そして, レマ単位の生起頻度が合計 100 を超えている *npo-/pro-*付きの派生動詞を分析対象とした結果, 約 300 の動詞が残った.

なお, Янда (2012), Janda et al. (2013) のデータベースの作成に倣って, 本章も 100 回以上の生起頻度という閾値を採用した. この閾値の設定は, 低頻度語まで分析対象に含めるとその数は膨大になってしまうため, それを避けるために取られた措置である. 抽出の際に 100 という生起頻度を閾値とした言語学的な根拠はないが, これは, 接頭辞の意味の検証に十分な用例が確認できる数値と言えよう.

²⁴⁵ 例えば, 動詞接頭辞 *за-/za-*の意味記述を行なっている Зализняк (1995) は, 後接辞-*ся/-sâ* が付いた再帰動詞を分析対象外としている. 理由は明記されていないが, 接頭辞と後接辞-*ся/-sâ* が付いた動詞は全体の意味が複雑になり, 接頭辞の意味と基本形の分析可能性が低下するためであると推測される. 本章も再帰動詞は分析から除外し, 今後の課題とする (後接辞-*ся/-sâ* を含めた分析をするにあたっては, *npo-/pro-*だけでなく, -*ся/-sâ* の意味記述も同様に整備されていなければならない).

²⁴⁶ ここでは派生動詞の語義すべてを分析対象としている. その際の語義の記述は, RNC が語の説明に採用している web 版の詳解辞典に基づく (検索で得られた語の語義を調べる際, RNC はその説明として電子版 Ожегов と Ушаков などの詳解辞典を用いている. ただ, 両詳解辞典の細かな版まで記載されていない). URL は以下の通りである: <http://dic.academic.ru/>

²⁴⁷ 現行 RNC-M に含まれる派生動詞を用いて *npo-/pro-*の意味の記述整備を行なったが, 7.2.以降の各意味の解説では, それぞれの特徴がよく現れている例を現行 RNC-M だけでなく, web, C_1, 研究書などからも引用する.

及する。

7.1.2.1. 解釈構造と意味的・統語的特徴

Кронгауз (1995)は、接頭辞 *про-/pro-*の意味群を分析する際、部分的ではあるが、解釈構造 (структура толкования) という枠組みをその記述に用いている。解釈構造とは、ある文脈において当該の意味を獲得している一連の接頭辞付き派生動詞に共通する接頭辞の具体的な意味を指す (Кронгауз 1995: 40)。例えば、接頭辞 *про-/pro-*が本章の THROUGH に相当する意味で基本形に付加されている場合、THROUGH は、この分類に属する派生動詞から判断して、以下のような解釈構造を有している。

(95) Кронгауз (1995)の解釈構造の例 (THROUGH に相当する意味)

- a. 1) *пробурить скважину в земле* 2) *прорубить окно в стене*
proburit' skvažinu v zemle prorubit' okno v stene
bore-V.INF. chink-N.ACC. in ground-N.LOC. cut_through-V.INF. window-N.ACC. in wall-N.LOC.
「土を掘削して隙間をつくる」 「壁に窓用の穴を開ける」

- b. действием V сделать отверстие Y в поверхности Z

「動作 V によって表面 Z に穴 Y を開ける」 (Кронгауз 1995: 40)

上記 b.は、接頭辞 *про-/pro-*が THROUGH の意味で付加されている場合、基本形である *бурить/burit'* 「穿孔する」、*рубить/rubit'* 「切る」の動作 V によって、隙間/窓用の穴 Y を土/壁 Z に開けるといふ意味の構造を示している。

Зализняк (1995)も意味の型 (тип значения) という類似の公式を用いて動詞接頭辞 *за-/za-*の意味記述を行なっている。Зализняк (1995: 160)は「接頭辞付き動詞の意味の型は、接頭辞付き動詞の意味的特徴 (複数の特徴) と特定の意味的・統語的特性の組み合わせで」決まる、としている。

(96) Зализняк (1995)における意味の型 (FILL 「覆う」の例)

- a. *засыпать яму землёй*
zasypat' âmu zemlëj
fill_up-V.INF. hole-N.ACC. dirt-N.INS.
「土を撒いて穴を塞ぐ」

b. за V + X(acc.) [+Y(instr.)]

производя действие V над объектом Y, заполнить или покрыть объект X²⁴⁸

「対象 Y に対して動作 V を行うことで、対象 X を満たす・覆う」 (Зализняк 1995: 161)

上記の公式は、接頭辞 *за-/za-*が FILL の意味で動詞に付加されている場合、対象 Y (土) に対して基本形である *сыпать/сыпат'*「撒く」の動作 V を行い、対象 X (穴) を満たす・覆うということを示している。

本章では、Кронгауз (1995)や Зализняк (1995)を参考にし、独自に、*про-/pro-*の各意味の解釈構造 (当該の意味で *про-/pro-*が付加された派生動詞群に共通する意味構造) と意味的・統語的特徴 (共起語の意味的な性質や統語的な振る舞い、など) といった枠組みを検討する (なお、接頭辞 *про-/pro-*は、英語では不変化詞 *through* が対応する場合が多い (後述)。Benom (2015)の研究は多義的な *through* の意味を意味的・統語的な観点から分析している)。

● 解釈構造

例として、DURATION「ある時間を通して何かに従事する動作」に属する派生動詞の解釈構造を以下に挙げる。

(97) DURATION に属する派生動詞の解釈構造

- a. 1) прождать「ある時間待つ」 *про-*+ждать「待つ」
провести какое-нибудь определённое время в ожидании кого-чего-нибудь
「誰か・何かを待ちながらある一定の時間を過ごす」
- 2) проискать「ある時間探す」 *про-*+искать「探す」
провести какое-нибудь определённое время в поисках кого-чего-нибудь
「誰か・何かを探しながらある一定の時間を過ごす」
- 3) просидеть「ある時間座っている」 *про-*+сидеть「座っている」
провести какое-нибудь определённое время, сидя.
「座りながらある一定の時間を過ごす」

(電子版 Ожегов と Ушаков より引用)

- b. 「ある一定の時間 (Y), V の動作をする」

詳解辞典における記述 (a.) からわかるように、DURATION の意味で *про-/pro-*が付加された派生動詞は、ある一定の時間 (Y), 基本形の V が表す動作に従事することを意味する。このような解釈構造が、DURATION に属する一連の *про-/pro-*付きの派生動詞から抽出できる。

²⁴⁸ b.の意味の型の公式には、わかりやすさのために著者が一部変更を加えてある。

● 意味的・統語的特徴

さらに、本章では解釈構造に含まれる Y などの記号にどのような語句が入り得るのかを意味的・統語的な特徴の観点から記述する：接頭辞付きの派生動詞の意味は、接頭辞や無接頭辞動詞の意味だけでなく、その支配のモデルとも関係している (cf. Зализняк 1995: 145-146). 例えば、DURATION に分類される派生動詞は名詞句の対格(数詞と名詞の組み合わせ)を伴う場合が多く、その際、名詞は時間の単位を意味する(下記例文の a.) (Кронгауз 1995: 45). また、DURATION の意味で *про-/pro-* が付加された派生動詞は、*весь/ves'* 「全ての」、*целый/ceľyj* 「まる」と *день/den'* 「日」、*год/god* 「年」、*обед/obed* 「昼」などの語結合とも頻繁に共起する(下記例文の b.) (Кронгауз 1995: 45). 他にも、DURATION の意味で *про-/pro-* が付いた派生動詞は、時間を表す共起語として、始めと終わり、もしくは終わりだけを指示する一定の時間の断片である前置詞句を伴うことがある(下記例文の c.) (Кронгауз 1995: 45).

(98) DURATION の意味的・統語的特徴の例²⁴⁹

X *про-V* + Y [ACC NP (時間)] / [PP (時間)]

- a. Соколовский *просидел* два часа у Демина.
 Sokolovskij *prosidel* dva časa u Demina.
 Sokolovskij-NAME. sit_for_a_certain_time-V.PST. two-NUM.ACC. hour-N.GEN. at Demin-NAME.
 「ソコロフスキーは2時間デミンのところにいた。」
- b. В этой дворцовой комнате они *просидели* всю ночь.
 V ètoj dvorcovoj komnate oni *prosideli* vsû noč'.
 In this palatial room they sit_for_a_certain_time-V.PST. all-PRN.ACC. night-N.ACC.
 「この屋敷の部屋で彼らは一晩中すごしていた。」
- c. Он *просидел* до утра.
 On *prosidel* do utra.
 he sit_for_a_certain_time-V.PST. up_to-PRP. morning
 「彼は朝までいた。」

(現行 RNC-M より引用: アクセス日 2017/11/13)

上記の例から、*про-/pro-* が DURATION の意味で付加されている場合、派生動詞は共起語として時間を表す対格の名詞句や前置詞句を伴っていることがわかる。a. と b. の例は、それぞれ *два часа/dva časa* 「2 時間」と *всю ночь/vsû noč'* 「一晩中」といった対格の名詞句を伴っている。

²⁴⁹ これ以降、意味的・統語的特徴の例文において Y に当たる語を強調する際には実線を、Z に当たる語を強調する際には点線を用いる。なお、主語である X を強調する必要がある場合には二重線を用いる。

c.の例では *do ympa/do utra* 「朝まで」といった時間を表す前置詞句が現れている。

本章は *npo-/pro-* の 9 つの意味に対して、このような意味的・統語的特徴を検討する。

7.1.2.2. イメージ・スキーマ

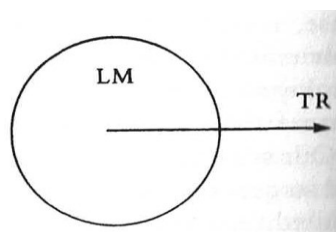
次節 7.2. では *npo-/pro-* の各意味について詳細に説明していくが、その際、認知言語学で用いられるイメージ・スキーマ (image schema) を導入する。

人間は「日々、具体的な身体経験に基づいて様々なイメージを形作っているが」(辻(編) 2013: 16), イメージ・スキーマとは、身体的・空間的经验の中で繰り返し発生するパターンを図式化したもので、「容器」, 「前後」, 「上下」などのイメージの抽象的な構造として機能する (cf. Johnson 1987)²⁵⁰. 身体的というのは、「イメージ・スキーマは知識の内容というよりは、経験の骨組みをなす抽象的なイメージであり、その多くは身体経験を通じて得られると考えられている」(大堀 2002: 87) からである。他にも、山梨 (1995: 96-97) が述べているように、「イメージスキーマは、外部世界に関する感覚的经验や具体的な行動を介してつくり上げられる具体的な表象に根差しており、日常言語の概念構造の形成に先行するわれわれの経験を構造化している <...>. 日常言語の意味は、外部世界に客観的に存在しているのではなく、われわれの具体的な経験的基盤を介して理解され動機づけられている。さらに、言葉の意味の一部は、この経験的な基盤を背景として形成されるさまざまなイメージスキーマによって特徴づけられている <...>. イメージスキーマは、日常言語の形式・構造から意味にわたる言語表現の拡張のプロセスと言葉の創造的側面を考察していく際に重要な役割をになう」。

この概念は、認知言語学の分野でまず英語前置詞の意味記述に用いられ、その後、*out* などの不変化や接頭辞などに分析範囲が拡大していった (e.g. Brugman 1981; Lindner 1981; Talmy 1985; Langacker 1987; Sweetser 1990). 以下に、Johnson (1987) における英語の *out* の空間的なイメージ・スキーマと例文を挙げる。

(99) John went *out* of the room.

「ジョンはその部屋から出た。」



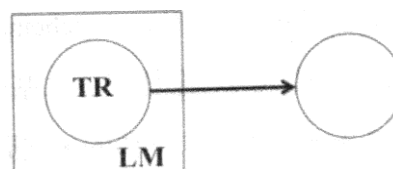
(Johnson 1987: 32)

²⁵⁰ Johnson (1987: xix) は、イメージ・スキーマに関して以下のように定義している：「私の主張は以下の内容を示すことから始まる：人間の身体的運動，対象物の操作，知覚的な相互作用には、繰り返し生じるパターンが含まれており、それらなしでは我々の経験は混沌とし、理解できないものになっているだろう。私はこうしたパターンをイメージ・スキーマと呼ぶが、これはイメージの抽象的な構造として主要な機能を果たすからである」。

このイメージ・スキーマは、容器である landmark（以下、LM）の中側から外側へ *trajector*（以下、TR）が移動しているという *out* の中心的・空間的な用法を示している²⁵¹。

ハンガリー語の接頭辞 *ki-*は通常「閉じた空間から外へ」を意味するが、*out* と同様のイメージ・スキーマが想定される (cf. 早稲田 2011)。

- (100) Kati *ki-ment* a szobából.
 Kati-NAME. out_go-V.PST. the room_from.
 「カティはその部屋から出た。」



(早稲田 2011: 128)

out のイメージ・スキーマと同様に、(100)では TR（カティ）が LM（部屋）の中から出ている様子が描かれている（なお、ロシア語の動詞接頭辞 *vyl-/vy-* の空間的な用法のイメージ・スキーマも *out* や *ki-* と類似の構造を有しているであろう）。他にも、Janda (1986), Shull (2003), Соколова, Байдимирова (2011)などは、ロシア語の動詞接頭辞の分析にイメージ・スキーマに相当する図を用いている。このように、イメージ・スキーマは接頭辞の意味記述にも援用される。

このイメージ・スキーマを介して言語単位の意味は拡張していくことがある。例えば、辻(編) (2013: 17)が述べているように、イメージ・スキーマが非空間領域へと投射されることで、空間的意味から非空間的意味へとメタファー的に意味の拡張が起こる (7.4.参照)。また、「基本的なイメージ・スキーマの構造に一部変更が加えられることによって、同じ空間義（空間的意味）²⁵²ではあるが、基本的用法とは異なる位置関係を示すように変化する」という拡張も存在する」(辻(編) 2013: 17)が、イメージ・スキーマそのものにバリエーションを生み出すこの作用をイメージ・スキーマ変換と呼ぶ (辻(編) 2013: 17; cf. Johnson 1987)。以下に、不変化詞 *out* のイメージ・スキーマ変換の例を挙げる。

²⁵¹ イメージ・スキーマ内で移動する物体に対して *trajector* (TR)、移動の起点となる物体に対して *landmark* (LM) という用語を用いる (cf. Langacker 1987)。なお、TR と LM は主に前置詞の分析に用いられるが、その場合、前置詞によって位置づけられる物体が TR、その位置付けの起点となる物体が LM である。例えば、The knob is *above* the keyhole. 「取っ手は鍵穴の上にある」(辻(編) 2013: 255)では、TR が knob, LM が keyhole である。TR と LM の区別は、ゲシュタルト心理学の「図地分化という基本的な認知能力の現れであると言える」(辻(編) 2013: 255)。

²⁵² () は著者が追加した。

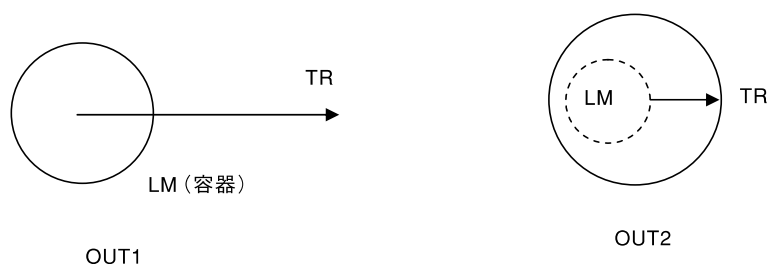


図 8. (再掲) 不変化詞 *out* のイメージ・スキーマ

(谷口 2011: 66)

(101) (再掲) OUT1 と OUT2 の用法に対応する例

a. OUT1: Get *out* of the car.

「車から出なさい。」

b. OUT2: Roll *out* the red carpet.

「赤いカーペットを広げなさい。」

(谷口 2011: 66)

OUT1 は, (99)で見たように, LM (容器) の内側から外側へ TR が移動しているという *out* の基本的な用法を示している. 一方, OUT2 は, TR の元の状態を LM とみなし, そこから外側へ広がる移動を表しており (丸めてあるカーペットを転がして広げるという空間的移動), OUT1 からイメージ・スキーマを変換することで生じたものであるとされる (谷口 2011: 65-66).

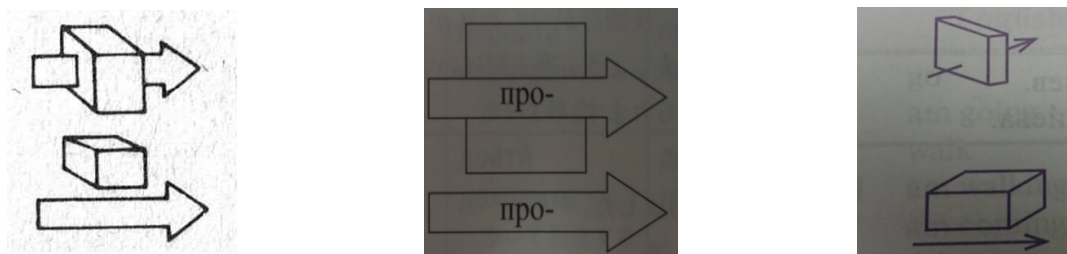
*npo-/pro-*に関してもイメージ・スキーマ変換によって意味の拡張が起きていると考えられるが (7.2., 7.4.参照), 接頭辞の意味間の関係を検討するにあたって, イメージ・スキーマという認知的なモデルを導入する意義は大きい. 単に接頭辞の意味群を列挙するのではなく, それらが互いにどう結びついており, いかなる意味拡張を経て現在の意味体系を成しているのかを認知言語学の観点から考察することで, 意味の記述はより精密化される.

また, イメージ・スキーマを導入する別の理由として, 教育上の利点も考えられる. 実は, イメージ・スキーマに相当するイメージやイラストは, 教材や辞書などに古くから用いられてきた (村田 2011: 82). 実際, イメージやイラストなどを用いた指導書, 教材, 辞書 (e.g. 田中他 2006; 大西, マクベイ 2009; 政村 2012)²⁵³, その重要性を指摘する研究 (e.g. 佐藤 2004; 村田 2011), スキーマの利用が語彙学習に効果的であることを示す実証研究 (谷口 2011)なども存在する. 教材においてスキーマが採用されている状況を鑑みると, これは学習者の意味理解を促進するのに

²⁵³ 厳密には, 田中他 (2006)はイメージ・スキーマではなく, コア図式という枠組みを学習に応用している. 大西, マクベイ (2009)は, 文法事項がもつイメージを画像などによって説明している. ただ, 谷口 (2011: 63)が述べているように, これらは「認知言語学のイメージ・スキーマなどに対応するツールを用い, 学習者向けの記述を行ったもの」である. また, 政村 (2012)は意味のイメージを図示・図解することに焦点を当てた辞典であるが, ここでいう図もイメージ・スキーマに相当する.

効果的であると推測される。

ロシア語の教材も、動詞接頭辞に対象は限定されるが、その空間的意味を提示する際にスキーマを用いることが少なくない。例えば、*про-/pro-*の空間的意味は以下のように図示される。



Пехливанова, Лебедева (1987: 246)

沼野他 (2012: 194)

Новикова, Шустикова (2015: 126)

図 9. 教材における *про-/pro-*のイメージ図

上の図では、*про-/pro-*がもつ何かの中を通過する動作（本章の THROUGH に相当）と何かの脇を通過する動作（本章の PASS に相当）が示されている。また、THROUGH や PASS のような空間的な意味は、他の意味への拡張の動機となり得るが、その意味の派生を説明する際に、上記のようなイメージ・スキーマが援用される。

このように、イメージ・スキーマを多義的な言語単位の学習に導入することにより、「特に空間的意味を根源として多様な拡張を示す前置詞や不変化詞の意味を明確に提示することができ、学習者にとっておおいに理解の助けとなることが期待される」（谷口 2011: 66）。

5 章で言及したが、英語の不変化詞や前置詞はロシア語では接頭辞となって現れる場合がある。例えば、動詞接頭辞 *про-/pro-*は英語では主に *through, by* となって現れ得る（7.2.参照）。したがって、ロシア語の接頭辞の学習にもイメージ・スキーマを用いることは有効であろう²⁵⁴。ただし、前述の通り、教科書に導入されている接頭辞の意味とそのイメージ・スキーマは空間的なものに限られる。著者の知る限り、THROUGH と PASS 以外の意味をイメージ・スキーマで示した *про-/pro-*の研究や教材は存在しない。そこで、本章では、*про-/pro-*がもつ抽象度の高い意味を除いた 6 つの意味に対してイメージ・スキーマを検討する。そして、前節で言及した解釈構造、意味的・統語的特徴と合わせてこれを用いることで、*про-/pro-*の詳細な意味記述を試みる。なお、これら 3 つの言語学的な分析の道具立ては、これまでも動詞接頭辞の記述に用いられてきたが、

²⁵⁴ ただし、鍋島 (2003: 334)が指摘しているように、「現段階では、イメージスキーマの実在性が実証されているわけでもなく、また、どのようなイメージスキーマが実在するのかについての先験的な基準が存在するわけでもない。したがって、これを用いた言語分析に不十分さがつきまとうのもまた事実である」。

その内容は体系的ではなく部分的であった。この点においても解釈構造、意味的・統語的特徴、イメージ・スキーマの記述整備には意義がある。

7.2. *npo-/pro-*の各意味の詳細

表 65 で示した通り、本章では *npo-/pro-* の意味を(94)の分析手順に従って 9 つに分類した。以下で、各意味の解釈構造、意味的・統語的特徴、そして、(一部の意味を除いた) イメージ・スキーマを提示する。

その際、合わせて *npo-/pro-* の意味がどう拡張していったのかについても認知言語学の観点から説明する。ロシア語の接頭辞を含めた多義的な言語単位では、メタファー、メトニミー、そしてイメージ・スキーマ変換などによってその意味が拡張していく (cf. Janda 1986, 2010; Brugman, Lakoff 1988; 皆島 2009, 2014; 早稻田 2010; Nessel et al. 2011; Соколова, Байдимирова 2011; 野田 2013; 趙 2014)。イメージ・スキーマ変換については 7.1.2.2. で言及したが、メタファーとメトニミーの定義は主に 艸山 (1997, 2010) に従う: 1) メタファーとは、2 つの事物・概念の何らかの類似性 (similarity) に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いることで、他方の事物・概念を表すという比喩である²⁵⁵。2) メトニミーとは、2 つの事物の外界における隣接性 (contiguity)、さらに、2 つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いることで、他方の事物・概念を表す比喩を指す²⁵⁶。本章では、このメタファー、メトニミー、イメージ・スキーマ変換の観点から (cf. Lakoff 1987)²⁵⁷、*npo-/pro-* の意味群がどう派生していったのかも合わせて記述する。

なお、ここでは *npo-/pro-* の 9 つの意味を、プロトタイプの THROUGH と 3 つの Cluster (類似の意味の集合体) に分けて記述する。7.4. で後述するが、これは放射状カテゴリーの作成において用いられる手法である (cf. Nessel et al. 2011; Соколова, Байдимирова 2011; Janda et al. 2013)。

²⁵⁵ 例えば、Nessel et al. (2011) の分析によると、ロシア語の動詞接頭辞 *вст-/вы-* は EMPTY A CONTAINER 「容器を空にする」という意味をもつが、ここからメタファーに動機付けされて動作の徹底性を示す意味群が派生する。残らず空にするという動作が、メタファーを介して徹底的な動作として捉えられるからである (7.4.1. 参照)。

²⁵⁶ メトニミーの例として「屋」の意味拡張が挙げられる (cf. 野田 2013): 「八百屋」、「花屋」、「郵便屋」など、「消費者に対してある有料の製品やサービスを提供する職業」という意味から、メトニミーによって「消費者に対して、ある有料の製品やサービスを提供するある職業に従事している人」(例: 「肉屋」、「パン屋」、「保険屋」) といった意味が派生する。これは、「<ある職業> と <ある職業に従事する人> との概念的関連性に基づくメトニミー」(野田 2013: 53) による意味拡張である。

²⁵⁷ 例えば、Lakoff (1987) では、日本語の類別詞「本」の意味拡張を、メタファー、メトニミー、イメージ・スキーマ変換などの認知的な動機付けを用いて説明している。ただし、「本」を例にとっても、意味拡張に関しては異なる解釈が可能であるため (cf. 濱野 2006)、本章の分析結果は絶対的なものではない。

7.2.1. THROUGH 「何かを通過・貫通する動作」

THROUGH は、何かの中を通る/中に何かを通す動作を表す (cf. АН СССР 1980: 369; Janda et al. 2013: 106). ロシア語の接頭辞は前置詞由来のものが多く、АН СССР (1960: 597)が述べているように、「接頭辞 *про-/pro-*と前置詞 *про/pro*²⁵⁸の間に意味的な共通点は少ない. 接頭辞 *про-/pro-*は意味的に前置詞 *сквозь/skvoz'*『貫いて』と *через/čerez*『通り抜けて』に遥かに近い」.

おそらく接頭辞 *про-/pro-*の「最も特徴的な意味は THROUGH であろう」(Janda et al. 2013: 106). THROUGH は空間的・具象的な意味であり、この接頭辞の中心的、プロトタイプ (7.4.参照) 的な意味であると推測される.

以下に、THROUGH に属する派生動詞とその解釈構造を挙げる.

(102) THROUGH に属する派生動詞の解釈構造

- a. 1) пройти 「通過する」: *про-* + идти 「進む」
двигаясь или будучи двигаемым, влезть, проникнуть через что-н., сквозь что-н.
「動きながら、または動かされながら、何かの中を通過して入り込む、侵入する」
- 2) пролететь 「飛んで通過する」 *про-* + лететь 「飛ぶ」
летя, пройти сквозь что-нибудь.
「飛ぶことで何かの中を通過する」
- 3) прожечь 「焼き穴を開ける」: *про-* + жечь 「焼く」
продыривить жжением.
「焼くことで (何かに) 穴を開ける」

(電子版 Ожегов と Ушаков より引用)

- b. 「V の動作をすることで、Y の中を通る・貫通する」

上記の例からわかるように、THROUGH の意味で *про-/pro-*が付加された派生動詞は、基本形の V が表す動作をすることで何かの中を通る・貫通するといった解釈構造を有している: a. 1)の *пройти/proiti* 「通過する」は、基本形の V である *идти/idi* 「進む」という動作によって何らかの対象 Y の中を通ることを意味する. また、a. 3) *прожечь/prožeč'* 「焼き穴を開ける」は、基本形の V (*жечь/žeč'* 「焼く」) の動作によって対象 Y を貫通するという解釈構造を有している²⁵⁹.

АН СССР (1980)は、THROUGH に相当する意味で *про-/pro-*が付加された派生動詞として、他にも *пролезть/prolezt'* 「這い込む」、*проехать/proehat'* 「(乗り物で) 通過する」、*пробуравить/proburavit'* 「ボーリングする」、*прогрызть/progryzt'* 「噛み破る」、*пропилить/propilit'* 「鋸で穴を開ける」といった例を挙げている. THROUGH は通過や貫通という意味的な特徴を有するため、基本形である V は、1) 移動 (*идти/idi* 「進む」、*ехать/ehat'* 「(乗り物で) 進む」) や 2) 破壊 (*грызть/gryzt'* 「噛

²⁵⁸ 前置詞 *про/pro* は、「について」、「のために」といった意味を表す.

²⁵⁹ ただし、本章で規定した解釈構造がきれいに適応されない派生動詞も存在する (7.3.で言及する).

む」, *пилить/pilit'*「鋸でひく」)を伴う動作を表す。

次に, *про-/pro-*付きの派生動詞の例文から抽出した, THROUGH の主要な意味的・統語的特徴を挙げる²⁶⁰。AH CCCP (1960: 597)は, THROUGH に相当する意味に関して「対象を通り抜ける・貫く動作, 特に, 対象における破口, 穴の形成」といった特徴を挙げているが, この意味で *про-/pro-*が付加された派生動詞は, 自動詞と他動詞の両方が有り得る。

(103) THROUGH の意味的・統語的特徴

a. 自動詞 X *про-V* + Y [PP (通過の対象)]

Мы	<i>прошли</i>	<u>сквозь</u>	<u>лес</u>	и	<i>пришли</i>	к	озеру.
My	<i>prošli</i>	<i>skvoz'</i>	<i>les</i>	<i>i</i>	<i>prišli</i>	<i>k</i>	<i>ozeru.</i>
We	<i>pass-V.PST.</i>	<i>through-PRP.</i>	<i>forest</i>	<i>and</i>	<i>arrive-V.PST.</i>	<i>to</i>	<i>lake</i>

「私たちは森の中を通過して, 湖に着いた。」 (on the web)

b. 他動詞

1) X *про-V* + Y [ACC NP (貫通の対象)]

Я *просверлил* стену.
 Â *prosverlil* *stenu*.
 I *drill-V.PST.* *wall-N.ACC.*
 「私は壁にドリルで穴を開けた。」

2) X *про-V* + Y [ACC NP (貫通の対象)] + Z [INS NP (道具)]

Я *пробил* стену камнем.
 Â *probil* *stenu* *kamnem*.
 I *make_a_hole-V.PST.* *wall-N.ACC.* *stone-N.INS.*
 「私は石で壁に穴を開けた。」

3) X *про-V* + Z [ACC NP (穴)] + Y [PP (貫通の対象)]

Кислота	<i>прожгла</i>	<u>дыру</u>	<u>в столе</u> .
Kislota	<i>prožgla</i>	<i>dyru</i>	<i>v stole.</i>
acid	<i>burn_a_hole_in-V.PST.</i>	<i>hole-N.ACC.</i>	<i>in desk-N.LOC.</i>

「酸は机に穴を開けた。」 (自作の例文)

a.の自動詞の場合, *про-/pro-*が付加された派生動詞は, 移動の経路を示す *сквозь/skvoz'*「貫いて」や *через/čerez*「通り抜けて」を伴った前置詞句 Y (通過の対象) と頻繁に共起する。b.の例のような「他動詞の場合, 直接目的語が意味するのは, 動作によって対象に作られた穴, もしくは穴が形成される対象である」(AH CCCP 1960: 598)。b. 1)と b. 2)では貫通の対象が対格の名詞句 Y (*стену/stenu*「壁」)で示されており, さらに, 2)では造格の名詞句 Z でその道具 (*камнем/kamnem*「石」)が示されている。3)は対格の名詞句 Z に「穴」自体を意味する語 (*дыру/dyru*) がきており, その穴が開く貫通の対象は前置詞句 Y (*в столе/v stole*「机に」)で示されている。

²⁶⁰ 当然, 本章が提示していない他の意味的・統語的特徴も存在するが, ここでは, 後述の分析を通して頻繁に見受けられたものや, 各意味の特徴をよく反映しているもののみを例として挙げる。

前述の考察を踏まえ、(103)の a.を例として THROUGH のイメージ・スキーマを検討する。

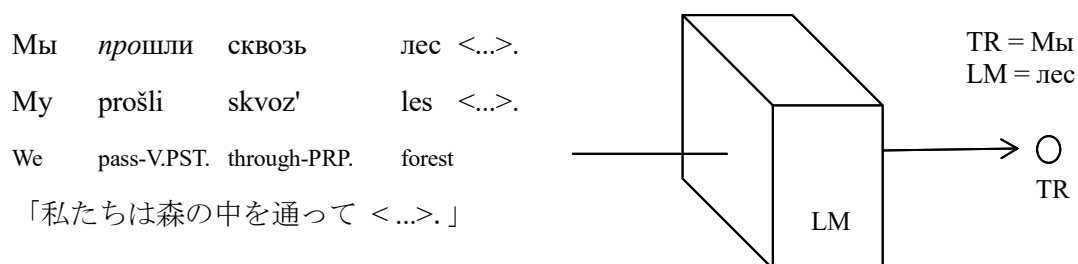


図 10. THROUGH のイメージ・スキーマ

上述のイメージ・スキーマでは、TR (Мы/My 「私たち」) が、LM (лес/les 「森」) の中を通過している動作が描かれている(このイメージ・スキーマは(103)の b.の例にも当てはまる)。THROUGH のイメージ・スキーマ(もしくはそれに該当する図)は、これまでもロシア語の教材において言及されてきたが(7.1.2.2.参照)、本章のイメージ・スキーマはそれと同様の構図を有している。

7.2.2. [Cluster 1] 「対象や目的の脇を通り過ぎる動作」

Cluster 1 は PASS と MISS から成る。PASS は何らかの対象の脇を通る動作を表し、MISS は何かを逃す・逸する動作を表す (cf. AH CCCP 1980: 369)。2 つの意味は非常に似ており、Ефремова (1996: 414-415)や Janda et al. (2013: 107)は、これらに相当する意味を 1 つのグループにまとめて記述している。両者は、より抽象的なレベルにおいて何らかの対象や目的へとは向かわずにその脇を通過する、という意味的な共通点を持つ。本章は解釈構造や意味的・統語的特徴の観点から PASS と MISS を別々の意味として扱うが、意味的に近い関係にあるため 1 つの Cluster にまとめる。

● PASS 「何かの脇・側を通過する動作」

PASS は何らかの対象の脇を通る動作を表す (cf. AH CCCP 1980: 369)。まず、PASS に属する派生動詞の解釈構造を確認する。

(104) PASS に属する派生動詞の解釈構造

- a. 1) проехать 「(乗り物で) 通過する」 про-+ехать 「(乗り物で) 進む」
миновать, проследовать мимо чего-нибудь по какому-нибудь пути, не останавливаясь.
「傍を過ぎる、止まらずに、何らかの道を通して何かの側を移動する」
- 2) пробежать 「走って通り過ぎる」 про-+бежать 「走る」
бегом пройти мимо кого-чего-нибудь.
「走りながら誰か・何かの側を通り過ぎる」

- 3) проплыть「泳いで過ぎる」 *про-* + *плыть*「泳ぐ」
 плывя, миновать что-нибудь, проследовать мимо чего-нибудь.
 「泳ぎながら、何かの側を通り過ぎる、脇を通過する」

(電子版 Ожегов と Ушаков より引用)

- b. 「V の動作をすることで、Y の脇・側を通り過ぎる」

PASS は前節の THROUGH と意味が似ているが、両者は脇・側を通るか (PASS)、中を通るか (THROUGH) といった経路の点で異なる。例えば、PASS に属する *пробежать/probežat'*「走って通り過ぎる」を例にとると、この派生動詞は、基本形の V (*бежать/bežat'*「走る」) の動作によって、対象 Y の脇を通り過ぎることを表す。他にも、АН СССР (1960: 598) は、PASS に相当するグループの例として、*пролететь/proletet'*「飛んで通過する」、*проскакать/proskakat'*「跳ねて過ぎる」といった派生動詞を挙げている。このように、語形成に際して PASS は移動を表す動詞と関係が深い。

次に、PASS の意味的・統語的特徴とイメージ・スキーマを挙げる。PASS の意味で *про-/pro-* が付加された派生動詞は、自動詞と他動詞の場合があり得る。

(105) PASS の意味的・統語的特徴

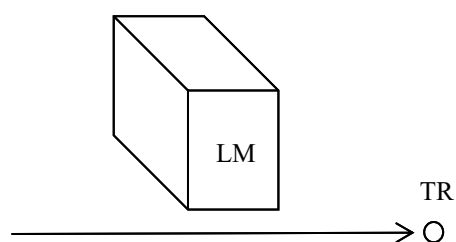
- a. 自動詞 X *про-V* + Y [PP (通過の対象)]

Тележка *проехала* мимо окна.
 Teležka *proehala* *mimo* *okna*.
 cart *ride_past-V.PST.* *by-PRP.* *window*
 「荷物運搬車が窓の側を通り過ぎた。」

- b. 他動詞 X *про-V* + Y [_{ACC} NP (通過の対象)]

Мы *проплыли* маяк.
 My *proplyli* *maâk*
 we *swim_by-V.PST.* *lighthouse-N.ACC.*
 「我々は灯台の側を泳ぎで通り過ぎた。」

(on the web)



a. TR = Тележка / LM = окно (> окна)

b. TR = Мы / LM = маяк

図 11. PASS のイメージ・スキーマ

a. の例は、通過の対象を表す前置詞句 Y を伴うが、その際の前置詞は、移動の経路を意味する *мимо/mimo*「側を、脇を」である傾向が非常に強い (*мимо окна/mimo okna*「窓の側を」)。b. では、*про-/pro-* の付いた派生動詞は対格の名詞句 Y を伴い、それは脇や側を通り過ぎる対象を意味する (例文では *маяк/maâk*「灯台」の側を泳いで通り過ぎている)。

ここまでの考察が示すように、THROUGH の意味的・統語的特徴は *сквозь/skvoz'*「貫いて」や

через/čerez「通り抜けて」、PASS のそれは *мимо/мимо*「側を、脇を」を伴う前置詞句に代表されるが、これが両者のイメージ・スキーマにも現れている。PASS のイメージ・スキーマは THROUGH のそれと似ているが、両者の違いは TR が LM の中を通っているか、脇を通っているかである。図 11 が示すように、PASS では TR (a. *Тележка/Teležka*「荷物運搬車」、b. *Мы/Мы*「我々」) が LM (a. *окна/окна*「窓」、b. *маяк/ма́йк*「灯台」) の中ではなく、脇・側を通っている。意味拡張に関して言うと、PASS は、イメージ・スキーマ変換に動機付けられて THROUGH から派生したと捉えられる（移動経路が対象の中から脇・側へと変化している）。

なお、*пройти/projti*「通過する」、*пробежать/probežat'*「走って通り過ぎる」などの動詞は THROUGH と PASS の両方の意味を有している場合が多く、その違いは共起する前置詞（THROUGH は主に *сквозь/skvoz'*, *через/čerez*, PASS は *мимо/мимо*）によって決まる²⁶¹。

● MISS「何かを逃す・逸する動作」

MISS は PASS と意味的に近い関係にある。PASS は何らかの対象の脇を通る動作を表すが、一方、MISS は何か逃す、逸する動作を表す (cf. АН СССР 1980: 369; Ефремова 1996: 414-415)。MISS は「目的」である対象の脇を通り過ぎるという点で PASS と通ずる部分を持つ。

まず、MISS に属する派生動詞の解釈構造を挙げる。

(106) MISS に属する派生動詞の解釈構造

- a. 1) *пробегать*「走って逸する」 *про-* + *бегать*「走る」
пропустить что-нибудь из-за беготни, из-за беганья.
「奔走したせいで、走ったせいで、何かを逃す」
- 2) *проспать*「寝過ごす」 *про-* + *спать*「寝る」
уснув, находясь в состоянии сна, пропустить, не заметить, прозевать
「眠りにつき、眠った状態にあり、(何かを) 逃す、気がつかない、逸する」
- 3) *прогулять*「散歩して逸する」 *про-* + *гулять*「散歩する」
лишиться чего-нибудь, пропустить что-нибудь, находясь на прогулке, гуляя
「散歩中に、散歩をすることで何かを失う、何かを逃す」
- 4) *проглядеть*「見落とす」 *про-* + *глядеть*「眺める」
не обратить должного внимания, упустить из виду
「しかるべき注意を払わない、視界から逃す」

(電子版 Ожегов と Ушаков より引用)

- b. 「V の動作をすることで Y を逸する / 十分に V の動作をしないことで Y を逃す」

Кронгауз (1995: 47; 1998: 149)によると、本章の MISS に当たる意味は、何らかの動作により時間

²⁶¹ 例えば、*пройти через здание/projti čerez zdanie*「建物の中を通る」の場合は THROUGH, *пройти мимо здания/projti mimo zdaniâ*「建物の側を通る」の場合は PASS の意味で *про-/pro-*は基本形である *идти/идти*「進む」に付加されている。

を費やした結果、同時に他の動作を行えないことを表す。つまり、MISS に属する派生動詞は、a.の 1)~3)のように、基本形 V が表す動作をすることによって、対象 Y を逸する、逃してしまうことを意味する（例えば、*проспать/prospat'*「寝過ごす」は、基本形 *спать/spat'*「寝る」ことで対象 Y を逸する動作を表す）。また、a.の 4)のように、基本形 V の動作を十分に行わないことで Y を逃すといった派生動詞も MISS に含まれる（*глядеть/glâdet'*「眺める」ことを十分に行わなかったため、*проглядеть/proglâdet'*「見落とす」となる）。他に、AH CCCP (1980) は *прокараулить/prokaraulit'*「よく見張りをせずに逸する」といった派生動詞を、MISS に相当するグループの例として挙げている（基本形：*караулить/karaulit'*「見張りをする」）。

次に、MISS の意味的・統語的特徴とイメージ・スキーマを確認する。AH CCCP (1980: 369)によると、MISS に相当する意味で *про-/pro-*が付加される場合、派生動詞は他動詞であるとされる（後述の 7.3.の分析においてもその通りであった）。

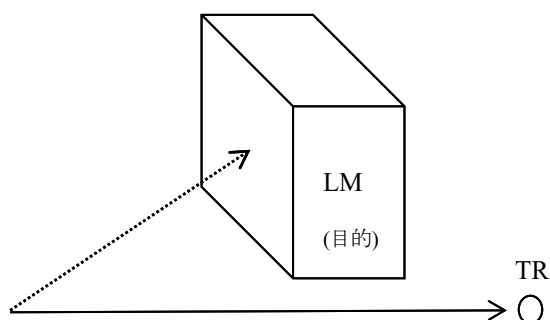
(107) MISS の意味的・統語的特徴

他動詞 X *про-V* + Y [ACC NP (逃す対象)]

a. Я опять проспал урок <...>.
 Â opât' prospal urok <...>.
 I again oversleep-V.PST. lesson-N.ACC.
 「私はまた授業を寝過ごした。」

b. Я проглядел опечатку.
 Â proglâdel opečatku.
 I overlook-V.PST. misprint-N.ACC.
 「僕は誤植を見逃した。」

(on the web)



点線：実行されなかった目的の動作
 実線：実際の動作

a. TR = Я / LM = урок

b. TR = Я（より正確には「私の目」）
 LM = опечатка (> опечатку)

図 12. MISS のイメージ・スキーマ

MISS の意味で *про-/pro-*が付加されている派生動詞は、対格の名詞句を要求する (cf. Кронгауз 1995: 47; 1998: 149). 上記 a.の例では「授業」を意味する *урок/urok* が対格の直接目的語として名詞句 Y の位置に現れている。b.の例では *опечатка/opečatka* (> *опечатку/opečatku*)「誤植」が Y の位置に現れている。

MISS は、メタファーに動機付けされて PASS から派生したと考える（「何かの脇・側を通り過ぎる」動作と「何かを逃す・逸する」動作の類似性）。MISS の場合、通り過ぎる対象は本来果た

されるべき目的である。だが、実際にはその目的の側を通り過ぎているために、もしくは Кронгауз (1998: 149)の言葉を借りるなら、2つの動作は同時に行えないために「逃す・逸する」ことに繋がったと解釈できる。MISS のイメージ・スキーマは PASS のそれと非常に似ており、TR が LM の側を通過している。ただ、MISS のイメージ・スキーマには、TR (Я/А「私」) が目的である LM (урок/urok「授業」、опечатку/opechatku「誤植」) へと向かう動作 (実際には行われなかった動作) が含意されている。

7.2.3. [Cluster 2]「通過に伴って何かが伸びる動作」

Cluster 2 は DISTANCE, DURATION, EXTENSION の3つから成る。より抽象的なレベルにおいて、これらの意味間には「通過に伴って何かが伸びる動作」という共通点がある。伸びる対象は、距離 (DISTANCE の場合)、時間 (DURATION の場合)、何らかの物事 (EXTENSION の場合) である。

なお、*npo-/pro-*のように、1つの言語単位が空間 (DISTANCE) と時間 (DURATION) の両意味で使われることは珍しい現象ではない。「これは内容語 (例えば, *идти/idi*「進む」, *бежать/bežat'*「走る」, *ползти/polzti*「這う」などの移動動詞は、空間内の移動と時間自体の流れの両方と関係がある) と、機能語 (例えば, *перед/pered*「前に」, *после/posle*「後に」, *в/v*「中で」などの前置詞は空間と時間の両方における関係を表す) に関わって」(Кронгауз 1995: 44)²⁶²おり、*npo-/pro-*も例外ではない。

以下で、3つの意味を個別に説明する。

● DISTANCE「ある距離を通過する動作」

DISTANCE はある距離を通過する動作を表す (cf. АН СССР 1980: 369; Ефремова 1996: 414)。接頭辞 *npo-/pro-*が DISTANCE の意味で付加されている派生動詞は、THROUGH に分類される派生動詞と関係が深く、そのため、研究や教材 (Ефремова 1996: 414; Барыкина, Добровольская 2015: 94)によっては、これらに相当する意味は1つのグループにまとめられている。ただし、DISTANCE には、何かの中を通過するという THROUGH 特有の動作は含まれていない。また、両者の統語的な特徴も異なる (この点については後述する)。そのため、本章は、DISTANCE と THROUGH を別の意味として記述する立場をとる。

DISTANCE に分類される派生動詞の解釈構造は次の通りである。

²⁶² 例えば、動詞 *бежать/bežat'*は「走る」という空間的な意味と「(時が) 早く過ぎる」という時間的な意味を有している。同様に、前置詞 *перед/pered* には空間的・時間的な「前に」の意味が共存している。

(108) DISTANCE に属する派生動詞の解釈構造

- a. 1) пробежать 「ある距離を走って通り過ぎる」 *про-* + бежать 「走る」
бегом преодолеть какое-н. пространство.
「走ってある距離を踏破する」
- 2) пронести 「ある距離を運び通す」 *про-* + нести 「運ぶ」
неся кого-что-н., пройти какое-н. расстояние в течение какого-н. времени.
「誰か・何かを運びながら, ある時間のうちにある距離を通過する」
- 3) проплыть 「ある距離を泳いで過ぎる」 *про-* + плыть 「泳ぐ」
плывя, преодолеть какое-нибудь расстояние.
「泳ぐことである距離を踏破する」

(電子版 Ожегов と Ушаков より引用)

- b. 「V の動作をすることで, ある一定の距離 Y を通過する, 踏破する」

a. の派生動詞は, 基本形である V の動作を行うことである一定の距離 Y を通過する, という解釈構造を有している (*бежать/bežat'* 「走る」, *нести/нести* 「運ぶ」, *плыть/плыт'* 「泳ぐ」 ことで, ある距離を踏破する). АН СССР (1980) は, DISTANCE に相当するグループの例として, 他にも *проползти/проползти* 「ある距離を這って通る」といった派生動詞を挙げている. このように, DISTANCE の意味で *про-/pro-* が付加される基本形は, THROUGH, PASS と同様に何らかの移動を表す.

次に DISTANCE の意味的・統語的特徴とイメージ・スキーマを確認する.

(109) DISTANCE の意味的・統語的特徴①

自動詞 X *про-V* + Y [_{ACC} NP (距離)]

Мы	проехали	десять	тысяч	миль.
Мы	proehali	desât'	tysâč	mil'.
we	ride_past-V.PST.	ten-NUM.ACC.	thousand-NUM.GEN.	mile-N.GEN.

「私たちは 10,000 マイル進んだ (通過した)」

(現行 RNC-M より引用: アクセス日 2017/11/12)

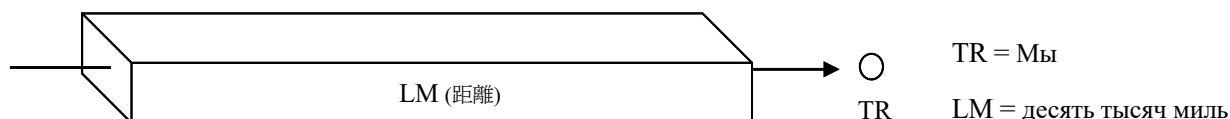


図 13. DISTANCE のイメージ・スキーマ

上記例文には, 距離を表す対格の名詞句 Y が含まれているが (*десять тысяч миль/desât' tysâč mil'* 「10,000 マイル」), これが DISTANCE の意味で *про-/pro-* が付加された派生動詞の最たる特徴で

ある (cf. Кронгауз 1995: 45)²⁶³.

DISTANCE は、イメージ・スキーマ変換に動機付けられて、THROUGH から派生した意味であるとする。THROUGH における LM は TR が通過する対象であったが、図 13 が示すように、DISTANCE ではその LM が距離 (*десять тысяч миль/desât' tysâč mil'* 「10,000 マイル」) となって現れていると捉える (通過の対象である LM が変形している)。

また、本章の分析では、(109)の他に、以下のような例も DISTANCE に分類する。

(110) DISTANCE の意味的・統語的特徴②

自動詞 X *pro*-V +Y [PP (距離)]

a. <...> человек проехал из России в Париж <...>.

<...> čelovek proehal iz Rossii v Pariž <...>.

person ride_past-V.PST. from-PRP. Russia to-PRP. Paris

「その人はロシアからパリへ (の距離を) 通って やって来た。」

b. Ольга Глебовна из кухни пробежала в смежную комнату <...>.

Ol'ga Glebovna iz kuhni probežala v смежную komnatu <...>.

Oliga-NAME. Glebovna-NAME. from-PRP. kitchen run_through-V.PST. to-PRP. neighbor room

「オリガ・グレボーヴナがキッチンから隣の部屋へ (の距離を) 走ってきた。」

(現行 RNC-M より引用：アクセス日 2017/11/17)

上記 a. と b. の例は、(109) の例とは異なり、距離を表す対格の名詞句を伴っていないが、同様にある距離を通過、踏破したことを含意している：代わりに、ここでは前置詞句 Y が踏破した距離を表している (a. の下線部は「ロシアからパリへ (の距離)」, b. の下線部は「キッチンから隣の部屋へ (の距離)」を通過したことを示す)²⁶⁴。

АН СССР (1960, 1980) や Ефремова (1996) では、(110) のように距離を表す対格の名詞句を伴わない用例は確認できない。だが、DISTANCE に相当する意味の説明として、АН СССР (1980: 369) は「移動する、前に進む」、Ефремова (1996: 414) は「前方に進む」といった動作も挙げており、(110) はこれに該当すると思われる。なお、Кронгауз (1995: 44-45) は、(110) のような *pro*-*pro*-付きの派生動詞を本章でいう DISTANCE に分類している。この場合、派生動詞は空間的な範囲を表す語

²⁶³ DISTANCE の意味で *pro*-*pro*-が付加された一部の派生動詞は、受動構文をとり得る (cf. Кронгауз 1995: 44-46)。例えば、*пройти/projti* 「通過する」を用いて、*Три километра пройдены/Tri kilometra projdeny* 「3 キロメートルが踏破された」と言うことができる (Кронгауз 1995: 44)。一方で、対応する無接頭辞動詞による受動構文は非文となる。

そのため、DISTANCE の意味で *pro*-*pro*-が付いた *пройти/пройти* などの動詞は、自動詞ではなく他動詞である可能性も否定できない。

²⁶⁴ DISTANCE の意味的・統語的特徴②の例にも、図 13 のイメージ・スキーマは当てはまる。

句を伴い、その語句には始点と終点が示されているか、終点が示されていない²⁶⁵。本章もこれに倣い、(110)で確認される用法は DISTANCE の例として扱う。なお、(110)の用法は一見すると THROUGH に分類しても問題はなさそうである（例えば、「ロシアからパリへの空間の中を通過した」とも捉えられる）。実際、Ефремова (1996: 414)では、本章の THROUGH と DISTANCE は同じグループの下位区分として 1 つにまとめられている。ただ、DISTANCE と THROUGH のイメージ・スキーマが異なること、THROUGH の特徴である何かの中を通過したという経路が DISTANCE にはっきりとは見受けられないことを考慮して、本章はこれらの意味を分けて記述する。

さらに、本章では音/発話に関わる *про-/pro-*付きの派生動詞も DISTANCE の例として分類する。

(111) DISTANCE の意味的・統語的特徴③

a. 自動詞 X [_{NOM} NP (音や発話)] *про-V*

Крик *прозвучал* *резко*, *угрожающе* <...>.

Krik *prozvučal* *rezko*, *ugrožajuše* <...>.

scream-N.NOM. sound-V.PST. strongly threateningly

「悲鳴が激しく、威嚇的に響いた。」

b. 自/他動詞 X *про-V* (+Y [_{ACC} NP (音や発話)])

1) — Я ничего не понимаю, — *пробормотал* Иван.

— Â ničego ne ponimaû, — *probormotal* Ivan.

I nothing not understand-V.PRS. mutter-V.PST. Ivan-NAME.NOM.

「『私は何もわかりません』とイワンはつぶやいた。」

2) Он *прошептал* это слово <...>.

On *prošeptal* *èto* *slovo* <...>.

he whisper-V.PST. this-PRN.ACC. word-N.ACC.

「彼はその言葉を囁いた。」

(現行 RNC-M より引用: アクセス日 2017/11/17)

まず a. と b. に共通して、基本形の V には音/発話に関する動詞が現れる：上記 a. では主格の主語 X

²⁶⁵ Кронгауз (1995: 45)が挙げた例は以下の通りである (*は非文を表す)。

a. *пройти* от начала улицы до конца.
projti *ot* *načala* *ulicy* *do* *konca*.
 go_through-V.INF. from-PRP. start street to-PRP. end

「通りの初めから最後まで歩き通す。」

b. * *Пробеги* оттуда.
Probegi *ottuda*.
 run_through-V.IMP. from_there-ADV.
 「そこから走り通せ。」

に音/発話を意味する名詞句 (*крик/krik* 「悲鳴」) が現れる. b.lは自他の両方があり得るが, 基本形 V の位置に音/発話に関係する動詞 (*звучать/zvučat'* 「響く」, *шептать/šeptat'* 「囁く」) がきており, 2)の他動詞は, 音/発話を意味する対格の名詞句 Y (*слово/slovo* 「語」) を伴う²⁶⁶.

接頭辞 *про-/pro-*は *звучать/zvučat'* 「響く」, *бурчать/burčat'* 「つぶやく」といった音や発話を意味する動詞と結びつきが非常に強い. 例えば, 本章の分析対象内では, *звенеть/zvenet'* 「鳴る」, *кричать/kričat'* 「叫ぶ」, *молвить/molvit'* 「言う」, *мычать/муčat'* 「(牛が) 鳴く」, *орать/orat'* 「大声で叫ぶ」, *петь/pet'* 「歌う」, *пищать/pišat'* 「びいびい言う」, *свистеть/svistet'* 「口笛を吹く」といった基本形に *про-/pro-*の付いた派生動詞が確認されている. なお, この用法は АН СССР (1980) において個別に記述されていない²⁶⁷.

Janda et al. (2013: 107)によると, 「この結びつきは, *про-/pro-*の THROUGH と DURATION²⁶⁸の両方に動機付けされている. 音や発話は空間を貫いていき (THROUGH), さらに, このグループの動詞の多くは DURATION の意味を表し得る」ためである. 確かに, 音/発話の派生動詞の多くは, 一定の時間続く動作 (DURATION) という意味も合わせて持っている²⁶⁹. だが, これらの動詞に空間を貫く THROUGH の意味が含まれているのかの判断は難しい. また, Кронгауз (1995: 50)は, より抽象的なレベルでは, 音や発話に関係する *про-/pro-*は, 本章の PASS と意味的にも統語的に近いと述べている. 以上のように, この点に関する記述は各研究で一致していない. 本章では(111)の用例に関して, 音や発話は空間を移動するものではあるが, その経路は何かの中や脇ではなく, ある距離を移動して伝わっていると捉える (つまり, DISTANCE に分類する²⁷⁰).

なお, Мадаени (1998)は, THROUGH, PASS, そして DISTANCE に相当する 3 つが移動動詞に *про-/pro-*が付加される際の意味である, と述べている.

● DURATION 「ある時間を通して何かに従事する動作」

DURATION はある時間を通して何かに従事する動作を表す (cf. АН СССР 1980: 369; Ефремова 1996: 416). この意味で *про-/pro-*が付加された派生動詞は時間的な文脈と関係が深く, 時間的な幅をもったプロセスや行動を表す (cf. Кронгауз 1995: 44-47).

²⁶⁶ DISTANCE の意味的・統語的特徴③の例にも, 図 13 のイメージ・スキーマは当てはまる. なお, (111) の a. の例文のように, TR (*крик/krik* 「悲鳴」) は言語化されているが, LM (悲鳴が通過する距離) は言語化されていない場合もある.

²⁶⁷ 一方, АН СССР (1960: 598)は, 本章が DISTANCE に分類する音/発話の派生動詞に関して, ここでの *про-/pro-*は完了, 遂行 (законченность, завершённость) を意味する, としている. 類似の記述が Ефремова (1996: 415) でも見受けられる.

²⁶⁸ 後述するが, DURATION は「ある時間を通して何かに従事する動作」を表す.

²⁶⁹ 例えば, *прошептать/prošeptat'* は, 「囁く」の他に「ある時間囁く」という意味を有している.

²⁷⁰ この問題に関しては先行研究が少なく, 記述がまだ整備されていないため, 今後さらなる調査が必要である.

DURATION に分類される派生動詞の解釈構造は以下の通りである。

(112) (再掲) DURATION に属する派生動詞の解釈構造

- a. 1) прождать 「ある時間待つ」 *про-*+ждать 「待つ」
 провести какое-нибудь определённое время в ожидании кого-чего-нибудь
 「誰か・何かを待ちながらある一定の時間を過ごす」
 2) проискать 「ある時間探す」 *про-*+искать 「探す」
 провести какое-нибудь определённое время в поисках кого-чего-нибудь
 「誰か・何かを探しながらある一定の時間を過ごす」
 3) просидеть 「ある時間座っている」 *про-*+сидеть 「座っている」
 провести какое-нибудь определённое время, сидя.
 「座りながらある一定の時間を過ごす」

(電子版 Ожегов と Ушаков より引用)

- b. 「ある一定の時間 (Y), V の動作をする」

上記 a. の 1)~3) の派生動詞は, ある一定の時間 (Y) を通して基本形である V が表す動作に従事することを意味する²⁷¹。АН СССР (1980) は, DURATION に相当する意味の例として, *проездить/проездит'* 「ある時間旅行する」, *промечтать/промечат'* 「ある時間夢想する」などの派生動詞を挙げている。

次に DURATION の意味的・統語的特徴とイメージ・スキーマに言及する。DURATION の意味で *про-/pro-* が付加される場合, 派生動詞は自動詞と他動詞の場合があり得る。

(113) DURATION の意味的・統語的特徴

- a. 自動詞 X *про-V* + Y [_{ACC} NP (時間)] / [PP (時間)]

- 1) Соколовский *просидел* два часа у Демина.
 Sokolovskij prosidel dva časa u Demina.
 Sokolovskij-NAME. sit_for_a_certain_time-V.PST. two-NUM.ACC. hour-N.GEN. at Demin-NAME.
 「ソコロフスキーは2時間デミンのところにいた。」
- 2) В этой дворцовой комнате они *просидели* всю ночь.
 V ètoj dvorcovoj komnate oni prosideli vsû noč'.
 In this palatial room they sit_for_a_certain_time-V.PST. all-PRN.ACC. night-N.ACC.
 「この屋敷の部屋で彼らは一晩中すごしていた。」

²⁷¹ Зализняк и др. (2015) では, DURATION に相当する意味は, 継続的・限定的動作様態 (длительно-ограниченный способ действия) として扱われている。Зализняк и др. (2015:119) によると, この意味を伴った *про-/pro-* 付きの派生動詞は「ある一定のひとまとまりの時間的間隔内で起きていた動作を」を表し, また, 「その際, 当意味はその間隔を丸ごと埋め尽くすかのようなものである」と述べている。Кронгауз (1995: 47) も同様に, *про-/pro-* の付いた派生動詞の要点は時間的な断片であり, 基本形の動詞はその断片を満たす手段を伝えている, と述べている。

3) Так я просидел до вечера.

Tak â prosidel do večera.
so I sit_for_a_certain_time-V.PST. up_to-PRP. evening

「こうして私は夕方までいた。」

b. 他動詞 X *pro*-V + Z [ACC NP] + Y [ACC NP (時間)] / [PP (時間)]

<...> я с большим волнением прождал его всё утро.
â s bol'shim volneniem proždal ego vsë utro.
I with big stress wait_for_a_certain_time-V.PST. him-PRN.ACC. whole-PRN.ACC. morning-N.ACC.

「私はとても緊張しながら彼を朝の間ずっと待っていた。」

(現行 RNC-M より引用：アクセス日 2017/11/13)

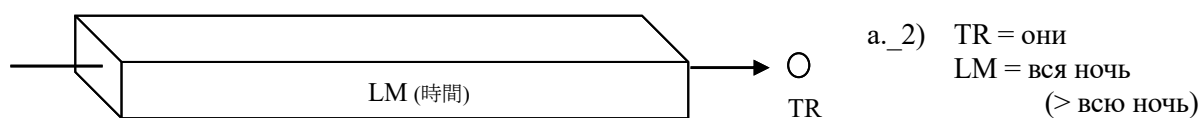


図 14. DURATION のイメージ・スキーマ

pro-/*pro*-が DURATION の意味で付加されている場合、派生動詞は、自他に共通して時間を表す名詞句 Y、もしくは前置詞句 Y を伴う。具体的には、時間的な断片として解釈できる *весь/ves'*「全ての」・*целый/ceľyj*「まる」と名詞の組み合わせによる対格の名詞句 (a. 2. と b.) や、数詞と名詞による対格の名詞句 (a. 1) を伴う (cf. Кронгауз 1995: 45). Зализняк и др. (2015: 119) が述べているように、DURATION の意味で *pro*-/*pro*-が付加された派生動詞は、「この継続的・限定的な意味を裏付ける時間的な状況限定詞の文脈においてのみ用いられる」。なお、DURATION に分類される派生動詞は、時間的な始点と終点、もしくは終点を表す語句を伴うことがあるが (a. 3), 始点のみを示す語句では非文となる (cf. Кронгауз 1995: 45).

DURATION のイメージ・スキーマは、DISTANCE のそれとほぼ同じである：DISTANCE のイメージ・スキーマでは LM は「距離」であり、そこを TR が通過・踏破する。DURATION のイメージ・スキーマでは LM は「時間」として捉えられる。例えば、a. の 2) の例では、*они/oni*「彼ら」(TR) が *всю ночь/vsû noč'*「一晩中」という時間(LM)を通過している。レイコフ、ジョンソン (1986: 66) は、TIME IS STATIONARY AND WE MOVE THROUGH IT「時間は静止物体である。われわれが時間の中を動いていく」という英語のメタファーの型に言及し、As we go further into the 1980s, ...「さらに 1980 年代の中にはいっていくにつれて」という例を挙げている。ロシア語における時間の概念にも類似のメタファーが働いていると推測される (つまり、DURATION は、メタファーに動機付けられた DISTANCE からの意味拡張の結果である)。

なお、Кронгауз (1995: 45-46)が述べているように、前出の DISTANCE と同様に、DURATION の要点は、動作ではなくむしろ対格の名詞句で表される時間的な部分にあるため、この意味で *про-/pro-*が付加された一部の派生動詞は受動構文をとり得る²⁷²。

● EXTENSION 「何かが伸びる動作」

EXTENSION は、一定の方向に向かって何かが伸びる・広がる動作を表す。АН СССР (1960, 1980), Ефремова (1996), Janda et al. (2013)などの研究は、個別に EXTENSION に相当する意味を設定しておらず、本章が EXTENSION に分類する派生動詞の例も、その記述の中には見受けられない。ただ、後述の分析によると、EXTENSION に属す派生動詞の解釈構造、意味的・統語的特徴、そしてイメージ・スキーマは、他の意味のそれらとは異なる。したがって、本章は個別に EXTENSION の意味を設定する必要があると判断した。

(114) EXTENSION に属する派生動詞の解釈構造

- a. 1) протянуть 「差し出す, 伸ばす」 *про-* + тянуть 「引く, 張る」
Натянуть на каком-н. расстоянии или вдоль чего-н., проложить на какое-н. расстояние.
「ある距離にわたって, もしくは何かに沿って張る, ある距離に渡って通す」
- 2) проложить 「道を通す」 *про-* + ложить 「横たえる」
Устроить, провести (путь, линию связи).
「(道, 連絡ライン) を設ける, 引く」
- 3) проходить 「(道などが) 渡る, 通っている」 *про-* + ходить 「進む」
иметь направление, быть расположенным.
「方向性を有している, 広がっている」

(電子版 Ожегов と Ушаков より引用)

- b. 「V の動作が, ある距離・範囲 (Y) に渡っている」

a. の 1)~3) の派生動詞は、基本形 V の動作がある距離・範囲 (Y) に渡って伸びている, または広がっていることを表す。EXTENSION に属す派生動詞は、その基本形がなんらかの「伸び・広がり」の概念を内包している。なお、東郷他(編) (1988)では、EXTENSION に相当する「一定の

²⁷² 以下に、DURATION に分類される *прожить/прожит'* 「ある期間過ごす」を例とした受動構文を挙げる (Кронгауз 1995: 45-46)。また、合わせて接頭辞無し *жить/žit'* 「過ごす」の受動構文 (非文) も提示する。

- a. Вот и ещё день прожит.
Vot i ešë den' prožit.
here-PART. further day-N.NOM. live_for_a_certain_time-V.PASS.
「さて, さらにもう 1 日が過ごされた。」
- b. * день жит.
den' žit.
day-N.NOM. live-V.PASS.
「1 日が過ごされた。」

方向に向かって伸びる動作」という意味が設定されており, *провести/provesti* 「(線を) 引く」といった例が挙げられている。

次に, EXTENSION の意味的・統語的特徴とイメージ・スキーマを挙げる。

(115) EXTENSION の意味的・統語的特徴

a. 自動詞 X [_{NOM} NP (伸びる対象)] *pro-V* + Y [PP (距離・範囲)]

<...> дорога *проходит* через семь областей <...>.

<...> doroga *prohodit* čerez sem' oblastej <...>.

road-N.NOM. lie_through-V.PRS. through-PRP. seven region

「道は7つの地域を通っている。」

(現行 RNC-M より引用 : アクセス日 2017/11/18)

b. 他動詞 X *pro-V* + Z [_{ACC} NP (伸びる対象)] + Y [PP (距離・範囲)]

1) Максим *протянул* *руку* к ноутбуку.

Maksim *protânul* *ruku* *k* *noutbuku*.

Maxim-NAME. extend-V.PST. hand-N.ACC. to-PRP. notebook

「マキシムはノートブックに手を伸ばした。」

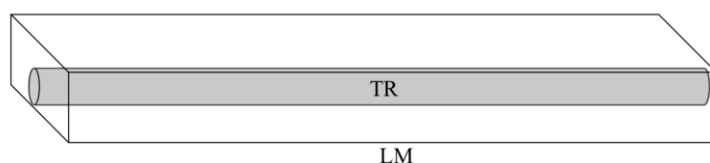
(現行 RNC-M より引用 : アクセス日 2017/11/18)

2) Домициан *положил* *дорогу* от цирка к своему дворцу.

Domician *proložil* *dorogu* *ot* *cirka* *k* *svoemu dvorcu*.

Domitian-NAME. build-V.PST. road-N.ACC. from-PRP. circus to-PRP. own palace

「ドミチアヌスはサーカスから自らの宮殿への道を敷設した。」 (on the web)



a. TR = дорога
LM = (距離) через семь областей

b_1) TR = рука (> руку)
LM = (距離) к ноутбуку

図 15. EXTENSION のイメージ・スキーマ

a.の自動詞の例では, 主格の主語である名詞句 X (*дорога/doroga* 「道」) が, 前置詞句 Y (*через* *семь областей/čerez sem' oblastej* 「7つの地域を通して」) で示される範囲に渡って伸びている。b.の他動詞の場合, 対格の名詞句 Z (1. *руку/ruku* 「手」, 2. *дорогу/dorogu* 「道」) が伸びる対象を表し, 前置詞句 Y (1. *к ноутбуку/k noutbuku* 「ノートブックへ」, 2. *от цирка к своему дворцу/ot cirka k svoemu dvorcu* 「サーカスから自らの宮殿へ」) は, 伸びる動作の距離や範囲を示している。

EXTENSION はメタファーに動機付けられて DISTANCE から派生したと考える。DISTANCE はある距離を通過する動作を表すが、メタファーを介してこの動作は何かに通っている・伸びている動作と捉えることができる。もしくは、EXTENSION は、イメージ・スキーマ変換 (TR の変形) による DISTANCE からの意味拡張の結果とも捉えられる: a. では, *дорога/doroga* 「道」(TR) が 7 つの地域という範囲を通して (LM) 伸びている状態が示されている。b. の 1) では *рука/ruka* 「手」(TR) が *к ноутбуку/k noutbuku* 「ノートブックまでの距離」(LM) に渡って伸びている。

7.2.4. [Cluster 3] 「徹底的な動作」

Cluster 3 は THOROUGH, EXPEND, HARM の 3 つの意味から成る, これらには「徹底的な動作」という共通点が見いだせる。また, 後述するが, THOROUGH, EXPEND, HARM は意味的・統語的特徴の点でも似ており, 本章ではこれらを 1 つの Cluster に集約して記述する。

● THOROUGH 「何かを徹底的に, 通しで行う動作」

THOROUGH は何かを徹底的に, 通しで行う動作を表す (cf. АН СССР 1980: 369; Ефремова 1996: 415; Janda et al. 2013: 106).

まず以下に THOROUGH に属する派生動詞の解釈構造を挙げる。

(116) THOROUGH に属する派生動詞の解釈構造

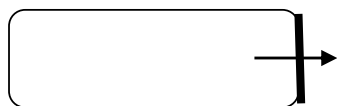
- a. 1) прогладить 「しっかりアイロンをかける」 *про-* + гладить 「アイロンをかける」
тщательно разгладить (утюгом).
「徹底的に (アイロンで) しわを伸ばす」
- 2) проварить 「十分煮る」 *про-* + варить 「煮る」
сварить до полной готовности в результате долгого кипячения, варки.
「長時間沸騰させた, 煮沸した結果として十分な段階まで煮る」
- 3) продумать 「熟考する」 *про-* + думать 「考える」
обдумать обстоятельно
「詳細に熟慮する」
- b. 1) прослушать 「終始聴く」 *про-* + слушать 「聴く」
выслушать от начала до конца.
「最初から最後まで聴き通す」
- 2) просмотреть 「目を通す」 *про-* + смотреть 「見る」
ознакомиться с чем-нибудь, проверить, быстро осматривая, проглядывая, прочитывая.
「急いで眺める, ざっと見通す, 読み終えることで何かを知る, 調べる」
(電子版 Ожегов と Ушаков より引用)
- c. 「Y に対して V の動作を徹底的に (a.), もしくは通しで最後まで (b.) 行う」

a. の例では, Y に対して基本形 V の動作を徹底的に行うことが表されている (例えば,

прогладить/progradiť「しっかりアイロンをかける」は、基本形 *гладить/gradiť*「アイロンをかける」という動作を、服などの対象 Y に対して入念に、徹底的に行うことを意味する)。AH CCCP (1980)は、他にも *прожарить/prožarit'*「十分に焼く」、*прожевать/proževat'*「十分に噛みこなす」といった派生動詞を THOROUGH に相当する意味の例として挙げている。また、これまでの研究では個別に触れられていないが、b.のように、対象 Y に対して基本形の V の動作を通して、つまり、最後まで行うことを意味する派生動詞も、本章では THOROUGH の例として捉える (*прослушать/proslušat'*「終始聴く」は、基本形 *слушать/slušat'*「聴く」に、通しで最後まで行う動作を意味する THOROUGH が付いた派生動詞である)。

(117) THOROUGH の意味的・統語的特徴①

- a. *Проварить* овоци 5 минут.
Provarit' ovoši 5 minut.
 boil_thoroughly-V.INF. vegetable-N.ACC. five minute
 「野菜を5分間じっくり煮込む。」 (on the web)
- b. Он тщательно продумал информацию Центра об этой «Ольге» <...>.
On tsatel'no produmal informaciû Centra ob ètoj «Ol'ge» <...>.
 he thoroughly think_over-V.PST. information-N.ACC. center-N.GEN. about this Oliga-NAME.
 「彼はその“オリガ”に関するセンターの情報を徹底的に熟慮した。」



THOROUGH に関しても同様に、通しで何かをやり終えた段階（太線の部分）が意味的に強調されていると考えて、上記のようなイメージ・スキーマを検討することができよう。しかし、TR と LM の関係が直感的にわかりづらいイメージ・スキーマは、意味学習に適していないと推測される（ロシア語の THOROUGH, EXPEND, HARM では、LM が言語化されない場合が多い）。これら 3 つのイメージ・スキーマの検討・作成は、今後の課題としたい。

c. Я просмотрел старые подшивки газет.

Â prosmotrel starye podšivki gazet.

I look_through-V.PST. old-ADJ.ACC. newspaper_file-N.ACC.

「私は古い新聞の綴じ込みに目を通した。」

d. С удовольствием прослушал я псалом до конца <...>.

S udovol'stvием proslušal â psalom do konca <...>.

with pleasure hear_through-V.PST. I psalm-N.ACC. until end

「喜んで私は聖歌を最後まで聴き通した。」

e. Лингвисты проанализировали грамматику и лексику этресского языка <...>.

Lingvisty proanalizirovali grammatiku i leksiku ètrusskogo âzyka <...>.

linguist analyze-V.PST. grammar-N.ACC. and vocabulary-N.ACC. Etruscan language

「言語学者はエトルリア語の文法と語彙を分析した。」

(現行 RNC-M より引用：アクセス日 2017/11/18)

a. と b. における *npo-/pro-* 付きの派生動詞は、基本形 V が表す動作 (*варить/varit'* 「煮る」, *думать/dumat'* 「考える」) を対格の名詞句 Y (*овошчи/ovoši* 「野菜」, *информацию/informaciû* 「情報」) に対して徹底的に行うことを示している。なお, b. の例のように, THOROUGH の意味で *npo-/pro-* が付いた派生動詞は、程度を表す副詞句 Z (*тщательно/tšatel'no* 「徹底的に」) を伴う場合がある²⁷⁴。c. ~ e. の例では、名詞句の対格 Y (*подшивки/podšivki* 「綴じ込み」, *псалом/psalom* 「聖歌」, *грамматику/grammatiku* 「文法」と *лексику/leksiku* 「語彙」) に対して基本形 V の動作 (*смотреть/smotret'* 「見る」, *слушать/slušat'* 「聴く」, *анализировать/analizirovat'* 「分析する」) を通しで最後まで行うことが示されている。

THOROUGH は、メタファーに動機付けされた THROUGH からの意味拡張の結果であると考えられる。THROUGH には、もし何かが“通しで/through”行われた場合、徹底的に、最後まで行う動作 (THOROUGH) が暗示されるためである (Janda et al. 2013: 106)。なお、類似の意味拡張が動詞接頭辞 *всл-/вс-* でも指摘されている (cf. Nessel et al. 2011)²⁷⁵。

²⁷⁴ ruTenTen11 の Word Sketch 機能を用いて、*продумать/produmat'* 「熟慮する」の共起語を確認すると、*детально/detal'no* 「細かく」, *хорошо/horošo* 「よく」, *внимательно/vnimatel'no* 「注意深く」といった副詞との共起頻度が高かった (アクセス日：2017/01/01)。

²⁷⁵ 7.4.1. で後述するが、Nessel et al. (2011) は動詞接頭辞 *всл-/вс-* の放射状カテゴリーを検討し、その中でどのように意味拡張が起きているのかを説明している。*всл-/вс-* は、EMPTY A CONTAINER 「容器を空にする」と EXHAUSTIVE RESULT 「徹底の結果」といった意味を有している。EXHAUSTIVE RESULT は、すべてを出し切ることを意味する EMPTY A CONTAINER から、メタファーに動機付けされて「何かを徹底的に行う動作」へと意味が拡張した結果である、とされる。*npo-/pro-* の THOROUGH も同様に、メタファーに動機付けされて THROUGH の通り過ぎるという動作が、通しで行われる徹底的な動作へと派生したと考える。

なお、基本形 *uđmu/ıdı* 「進む」に *npo-/pro-* の付いた *npoımu/projti* は、空間的な意味での「通過する」以外にも「(試験などを) 通過する, 合格する, 修了する」(cf. 東郷他(編) 1988; Ожегов 2010) といった意味を有している。上記の意味で *npoımu/projti* が用いられた例は、C_1 において数多く観察されるが、これを本章では THOROUGH と THROUGH の両方に分類する。

(118) THOROUGH の意味的・統語的特徴② (THROUGH にも分類)

X *npo*-V + Y [_{ACC} NP (通過・修了の対象)]

a. Все проекты *прошли* тщательную экспертизу <...>.

Vse proekty prošli tšatel'nuû èkspertizu <...>.

all project get_through-V.PST. in_depth-ADJ.ACC. expert_examination-N.ACC.

「すべてのプロジェクトは徹底的な専門家の鑑定を合格した。」

b. Кинологи *прошли* обучение по специальной программе <...>.

Kinologi prošli obučenie po special'noj programme <...>.

dog_trainer complete-V.PST. instruction-N.ACC. about special program

「ドッグトレーナーは特別プログラムの講座を修了した。」

(C_1 より引用)

a. と b. を THROUGH に分類する場合、対格の名詞句 Y (a. *экспертизу/èkspertizu* 「鑑定」、b. *обучение/obučenie* 「講座」) の中を主語 X が通り過ぎてしていると解釈する。一方、a. と b. を THOROUGH に分類する場合、名詞句 Y の過程を通して最後まで進んだ結果、それを合格・修了すると解釈される。これらの例は、THROUGH の用法か、THOROUGH の用法かの判断が難しい。そこで、本章では、このような派生動詞は THROUGH と THOROUGH の両方に分類する。

さらに、*npoımu/projti* は「(時間が) 経過する」, 「(行事が) 経過する, 行われる」といった意味も有する (東郷他(編) 1988; Ожегов 2010), 本章ではこれらの意味における *npo-/pro-* も THOROUGH と THROUGH の両方に分類する。

(119) THOROUGH の意味的・統語的特徴③ (THROUGH にも分類)

a. 自動詞 X [_{NOM} NP (時間)] *npo*-V

Но *прошло* уже сто лет.

No prošlo uže sto let.

but pass-V.PST. already hundred-NUM.NOM. year-N.GEN.

「だが、すでに 100 年が経過した。」

(C_1 より引用)

b. 自動詞 X_[NOM NP (行事)] *про-V*

<...>	<u>заседание</u>	<i>прошло</i>	<i>вполне</i>	<i>гладко</i>	<i>и</i>	<i>успешно.</i>
<...>	<i>zasedanie</i>	<i>prošlo</i>	<i>vpolne</i>	<i>gladko</i>	<i>i</i>	<i>uspešno.</i>
	meeting-N.NOM.	take_place-V.PST.	quite	smoothly	and	successfully

「会議はかなりスムーズに、そしてうまく行われた。」

(現行 RNC-M より引用：アクセス日 2018/01/02)

a.では主格の名詞句 X に時間を表す語が現れ、*сто лет/sto let* 「100 年」が過ぎたことが示されている。b.の例では、主格の名詞句 X に行事を表す語 (*заседание/zasedanie* 「会議」) がきており、その行事が行われた、過ぎたことが示されている。Sketch Engine の Word Sketch 機能で動詞 *пройти/projti* がどのような主語と共起しているのかを確認すると (3.3.7. 参照), *соревнование/sorevnovanie* 「競技」, *конференция/konferenciâ* 「会議」, *церемония/ceremoniâ* 「セレモニー」といった名詞と共起する頻度が極めて高いことがわかった (ruTenTen：アクセス日 2018/01/02)。

a.に関しては、メタファーを介して時間は動きの観点から解釈されるため (テイラー, 瀬戸 2008: 304 / cf. Lakoff, Johnson 1980)²⁷⁶, THROUGH に分類することが可能であろう (時間が通り過ぎていった)。だが, a.の例は基本形 *идти/idti* 「進む, 進行する」の動作が最後まで, 通しで行われた結果と捉えることもできる (THOROUGH の解釈)。b.については, 「会議」が通り過ぎた (THROUGH), もしくは通しで, 最後まで進行した (THOROUGH) とともに捉えられる。したがって, 本章では(119)のような例は THROUGH と THOROUGH に分類する。

● EXPEND 「何かを消費する・使い尽くす動作」

EXPEND に相当する意味は多くの研究や辞書で言及されているが (e.g. AH СССР 1960, 1980; 東郷他(編) 1988; Ефремова 1996; Ожегов 2010), これは何かを消費する・使い尽くす動作を表す。

EXPEND に属する派生動詞の解釈構造は次の通りである。

²⁷⁶ 英語には, TIME IS A MOVING OBJECT 「時間は動いている物体である」(Lakoff, Johnson 1980)や TIME IS MOTION 「時間は動きである」(Lakoff, Johnson 1999)といったメタファーの型が存在している。例えば, 「英語における時間は TIME IS A MOVING OBJECT <時間は動いている物体である>というメタファーに基づいて成り立っており, 未来はわれわれの方へ向かって動いているのだという発想が根本にある。<...> “Time flies.” <光陰矢の如し>という諺は, 『時間は動いている物体である』というメタファーの一例である」(レイコフ, ジョンソン 1986: 64)。ロシア語にも, 同様のメタファーの型が存在していると考えられる。

a. 1) проездить 「旅行に費やす」 *про*-ездить 「旅行する」
истратить на поездку
「旅行に（金銭を）使い果たす」

2) проесть 「食に費やす」 *про*-есть 「食べる」
истратить на питание, на жизнь
「食に、生活に（金銭を）使い果たす」

3) пропить 「飲酒に費やす」 *про*-пить 「飲む」
истратить на выпивку, пьянство
「酒類、飲酒に（金銭を）使い果たす」

b. 「V の動作をすることで Y を使い果たす」

以下に、EXPEND の意味的・統語的特徴を挙げる。

a. Он сказал, что *проел* деньги на мороженое.
 On skazal, čto proel den'gi na moroženoe.
 he say-V.PST. that-CONJN. spend_on_food-V.PST. money-N.ACC. on ice_cream
 「彼は、アイスに金を使い切ってしまったと言った。」

b. Муж	опять	<i>пропил</i>	<u>зарплату.</u>
Muž	opât'	propil	zarplatu.
husband	again	spend on drinking-V.PST.	salary-N.ACC.

220

った例が確認される。

EXPEND は、THOROUGH「何かを徹底的に、通しで行う動作」からメトニミーで派生した意味であると捉える（原因・結果、2つの出来事の時間的な隣接性 (cf. 山梨 1988; 巻下, 瀬戸 1997; 瀬戸 2005; 靱山 2010)）。EXPEND は徹底的な動作が原因で生じた事態の変化を表し、基本形によって表される動作を徹底的にやりすぎたせいで、それが悪い結果（枯渇するまで金銭を消費する）へと繋がったことを意味する。

● HARM「何かに害・損傷を与える動作」

АН СССР (1980)や Ефремова (1996)において HARM に相当する意味の記述は存在しない。一方で, АН СССР (1960), Ожегов, Шведова (1997), Барыкина, Добровольская (2015)にはこれに相当する意味の記述が見受けられる²⁷⁷。HARM は対象に何らかの害や損失を与えることを表す。

HARM に属する派生動詞の解釈構造は以下の通りである。

(122) HARM に属する派生動詞の解釈構造

- a. 1) пропеть「声を枯らす」 *про-* + *петь*「歌う」
израсходовать голосовые средства, потерять голос
「声の力を使い尽くす, 声をからす」
- 2) простудить「風邪を引かせる」 *про-* + *студить*「冷やす」
причинить кому-нибудь болезнь простудой, повредить простудой
「誰かに風邪によって病気を引き起こさせる, 風邪による害を与える」
- 3) прокурить「喫煙で害をもたらす」 *про-* + *курить*「喫煙する」
причинить посредством куренья вред чему-нибудь
「喫煙によって何かに害を与える」

(電子版 Ожегов と Ушаков より引用)

- b. 「V の動作によって Y に害・損傷を及ぼす」

a. の 1)~3)は、基本形の V の動作によって対象 Y に害や損失が及ぶことを示している (*неть/пет'*「歌う」ことにより声帯に害が及んで *пропеть/пропет'*「声を枯らす」, *стыдуть/студит'*「冷やす」ことが体調の悪化を招いて *простудить/простудит'*「風邪を引かせる」という意味に繋がる)。

次に、HARM の意味的・統語的特徴を挙げる。

²⁷⁷ АН СССР (1960: 598)では *прогадать/прогадат'*「見込み違いで損をする」(基本形 *гадать/гадат'*「予想する」)を例に挙げ、ここでの *про-/pro-*の意味は「害や損失に繋がる行為の失策」としている。Ожегов, Шведова (1997: 604)には損失, 損害, 結果の不快性, Барыкина, Добровольская (2015: 96)にはほぼ損害と言える動作の徹底性という *про-/pro-*の意味が存在する。これらは本章の HARM に相当すると言える。

(123) HARM の意味的・統語的特徴

他動詞 X *npo*-V + Y [ACC NP (害を受ける対象)]

- a. <...> мы обязаны были не простудить детей.
 my obâzany byli ne prostudit' detej.
 we must be-V.PST. not let_catch_cold-V.INF. children-N.ACC.
 「私たちは子供達が風邪を引かないようにすべきであった。」

(現行 RNC-M より引用：アクセス日 2017/11/3)

- b. <...> кто-то совершенно пропил ГОЛОС <...>.
 kto-to soveršenno propil golos <...>.
 someone totally ruin_through_drinking-V.PST. voice-N.ACC.
 「誰かは飲み過ぎで完全に声を枯らした。」

(C_1 より引用)

a.の *простудить/prostudit'* 「風邪を引かせる」と b.の *пропить/propit'* 「飲酒で駄目にする」は、基本形の V (*стыдуть/studit'* 「冷やす」と *пить/pit'* 「飲む」) が示す動作によって、対格の名詞句 Y (*детей/detej* 「子供」, *голос/golos* 「声」) に害が及ぶことを示している。

EXPEND と同様に、HARM はメトニミーに動機付けされて THOROUGH から派生したと捉える (原因・結果, 2つの出来事の時間的な隣接性 (cf. 山梨 1988; 卷下, 瀬戸 1997; 瀬戸 2005; 靱山 2010)). HARM は徹底的な動作が原因で生じた事態の変化を表し、結果としてそこには害や損傷が生じる。したがって、THOROUGH から HARM への意味的拡張は、メトニミーによって動機付けられていると考える。

7.3. 分析：意味毎の生起頻度の計測

ここでは、7.2.で言及した解釈構造、意味的・統語的特徴、イメージ・スキーマを判断基準として、実際のテキストにおいて *npo-/pro-*がどの意味で基本形に付加されているのかを確認し、意味毎の生起頻度を計算する。その結果に基づいて *npo-/pro-*の意味群の中から学習価値の高いものを選定し、それらに学習上の優先順位をつける。

7.3.1. 分析手順

分析対象のテキストとして、自作 100 万語コーパス C_1 を採用する (4 章参照)。コーパス規模で圧倒的に勝る RNC-M や現行 RNC-M を本章では分析に用いない。まず RNC-M (Ляшевская, Шаров 2009)は頻度データしか提示しておらず、*npo-/pro-*を伴った派生動詞の前後の文脈が確認で

きない。一方、web を通して使用できる現行 RNC-M では、検索語を含んだテキストが表示されるため、文脈付きで対象の派生動詞を確認できる。ただ、検索した結果は一部しか保存できないため全数調査は実施できないし、今後、分析結果の再現もできない。仮に検索結果の全体を保存できたとしても、該当の派生動詞の数は膨大であるため、すべてを確認することは極めて難しい。同様の理由で ruTenTen11 も本章の分析には不向きである²⁷⁸。そのため、前後の文脈が確認できるテキストが存在し、かつ、全数調査が可能な自作の 100 万語コーパス C_1 を分析に使用する²⁷⁹。

● データベース

具体的な分析手順に関しては、まず Sketch Engine の検索機能と正規表現 (`ppo.* / PoS: verb`) を用いて、*ppo-/pro-*が付いた動詞を C_1 からすべて抽出し、それを KWIC²⁸⁰の形式でエクセルに保存する。ただ、このやり方では *присутствовать/prosit'*「頼む」や *проявлять/proâvit'*「発揮する」といった、動詞接頭辞 *ppo-/pro-*が分析できない例も検索結果に含まれる（これらは語幹が *ppo-/pro-*という文字列で始まっているだけであり、ここでの *ppo-/pro-*は動詞接頭辞ではない）。そのため、Тихонов (1985)の記述に基づいて、このような例は手動で削除した。その結果、約 2,350 例が分析対象として残った。これらの例に含まれる *ppo-/pro-*が、7.2.で言及した 9 つの内どの意味に分類されるのかを確認する。

● 分類上の問題点

前後の文脈を考慮した結果、複数の意味に分類可能な例は、どちらか一方ではなく両方の意味

²⁷⁸ 現行 RNC-M の検索機能と正規表現を用いて *ppo-/pro-*を含んだ派生動詞を抽出すると、1,645,469 例が確認された（アクセス日：2017/11/5）。また、ruTenTen11 で同様の分析をすると、76,561,740 の派生動詞がヒットする（アクセス日：2017/11/5）。これだけ膨大なデータを精査し、意味毎の生起頻度を計測する作業は現実的ではない。

²⁷⁹ 4 章の分析からは、高頻度 5,000 語の選定に 100 万語のコーパスでは不十分であるという結果が得られた。一方で、本章のような、派生接辞の意味毎の生起頻度を計測する分析に 100 万語のコーパスが耐えられるかどうかを判断するにはさらなる調査が必要である。おそらく特定の派生接辞の意味毎の生起頻度を計測する際もコーパス規模は大きい方が良くであろう。ただ、上記理由と、約 2,350 例という十分な分析対象数が確保できたことを考慮し、今回は 100 万語コーパスの C_1 を分析に用いる。

²⁸⁰ keyword in context の略で、検索対象の語を中央に配置し、文脈を前後に表示する方法を指す（石川 2012: 25）。以下に、本章の分析に用いる *ppo-/pro-*付きの派生動詞の KWIC を一部示す。

рисунки и картины великой художницы, маленькой старушки,	прошедшей	сквозь ад. Ленина Никитина. «Счастье творчества». Выставка Китайское
акрытое окно, так как думал, что взлетел физически. Но стекло	прошло	сквозь все мое тело, что я почувствовал всеми внутренностями. Затем я з
азалось, что познать любовь могут только те, кто выстрадал ее,	прошел	сквозь все: обиды, унижение и разочарование. Я всегда считала себя сил
в Нью-Йорке, о чем свидетельствует штамп торгового агента.	Пройдя	через "реставрационную мастерскую" Наталья, он занял достойное мест
их поколений будет жить память о родных и близких, которые	прошли	через все ужасы Великой Отечественной войны. Пока еще не угасли эмо
нем. Правда, поверить в то, что Сину действительно пришлось	пройти	через все это, довольно сложно: выжить после такого проблематично, а у

で頻度をカウントする。例えば, *пролететь вдоль стены внутрь/proletet' vdol' steny vnutr'*「(猫が)壁に沿って中へ素早く飛び込む」という例が C_1 内で確認されるが, この例における *про-/pro-*は THROUGH と PASS の両方の意味に分類が可能であると判断する (*внутри/vnutr'*「中へ」は THROUGH へ, *вдоль/vdol'*「沿って」は PASS へと分類する判断基準となる)。また, 7.2.4.で言及したが, *пройти/projti* は対格の名詞句を伴って「(試験などを) 通過する, 合格する, 修了する」を表すが(例: *пройти практику/projti praktiku*「実習を修了する」), この場合, *про-/pro-*が THROUGH と THOROUGH のどちらの意味で付加されているのかを客観的に判断することは難しい。そのため, 本章は, このような例に関しては両方の意味で頻度を計算する。

他にも, 本章が設定した枠組みではきれいに分類できない例も存在する。例えば, *прогнать/prognat'*「追い出す」(基本形 *гнать/gnat'*「追う」)は, 本章の分析では THROUGH (と THOROUGH) に分類される。だが, この動詞に含まれる *про-/pro-*の意味は, 「通過する動作」というよりも「外へ出る動作」により近いと言える。ただ, *прогнать/prognat'*に関しては何らかの対象(境界線, 場所など)を通過している, 最後まで通過していると解釈できるため, 本章はこれを THROUGH と THOROUGH に分類する。

さらに, 現実的には9つの意味のどれに当てはまるのか判別のできない例も C_1 には含まれている。そのような場合は判別不能とする。例えば, *писать/pisat'*「書く」に *про-/pro-*が付加された *прописать/propisat'*は, C_1 内で「正式に登録する」という意味で生起している。Тихонов (1985) は, 両者は基本形と派生語の関係にあるとしているが, 現状, 本章の枠組みではうまく分析できない。仮にこの派生動詞における *про-/pro-*が何らかの意味で付加されていたとしても, 共時的には分析可能性が極めて低いと考えられる。他にも, *ведать/vedat'*「知る, 経験する」に *про-/pro-*が付いた *проведа́ть/provedat'*は「訪れる, 見舞う」を表すが, これも接頭辞の意味をうまく抽出できない。本章では, このような例は判別不能とする。

7.3.2. 分析結果と考察

7.2.で言及したが, 本章における分析結果は絶対的なものではない。本章は解釈構造, 意味的・統語的特徴, イメージ・スキーマといった客観的指標を用いて, 可能な限り意味を形式に還元しようと試みているが, 当然, 複数の分析結果が想定される。例えば, 音/発話に関する *про-/pro-*付きの派生動詞は, 研究によっては THROUGH と DURATION (cf. Janda et al. 2013), PASS (cf. Кронгауз 1995)に分類されるが(7.2.3.参照), 本章は第3の立場である DISTANCE にこのタイプの派生動詞を分類している。意味の分類はいくつかの可能性のある点に留意されたい。分析結果は以下の通りである(なお, 実際の分類例は巻末の付録を参照されたい)。

表 66. C_1 における *npo-/pro-*の意味毎の生起頻度

意味	生起頻度	Prototype / Cluster	生起頻度
1. THROUGH	688	Prototype	688
2. PASS	68	Cluster 1	128
3. MISS	60		
4. DISTANCE	459 (272) ²⁸¹	Cluster 2	906
5. DURATION	228		
6. EXTENSION	219		
7. THOROUGH	1,066	Cluster 3	1,103
8. EXPEND	5		
9. HARM	32		
10. 判別不能	41		

表 66 の数値から、実際のテキストにおいては各意味の生起頻度に差があることが窺える。以下で、プロトタイプの THROUGH と Cluster 毎に分析結果を考察する。

● THROUGH

THROUGH は生起頻度が一番高いわけではないが (688), 十分学習価値の高い意味であると言える (プロトタイプの生起頻度が最も高くなければならないということはない (cf. Ляшевская 2014)). また、後述する放射状カテゴリーや比喻による意味拡張を念頭に置いた学習の観点からすると、その中心に位置するプロトタイプ、すなわち、THROUGH の学習優先度は極めて高い。この意味に属す派生動詞は、その大半が移動動詞と破壊に関する基本形から作られており (7.2.1. 参照), C_1 内でも両方の例が確認された。

なお, Janda et al. (2013) は、音/発話を意味する動詞に付加される *npo-/pro-* は、THROUGH と DURATION に動機付けられている、と述べている (7.2.3. 参照)。この解釈に基づいて生起頻度を再計算すると (音/発話を意味する派生動詞を THROUGH に分類すると), THROUGH の生起頻度は 960 まで上昇する。

● Cluster 1: PASS, MISS

Cluster 1 は PASS と MISS から成るが、他の意味と比べてこれらは生起頻度が低い部類に属す。C_1 において PASS は 68 例, MISS は 60 例しか確認されなかった。PASS に含まれる動詞は、*пройти/projti* 「通過する」, *пролететь/proletet'* 「飛んで通過する」などの移動を表す動詞が大半を占める。MISS に分類される派生動詞として、*проиграть/proigrat'* 「負ける」, *пропустить/propustit'* 「逃す」とその体的なペアである不完了体動詞が挙げられるが、少数の・特定の動詞が MISS 全

²⁸¹ 括弧内の数値は、DISTANCE に分類した音/発話に関する *npo-/pro-* の生起頻度を表す (7.2.3. 参照)。

体の生起頻度の大半を占めている。また、Cluster 1 全体の生起頻度は 128 にとどまる。

● Cluster 2: DISTANCE, DURATION, EXTENSION

Cluster 2 は、DISTANCE, DURATION, EXTENSION から成る。DISTANCE を筆頭に、どれも生起頻度は高い。それに伴って Cluster としての生起頻度も高くなる。

DISTANCE は C_1 内で 459 例が確認されており、移動に関する動詞と音/発話に関する派生動詞がこのグループの大多数を構成している（その内 272 は、後者に関する DISTANCE の例である）。ただ、前述の通り、音/発話に関する動詞の例を DISTANCE に動機付けされた例ではないと判断すると、生起頻度は 187 まで減少する。DURATION の *npo-/pro-*は、様々な基本形に付加されており、228 例が C_1 内で確認された（Janda et al. (2013)が言うように、仮に音/発話に関する派生動詞が DURATION に分類されるのであれば、その数値は 500 まで上昇する）。C_1 における EXTENSION の生起頻度は 219 であるが、MISS と同様に、*протянуть/protânut'*「差し出す」とその不完了体 *протягивать/protâgivat'*などの特定の派生動詞がグループの大半を占めている。

● Cluster 3: THOROUGH, EXPEND, HARM

Cluster 3 は THOROUGH, EXPEND, HARM の 3 つから成るが、突出して THOROUGH の生起頻度が高い（1,066 例）。この現象は「何かを徹底的に、通しで行う動作」という THOROUGH の意味が完了体動詞の形成に際して基本形に付加されやすいためであろう（例：*проделать/prodelat'*「やり終える」、*прослушать/prosluŝat'*「終始聴く」、*провести/provesti*「遂行する」）。なお、THROUGH と THOROUGH の両方に分類された例は 428 であった（7.2.4.参照）。これに対して、EXPEND はわずか 5 例、HARM は 32 例しか C_1 内で確認されなかった。

本章の分析結果に基づいて *npo-/pro-*の意味群に学習の優先順位をつけると、以下のような結果が得られる。

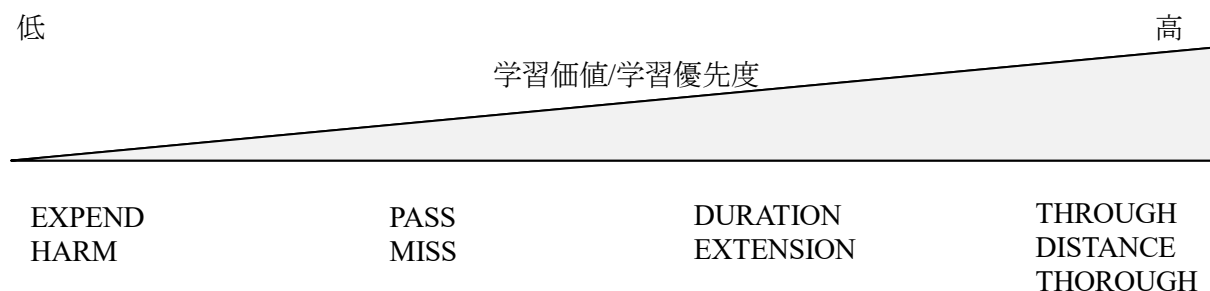


図 16. *npo-/pro-*の意味群の学習価値/学習優先度

まず、THROUGH, DISTANCE, THOROUGH の3つが導入対象として挙げられる。これらの生起頻度は他よりも高く、実際のテキストにおいて学習者が出会う機会が多い。THOROUGH と DISTANCE の統語的特徴は互いに異なるものの、これらは THROUGH と意味的に近い関係にある：DISTANCE の意味で *npo-/pro-*が付加された派生動詞は、距離を表す名詞句や前置詞句を伴うが(7.2.3.参照)、THROUGH とは通過という共通点が見出せる。一方で、THOROUGH では、通過の概念がメタファーに動機付けされて何かを徹底的に、通しで行う動作として現れている(7.2.4.参照)。現在、日本の教材では3つの内 THROUGH しか導入対象とされていない。だが、実際のテキストにおいて *npo-/pro-*は DISTANCE や THOROUGH の意味でも基本形に頻繁に付加されており、効率的な語彙力増加の観点からは、これらを導入する価値は高いと言える。

次に、本章の分析結果からは、Cluster 2 に属する DURATION, EXTENSION の学習優先度が高いことがわかる。これらの意味はこれまで教材で触れられてこなかった。DURATION は共起語として時間を表す名詞句や前置詞句を伴うため、実際のテキストにおいて比較的認識はしやすいはずである。だが、DURATION は、THROUGH や DISTANCE のように移動を表す意味ではないため、その導入には説明や工夫が求められるであろう。一方、EXTENSION は、前述の通り、特定の派生動詞が全体の頻度の多数を占めているため、そもそも EXTENSION という意味を設定しないというアプローチも考えられる。

そして、優先順位の観点からして次に位置するのが、Cluster 1 の PASS と MISS である。PASS は THROUGH と同じく空間的な意味を表すが、生起頻度は顕著に低い。MISS はさらに生起頻度が低く、かつ、特定の派生動詞の中でしか確認されないため、時間的な制約が厳しい状況では MISS は導入対象から外す、もしくは基本形と接頭辞を分析せずに派生動詞を学習者に提示するというアプローチの方が良いのかもしれない。

最後の EXPEND と HARM は生起頻度が極めて低く、C_1 においてほとんどこれらの例は確認されなかった。本章の分析結果は、EXPEND と HARM の学習優先度が最も低いことを示している。学習者が出会う機会は少ないため、EXPEND と HARM という意味自体を導入対象外としても良いであろう。

本章の分析結果は、派生接辞のどの意味を学習者に提示すべきかを判断する際に、1つの根拠として用いることができる。例えば、今まで日本の教材では THROUGH と PASS の意味だけが導入対象とされてきたが、実際のテキストにおいて *npo-/pro-*は他の意味でも頻繁に付加されていることが本章の分析から客観的に確認された。このようなデータは、教材や授業に派生接辞の特定の意味を導入する際の根拠として機能する。この点に本章の分析結果の意義がある。

本稿はここまで、主に生起頻度に基づいて、コーパス言語学的な観点から効率的な語彙学習法を検討してきた。次の 7.4. では、ここまでの *npo-/pro-* の分析結果を踏まえて、認知言語学の観点から、多義的な動詞接頭辞の効率的な意味学習を実現するための記述整備を行う。

7.4. 多義的な動詞接頭辞の意味学習に向けた放射状カテゴリーの記述整備

ここまでの分析で見たように、ロシア語の動詞接頭辞は多義的であり、その学習は容易ではない。*npo-/pro-* に対象を限定しても意味は 9 つも存在する。そもそも日本の教材は *THROUGH* と *PASS* の意味しか導入していないという問題もあるが、逆に、数少ない動詞接頭辞の教材においてはその意味群は列挙されるだけであり (cf. Барыкина, Добровольская 2015), 意味間の繋がりに関しての解説は欠如している。この提示の仕方は一つひとつ意味を別個に覚えていくことと同じであり、学習負荷はかなり重いと考えられる。そこで、7.4. ではこのような状況を考慮して、認知言語学の観点から、多義的な接頭辞 *npo-/pro-* の意味を効率的に学ぶための記述を整備する。

現在、外国語学習の様々な分野で認知的なアプローチの適用が見受けられる。横山, 三ツ木 (2014: 280) が述べているように、「近年、認知言語学的知見を言語教育の場へ応用するという目的を持った研究が多くみられるようになった (e.g. 田中他 2006; 荒川, 森山 2009; Littlemore 2009)」。認知言語学ではメタファー等による語の意味拡張と多義性に関する議論が一つの主要な研究領域となっているため、英語教育を対象とした理論の応用としては、特にメタファーの指導 (Azuma 2005; Azuma, Littlemore 2010; Yasuda 2010) や多義語の学習や指導に関するもの (田中 2004; 田中他 2006; Morimoto, Loewen 2007; Mitsugi 2013) などの研究がみられる。他にも、イメージ・スキーマ (7.1.2.2., 7.2. 参照) やそれに相当する図を用いた語彙学習・語彙指導も提案されている (cf. 田中他 2006; 大西, マクベイ 2009; 谷口 2011; 政村 2012)。このように、英語に関して言えば、認知言語学的知見を学習に導入する、応用認知言語学²⁸²的なアプローチが盛んになってきている。

一方、ロシア語教育においては、認知言語学的なアプローチを用いた学習法は盛んとは言えず、接頭辞に関して言えば先行研究はまだないと思われる。とはいえ、一般言語学の観点からすると、「ロシア語の接頭辞の意味は、比較的よく研究されてきた分野である。過去 20 年に渡る構造主

²⁸² 谷口 (2011: 63-64) が述べているように「応用認知言語学は、認知言語学の提唱する道具立てに限らず、そのベースとなる理念を L2 習得に適用するアプローチであるが、例えば (i) 使用基盤モデル・ボトムアップによる習得, (ii) プロトタイプとスキーマから成る認知的カテゴリー, (iii) メタファー・メトニミーによる多義性と意味拡張, といった事象に関わる研究成果を積極的に取り入れている。より具体的に」言うと、荒川, 森山 (2009: 94-108) は、認知言語学が掲げる使用基盤モデルが第 2 言語教育にどう活かせるかを以下のようにまとめている: 1) ボトムアップのプロセスを重視, 2) 反復的な言語使用の重視, 3) 形式と意味のマッピングの強化, 4) 学習者のニーズの重視, 5) 認知的要因の重視, 6) 認知能力の重視, 7) カテゴリー構造とその再編成の重視, 8) 語彙学習の側面の重視, 9) 百科事典的意味の重視, 10) 言語の類型論的特徴の重視。

義的・認知言語学的な調査とともに、伝統的なアプローチの枠組みにおいて得られた結果は、概して、ロシア語接頭辞の機能に関して信頼に足る記述を作り出している」(Зализняк 1995: 143). その認知言語学的な成果として Зализняк (1995)は Janda (1986)を挙げているが、ここではその研究の流れを汲む Janda et al. (2013)を主要参考文献として用い、認知言語学の観点から接頭辞の多義性の学習に向けた *про-/pro-*の記述整備を行う。具体的には、*про-/pro-*の放射状カテゴリーを作成し、その枠組みの中で各意味がどのように拡張していったのか、互いにどう関係しているのかを認知言語学の観点から記述する。

まず動詞接頭辞の放射状カテゴリーの概要に言及する (7.4.1.)。次に、動詞接頭辞 *про-/pro-*の放射状カテゴリーを作成する。そして、*про-/pro-*の意味群が放射状カテゴリー内で互いにどう繋がっているのか、どのような拡張を経ているのかを認知言語学の観点から検討して記述を整備する。同時に、その結果に基づいて、放射状カテゴリーを用いた多義的な接頭辞の意味学習に関して若干の考察を行う (7.4.2.)。

7.4.1. 放射状カテゴリーと先行研究の概要

George Lakoff はプロトタイプ理論²⁸³を用いて多義語の分析を行っているが (Lakoff 1987: 83-84²⁸⁴; cf. Janda et al. 2013: 22-24), その意味群は互いに関係し合っているとし、その結果として放射状のカテゴリー (radial category) を成して存在しているとした。Янда (2012)が述べているように、認知言語学 (Lakoff 1987; Taylor 2003)において、放射状カテゴリーは複雑な意味のネットワークの分析に用いられている。「放射状カテゴリーの意味的な概念は Rosch (1978)の研究結果に依拠している。彼女の研究は、人間の思考は中心的なプロトタイプとそれよりもプロトタイプ性が劣る周辺的なもので構成される『放射状カテゴリー』の中に対象物を形成している、というこ

²⁸³ プロトタイプ理論の説明として白井 (1998)と辻(編) (2013)を引用する：プロトタイプ理論とは「心理学の分野で提示された、人間の認知構造、特にカテゴリー認知に関するモデルであり、古典的カテゴリー論に相対するものである。<...> プロトタイプ理論ではカテゴリーそのものに内部構造を認め、典型的メンバーと非典型的メンバーによって構成されているとする (例えば典型的な鳥は「つばめ」であり非典型的な鳥は、「ペンギン」「ダチョウ」である)。そしてカテゴリーの中によりよいメンバーとそうでないものとの連続性をみとめる」(白井 1998: 87)；プロトタイプ理論とは、「言語学・心理学上の概念で、1970年代に Rosch らによって提唱された。<...> カテゴリーは構造を持ち、典型的成員 (プロトタイプ) は中心、非典型的成員は周辺に位置づけられ、かつカテゴリーの境界はファジーなこともあると考える」(辻(編) 2013: 326)。

例えば、Rosch (1975)は、アメリカの大学生に対して家具、野菜、鳥などのプロトタイプに関して実験を行った。家具のカテゴリーの調査では、イスや机など約 60 の家庭用品を対象に、7段階評価で家具として最もよい例には 1 を、悪い例には 7 をつけさせた。すると、家具のカテゴリーにおいて *chair*, *bed*, *table* は、*kitchen chair* よりも中心的であるといった結果が出ている。

²⁸⁴ アメリカ英語の *mother* は多義語であるが、子供を産み、育て、父親と結婚している法律上の保護者である母 (a) だけでなく、継母 (b) や養母 (c) などの意味も有している。これらの意味の中で (a) の *mother* が最も中心的であるとされる。

とを示した」(Янда 2012: 13). 放射状カテゴリーとは「プロトタイプの周りに組織されたサブカテゴリー群のネットワークである. 古典的・アリストテレス的なカテゴリーとは異なり, 放射状カテゴリーは一連の必要十分条件の観点から定義されてはいない」(Nesset et al. 2011: 380). むしろ, 放射状カテゴリーとは, プロトタイプの意味と, そのプロトタイプと家族的類似性を有した他の意味群との間にある構造化された関係である (Nesset et al. 2011: 380). つまり, 放射状カテゴリーは, 言語単位の意味を互いに関係し合うヴァリエーション群のネットワークとして提示し, それらはプロトタイプと周辺のケースに分けられることを示している (Ляшевская 2014: 339).

また, 認知言語学において, この放射状カテゴリーは比喩的な拡張 (メタファー, メトニミーなど) による意味の派生関係を記述する際に援用される.

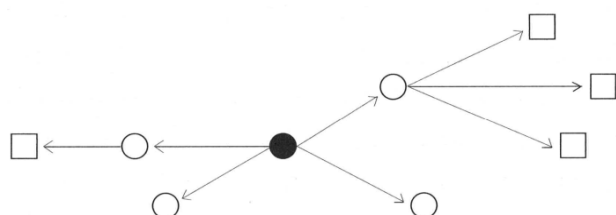


図 17. (再掲) 放射状カテゴリーのイメージ図 (辻(編) 2013: 340)

中央の黒丸がプロトタイプの意味である. そのプロトタイプから比喩的な拡張によって白丸の意味が派生し, さらにそこから四角へと意味が拡張する様を図にしたのが放射状カテゴリーである.

次に, 実際にロシア語の動詞接頭辞の放射状カテゴリーに言及する. 以下に動詞接頭辞 *raz-* の放射状カテゴリーを挙げる.

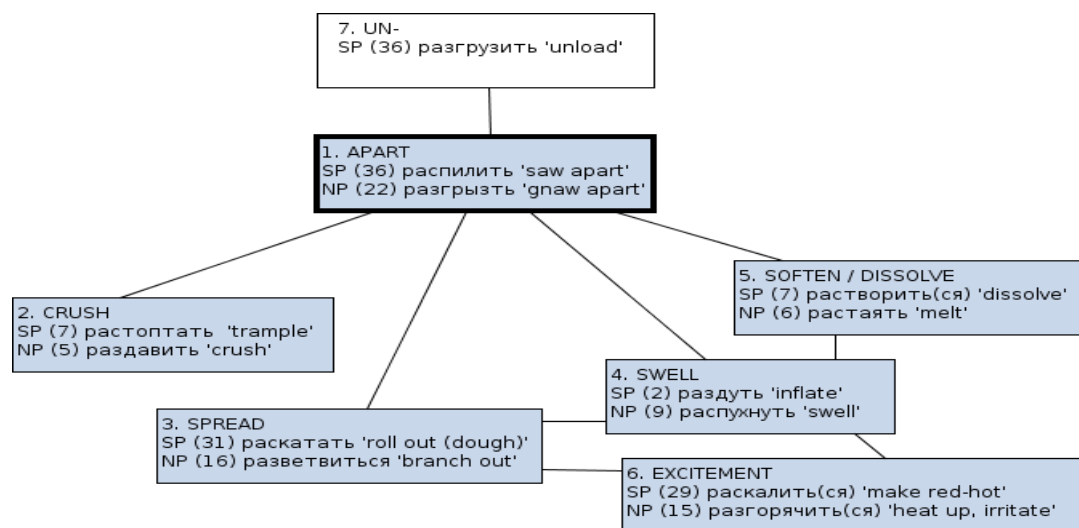


図 18. 動詞接頭辞 *raz-* の放射状カテゴリー (Janda et al. 2013: 43)²⁸⁵

²⁸⁵ 放射状カテゴリーの四角い枠は接頭辞の意味を表しており, 中央の 1. APART がこの接頭辞のプロトタイプ的な意味を担っている. また, 本章の分析とは関係ないが, 枠内の記号の見方は次の通りである:
a. SP : Specialized Perfective の略で, 対応する無接頭辞の不完了体動詞と語彙の意味が異なる接頭辞付き完了体動詞を意味する (例: *писать/pisat'* 「書く」に対しての *переписать/perepisat'* 「書き直す」).

Янда (2012: 15-18), Janda et. al. (2013: 42-52)は、放射状カテゴリーのモデルを用いて動詞接頭辞 *raz-/raz-* の意味拡張を以下のように説明している：*raz-/raz-* のプロトタイプの意味は 1. APART 「分離」である（1.の例：*пилить/pilit'* 「鋸を引く」→ *распилить/raspilit'* 「鋸で数個に引く」）。この APART は、個別の物体や、物体の集合における統一性の欠損を意味する。その結果、個別の物体やその部分部分は結合されたものではなくなり、様々な方向へと動いていく；2. CRUSH 「破壊」と 1. APART 「分離」の意味間の共通性は、欠損の際に物体の内部構造が消えることである（2.の例：*монтать/toptat'* 「踏む」→ *расмонтать/rastoptat'* 「踏みつぶす」）。

3. SPREAD 「拡散」、4. SWELL 「膨張」、5. SOFTEN / DISSOLVE 「軟化/溶解」、6. EXCITEMENT 「興奮」は分散（dispersal）という概念によって 1 つのクラスターを形成するが、この分散は 1. APART と直接的な関係をもつ（3.の例：*катать/katat'* 「伸ばす」→ *раскатать/raskatat'* 「平坦にする」/ 4.の例：*дуть/dut'* 「吹く」→ *раздуть/razdut'* 「膨らませる」/ 5.の例：*творить/tvorit'* 「創る」→ *растворить/rastvortit'* 「溶かす」/ 6.の例：*калить/kalit'* 「鍛錬する」→ *раскалить/raskalit'* 「赤熱する」）。

最後の 7. UN-は、何かを「取り消す」というある種の分離であるという点でプロトタイプと繋がっている（7.の例：*грузить/gruzit'* 「積む」→ *разгружить/razgruzit'* 「荷下ろしする」）。

次に、Nesset et al. (2011)の研究が提示する *вы-/vy-* の放射状カテゴリーを挙げる。

-
- b. NP : Natural Perfective の略で、無接頭辞の不完了体動詞と語彙的な意味が同じ接頭辞付き完了体動詞を指す（例：*писать/pisat'* に対しての *написать/napisat'* 「書く」）。

なお、括弧内の数字は分析において記録された派生動詞の個数である。詳細は Janda et al. (2013)を参照されたい。

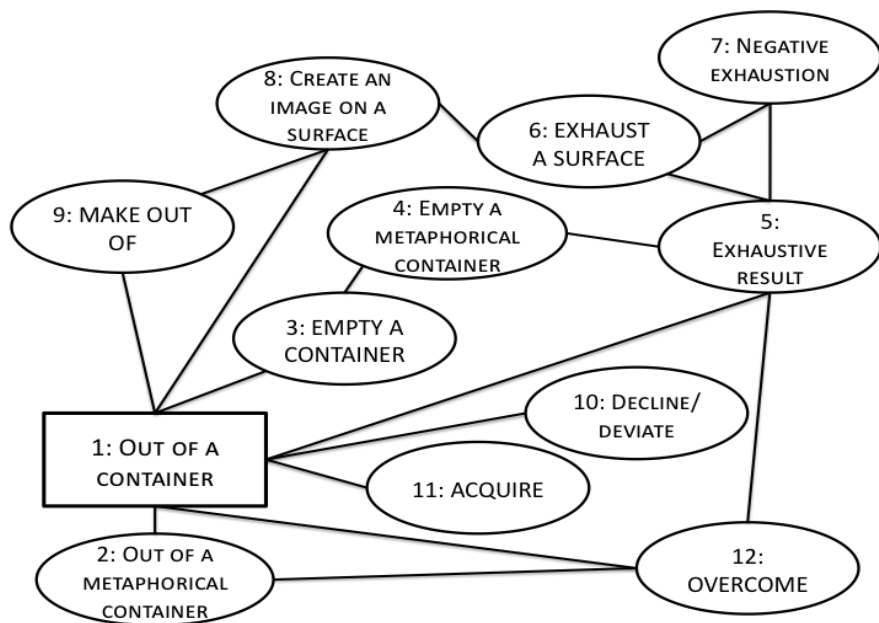


図 19. 動詞接頭辞 *vbl-/vy-* の放射状カテゴリー (Nesset et al. 2011: 381)

Nesset et al. (2011: 381-387)は、*vbl-/vy-*の放射状カテゴリー内における意味拡張を以下のように説明している：*vbl-/vy-*のプロトタイプは 1. OUT OF A CONTAINER 「容器から出る」である（例：*uđmu/idti* 「進む」→ *vyuđmu/vyjtı* 「出る」）。2. OUT OF A METAPHORICAL CONTAINER 「メタファー的な容器から出る」はメタファーを介してプロトタイプと関係している²⁸⁶。例えば、2.に分類される *vyduumat'/vydumat'* 「考え出す」では、考えが外に出てくることが表されている（基本形：*duumat'/dumat'* 「考える」）。

3. EMPTY A CONTAINER 「容器を空にする」と 4. EMPTY A METAPHORICAL CONTAINER 「メタファー的な容器を空にする」は、プロトタイプと同様に TR が LM から出る動きと関係しているが、さらに、その動作の結果として LM が空になるという概念を含意している（例：*syumat'/sypat'* 「まく」→ *vysyumat'/vysypat'* 「ぶちまける」）。

5. EXHAUSTIVE RESULT 「徹底の結果」、6. EXHAUST A SURFACE, 「表面に対する徹底」、7. NEGATIVE EXHAUSTION 「ネガティブな徹底」は、動作の徹底性に関連する Cluster を形成する。この Cluster の意味群は、「容器を空にする」（すべてを出し切る）から、メタファーに動機付けさ

²⁸⁶ Nesset et al. (2011)ではある意味に関して、その具象的・空間的意味とメタファー的な意味を区別している（1. OUT OF A CONTAINER と 2. OUT OF A METAPHORICAL CONTAINER の対応）。ただし、Janda et al. (2013)では、その記述から察するに、このような意味の対応は 1 つにまとめられている。つまり、OUT OF A METAPHORICAL CONTAINER は、メタファーに動機付けられて OUT OF A CONTAINER から派生した別の意味というよりは、これらは同じ意味のメタファー的用法と空間的用法であると言える。後述の分析では Janda et al. (2013)に倣い、ある意味の具象的・空間的な用法とそのメタファー的な用法を区別しないこととする。

れて「ある動作を徹底的に行う」動作へと意味拡張を経た結果である。例えば、5. EXHAUSTIVE RESULT に分類される *выбрить/vybrit'* は「完全に剃る」を意味する（基本形：*брить/brit'* 「剃る」）。6. EXHAUST A SURFACE の例としては *вылизать/lylizat'* 「舐めてきれいにする」が挙げられる（基本形：*лизать/lizat'* 「舐める」）。7. NEGATIVE EXHAUSTION には *вытереть/vyteret'* 「擦り破る」が含まれる（基本形：*тереть/teret'* 「擦る」）。

8. CREATE AN IMAGE ON A SURFACE 「表面にイメージを形成する」は 6. と関連しており、表面への動作に適用される。ただ、この意味の力点は徹底性ではなく、表面へ現れるイメージに当てられている（例：*шить/šit'* 「縫う」→ *вышить/vyšit'* 「刺繍する」/ ここでは、動作の結果として現れる模様が強調されている）。なお、プロトタイプに属する *выйти/vyjti* が「出る、現れる」を意味することからもわかるように、8. CREATE AN IMAGE ON SURFACE は 1. OUT OF A CONTAINER とともに放射状カテゴリ内で繋がっている。そして、8. CREATE AN IMAGE ON A SURFACE の意味拡張の結果が 9. MAKE OUT OF 「作り上げる」である（例：*работать/rabotat'* 「働く」→ *выработать/vyrabotat'* 「制作する」）。両者は出現の概念を共有している。

10. DECLINE/DEVIATE 「傾ける・逸脱する」は、基準もしくは基準の位置から逸れることを表す。これはメタファーによるプロトタイプからの意味拡張の結果であり（LM から出るという類似点）、例えば、*выгнуть спину/vygnut' spinu* 「背中を反る」では、TR の *спина/spina* 「背中」が通常の状態（LM）から移動することが示されている（基本形：*гнуть/gnut'* 「曲げる」）。

11. ACQUIRE 「獲得する」はプロトタイプから生じた意味である。*выиграть/vyigrat'* 「勝つ、勝ち取る」は *играть/igrat'* 「遊ぶ」の派生語であるが、「賞を勝ち取る」はメタファー的な観点からすると「賞が出てきて勝者に見えるようになる」ことを意味する。12. OVERCOME 「克服する」もプロトタイプから派生した意味である。何かを越える・克服する際、メタファー的に言えば、人はある状態から出て、ある状態へ入る。*выстрадать/vystradat'* 「苦しんだ末に乗りきる」は、苦しみを乗りきって別の所へ出ることを意味する（基本形：*страдать/stradat'* 「苦しむ」）。

ここまで、Janda et al. (2013), Nessel et al. (2011) が作成した動詞接頭辞の放射状カテゴリと意味拡張の記述を概観した。だが、上記研究には、放射状カテゴリ内における意味拡張の動機付け（メタファー、メトニミー、イメージ・スキーマ変換などによる）の説明が乏しい。そこで、次節 7.4.2. ではこの点に関する記述を考慮して *pro-/pro-* の放射状カテゴリを検討する。

7.4.2. 動詞接頭辞 *pro-/pro-* の放射状カテゴリ

ここでは *pro-/pro-* の放射状カテゴリを検討するが、まず 7.2 の分析・考察結果を反映した各

意味の一覧を以下に挙げる.

表 67. *npo-/pro-*の意味分類 (Prototype と Cluster 別)

	グループ	用語	意味	例
1.	Prototype	THROUGH	何かを通過・貫通する動作	проломать/prolomat' bore
2.	Cluster 1 対象や目的の脇を 通り過ぎる動作	PASS	何かの脇・側を通過する動作	проехать/prochat' ride past
3.		MISS	何かを逃す・逸する動作	проспать/prospat' miss...due to being asleep
4.	Cluster 2 通過に伴って何か 伸びる動作	DISTANCE	ある距離を通過する動作	пробежать/probežat' run through a certain distance
5.		DURATION	ある時間を通して何かに従事 する動作	просидеть/prosidet' sit for a certain time
6.		EXTENSION	何か伸びる動作	протянуть/protânut' extend
7.	Cluster 3 徹底的な動作	THOROUGH	何かを徹底的に, 通しで行う 動作	проварить/provarit' boil enough
8.		EXPEND	何かを消費する・使い尽くす 動作	пропить/propit' waste money on drinking
9.		HARM	何かに害・損傷を与える動作	простудить/prostudit' let catch cold

本章では, 次のような *npo-/pro-*の放射状カテゴリーを作成した.

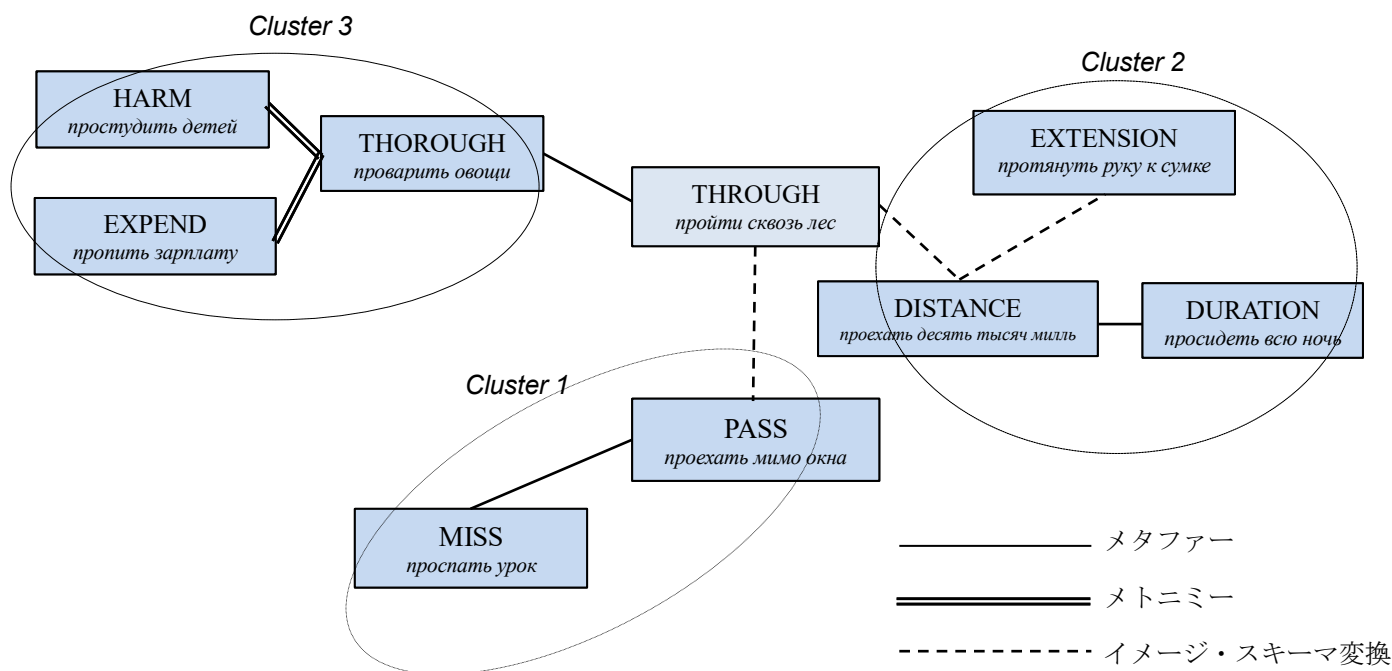


図 20. *npo-/pro-*の放射状カテゴリー

以下で、放射状カテゴリー内で9つの意味がどのように関係しているのかを、メタファー、メトニミー、イメージ・スキーマ変換を用いて記述する。

● Prototype: THROUGH

本章の分析では、*npo-/pro-*のプロトタイプの意味を **THROUGH** に設定した。いくつかある意味の中から1つのプロトタイプを認定する作業は容易ではなく、Janda et al. (2013)も *npo-/pro-*の分析に際して **THROUGH** がプロトタイプであると断言はしていない（「おそらく最も特徴的な意味は **THROUGH** であろう」(Janda et al. 2013: 106)と述べるにとどまる）。

例えば、前出の動詞接頭辞 *pa3-/raz-*の図 18 では **APART**, *vbl-/vy-*の図 19 では **OUT OF A CONTAINER** がプロトタイプの意味として規定されているが、Nesset et al. (2011: 380)は、プロトタイプの特性として、以下の3点を挙げている：1) すべての周辺の意味は、直接的もしくは間接的にプロトタイプと結びついている。2) プロトタイプは中心的な意味であり、メタファーやメトニミーといった認知的なメカニズムを介して他の意味への拡張の動機となる。3) プロトタイプは **physical** な領域に属している場合が多く、周辺的な意味と最も多く繋がっている。

1)に関しては、プロトタイプの **APART** と **OUT OF A CONTAINER** は、放射状カテゴリー内ですべての意味と直接的もしくは間接的に繋がっている。また、2)に関して言うと、*pa3-/raz-*の **APART**

と *ebi-ny* の OUT OF A CONTAINER は、メタファーやメトニミーを介した意味拡張の元となっている。そして、3)については、APART と OUT OF A CONTAINER は共に物理的・空間的な意味である。他にも、白井 (1998: 94)は、4) プロトタイプを選定するには頻度の高さを計測するといった手法があり得るとしている（つまり、プロトタイプの意味の生起頻度は高い）。

本章では、1)～3)が当てはまるように、*npo-/pro-*の放射状カテゴリー（図 20）を作成した。なぜ THROUGH を放射状カテゴリーの中心に据えたかと言うと、そうすることで 1)～3)の特徴を満たし、かつ、*npo-/pro-*の意味拡張をうまく説明できる放射状カテゴリーが成立するからである。例えば、同様に空間的な意味を表す PASS をプロトタイプに据えて、意味拡張を検討した場合、Cluster 1 と Cluster 3 との繋がりをうまく説明できないため、3)の特性に反する。プロトタイプから Cluster 2「通過に伴って何かが伸びる動作」への意味拡張は、イメージ・スキーマの観点からして、脇を通る PASS ではなく中を通る THROUGH に動機付けられている方が自然である。また、意味拡張に際して脇を通る動作を表す PASS が、「徹底的な動作」を意味する Cluster 3 のどれかと直接関係しているとは考えづらい。くわえて、PASS は生起頻度も低いため、4)の特性も満たしていない。したがって、*npo-/pro-*のプロトタイプの意味は、THROUGH であると本章は考える²⁸⁷。プロトタイプの認定は極めて難しい作業であり、検討すべき問題はまだ残されているが²⁸⁸、上記考察は一定の妥当性を有していると考える。

● Cluster 1: PASS, MISS

プロトタイプの意味である THROUGH「何かを通過・貫通する動作」から、イメージ・スキーマ変換に動機付けられて PASS「何かの脇・側を通過する動作」が派生する（中を通過するのではなく、脇を通過する）。

²⁸⁷ 他にも、辻(編) (2013: 323)は、Rosch らの研究をまとめて、「プロトタイプは① 瞬時に思い出すことができる、② 長期にかつ安定的に記憶されている、③ 多くの人が画一的に認定できる、④ 類似性の質問文 (X が Y にどれくらい似ているか) で X がプロトタイプか否かで異なる結果を示す」といった基準を挙げている。

²⁸⁸ 例えば、動詞接頭辞 *za-/za-*に関して、Janda (1986), Shull (2003), Соколова, Байдимирова (2011)は異なるプロトタイプを設定している。また、プロトタイプの数も検討する必要がある。Ляшевская (2014)は、空間的な意味を表す前置詞 *наверх/poverh*「上に」にはプロトタイプが2つあるとし、その放射状カテゴリーを作成している。上述の Соколова, Байдимирова (2011)も *za-/za-*のプロトタイプとして2つの意味を挙げている。他にも、通時的な観点から、接頭辞の意味がどのような変遷を経て共時的な状態に至ったのかも検討しなければならない。Neset et al. (2011)の分析によると、動詞接頭辞 *uz-/iz-*のプロトタイプの意味は通時的に見て変化した可能性があるという。

上記問題は本章の対象範囲を大きく超えるため扱わないが、今後の課題として検討していく。

(124) THROUGH (a.) と PASS (b.) の例

a. Мы *прошли* *сквозь* *лес* <...>.
 Мы *prošli* *skvoz'* *les* <...>.
 We *pass-V.PST.* *through-PRP.* *forest*
 「私たちは森の中を歩いて <...>。」

b. Тележка *проехала* *мимо* *окна*.
 Teležka *prochala* *mimo* *okna*.
 cart *ride_past-V.PST.* *by-PRP.* *window*
 「荷物運搬車が窓の側を通り過ぎた。」

(on the web)

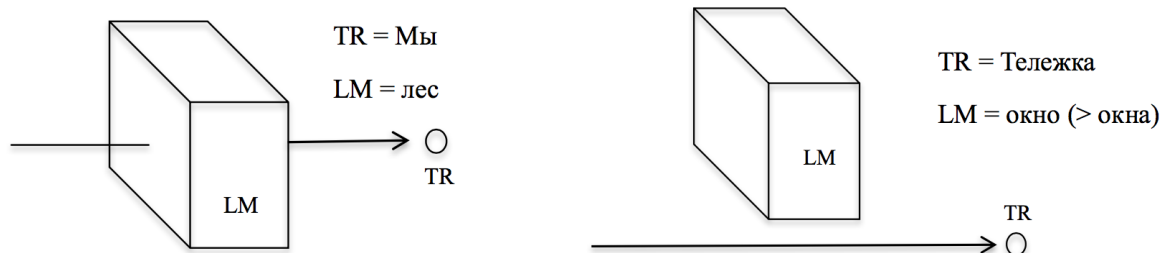


図 21. THROUGH (左) と PASS (右) のイメージ・スキーマの比較

THROUGH のイメージ・スキーマでは TR が LM の中を通っている。一方, PASS のイメージ・スキーマでは, TR が LM の脇・側を通る移動経路がプロファイルされている (際立っている)。

また, PASS の動作は「何かを逃す・逸する動作」と類似性を有しており, PASS からメタファーを動機付けとして MISS への意味拡張が起こる。

(125) PASS (a.) と MISS の例 (b.)

a. Тележка *проехала* *мимо* *окна*.
 Teležka *prochala* *mimo* *okna*.
 cart *ride_past-V.PST.* *by-PRP.* *window*
 「荷物運搬車が窓の側を通り過ぎた。」

b. Я *опять проспал* *урок* <...>.
 Я *opât'* *prospal* *urok* <...>.
 I *again* *oversleep-V.PST.* *lesson-N.ACC.*
 「私はまた授業を寝過ごした。」

(on the web)

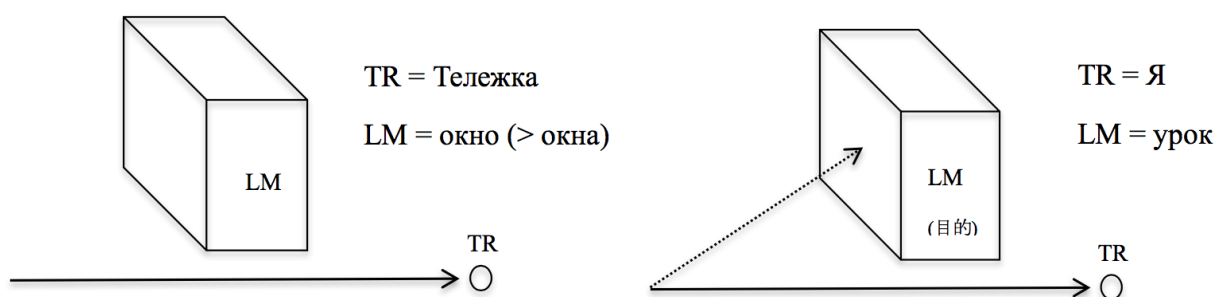


図 22. PASS (左) と MISS (右) のイメージ・スキーマの比較

放射状カテゴリー内で PASS と MISS は Cluster を形成するが、両者の意味には「対象・目的の脇を通り過ぎる」という共通点が見受けられる。結果として、まずイメージ・スキーマ変換を介して THROUGH から PASS が派生し、そして、PASS からメタファーに動機付けされて MISS への意味拡張が起こる、と考える。

● Cluster 2: DISTANCE, DURATION, EXTENSION

まず THROUGH から DISTANCE 「ある距離を通過する動作」へと意味拡張が起こる。通過という動作はその際に踏破した距離として捉えられるが、DISTANCE は THROUGH からイメージ・スキーマ変換によって派生した意味であると捉える。

(126) THROUGH (a.) と DISTANCE (b.) の例

a. Мы	прошли	сквозь	лес<...>.	b. Я	прошёл	сто	метров<...>.
My	prošli	skvoz'	les <...>.	Â	prošël	sto	metrov <...>.
We	pass-V.PST.	through-PRP.	forest	I	go_through-V.PST.	hundred-NUM.ACC.	meter-N.GEN.
「私たちは森の中を歩いて <...>。」				「私は 100 メートルを進みきった。」			

(on the web)

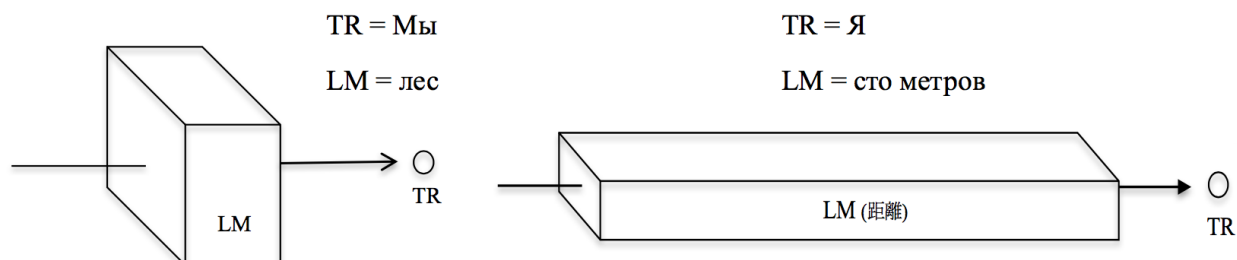


図 23. THROUGH (左) と DISTANCE (右) のイメージ・スキーマの比較

THROUGH のイメージ・スキーマでは TR が LM の中を通過している (左図)。一方、DISTANCE のイメージ・スキーマでは LM の構造が変形しており、それは通過した距離を表している (右図)。そして、例文では TR (Я/Â 「私」) が LM (сто метров/sto metrov 「100 メートル」) を通過・踏破している。

DURATION 「ある時間を通して何かに従事する動作」は、メタファーに動機付けされた DISTANCE からの意味拡張の結果である。メタファーを介して (移動した距離を移動した時間として捉える)、DISTANCE から DURATION へと意味が派生した、と考える。

(127) DISTANCE (a.) と DURATION (b.) の例

a. Я прошёл	сто	метров <...>.	b. Я просидела	там два	часа.
Ā prošel	sto	metro<...>.	Ā prosidela	tam dva	časa.
I go_through-V.PST.	hundred-NUM.ACC.	meter-N.GEN.	I sit_for_a_certain_time-V.PST.	there two-NUM.ACC.	hour-N.GEN.
「私は 100 メートルを進みきった。」			「私はそこに 2 時間の間いた。」		

(on the web)

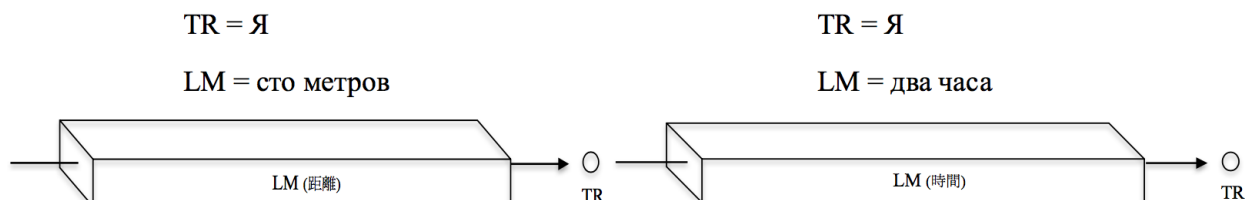


図 24. DISTANCE (左) と DURATION (右) のイメージ・スキーマの比較

DISTANCE と DURATION のイメージ・スキーマはほぼ同じであるが、LM が指示する対象が異なる (DISTANCE の LM は距離であるが、DURATION の LM は時間である). TIME IS STATIONARY AND WE MOVE THROUGH IT という英語におけるメタファーの型からわかるように (cf. レイコフ, ジョンソン 1986: 66), TR が LM (時間) の中を通過しているのである。

EXTENSION 「何かが伸びる動作」は、メタファーに動機付けされて DISTANCE から派生したと考える (ある距離を通過する動作からメタファーを介して、何かが伸びている動作へ意味が拡張した)。もしくは、*prohodit'* が「(道路などが) 通っている」(cf. 東郷他(編) 1988) といった意味を有していることからわかるように、EXTENSION は、DISTANCE からイメージ・スキーマ変換 (TR の構造変化) に動機付けされて派生したとも考えられる。

(128) DISTANCE (a.) と EXTENSION (b.) の例

a. Я прошёл	сто	метров <...>.	b. Дорога	проходит	через	парк.
Ā prošel	sto	metro<...>.	Doroga	prohodit	čerez	park.
I go_through-V.PST.	hundred-NUM.ACC.	meter-N.GEN.	road-N.NOM.	lie_through-V.PRS.	through-PRP.	park
「私は 100 メートルを進みきった。」			「道は公園を通っている。」			

(on the web)

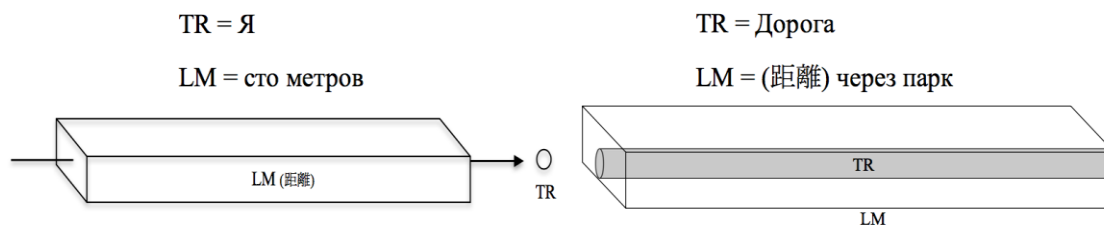


図 25. DISTANCE (左) と EXTENSION (右) のイメージ・スキーマの比較

これまでのイメージ・スキーマとは異なり、EXTENSION のそれでは、TR 自体の構造が変化しており、LM の中を通して伸びている。

これら 3 つの意味は「通過に伴って何かが伸びる動作」という共通点を持ち、放射状カテゴリー内で 1 つの Cluster を形成する。

● Cluster 3: THOROUGH, EXPEND, HARM

THOROUGH「何かを徹底的に、通しで行う動作」は、メタファーに動機づけられて THROUGH から派生したと捉える。Janda et al. (2013: 106)が述べているように、「何かが最後まで通しで (through) 行われる際、それが THOROUGH である」。つまり、何かを通して (“through”) 行うことは、徹底的な動作、もしくは最後まで通しで行う動作として解釈できるのである。

そして、THOROUGH の徹底的に行われる動作の行き着く結果が、EXPEND「何かを消費する・使い尽くす動作」と HARM「何かに害・損傷を与える動作」である。これらは THOROUGH からメトニミーに動機付けられて派生したと考える (原因・結果, 2 つの出来事の時間的な隣接性 (cf. 山梨 1988; 巻下, 瀬戸 1997; 瀬戸 2005; 靱山 2010)): まず、徹底的な動作の対象が金銭である場合、それが原因として生じる結果が金銭の消費・浪費、すなわち、EXPEND である。したがって、EXPEND は THOROUGH からメトニミーに動機付けられて派生したと捉える。HARM も同様に、徹底的な動作が原因で生じた事態の変化を表し、結果としてそこには害・損傷が含まれる。したがって、THOROUGH から HARM への意味拡張はメトニミーによって動機付けられている、と考える。

これら 3 つの意味は、*obl-lyt-*の EXHAUSTIVE RESULT, EXHAUST A SURFACE, NEGATIVE EXHAUSTION (図 19 参照) のように、「徹底的な動作」という点で 1 つの Cluster を形成する。

ここまで記述を整備してきた放射状カテゴリーは、1) 動詞接頭辞の多義性の理解や 2) 体のペアの理解 (cf. Янда 2012; Janda et al. 2013; Кузнецова, Янда 2013)に役立つと思われる²⁸⁹。動詞に関わるこれらの文法事項を理解することは、語彙力の増加に大きな寄与をもたらす (5 章参照)。1) に関して言うと、放射状カテゴリーは、当該の言語単位の意味群が互いにどう関係しているのか、これらはどのような意味拡張を経ているのかを示している。そのため、放射状カテゴリーにおけ

²⁸⁹ すでに言及したが、Janda らはいわゆる空の接頭辞の存在に懐疑的で重複仮説を支持している。Янда (2012: 43), Janda et al. (2013: 200), Кузнецова, Янда (2013: 92)は、体のペアを空の接頭辞を用いて説明している教材に批判的で、接頭辞の意味と動詞の結合 (完了化に際してどの接頭辞が用いられるのかという選択の問題) を学習者に理解させるべきである、と述べている。

ただし、この主張は認知言語学的な記述によって得られた分析結果の副産物である。今後、彼女らの主張を裏付ける実証研究が望まれる。

る意味間の関係性の理解は、多義的な接頭辞の意味学習において役立つと思われる。

また、図 20 のように放射状カテゴリー内の意味拡張を図として示さなくとも良いかもしれない。例えば、「THROUGH → THOROUGH : 何かを通り過ぎる動作は、何かを徹底的に行う動作と類似性を持つ」といった意味の派生の過程を説明する手法は、*npo-/pro-*という 1 つの形式がなぜ複数の意味群を有しているのかを理解する際に活用できよう。

放射状カテゴリーにくわえて、イメージ・スキーマも多義的な接頭辞の意味学習に活用できると考えられる。すでに多くのロシア語教材が THROUGH と PASS のイメージ・スキーマを採用していることから、この認知的なモデルを用いたアプローチの学習効果が期待される。前置詞や接頭辞などの多義の言語単位に対してイメージ・スキーマを活用するアプローチは、各意味の学習負担を軽減すると推測される (cf. 田中他 2006; 大西, マクベイ 2009; 谷口 2011)。

いずれにしても、イメージ・スキーマと放射状カテゴリーを用いた学習の効果を測定するためには実証研究が不可欠である。これは本稿の分析対象の範囲を超えているが、今後、必ず実施しなければならない課題である。ただし、本稿は効率的なロシア語の語彙学習法を検討する上での出発点となる基礎研究である。本来、教育的な観点からの主張は抑えるべきかもしれないが、実証研究を行うにしても、その前提として *npo-/pro-*の意味分類、イメージ・スキーマ、放射状カテゴリーの記述が整備されていなければならない。この点において本章の分析結果や考察には意義があると考えられる。

7.5. 総括

本章は、まず 7.1.において動詞接頭辞 *npo-/pro-*の意味分類とその分類基準を検討・導入し、最終的に 9 つの意味を設定した (表 65 参照) : 本章では解釈構造, 意味的・統語的特徴 (cf. Зализняк 1995; Кронгауз 1995), そしてイメージ・スキーマ (cf. Johnson 1987)を使い, 可能な限り意味を形式に還元するようにして意味の分類作業を進めた。その結果, АН СССР (1980)には欠如している 2 つの意味 (EXTENSION, HARM) を設定するに至った。

7.2.では *npo-/pro-*の一つひとつの意味を詳細に説明した。その際, 9 つの意味をプロトタイプと 3 つの Cluster に分け, それぞれの意味の解釈構造, 意味的・統語的特徴, (Cluster 3 を除く) イメージ・スキーマを提示した。これら 3 つの分析の道具立ては, これまでにも動詞接頭辞の記述に用いられてきたが, その内容は体系的ではなく部分的であった。本章の分析では *npo-/pro-*に対象を限定し, これらを用いて詳細に記述を行った。接頭辞の意味分類の記述を整備することは, 言語学だけでなく教育の観点からも重要である²⁹⁰。

²⁹⁰ 例えば, 接頭辞の意味記述が整備されていれば, 辞書に記載されていない語の意味を推測できる可能性

7.3.では4章で作成したC_1を用いて、実際に *npo-/pro-*がどの意味で基本形に付加されている頻度が高いのかを確認した。つまり、どの意味の学習価値が高いのかを、実際のテキストにおける生起頻度を手がかりに選定していった。その結果、各意味の生起頻度には差があり、学習価値の高い意味が確認された。例えば、THROUGH, DISTANCE, THOROUGH は実際のテキストにおいて出会う機会が多く、まず学習者に導入すべき優先的な意味であると言える（

図16参照）。

そして、続く7.4.では、*npo-/pro-*の放射状カテゴリを作成した。現状、ロシア語の動詞接頭辞に関する放射状カテゴリの記述はまだ少なく、7.4.の意義は、認知言語学の観点から成された *npo-/pro-*の放射状カテゴリの記述整備にあると考える。放射状カテゴリにおける意味拡張の関係をすることで、学習者は *npo-/pro-*の意味群を覚えやすくなると推測される。

以上の分析結果や考察を踏まえて、本章の研究設問の答えを検討する。

(129) (再掲) 7章の研究設問

- a. 動詞接頭辞 *npo-/pro-*を対象として、意味毎の解釈構造、意味的・統語的特徴、イメージ・スキーマを記述する。その上で、実際のテキストにおいて *npo-/pro-*のどの意味の生起頻度が高いかを確認し、学習価値の高い意味を選定する。
- b. *npo-/pro-*の放射状カテゴリを作成し、多義的な接頭辞の意味学習の基盤を整備する。

a.に関しては、当然、9つの意味群を学習価値の高いグループと低いグループにきれいに二分はできないが、前述の通り、THROUGH, DISTANCE, THOROUGH の学習価値は高いと言える。時間的に導入が許されるのであれば、DURATION と EXTENSION も学習者が出会う頻度が多いため、覚える価値は高い。PASS, MISS は他の意味に比べて生起頻度が低く、したがって、学習の優先度も下がる（ただし、*npouzparamь/proigrat'*のように語自体の生起頻度が高いものもある）。EXPEND と HARM はさらに C_1 内でほとんど確認されなかった。場合によってはこれらを導入しないというアプローチもあり得るだろう。

b.に関しては、著者の知る限り、本章が初めて認知言語学の観点から *npo-/pro-*の体系的な記述を行なった：まず、*npo-/pro-*の放射状カテゴリを作成し、その中で意味拡張がどのようにして起こったかを検討した。本章で得られた記述に基づいて、今後は多義的な接頭辞の意味学習にイ

もある：Кронгауз (1995: 33)は、母語話者であれば辞書に記載のない *отбараचितь/otbatačit'*「日雇いで返済する」という動詞に出会っても、*отработамь/otrabotat'*「働いて返す」などの、すでにロシア語に存在している動詞からの類推でその意味は理解できる、と述べている（*бараचितь/batračit'*「日雇い働きをする」に「返す動作」を意味する接頭辞 *om-/ot-*が付いている）。このようなアプローチは、2章で言及した WF の概念に通ずる。

メージ・スキーマと放射状カテゴリーが有効であるかを、実証研究を通して検討していく。

本章は主としてコーパス言語学、認知言語学の観点から動詞接頭辞の意味の分析を行ったが、課題として残された問題点は少なくない。まず、7.3.の分析に際して、本稿の枠組みではうまく分類できない派生動詞が存在する。つまり、本稿の枠組みでは、当該の派生語における接頭辞と基本形をうまく分析することができないのである。そのため、今後、本章では検討していない 10 個目の意味を新しく設定する必要があるのかもしれない。ただ、Зализняк (1995: 151)が述べているように、分析可能性は程度の問題であり²⁹¹、本章の枠組みで分類できない例は不可避な要素であると捉えることもできる。

また、本章の意味分類が言語学的に妥当であるかといった根本的な問題も存在する。7.2.3.で見たように、意味分類には複数の見解があり得る。ここでは、Langacker (1987: 48-55)の絶対予測性 (absolute predictability) の観点が、分析の難しさを説明してくれるであろう：絶対予測性とは、あるクラスに関しての主張が、そのクラスのすべてのメンバー、もしくはそのメンバーにのみ有効でなければならないと考えることを指す。この主張は確かに理想的ではあるが、実際にそうのように考えると、間違った結論を導き出してしまう可能性がある。現実的には、予測性のレベルを下げなければいけない。カテゴリー化を必要十分条件に基づいて行った場合、絶対予測性が期待されるが、現実には分類しきれない例が実際の言語には含まれているのである。

なお、本稿の分析対象は *про-/pro-* という 1 つの動詞接頭辞にとどまるが、基本形 *клеить/kleit'* 「糊付けする」に対する派生動詞 *отклеить/otkleit'* 「剥がす」と *приклеить/prikleit'* 「貼り付ける」の対応のように、ある接頭辞の意味は、他の接頭辞の意味との関係性によって体系化されている場合もあるため (cf. Кронгауз 1995: 53) ²⁹²、今後は分析対象の接頭辞を拡大していく。

²⁹¹ Зализняк (1995: 150)によると、接頭辞の意味的な分析可能性は、当該の語がロシア語に登場して新しいほど高いとしている。

²⁹² 他にも、動詞接頭辞 *от-/ot-* は *y-/u-* と対比の関係を示す場合がある (例えば, *говорить/govorit'* 「話す」に接頭辞が付いた *отговорить/otgovorit'* 「思いとどませる」, *уговорить/ugovorit'* 「説得する」など) (Кронгауз 1995: 53)。ここでの *от-/ot-* は「拒否」を、*y-/u-* は「満足な結果への到達」といった意味で基本形に付加されていると思われる。

8 章. 結び

8.1. 本稿の総括

本稿全体の目的はロシア語に特化した語彙学習法の検討である。より具体的に言うと、本稿は、派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法を言語学的に検討した基礎研究である。ここでは順を追って、1 章から 7 章までの内容を総括する。

1 章では主に本稿の背景 (1.1.) と目的 (1.2.) について言及した：ロシア語教育は授業数が少なく、そもそも時間的な制約が厳しいため、語彙学習に時間を割けないという環境的な問題が存在する。また、歴史的に見て、ロシア語に特化した語彙学習法はこれまで盛んに研究されてきたとは言えない。したがって、このような状況下で求められるのは、ロシア語の言語的特徴を考慮した、効率的な語彙学習法の検討・確立である。

本稿は語形成におけるロシア語の豊かな形態的手法に着目し、派生接辞の学習が効率的に語彙力を伸ばし得ると考えた。その効果を言語学的に確認し、語彙学習の観点からロシア語の派生接辞の記述を整備するため、本稿は以下の 4 つの研究設問を設定した。

(130) (再掲) 本稿の研究設問 (章の情報を追加)

- a. 派生接辞学習による語彙力増加の数量的確認 (5 章)
- b. 学習価値の高い派生接辞の選定 (6 章)
- c. 学習価値の高い意味の選定 – 動詞接頭辞 *npo-/pro-* を例に – (7 章)
- d. イメージ・スキーマと放射状カテゴリーの記述整備 – 動詞接頭辞 *npo-/pro-* を例に – (7 章)

本稿では a.~d. の研究設問を議論するため、まず 2 章において、テキスト内の語を数える際に用いられる 4 つの単位 (トークン、タイプ、レマ、WF) を導入・考察し (2.1., 2.2.)、英露の研究事例を通してこれらの使用領域や問題点に言及した (2.3.)。

3 章では、まず外国語教育とコーパスの関係 (3.1.)、コーパスの構築に関する諸相 (3.2.) に言及した。次に、これまでに作成されたロシア語コーパスとそれに基づく頻度辞書を導入したが、その際、1) コーパス規模 (総語数)、2) テキストのサンプリング、3) 語彙リストの観点から、それぞれの特性を概観した。現在、ロシア語には複数の書き言葉均衡コーパスが存在しており、かつ、Sketch Engine は、ロシア語の巨大モニターコーパス (ruTenTen11) を公開している。言語研究に使用可能なコーパスの多様性の点で、以前は、ロシア語は英語に後塵を拝していたが、現状、

ある程度選択の余地が生まれている。

この状況を踏まえて、4章では本稿の研究設問(130)の分析にどのロシア語コーパスが最も適しているかを調査した：まず、RNC-M (9,200 万語) の内部構造を模した 100 万語のコーパスを 5 つ (C_1~C_5) 作成した (ロシア語の頻度辞書は総語数 100 万語の書き言葉均衡コーパスに基づいて編まれたものが多いため (cf. Засорина (ред.) 1977; Лёнгрен 1993; Brown 1996), この総語数を採用した / 4.1., 4.2.)). RNC-M の規模は 9,200 万語であるのに対し、C_1~C_5 のそれは各 100 万語である。これらのコーパスを比較することにより、安定した頻度データが得られる大規模コーパスである RNC-M と、100 万語の C_1~C_5 の間において、どの程度高頻度語の項目数が重複しているのかを計測した (4.3.). RNC-M と C_1~C_5 は、同じサンプリング比率で構成されているが、その規模は大きく異なる。先行研究の分析結果から、規模が大きく、同じテキストサンプリングの比率で構成されたコーパス間では高頻度語の重複数が高くなる、ということがわかっている (4.3.1.). したがって、同じサンプリング比率で構築された RNC-M と C_1~C_5 における高頻度語の重複数には、主にコーパス規模が影響する。分析の結果、RNC-M と C_1~C_5 の高頻度語の重複数は上位 1,500 語までは安定していることが確認された (4.3.2.). つまり、100 万語のコーパスを用いてロシア語の高頻度語を抽出する場合、頻度順に 1,500 語までは信頼性の高いデータが得られる、ということがわかった。一方で、5章~7章の分析には高頻度 5,000 語を用いるため、100 万語のコーパスが提示する頻度データは上記研究設問の分析には対応し切れない。この結果を踏まえて、本稿は RNC-M の頻度データ (Ляшевская, Шаров 2009) を後述の分析に採用するという結論に至った。また、書き言葉との比較のために、話し言葉コーパスである RNC-S も分析に用いた。

5章から具体的に本稿の研究設問の分析・考察に入った。英語と比べて、ロシア語は新しい概念・語彙素を形成する際の統合的性質 (接頭辞や接尾辞などの付加) が強い。その結果、ロシア語は派生語の含有率が高くなるため、派生接辞の学習により効率的に語彙力を伸ばすことができると推測される (5.1., 5.2.). それを数量的に確認するために、RNC-M と RNC-S の高頻度 5,000 語を対象として、レマ単位の頻度データを WF 単位で数え直し、テキストカバー率の上昇度合いを計算した (5.3.). 分析の結果、高頻度語を WF 化すると 1,000 語、2,000 語といった特定語数によるテキストカバー率は大幅に上昇することがわかった。

表 68. (再掲) RNC-M と RNC-S におけるレマ単位と WF 単位によるテキストカバー率

語数	RNC-M (書き言葉コーパス)			RNC-S (話し言葉コーパス)		
	レマ	WF		レマ	WF	
500 語	53.0%	63.3%	(=レマ単位の 1,212 語)	69.4%	76.2%	(=レマ単位の 1,132 語)
1,000 語	60.9%	72.1%	(=レマ単位の 2,533 語)	75.3%	81.4%	(=レマ単位の 2,364 語)
1,500 語	65.9%	76.1%	(=レマ単位の 3,627 語)	78.3%	83.5%	(=レマ単位の 3,400 語)
2,000 語	69.4%	78.2%	(=レマ単位の 4,397 語)	80.3%	84.6%	(=レマ単位の 4,206 語)
2,500 語	72.0%	79.3%	(=レマ単位の 4,927 語)	81.7%	85.3%	(=レマ単位の 4,801 語)

上記の分析結果は、高頻度語の中には派生語が数多く含まれており、派生接辞の知識が語彙力増加に効果的であることを示している。これまで感覚的にロシア語の語彙力増加には、派生接辞の学習が有効であろうと言われてきたが、それが 5 章の分析により客観的に確認された。

ただ、ロシア語は無数の派生接辞を有しており、実際の語形成において、これらは高頻度に使われるもの、中程度に使われるもの、低頻度に使われるものが連続体を成して存在している。6 章では、派生接辞の学習優先度を検討する客観的指標の獲得を目指した：効率的な語彙学習の観点からすると、すべての派生接辞が同等の学習価値を有しているわけではない。だが、現在ある教材はこの視点を欠いており、派生接辞の学習には不向きであると考え（6.1.）。そこで、実際に学習者が会う機会が多い派生接辞を選定するため、RNC-M と RNC-S の高頻度 5,000 語内に含まれる各派生接辞の生起頻度と実質的生産性（当該の派生接辞が含まれる派生語の個数）を計測した（6.2.）。結果、接頭辞は動詞に付加される *no-/po-*, *c-/s-*, *в-/v-*, *вы-/vy-*, *при-/pri-*, *про-/pro-*, *у-/u-*, 接尾辞は副詞を形成する *-o/-o*, 動詞を形成する *-a/-a-*, *-ва-/va-*, *-ива-/iva-*, 名詞を形成するゼロ接尾辞, *-ениj-/enij-*, *-ниj-/nij-*, *-иj/-ij-*, *-ост'/-ost'*, 形容詞を形成する *-н-/n-*, *-ск-/sk-*, *-ов-/ov-*, *-енн-/enn-*, *-альн-/al'n-* などの生起頻度と実質的生産性が高いことがわかった（6.3.）。なお、この分析結果は、概ね書き言葉（RNC-M）と話し言葉（RNC-S）に共通している。語形成の知識を用いた語彙学習には、今後、検討しなければならない問題が残っているが（6.4.）、効率的に語彙力を伸ばすためには、まず、上記派生接辞を優先的に学ぶことが望まれる。これまで日本のロシア語教育において語形成はあまり触れられてこなかったが、5 章の分析から得られた結果は、授業や教材へ派生接辞を導入する根拠となるし、6 章の分析から得られたリストは、具体的にどの派生接辞を学習者に提示すべきかといった指標として機能する。

6 章の分析により、学習優先度の高い派生接辞は選定できた。ただ、ロシア語の派生接辞、特に動詞接頭辞は多義的である（かつ、動詞接頭辞の生起頻度と実質的生産性は高いため（6.3.1.）、その意味学習は極めて重要である）。したがって、真に効率的な語彙学習法を検討するのであれば、

頻繁に使われる派生接辞だけでなく、その意味まで選定することが望まれる。そこで、7章では、前章の分析で生起頻度と実質的生産性の値が高かった *npo-/pro-* を分析対象として学習価値の高い意味の選定を行った：まず、*npo-/pro-* の意味分類に関して詳細な記述を行い、結果として9つの意味を設定した(7.1., 7.2.)。そして、C_1において、それぞれの意味の生起頻度を計測した(学習者が出会う頻度の高い意味は、学習価値が高いと言える / 7.3.)。結果は以下の通りであった。

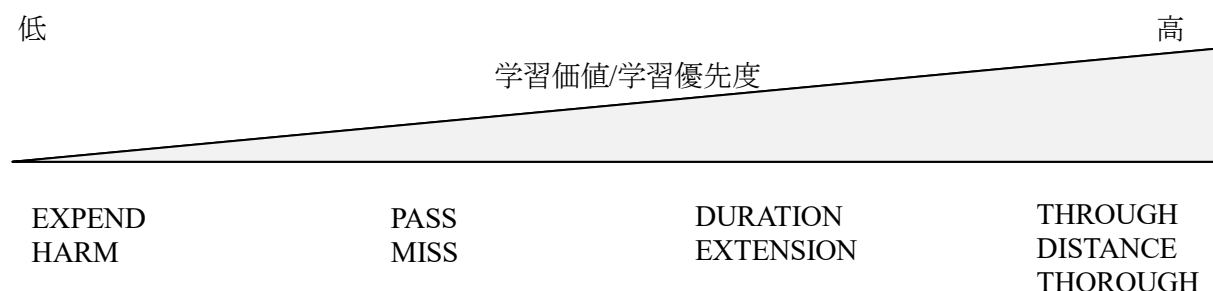


図 26. (再掲) *npo-/pro-* の意味群の学習価値/学習優先度

上記図は、THROUGH, DISTANCE, THOROUGH がまず学習者に提示すべき *npo-/pro-* の意味であることを示している。時間的に可能であれば、次の導入項目は DURATION と EXTENSION, そして PASS, MISS がそれに続く。なお、EXPEND と HARM は、実際のテキストや発話でほぼ出会う機会がないため、導入対象外としても良いであろう。6章の分析からは学習価値の高い派生接辞が何であるかが判断できるが、7章のこの分析結果は、さらに、(動詞接頭辞 *npo-/pro-* に限定されるが) 学習優先度の高い意味がどれであるかまで示してくれる。このようなリストが提示する情報は、派生接辞を用いた語彙学習を検討する上で非常に重要である。

同時に、*npo-/pro-* を対象として放射状カテゴリーを検討・作成した(7.4.)：*npo-/pro-* の上記意味群を単に一つひとつ個別に暗記するやり方は学習の負荷が重いと推測される。そこで、多義的な接頭辞の学習においてその理解を促進すると考えられる放射状カテゴリーの記述を整備した。この放射状カテゴリーと、7.2.で作成したイメージ・スキーマの記述は、今後、接頭辞の意味学習を検討する際の土台として役立つであろう(ただし、学習効果は実証研究を通して確認しなければならない)。これまで動詞接頭辞 *npo-/pro-* は言語学的な観点からも、教育的な観点からも、あまり研究されてこなかった。本稿は初めてこの接頭辞の体系的な意味記述を行い、また、そのイメージ・スキーマと放射状カテゴリーを作成した。直接この成果を教育現場に応用することはできないが、それを検討する基盤を作成したという点で、7章の記述整備には意義があると考えられる。

8.2. 今後の課題

5章と6章では、コーパスが提示する頻度データに基づいて、(130)の研究設問 a.と b.の分析・考察に取り組んだ。そのデータの抽出元として、本稿の分析に利用可能で、現状最も規模が大きく、テキストジャンルのバランスに優れた書き言葉均衡コーパス、RNC-M を採用した。とはいえ、現在の英語コーパスと比較すると、RNC-M の 9,200 万語というコーパス規模は決して巨大であるとは言えない。今後、より大規模なロシア語の書き言葉均衡コーパスが登場した場合、本稿の分析を再び実施し、同様の分析結果が得られるかどうかを確認する必要がある。また、参考として RNC-S (話し言葉コーパス) に対しても RNC-M と同様の分析を実施しているが、このコーパスの総語数は 100 万語に満たない (約 76 万語)。そのため、今後、大規模な話し言葉コーパスを用いての再検証が望まれる。くわえて、学習を念頭におく場合、語彙の頻度だけでなく親密度 (cf. 横川 2006) といった基準を考慮して分析対象の語彙を選定すべきであろう。

本稿 7 章では、先行研究や詳解辞典の記述を踏まえ、動詞接頭辞 *npo-/pro-* の意味分類を行った：まず、本稿は *npo-/pro-* の意味を 9 つに分類した。具体的には、本稿はこれまでの研究とは異なり、解釈構造、意味的・統語的特徴、イメージ・スキーマ (7.1.2.) という判断基準を体系的に用いて、意味を可能な限り形式に還元してその分類を試みた。だが、音/発話に関する派生動詞の分類について各研究で意見が割れることから (7.2.3.)、絶対的な意味分類の基準は実現が難しく、ある意味と他の意味の境界線はフエジーであることを認めざるを得ない。とはいえ、自らの研究の妥当性を客観的に裏付ける作業は、認知言語学の観点からだけでなく、その他の言語学の観点からも今後検討していく必要がある。また、本稿の 9 つの枠組みで分類しきれなかった (分析可能性の低い) *npo-/pro-* 付きの派生動詞に対して (7.3.1.)、新しい 10, 11 個目の意味を設定する必要性があるのか、それとも、比喩的な観点から既存の意味に分類が可能なのかどうかを再検討する必要がある。このように、7 章の意味分析には今後検討すべき課題が多く残されており、より厳密な言語学的アプローチが望まれる。

なお、本稿は、ロシア語の効率的な語彙学習を実現するための基礎研究である。したがって、教材や授業に本稿の分析結果をすぐに反映しようとするのは時期尚早である。本稿のような基礎研究の成果を教育現場で応用するためには、学習効果を確認する実証的な検証が求められる。投野 (2015b: 8) が指摘しているように、「コーパスの英語教育への応用は効果研究まで着実に視野に入れて行っている研究はまだ数が多くなく、コーパスの研究利用の提案やシステム・教材の具体案を示すだけのものが大多数である」。例えば、本稿 6 章ではコーパスの頻度データを用いて学習優先度の高い派生接辞を選定した。おそらく、リスト化された学習価値の高い派生接辞の中には、学習者にとって覚えやすいものと、そうでないものが混在しており、この観点は基礎研究の分析

結果からは推し量れない。これは学習者という変数を設定した上で実証的に確認する必要がある。

7章で扱った放射状カテゴリーとイメージ・スキーマを多義的な接頭辞の意味学習へ応用するにしても、同様の問題点が指摘できる。これらを用いた認知的なアプローチが、接頭辞の多義性の理解をどの程度促進するのか、もしくは逆にそれを妨げるのかは検証なしでは測れない。また、本稿では THROUGH のように、各意味の用語に大文字の英語表記を採用しているが、教育上、日本語で導入した方が良いかもしれない。他にも、本稿で示した、放射状カテゴリー内における意味拡張の手段の設定（メタファー、メトニミー、イメージ・スキーマ変換）が、教育上妥当であるかも検討しなければならない。イメージ・スキーマの構造の一部を取り出す、もしくは、その構造が大きなものへと変化するという点で、イメージ・スキーマ変換はメトニミー的とも考えられるが（辻(編) 2013: 17）、メタファーとメトニミーの2つだけを導入した方が学習負荷は低くなる可能性がある。ただし、繰り返しになるが、基礎研究である本稿の成果を応用の段階に推し進めるには、リストを整備して終わるのではなく、1) 教育現場で実践経験を積み、2) かつ、実証研究を行うことが不可欠であると考ええる。

また、日本語母語話者が対象であるという変数も今後は考慮する必要があるだろう。Bauer, Nation (1993: 253)は、「WF という概念の背景にある最も重要な原理は、一度、元となる語 (base word)、もしくは派生語を覚えれば、その word family の他の構成員を理解する労力は少なくて済む、または、まったく労力を要さない」ということであると述べている。例えば、WF の利用に際して英語と同語族の言語を母語とする学習者を想定した場合、言語間の類似性によって派生語を理解したり、使用したりすることは可能であろう（望月他 2003: 80）。ただ、日本語とロシア語は言語の系統がかなり異なるため、WF 単位で語を捉えさせる負荷は予想以上に重いのかかもしれない²⁹³。

さらに、本稿で整備されたリストを実践に应用する場合、対象となる学習者のレベルも検討しなければならない。投野 (2015b: 10)が述べているように、コーパスから得られた英語のコロケーションの研究成果をどの学習段階で導入するのが適切か、といった研究は中上級者を意識しており、日本のように圧倒的に初級学習者が多い環境では、その研究成果をそのまま流用することはできない。ロシア語の学習者は、大学入学から学習を開始するため、その大半が初級レベルに属している。そのため、WF の知識が活かせるレベルはどの段階からなのかを吟味する必要がある。

上記問題点は、今後の課題とする。

²⁹³ Aizawa (1998)の実証研究は、日本人大学生にとって WF 単位で語を捉えることの難しさを示していると思われる：Bauer, Nation (1993)が提示する Level 3 と 4 の 21 の接辞（6.2.1.参照）を含む派生語を3語ずつ提示して（例：-able であれば *eatable, changeable, agreeable*）、共通する接辞の意味と品詞を尋ねる調査を行なった。結果、-ly, -y（レベル3）、-al, -ism, -ity, -ize, -ous（レベル4）について、日本人大学生の40%以上が正しく答えられなかった（Aizawa 1998: 78）。

そのため、本源形とその派生語群を1つにまとめた WF は、日本人学習者にとって大きな単位であり、レマで語彙を提示した方が良い可能性もある。この問題も今後検討していく。

参考文献一覧

- 相澤一美, 石川慎一郎, 村田年, 磯達夫, 上村俊彦, 小川貴宏, 清水伸一, 杉森直樹, 羽井左照彦, 望月正道. 2005. 『JACET8000 英単語「大学英語教育学会基本語リスト」に基づく』, 東京: 桐原書店.
- 赤野一郎, 投野由紀夫, 堀正広. 2014. 『英語教師のためのコーパス活用ガイド』, 東京: 大修館書店.
- 東一夫, 東多喜子. 2012. 『標準ロシア語入門 (改訂版)』, 東京: 白水社.
- 荒川洋平, 森山新. 2009. 『わかる!! 日本語教師のための応用認知言語学』, 東京: 凡人社.
- 石川慎太郎. 2001. 「英和辞書における語彙重要度指定の妥当性の検証」『静岡県立大短大部紀要』14(1), 1-12 頁.
- 石川慎一郎. 2008. 『英語コーパスと言語教育: データとしてのテキスト』, 東京: 大修館書店.
- 石川慎一郎. 2012. 『ベーシックコーパス言語学』, 東京: ひつじ書房.
- 石川慎一郎, 前田忠彦, 山崎誠(編). 2010. 『言語研究のための統計入門』, 東京: くろしお出版.
- 井上幸義. 2015. 「ロシア語の造格の不変の意味について」『ロシア語ロシア文学研究』47, 181-197 頁.
- 上原順一. 2005. 「ロシア語教育における語形成接辞の抽出について -エフレーモヴァの『ロシア語語形成単位辞典』をもとに-」『大阪外国語大学論集』31, 63-74 頁.
- 宇多文雄. 2009. 『ロシア語文法便覧』, 東京: 東洋書店.
- 浦井康男. 1997. 「Л. Лёнгрен 編 "Частотный словарь современного русского языка", Uppsala, 1993, 188p. と Uppsala Corpus」『ロシア語ロシア文学研究』29, 167-173 頁.
- 大石強. 1988. 『形態論』, 東京: 開拓社.
- 太田垣正義. 1999. 『英語教育学・理論と実践の結合: 語彙指導と語彙研究』, 東京: 開文社出版.
- 大西泰斗, P.C., マクベイ. 2009. 『大西泰斗のイメージ英文法: English Brain Force』, 東京: DHC.
- 大堀壽. 2002. 『認知言語学』, 東京: 東京大学出版会.
- 小田利勝. 2007. 『ウルトラ・ビギナーのための SPSS による統計解析入門』, 長野: プレアデス出版.
- 門田修平(編). 2003. 『英語のメンタルレキシコン: 語彙の獲得・処理・学習』, 東京: 松柏社.
- 門田修平, 池村大一郎. 2009. 『英語語彙指導ハンドブック』, 東京: 大修館書店.
- 金子百合子. 2016. 「岩手大学における語学教育の動向と ICT コンテンツ活用によるロシア語自律学習支援」『ロシア語教育ネットワークの確立と今後の展望 (研究成果最終報告書)』, 13-22 頁.
- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一(編). 2001. 『言語学大辞典第 6 巻: 術語編』, 東京: 三省堂.
- 木村彰一. 1985. 『古代教会スラブ語入門』, 東京: 白水社.
- 黒岩幸子. 2016. 「岩手県立大学のロシア語教育」『ロシア語教育ネットワークの確立と今後の展望 (研究成果最終報告書)』, 23-43 頁.
- 古賀義顕, 鴻野わか菜. 2012. 『ロシア語の教科書』, 東京: ナウカ出版.
- 小森和子, 三國純子, 近藤安月子. 2004. 「文章理解を促進する語彙知識の量的側面 -既知語率の閾値探索の試み-」『日本語教育』120, 83-92 頁.
- 齊藤俊雄, 中村純作, 赤野一郎(編). 1998. 『英語コーパス言語学: 基礎と実践』, 東京: 研究社.
- 齊藤俊雄, 中村純作, 赤野一郎(編). 2005. 『英語コーパス言語学: 基礎と実践 改訂新版』, 東京: 研究社.
- 酒井玲子. 2009. 『英語の「語脳」をつくる接頭辞と接尾辞の完全ガイド』, 東京: 国際語学社.
- 佐藤健. 2004. 「英語多義語学習におけるイメージスキーマの重要性とニューメディアを用いたその表示の意義について」『情報メディア研究』2(1), 57-62 頁.
- 佐藤純一. 2001. 『新ロシア語入門』, 東京: NHK 出版.
- 佐藤純一. 2012. 『ロシア語史入門』, 東京: 大学書林.
- 佐藤純一, 木島道夫. 2009. 『最新ロシア重要単語 2200』, 東京: 白水社.
- 佐山豪太. 2013. 「語形成におけるロシア語の形態的手段の比重 -英露の高頻度語によるテキストカバー率をめぐる-」『ロシア語教育研究』4, 41-56 頁.
- 佐山豪太. 2014. 「特定分野の語彙学習 -経済学分野に特徴的な語彙を中心に-」『ロシア語教育研究』5, 51-76 頁.
- 嶋田裕司. 1985. 『句動詞』, 東京: 大修館書店.
- JALP 多言語教育推進研究会. 2016. 「『第 2 の外国語』学習指導要領 (案)」『日本言語政策学会』

- URL: http://jalp.jp/wp/?page_id=1069.
- 白井恭弘. 1998. 「言語学習とプロトタイプ理論」 奥田祥子(編)『ボーダーレス時代の外国語教育』, 東京: 未来社, 69-108 頁.
- スルダノヴィチ, E.I., 仁科喜久子. 2008. 「コーパス検索ツール Sketch Engine の日本語版とその利用方法」『日本語科学』 23, 59-80 頁.
- 瀬戸賢一. 2005. 『よくわかる比喩 ことばの根っこをもっと知ろう』, 東京: 研究社.
- 高野嘉明. 2010. 「個人語彙規模の測定に関する一考察」『青山学院女子短期大学紀要』 64, 9-26 頁.
- 高橋勝忠. 2009. 『派生形態論』, 東京: 英宝社.
- 田中茂範. 2004. 「基本語の意味のとらえ方 -基本動詞におけるコア理論の有効性-」『日本語教育』 121, 3-13 頁.
- 田中茂範, 阿部一, 佐藤芳明. 2006. 『英語感覚が身につく実践的指導: コアとチャンクの活用』, 東京: 大修館書店.
- 谷口一美. 2011. 「応用認知言語学と語彙学習 -文法理論を英語教育に活用する(2)-」『大阪教育大学紀要第 I 部門』 59(2), 63-74 頁.
- 玉木佳代子. 2009. 「外国語学習におけるプロジェクト授業: その理論と実践」『立命館言語文化研究』 21(2), 231-246 頁.
- 千野栄一. 1972. 「ロシア語名詞変化における異形態の分布について -AM, -AMH, -AX」『ロシヤ語ロシヤ文学研究』 4, 70-75 頁.
- 中條清美. 2015. 「コーパスと英語学習語彙表」 投野由紀夫(編)『コーパスと英語教育』, 東京: ひつじ書房, 17-42 頁.
- 趙寅秋. 2014. 「三次元形容詞『厚・薄』の多義性研究 -プロトタイプ・カテゴリーおよび概念メタファーの視点から-」『地球社会統合科学研究』 1, 43-55 頁.
- 辻幸夫(編). 2013. 『新編認知言語学キーワード事典』, 東京: 研究社.
- 堤正典. 2001. 「ロシア語教育と文法用語」『Славяна: slavonic studies』 16, 33-39 頁.
- テイラー, J.R., 瀬戸賢一. 2008. 『認知文法のエッセンス』, 東京: 大修館書店.
- 東郷正延, 染谷茂, 磯谷孝, 石山正三(編). 1988. 『研究社露和辞典』, 東京: 研究社.
- 投野由紀夫. 2003. 「コーパスを英語教育に生かす」『英語コーパス研究』 10, 249-264 頁.
- 投野由紀夫. 2005. 「教材とコーパス」『立命館言語文化研究』 16(4), 157-168 頁.
- 投野由紀夫. 2011. 「コーパス言語学の英語教育への応用: CEFR を中心に」『JACET 中部支部紀要』 9, 1-12 頁.
- 投野由紀夫(編). 2013. 『英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック: CAN-DO リスト作成・活用』, 東京: 大修館書店.
- 投野由紀夫. 2015a. 「教育利用のためのコーパス情報とツールの活用」 投野由紀夫(編)『コーパスと英語教育』, 東京: ひつじ書房, 181-206 頁.
- 投野由紀夫. 2015b. 「コーパスの英語教育への応用」 投野由紀夫(編)『コーパスと英語教育』, 東京: ひつじ書房, 1-16 頁.
- 投野由紀夫(編). 2015. 『コーパスと英語教育』, 東京: ひつじ書房.
- 独立行政法人国際交流基金(編). 2017. 『JF 日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』, 埼玉: 独立行政法人国際交流基金.
- 戸辺又方. 1990. 『1年生のロシア語』, 東京: 白水社.
- 中澤英彦. 1998. 「ロシア語」 東京外国語大学語学研究所(編)『世界の言語ガイドブック』, 東京: 三省堂, 378-391 頁.
- 中澤英彦(編). 2005. 『日本語から引く知っておきたいロシア語』, 東京: 小学館.
- 中澤英彦. 2007. 『使える・話せる・ロシア語単語』, 東京: 語研.
- 中澤英彦. 2010. 『一冊目のロシア語 (改訂版)』, 東京: 東洋書店.
- 中澤英彦. 2010. 「ロシア語のアスペクト」『語学研究所論集』 15, 249-262 頁.
- 中澤英彦. 2012. 「ロシア語検定試験について」『EU および日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究』, 149-169 頁.
- 中澤英彦(編). 2015. 『プログレッシブ ロシア語辞典』, 東京: 小学館.

- 中本敬子, 李在鎬(編). 2011. 『認知言語学研究の方法 内省・コーパス・実験』, 東京: ひつじ書房.
- 鍋島弘治朗. 2003. 「認知言語学におけるイメージ・スキーマの先行研究」『日本認知言語学会論文集』3, 334-338 頁.
- 二枝美津子. 2009. 「中動態と他動性」『京都教育大学紀要』114, 105-119 頁.
- 西川盛雄. 2006. 『英語接辞研究』, 東京: 開拓社.
- 西川盛雄. 2013. 『英語接辞の魅力: 語彙力を高める単語のメカニズム』, 東京: 開拓社.
- 西中村浩, 朝妻恵里子. 2017. 『ロシア語をはじめよう』, 東京: 朝日出版社.
- 沼野恭子, 匹田剛, 前田和泉, I., ダフコワ. 2012. 『大学のロシア語 I 基礎力養成テキスト』, 東京: 東京外国語大学出版会.
- 野田大志. 2013. 「現代日本語における[X+屋]型派生名詞の構文的多義性」『人間情報学研究』18, 39-57 頁.
- 拝田清. 2012. 「日本の大学言語教育における CEFR の受容 -現状・課題・展望-」『EU および日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究』, 93-103 頁.
- 秦野一宏, S., トルストグゾフ. 2012. 『ロシア語 文法と練習』, 東京: 白水社.
- バトラー後藤裕子. 2011. 『学習言語とは何か: 教科学習に必要な言語能力』, 東京: 三省堂.
- 馬場彰. 1998. 「英語」東京外国語大学語学研究所(編)『世界の言語ガイドブック』, 東京: 三省堂, 22-41 頁.
- 濱野寛子. 2006. 「助数詞『本』の多義性に関する認知言語学的考察」『言語科学論集』12, 77-93 頁.
- 林田理恵. 2014. 「ロシア語教育実情調査 -将来的展望と中等・高等教育機関連携の可能性-」『複言語・多言語教育研究』2, 60-71 頁.
- 林田理恵. 2016. 「専攻課程への ТРКИ 正規導入と高大連携への展望(大阪大学)」『ロシア語教育ネットワークの確立と今後の展望 (研究成果最終報告書)』, 145-150 頁.
- 原求作. 1996. 『ロシア語史講話』, 東京: 水声社.
- 匹田剛. 2007. 「ロシア語の文法における連続性について」『ロシア語学と言語教育』, 5-26 頁.
- 匹田剛. 2016. 『これならわかる ロシア語文法 入門から上級まで』, 東京: NHK 出版.
- フリーズ, C.C., A.A. トレイヴァー. 1958. 『英語の制限単語表: 教育語彙選定の方法と問題』, 東京: 大修館書店.
- 前川喜久雄. 2011. 「特定領域研究『日本語コーパス』と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』」『「現代日本語書き言葉均衡コーパス」完成記念講演会予稿集』, 1-10 頁.
- 前木祥子. 2004. 『しっかり学ぶロシア語』, 東京: 文昇堂.
- 卷下吉夫, 瀬戸賢一. 1997. 『日英語比較選書 1 文化と発想とレトリック』, 東京: 研究社.
- マケナリー, T., A., ハーディー. 2014. 『概説コーパス言語学: 手法・理論・実践』, 東京: ひつじ書房.
- 政村秀實. 2012. 『図解 英語基本語義辞典』, 東京: 国際語学社.
- 真嶋潤子. 2007. 「言語教育における到達度評価制度に向けて -CEFR を利用した大阪外国語大学の試み-」『間谷論集』1, 3-27 頁.
- 三浦由香利. 1999. 「ロシア語動詞派生名詞における語形成的意味について」『神戸国際大学紀要』57, 63-77 頁.
- 水野晶子, 阿出川修嘉. 2006. 「《資料と報告》コンコーダンスソフト AntConc をロシア語研究に活かす -ソフトの使用法の概説とロシア語研究への活用の試み-」『ロシア語研究「木二会」年報』19, 25-57 頁.
- 水本篤. 2007. 「より良い学習語彙表の開発にむけた統計的手法の検討」『統計数理研究所共同研究レポート 日英語の基本語抽出における統計手法の研究』199, 1-14 頁.
- 水本篤, 野ロジュディー. 2009. 「多変量解析を用いた PERC コーパスの領域分類」『コーパス言語研究における量的データ処理のための統計手法の概観 (統計数理研究所共同研究レポート)』232, 85-106 頁.
- 皆島博. 2009. 「英語の名詞 word の多義構造: 認知意味論的分析」『福井大学教育地域科学部紀要 I (人文科学 外国語・外国文学編)』65, 9-21 頁.
- 皆島博. 2014. 「日英多義語の認知意味論的分析 -『イエ(家)』と“house”-」『福井大学教育地域科学部紀要』4, 43-57 頁.

- 村田純一. 2011. 「認知言語学の英語教育への応用：日英語比較へ向けて」『神戸外大論叢』62(2), 77-98 頁.
- 木二会会員共訳. 1998. 「ロシア語百科事典・改訂新版 動詞特集」『ロシア語研究「木二会」年報』11, 39-105 頁.
- 望月正道, 相澤一美, 投野由紀夫. 2003. 『英語語彙の指導マニュアル』, 東京: 大修館書店.
- 萩山洋介. 1997. 「慣用句の体系的分類 - 隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に -」『名古屋大学国語国文学』80, 29-43 頁.
- 萩山洋介. 2010. 『認知言語学入門』, 東京: 研究社.
- 萩山洋介, 深田智. 2003. 「第3章 意味の拡張」松本曜(編)『認知意味論』, 東京: 大修館書店, 73-134 頁.
- 文部科学省. 2008. 『中学校学習指導要領解説』
URL: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chukaisetsu/index.htm
- 文部科学省. 2009. 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』
URL: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1282000.htm
- 安岡治子. 2011. 『総合ロシア語入門』, 東京: 研究社.
- 柳町裕子. 2011. 『これなら覚えられる! ロシア語単語帳』, 東京: NHK 出版.
- 山下喜代. 2006. 「意図的語彙学習のための方法と教材 - 人物を表す接尾辞を例にして -」『講座日本語教育』42, 42-59 頁.
- 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』, 東京: 東京大学出版会.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』, 東京: ひつじ書房.
- 横川博一. 2006. 『日本人英語学習者の英単語親密度 文字編：教育・研究のための第二言語データベース』, 東京: くろしお出版.
- 横山吉樹, 三ツ木真実. 2014. 「語の意味カテゴリー能力と多義語の語彙知識との関連性」『北海道教育大学紀要 教育科学編』65(1), 279-291 頁.
- リンゼイ, J.W. 2006. 『言語類型論入門：言語の普遍性と多様性』, 東京: 岩波書店.
- レイコフ, G., M., ジョンソン. 1986. 『レトリックと人生』, 東京: 大修館書店.
- 和久利誓一. 1961. 『テーブル式ロシア語便覧』, 東京: 評論社.
- 早稲田みか. 2011. 「ハンガリー語動詞接頭辞の多義性と格交替」『類型学研究』3, 127-139 頁.
- 和田朋子, 長沼君主, 田中敦英. 2004. 「言語能力の発達段階の記述について」『言語情報学研究報告』2, 95-110 頁.
- Aizawa, K. 1998. "Developing a vocabulary size test for Japanese EFL learners", *ARELE*, 9, pp.75-85.
- Anthony, L. 2005. "AntConc: A learner and classroom friendly, multi-platform corpus analysis toolkit", *Proceedings of IWLeL 2004: An interactive workshop on language e-learning*, Tokyo, Japan, pp.7-13.
- Atkins, S., J., Clear, N., Ostler. 1992. "Corpus design criteria", *Literary and linguistic computing*, 7(1), pp.1-16.
- Azuma, M. 2005. *Metaphorical competence in an EFL context*, Tokyo: Toshindo Publishing.
- Azuma, M., J., Littlemore. 2010. "Promoting creativity in English language classrooms", *JACET Kansai journal*, 12, pp.8-19.
- Baker, P., A., Hardie, T., McEnery. 2006. *A glossary of corpus linguistics*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Bauer, L. 1983. *English word-formation*, New York: Cambridge University Press.
- Bauer, L. 1988. *Introducing linguistic morphology*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Bauer, L., I.S.P., Nation. 1993. "Word families", *International journal of lexicography*, 6(4), pp.253-279.
- Beliakov, V., M., Guiraud-Weber. 1997. "О некоторых свойствах вторичных глагольных приставок", *Russian Linguistics*, 21(2), pp.165-175.
- Benom, C. 2015. "The correctness fallacy and lexical semantics", *九州大学言語学論集*, 35, pp.137-172.
- Biber, D. 1991. *Variation across speech and writing*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Biber, D. 1993a. "Representativeness in corpus design", *Literary and linguistic computing*, 8(4), pp.243-257.
- Biber, D. 1993b. "Using register-diversified corpora for general language studies", *Computational linguistics*, 19(2), pp.219-241.
- Biber, D., S., Conrad, R., Reppen. 1998. *Corpus linguistics: Investigating language structure and use*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bogaards, P., B., Laufer (eds.). 2004. *Vocabulary in a second language: Selection, acquisition, and testing*, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.

- Borras, F.M., R.F., Christian. 1971. *Russian syntax: Aspects of modern Russian syntax and vocabulary*, 2nd ed., New York, Oxford: Oxford University Press.
- Brezina, V., D., Gablasova. 2015. "Is there a core general vocabulary? Introducing the New General Service List", *Applied linguistics*, 36(1), pp.1-22.
- Brown, J. 1996. *Russian learners' dictionary: 10,000 words in frequency order*, London, New York: Routledge.
- Browne, C. 2013. "The New General Service List: Celebrating 60 years of vocabulary learning", *The language teacher*, 37(4), pp.13-16.
- Browne, C. 2014. "The New General Service List version 1.01: Getting better all the time", *Korea TESOL journal*, 11(1), pp.35-50.
- Brugman, C. 1981. *Story of OVER*, Berkely: University of California.
- Brugman, C., G., Lakoff. 1988. "Cognitive topology and lexical networks". *Cottrell, G.W., S., Small, M.K., Tannenhouse (eds.) Lexical ambiguity resolution*, San Mateo, California: Morgan Kaufman Publishers, pp.477-508.
- Candlin, C.N. 1988. "Preface", *Carter, R., M., McCarthy (eds.) Vocabulary and language teaching*, London, New York: Longman, pp.VII-IX.
- Carter, R., M., McCarthy. 1988. *Vocabulary and language teaching*, London, New York: Longman.
- Carver, R.P. 1994. "Percentage of unknown vocabulary words in text as a function of the relative difficulty of the text: Implications for instruction", *Journal of reading behavior*, 26(4), pp.413-437.
- Chujo, K., S., Hasegawa. 2006 "An investigation into the star-rated words in English-Japanese learner's dictionaries", *International journal of lexicography*, 19(2), pp.175-195.
- Clear, J. 1992. "Corpus sampling", *Leitner, G. (ed.) New directions in English language corpora: Methodology, results, software developments*, Berlin, New York: Mouton de Gruyter, pp.21-31.
- Cobb, T., M., Horst. 2004. "Is there room for an academic word list in French?", *Bogaards, P., B., Laufer (eds.) Vocabulary in a second language: Selection, acquisition, and testing*, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins, pp.15-38.
- Comrie, B. 1976. *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Council of Europe. 2001. *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Coxhead, A. 2000. "A New Academic Word List", *TESOL quarterly*, 34(2), pp.213-238.
- De Bot, K., W., Lowie, M., Verspoor. 2005. *Second language acquisition: An advanced resource book*, London: Routledge.
- Deignan, A. 2005. *Metaphor and corpus linguistics (Converging evidence in language and communication research)*, Amsterdam: John Benjamins.
- Folse, K.S. 2004. *Vocabulary myths: Applying second language research to classroom teaching*, Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Francis, W.N. 1982. "Problems of assembling and computerizing large corpora", *Johansson, S.(ed.) Computer corpora in English language research*, Bergen: Norwegian Computing Centre for the Humanities, pp.7-24.
- Francis, W.N., H., Kučera. 1982. *Frequency analysis of English usage: Lexicon and grammar*, Boston: Houghton Mifflin.
- Gardner, D. 2007. "Validating the construct of word in applied corpus-based vocabulary research: A critical survey", *Applied linguistics*, 28(2), pp.241-265.
- Goulden, R., I.S.P., Nation, J., Read. 1990. "How large can a receptive vocabulary be?", *Applied linguistics*, 11(4), pp.341-363.
- Grabe, W., F.L., Stoller. 2002. *Teaching and researching reading*, Harlow, Tokyo: Longman, an imprint of Pearson Education.
- Harley, H. 2006. *English words: A linguistic introduction*, Oxford: Blackwell Publishers.
- Harrison, W., J., Mullen. 1967. *Expression of the passive voice (Studies in the modern Russian language 4)*, Cambridge: The University Press.
- Hatch, E., C., Brown. 1995. *Vocabulary, semantics, and language education*, Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Hirsh, D., I.S.P., Nation. 1992. "What vocabulary size is needed to read unsimplified texts for pleasure?", *Reading in a foreign language*, 8(2), pp.689-696.
- Hu, M., I.S.P., Nation. 2000. "Unknown vocabulary density and reading comprehension", *Reading in a foreign language*, 13(1), pp.403-430.

- Hunston, S. 2002. *Corpora in applied linguistics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Janda, L.A. 1986. *A semantic analysis of the Russian verbal prefixes za-, pere-, do-, and ot-* (= *Slavistische beiträge, Band 192*), Munich: Otto Sagner.
- Janda, L.A. 2010. "Prefixed perfectives from non-determined motion verbs in Russian", *Hasko, V., R., Perelmutter (eds.) New approaches to Slavic verbs of motion (Studies in language companion series 115)*, pp.125-140.
- Janda, L.A., J., Kuznetsova, O., Lyashevskaya, A., Makarova, T., Nessel, S., Sokolova. 2013. *Why Russian aspectual prefixes aren't empty: Prefixes as verb classifiers*, Bloomington: Slavica.
- Janda, L.A., O., Lyashevskaya. 2011. "Aspectual pairs in the Russian National Corpus", *Scando-slavica*, 57(2), pp.201-215.
- Johnson, M. 1987. *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*, Chicago: University of Chicago Press.
- Josselson, H.H. 1953. *The Russian word count*, Detroit: Wayne University Press.
- Kennedy, G. 1998. *An introduction to corpus linguistics*, London, New York: Longman.
- Kilgarriff, A. 1996. "Putting frequencies in the dictionary", *International journal of lexicography*, 10(2), pp.135-155.
- Kilgarriff, A. 1997. "Using word frequency lists to measure corpus homogeneity and similarity between corpora", *Proceedings of 5th ACL SIGDAT Workshop on very large corpora*, Beijing, China, pp.231-245.
- Kilgarriff, A. 2010. "Comparable corpora within and across languages, word frequency lists and the KELLY project", *Proceedings of workshop on building and using comparable corpora at LREC*, Valletta, Malta, pp.1-5.
- Kilgarriff, A., G., Grefenstette. 2003, "Introduction to the special issue on web as corpus", *Computational linguistics*, 29(3), pp.333-347.
- Kilgarriff, A., P., Rychlý, P., Smrz, D., Tugwell. 2004. "The Sketch Engine", *Proceedings of EURALEX 2004*, Lorient, France, pp.105-116.
- Kilgarriff, A., V., Baisa, J., Bušta, M., Jakubíček, V., Kovář, J., Michelfeit, P., Rychlý, V., Suchomel. 2014. "The Sketch Engine: Ten years on", *Lexicography*, 1(1), pp.7-36.
- Kirkici, B. 2010. "Distinct mechanisms in the processing of English past tense morphology: A view from L2 processing", *Pütz, M., L., Sicola, (eds.) Cognitive processing in second language acquisition: Inside the learner's mind*, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins, pp.67-84.
- Lakoff, G. 1987. *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*, Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G., M., Johnson. 1980. *Metaphors we live by*, Chicago, London: University of Chicago Press.
- Lakoff, G., M., Johnson. 1999. *Philosophy in the flesh: The embodied mind and its challenge to western thought*, New York: Basic Books.
- Langacker, R.W. 1987. *Foundations of cognitive grammar. Vol. 1, theoretical prerequisites*, Stanford: Stanford University Press.
- Laufer, B. 1989. "What percentage of text-lexis is essential for comprehension?", *Lauren, C., M., Nordman (eds.) Special language: From humans thinking to thinking machines*, Clevedon: Multilingual Matters, pp.316-323.
- Laufer, B. 1992. "How much lexis is necessary for reading comprehension?", *Arnaud, P.J.L., H., Béjoint (eds.) Vocabulary and applied linguistics*, Houndmills, Basingstoke, Hampshire: Macmillan Academic and Professional, pp.126-132.
- Laufer, B. 1997. "The lexical plight in second language reading", *Coady, J., T., Huckin (eds.) Second language vocabulary acquisition: A rationale for pedagogy*, New York: Cambridge University Press, pp.20-34.
- Laufer, B., I.S.P., Nation. 1995. "Lexical richness in L2 written production: Can it be measured?" *Applied linguistics*, 16(3), pp.307-322.
- Laufer, B., I.S.P., Nation. 2012. "Vocabulary". *Gass, S.M., A., Mackey (eds.): The Routledge handbook of second language acquisition*, New York: Routledge, pp.163-176.
- Leech, G. 1997. "Teaching and language corpora: A convergence", *Wichmann, A., S., Fligelstone, T., McEnery, G., Knowles (eds.) Teaching and language corpora*, London: Longman, pp.1-23.
- Leech, G. 2007. "New resources, or just better old ones?", *Hundt, M., N., Nesselhauf, C., Biewer (eds.) Corpus linguistics and the web*, Amsterdam: Rodopi, pp.133-149.
- Lindner, S. 1981. *A lexico-semantic analysis of English verb-particle constructions with UP and OUT (Unpublished doctoral dissertation)*, San Diego: University of California.
- Littlemore, J. 2009. *Applying cognitive linguistics to second language learning and teaching*, Basingstoke:

- Palgrave Macmillan.
- Lyons, J. 1968. *Introduction to theoretical linguistics*, London: Cambridge University Press.
- McCarthy, M., R., Carter. 2001. "Size isn't everything: Spoken English, corpus, and the classroom", *TESOL quarterly*, 35(2), pp.337-340.
- McEnery, T., A., Hardie. 2012. *Corpus linguistics: Method, theory and practice*, Cambridge, Tokyo: Cambridge University Press.
- McEnery, T., A., O'Keeffe. 2010. "Historical perspective: What are corpora and how have they evolved?", O'Keeffe, A., M., McCarthy. (eds.) *The Routledge handbook of corpus linguistics*, London: Routledge, pp.3-13.
- McEnery, T., R., Xiao, Y., Tono. 2006. *Corpus-based language studies: An advanced resource book*, London: Routledge.
- Meara, P. 1980. "Vocabulary acquisition: A neglected aspect of language learning", *Language teaching and linguistics: Abstracts*, 13(4), pp.221-246.
- Mitsugi, M. 2013. "The effectiveness of core meaning based instruction on preposition choice", *Research bulletin of English teaching*, 10, pp.1-25.
- Mochizuki, M., K., Aizawa. 2000. "An affix acquisition order for EFL learners: An exploratory study", *System*, 28(2), pp.291-304.
- Morimoto, S., S., Loewen. 2007. "A comparison of the effects of image-schema-based instruction and translation-based instruction on the acquisition of L2 polysemous words", *Language teaching research*, 11(3), pp.347-372.
- Nagy, W.E., R.C., Anderson, M., Schommer, J.A., Scott, A.C., Stallman. 1989. "Morphological families in the internal lexicon", *Reading research quarterly*, 24(3), pp.263-282.
- Nation, I.S.P. 2001. *Learning vocabulary in another language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Nation, I.S.P. 2004. "A study of the most frequent word families in the British National Corpus", Bogaards, P., B., Laufer (eds.) *Vocabulary in a second language: Selection, acquisition and testing*, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins, pp.3-13.
- Nation, I.S.P. 2006. "How large a vocabulary is needed for reading and listening?", *The Canadian modern language review*, 63, pp.59-82.
- Nation, I.S.P. 2011. "Vocabulary research into practice", *Language teaching*, 44(4), pp.529-539.
- Nation, I.S.P., D., Beglar. 2007. "A vocabulary size test", *The language teacher*, 31(7), pp.9-13.
- Nation, I.S.P., K., Hwang. 1995. "Where would general service vocabulary stop and special purposes vocabulary begin?", *System*, 23(1), pp.35-41.
- Nation, I.S.P., P., Meara. 2002. "Vocabulary", Schmitt, N. (ed.) *An introduction to applied linguistics*, London: Edward Arnold, pp.35-54.
- Neset, T., A., Endresen, L.A., Janda. 2011. "Two ways to get out: Radial category profiling and the Russian prefixes vy- and iz-", *Zeitschrift für slawistik*, 56(4), pp.377-402.
- O'Keeffe, A., M., McCarthy, R., Carter. 2007. *From corpus to classroom: Language use and language teaching*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, H.E. 1931. *Second interim report on vocabulary selection*, Tokyo: The Institute for Research in English Teaching.
- Pomikalek, J., P., Rychly, A., Kilgariff. 2009. "Scaling to billion-plus word corpora", *Advances in computational linguistics. Special issue of research in computing science*, 41, pp.3-14.
- Quirk, R. 1972. *A grammar of contemporary English*, London: Longman.
- Read, J. 2007. "Second language vocabulary assessment: Current practices and new directions", *International journal of English studies*, 7(2), pp.105-125.
- Reppen, R. 2010. *Using corpora in the language classroom*, New York: Cambridge University Press.
- Römer, U. 2006. "Pedagogical applications of corpora: Some reflections on the current scope and a wish list for future developments", *Zeitschrift für anglistik und amerikanistik*, 54(2), pp.121-134.
- Römer, U. 2008 "Corpora and language teaching", Lüdeling, A., M., Kyto (eds.) *Corpus linguistics: An international handbook*, Berlin: W. de Gruyter, pp.112-131.
- Rosch, E. 1975. "Congitive representations of semantic categories", *Journal of experimental psychology*, 104 (3), pp.192-233.
- Rosch, E. 1978. "Principles of categorization", Rosch, E., B.B., Lloyd (eds.) *Cognition and categorization*, Ann Arbor, Mich.: UMI Books on Demand, pp.27-48.
- Schmitt, N., P., Meara. 1997. "Researching vocabulary through a word knowledge framework. Word associations and

- verbal suffixes", *Studies in second language acquisition*, 19(1), pp.17-36.
- Sekine, S. 1997. "The domain dependence of parsing", *Proceedings of 5th conference on applied natural language processing*, Washington DC, USA, pp.96-102.
- Sharoff, S., E., Umanskaya, J., Wilson. 2013. *A frequency dictionary of Russian: Core vocabulary for learners (Routledge frequency dictionaries)*, Oxford: Routledge.
- Shull, S. 2003. *The experience of space. The privileged role of spatial prefixation in Czech and Russian*, Munich: Verlag Otto Sagner.
- Sinclair, J (ed.). 1987. *Collins COBUILD English language dictionary*, London: Collins.
- Sinclair, J. 1991. *Corpus, concordance, collocation*, Oxford: Oxford University Press.
- Sinclair, J. 1996. "EAGLES preliminary recommendations on corpus typology"
URL: <http://www.ilc.cnr.it/EAGLES96/corpus/corpus.html>
- Sinclair, J., A., Renouf. 1988. "A lexical syllabus for language learning", *Carter, R., M., McCarthy (eds.) Vocabulary in language teaching*, London: Longman, pp.140-160.
- Šteinfeldt, E. 1973. *Russian word count: 2500 words most commonly used in modern literary Russian: Guide for teachers of Russian*, Moscow: Progress Publishers.
- Šteinfeldt, E. 2003. *Russian word count: 2500 words most commonly used in modern literary Russian: Guide for teachers of Russian (reprinted)*, Honolulu, Hawaii: University Press of the Pacific.
- Stubbs, M. 2001. *Words and phrases: Corpus studies of lexical semantics*, Oxford: Blackwell Publishers.
- Sutarsyah, C., I.S.P., Nation, G., Kennedy. 1994. "How useful is EAP vocabulary for ESP? A corpus based case study", *RELC journal: A journal of English language teaching in Southeast Asia*, 25(2), pp.34-50.
- Sweet, H. 1900. *The practical study of languages; a guide for teachers and learners*, New York: Henry Holt.
- Sweet, E. 1990. *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*, Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Swenson, E., M., West. 1934. *On the counting of new words in textbooks for teaching foreign languages (Bulletin of the department of educational research. University of Toronto, 1)*, Toronto: The University of Toronto Press.
- Talmy, L. 1985. "Force dynamics in language and thought", *Eilfort, W.H., P.D., Kroeber, K.L. Peterson (eds.) Papers from the parasession on causatives and agentivity at the twenty-first regional meeting*, Chicago, USA, pp.293-337.
- Taylor, J.R. 2003. *Linguistic categorization, 3rd ed.*, Oxford: Oxford University Press.
- Teubert, W., A., Čermáková. 2007. *Corpus linguistics: A short introduction*, London: Continuum.
- Thorndike, E.L., I., Lorge. 1944. *The teacher's word book of 30,000 words*, New York: Bureau of Publications Teachers College, Columbia University.
- Tiberius, C., A., Kilgariff. 2009. "Sketch Engine for Dutch with the ANW corpus", *Beijk, E., L., Colman, A.M.F., Moerdijk (eds.) Fons verborum: Feestbundel fons moerdijk*, Leiden: Instituut voor Nederlandse lexicologie, pp.237-255.
- Timberlake, A. 2011. *A reference grammar of Russian (paperback ed.)*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Tognini-Bonelli, E. 2010. "Theoretical overview of the evolution of corpus linguistics", *O'Keeffe, A., M., McCarthy (eds.) The Routledge handbook of corpus linguistics*, New York: Routledge, pp.14-28.
- Townsend, C.E. 1975. *Russian word-formation*, Cambridge, Mass: Slavica Publishers.
- Várad, T. 2001. "The linguistic relevance of corpus linguistics", *Proceedings of the corpus linguistics 2001 conference*, Lancaster, UK, pp.587-593.
- Wade, T. 2011. *A comprehensive Russian grammar, 3rd ed., revised and updated*, Oxford: Blackwell Publishers.
- Waring, R., I.S.P., Nation. 1997. "Vocabulary size, text coverage, and word lists", *Schmitt, N., M., McCarthy (eds.) Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy*, Cambridge University Press: Cambridge, pp.6-19.
- Webb, S., I.S.P., Nation. 2017. *How vocabulary is learned*, Oxford: Oxford University Press.
- West, M. 1953. *A General Service List of English words*, London: Longman, Green & Co.
- Wheeler, M., B., Unbegaun, P., Falla (eds.). 2007. *Oxford Russian dictionary: Russian-English / English-Russian*, Oxford: Oxford University Press.
- Yasuda, S. 2010. "Learning phrasal verbs through conceptual metaphors: A case of Japanese EFL learners" *TESOL quarterly*, 44(2), pp.250-273.
- Zimmerman, C.B. 1997. "Historical trends in second language vocabulary instruction", *Coady, J., T., Huckin (eds.) Second language vocabulary acquisition: A rationale for pedagogy*, New York: Cambridge University Press, pp.5-19.
- Zipf, G.K. 1935. *The psycho-biology of language: An introduction to dynamic philology*, Boston: Houghton Mifflin.

- Амиантова, Э. (ред.) 2016. *Лексика русского языка. Сборник упражнений, 8-е изд., стер.*, М.: Флинта, Наука.
- АН СССР. 1960. *Грамматика русского языка, т.1*, М.: Наука.
- АН СССР. 1980. *Русская грамматика, т.1*, М.: Наука.
- Андрюшина, Н.П. (ред.). 2014. *Лексический минимум по русскому языку как иностранному. I сертификационный уровень. Общее владение, 7-е изд.*, СПб: Златоуст.
- Андрюшина, Н.П. (ред.). 2015. *Лексический минимум по русскому языку как иностранному. II сертификационный уровень. Общее владение, 6-е изд.*, СПб: Златоуст.
- Барыкина, А.Н., В.В., Добровольская. 2015. *Изучаем глагольные приставки, 3-е изд.*, СПб: Златоуст.
- Беляева, Г.В., Н.Э., Луцкая. 2008. *Я пишу по-русски: Пособие по письму: Книга для студентов: Базовый уровень*, М.: Московский государственный университет имени М.В. Ломоносова.
- Богомолов, А.Н. 2012. *Новости из России: Русский язык в средствах массовой информации: Учебное пособие для изучающих русский язык как иностранный, 5-е изм. и доп.*, М.: Русский язык, Курсы.
- Бондарь, Н.И., С.А., Лутин. 2006. *Как спросить? Как сказать?: Пособие по развитию речи для изучающих русский язык как иностранный*, М.: Русский язык. Курсы.
- Варламов, А.Н., В.В., Муравьёва, И.И., Яценко. 2005. *Русский рассказ конца XX века: Учебное пособие*, М.: Флинта, Наука.
- Виноградов, В.В. 1972. *Русский язык: Грамматическое учение о слове, 2-е изд (reprinted)*, М: Высшая школа.
- Головко, О. 2015. *"Вперед!" Пособие по русской разговорной речи*, М.: Русские курсы.
- Григорьева, М.В. (ред.). 2012. *Библиографическая запис. Сокращение слов и словосочетаний на русском языке*, М.: ФГУП Стандартформ.
- Евсеева, И.В., Т.А., Лузгина, И.А., Славкина, Ф.В., Степанова. 2007. *Современный русский язык: Курс лекций*, Красноярск: Сибирский федеральный университет.
- Ефремова, Т.Ф. 1996. *Толковый словарь словообразовательных единиц русского языка*, М.: Русский язык.
- Жукова, Н.Н. 2005. *Десять рассказов: Книга для чтения: Учебное пособие по русскому языку как иностранному*, М.: Русский язык, Курсы.
- Зализняк, А.А. 1977. *Грамматический словарь русского языка: Словоизменение: Около 100,000 слов*, М.: Русский язык.
- Зализняк, А.А. 1995. "Опыт моделирования семантики приставочных глаголов в русском языке" *Russian linguistics*, 19(2), С.143-185.
- Зализняк, А.А., А.Д., Шмелёв. 2000. *Введение в русскую аспектологию*, М.: Языки русской культуры.
- Зализняк, А.А., И.Л., Микаэлян, А.Д., Шмелёв. 2015. *Русская аспектология. В защиту видовой пары*, М: Языки славянской культуры.
- Засорина, Л.Н. (ред.). 1977. *Частотный словарь русского языка: Около 40000 слов*, М.: Русский язык.
- Захаров, В.П. 2005. *Корпусная лингвистика: Учебно-метод. Пособие*, СПб: СПбГУ.
- Земская, Е.А. 1973. *Современный русский язык: Словообразование*. М.: Просвещение.
- Земская, Е.А. 2007. *Словообразование как деятельность, 3-е изд.*, М.: Наука.
- Зиндер, Л.Р., Т.В., Строева. 1968. "К вопросу о применении статистики в языкознании", *Вопросы языкознания*, 6, С.120-123.
- Исаченко, А.В. 1960. *Грамматический строй русского языка в сопоставлении со словацким. Морфология, Ч.2*, Братислава: Издательство Словацкой Академии наук.
- Караулов, Ю.Н. (ред.). 1997. *Русский язык: Энциклопедия, 2-е изд. перер. и доп.*, М.: Большая российская энциклопедия.
- Киселёва, М.С. 2016. *Лексика и словообразование: Учебное пособие, 2-е изд., стер.*, М.: Флинта.
- Козлова, Н.А. 2014. *Учебный словообразовательный словарь русского языка*, СПб: Златоуст.
- Козырев, В., В., Черняк. 2016. *Современный русский язык. Лексикография. Учебное пособие*, М.: КноРус.
- Копотев, М.В., А. Мустайоки. 2008. "Современная корпусная русистика", *Slavica helsingiensia*, 34, С.7-24.
- Корокова, Л.С. 1973. "Словообразовательный анализ и его роль в процессе обучения иностранным языкам в неязыковом вузе", *Словообразование и его место в курсе преподавания иностранных языков. Вып.1*, С.27-45.
- Котелова, Н. (ред.). 1986. *Новое в русской лексике, словарные материалы-81*, М.: Русский язык.
- Кронгауз, М.А. 1995. "Приставки и глаголы: Грамматика сочетаемости". *Семиотика и информатика*, 34, С.32-57.
- Кронгауз, М.А. 1998. *Приставки и глаголы в русском языке: Семантическая грамматика*, М.: Языки

- русской культуры.
- Кузнецова, Ю.Л., Л.А., Янда. 2013. “Приставки в свете когнитивной лингвистики и типологии (Отклик на статью А.А. Зализняк и И.Л. Микаэлян)”, *Вопросы языкознания*, 4, С.87-96.
- Лённгрэн, Л. 1993. *Частотный словарь современного русского языка. (With a summary in English: A frequency dictionary of modern Russian)*, Uppsala: AUU.
- Лопатин, В.В. 1977. *Русская словообразовательная морфемика: Проблемы и принципы описания*, М.: Наука.
- Ляшевская, О.Н. 2014. “Поверх очков: Пространственные интерпретации и семантика предложной конструкции”, *Acta linguistica petropolitana. Труды института лингвистических исследований РАН*, 2, С.332-361.
- Ляшевская, О.Н. 2016. *Корпусные инструменты в грамматических исследованиях русского языка*, М.: Издательский дом ЯСК.
- Ляшевская, О.Н., В.А., Плунгян, Д.В., Сичинава. 2005. “О морфологическом стандарте корпуса современного русского языка”, *Научная и техническая информация, сер. 2. Информационные процессы и системы*, 6, С.2-9.
- Ляшевская, О.Н., С.А., Шаров. 2009. *Частотный словарь современного русского языка на материалах Национального корпуса русского языка*, М.: Азбуковник.
- Мадаени, А. 1998. “Семантика глаголов движения с приставкой про-”, *Язык, сознание, коммуникация*, 3, С.91-99.
- Москвин, В.П. 2015. *Методы и приёмы лингвистического анализа: Монография*, М.: Флинта, Наука.
- Новикова, Н.С., Т.В., Шустикова. 2015. *Русская грамматика в таблицах и схемах: Справочное пособие для иностранных учащихся, 3-е изд., стер.*, М.: Русский язык, Курсы.
- Ожегов, С.И. 1990. *Словарь русского языка, 22-е изд.*, М.: Русский язык.
- Ожегов, С.И. 2010. *Толковый словарь русского языка*, М.: Мир и Образование.
- Ожегов, С.И., Н.Ю., Шведова. 1997. *Толковый словарь русского языка: 80000 слов и фразеологических выражений, 4-е изд., доп.*, М.: Азбуковник.
- Пехливанова, К.И., М.Н., Лебедева. 1987. *Грамматика русского языка в иллюстрациях, 2-е изд., исп.*, М.: Русский язык.
- Пешковский, А.М. 1956. *Русский синтаксис в научном освещении: Популярный очерк, пособие для самообразования и школы, 7-е изд.*, М.: Государственное учебно-педагогическое издательство.
- Пиотровский, Р.Г., К.Б., Бектаев, А.А., Пиотровская. 1972. *Математическая лингвистика*, М.: Высшая школа.
- Плотникова, Г.Н. 2011. *Лингвометодические основы обучения русскому словообразованию*, М.: Книжный дом “ЛИБРОКОМ”.
- Плунгян, В.А. 2005. “Зачем нужен Национальный корпус русского языка?”, *Национальный корпус русского языка 2003–2005. Результаты и перспективы*, М.: Индрик, С.6-20.
- Плунгян, В.А. 2008. “Корпус как инструмент и как идеология: О некоторых уроках современной корпусной лингвистики”, *Русский язык в научном освещении*, 16(2), С.7-20.
- Подалко, П.Э. 2016. “Историко-культурные аспекты изучения русского языка в Японии”, *Русский язык за рубежом (Русистика Японии)*, С.63-68.
- Ремчукова, Е.Н. 2004. *Морфология современного русского языка: Категория вида глагола: Учебное пособие*, М.: Флинта, Наука.
- Савчук, С.О. 2005. “Метатекстовая разметка в Национальном корпусе русского языка: Базовые принципы и основные функции”, *Национальный корпус русского языка: 2003-2005. Результаты и перспективы*, М.: Индрик, С.62-88.
- Саяма, Г. 2018. “Влияние объёма корпуса на определение наиболее часто употребляемых слов: Анализ частотных данных из пяти корпусов”, *Русский язык в научном освещении*, 34(1), 70-91.
- Соколова, С., А., Байдимирова. 2011. “Роль конструкций в определении значений приставки: Корпусное исследование приставки ЗА-”, *Международная конференция «Русский язык: Конструкционные и лексико-семантические подходы»*, СПб, Россия, С.1-8.
- Тихонов, А.Н. 1985. *Словообразовательный словарь русского языка, в двух томах, около 145000 слов*, М.: Русский язык.
- Улуханов, И.С. 1996. *Единицы словообразовательной системы русского языка и их лексическая реализация*, М.: Астрасемь.
- Фрумкина, Р.М. 1959. “Некоторые вопросы методики составления частотных словарей”, *Машиный*

- перевод и прикладная лингвистика*, 2(9), С.23-37.
- Хаясида, Р. 2016, “В каком направлении должно двигаться сегодня преподавание русского языка в Японии”, *Русский язык за рубежом (Русистика Японии)*, С.21-30.
- Хмелевская, Т.А., Х., Окабаяси, М., Обата. 1991. “Вопросы изучения лексики в практическом курсе русского языка как иностранного”, *外国語教育：理論と実践*, 17, С.9-15.
- Шведова, Н.Ю. 2007. *Толковый словарь русского языка: С включением сведений о происхождении слов*, М.: Азбуковник.
- Штейнфельд, Э.А. 1963. *Частотный словарь современного русского литературного языка*, Таллин: [s.p.].
- Щипицина, Л.Ю. 2015. *Информационные технологии в лингвистике: Учебное пособие. 2-е. изд.*, М.: ФЛИНТА, Наука.
- Эндрюс, Э.Н. 2014. *Русские глагольные приставки: Практикум, 2-е изд.*, М.: Русский язык. Курсы.
- Янда, Л.А. 2012. “Русские приставки как система глагольных классификаторов”, *Вопросы языкознания*, 6, С.3-47.
- Янко-Триницкая, Н.А. 2001. *Словообразование в современном русском языке*, М.: Индрик.

付録 C_1 における *про-/pro-*の各意味の分類例

ここでは、C_1 における分析 (7.3.) で確認された各意味 (1. THOROUGH~9. HARM) の分類例を挙げる。すべての分類例を記載することはできないため、ある意味での生起頻度が完了体と不完了体を合わせて 5 を越える派生動詞の例のみを対象として扱う (例: 完了体 *протереть/proteret'* 「きれいにする, 磨く」とそのペアである不完了体 *протира́ть/protirat'* は、C_1 内において 7. THOROUGH の意味で前者が 4 回、後者が 5 回生起する。THOROUGH の意味での *протира́ть/protirat'* – *протереть/proteret'* の生起頻度は合計 9 となるため、以下でこれを記載の対象とする)。ただ、2. PASS, 8. EXPEND, 9. HARM はそもそも C_1 内で確認された例が少ないため、生起頻度が 5 以下でも参考のためにこれらの分類例を挙げる。

なお、ここでは主に完了体動詞の分類例を記載する (つまり、*протира́ть/protirat'* – *протереть/proteret'* の場合、*протереть/proteret'* の例を挙げる。ただし、不完了体動詞の方が例文としてわかりやすい場合はそちらを記載する)。

1. THOROUGH に分類される派生動詞の例

a. **пробить** 「貫く」 (基本形 *бить* 「打つ」)

В первую же ночёвку на Осетинской земле со стороны Грузии прилетел снаряд. Он попал в здание школы, пробив в нём огромную сквозную дыру.

b. **пробудить** 「(感情を) 喚起する, (ある感情が現れるように) 呼び起こす」

(基本形 *будить* 「起こす」)

Без фанатизма и вегетарианства Илья Одегов делает важнейшее дело — пробуждает в нас человечность.

c. **прогнать** 「追い出す」 (基本形 *гнать* 「追う, 追い払う」 / 7. THOROUGH にも分類)

Точно так же звали людей, которых из райского сада прогнали! Из-за них теперь все остальные люди страдают, и мы с Вами тоже!

d. **проголосовать** 「票を投じる (用紙を投票箱に通す)」 (基本形 *голосовать* / 体のペア²⁹⁴)

Я был единственным, кто проголосовал против проведения этой операции.

e. **проехать** 「(乗り物で) 通過する」 (基本形 *ехать* 「(乗り物で) 進む」)

Дорога обещала быть не слишком утомительной: в поздний утренний час можно проехать через Тель-Авив без всякой задержки, <...>.

²⁹⁴ ある完了体と不完了体動詞について、東郷他(編)(1988), Ожегов(2010), 電子版 Ожегов, Ушаков のどれかが体的なペアであると記述している場合は「体のペア」と記す。

- f. **пройти** 「通過する」 (基本形 идти 「進む」)
Пошли, - Барух поискал глазами, куда бы бросить стаканы из-под пива. - Оставь, уберут. - И то верно. Они молча прошли через лобби в пустой ресторан отеля.
- g. **пролезть** 「這い込む」 (基本形 лезть 「這う」)
Дверь в чулан намертво прихвачена огромными гвоздями, и горе, если бесёнок пролезет через случайную щель в подточенной жучком треснувшей древесине.
- h. **пролететь** 「(時間が早く) 経過する」 (基本形 лететь 「飛ぶ」 / 7. THOROUGH にも分類)
Мне тоже жаль, Игорёк, что десять дней пролетели быстро, - откровенно призналась женщина. - Я люблю вас! - совсем теряя голову, признался Игорь, понимая, что другого случая уже не будет.
- i. **промелькнуть** 「瞬く間に過ぎる, さっと現れる」 (基本形 мелькнуть 「ちらちらする」)
Герцог ещё больше побледнел, а во взгляде молодого прелата промелькнуло что-то похожее на затаённую боль.
- j. **пронизать** 「しみ渡る, 貫く」 (基本形 низать 「通す」 / 6. EXTENSION にも分類)
"У тебя - бардак! - Если бы ты взглянула на него в ультрафиолетовом свете, ты бы увидела настоящее абстракционистское полотно". Весь фильм пронизан такими эмоциональными ловушками.
- k. **пропитать** 「浸透させる, 含浸させる」 (基本形 питать 「供給する」 / 6. EXTENSION にも分類)
Искали причины поражения, требовали переигровки, короче, сотрясали пропитанный потом воздух. Настроение – домкратом не поднять.
- l. **пропустить** 「通過させる」 (基本形 пустить 「放つ」)
Охрана поздоровалась с Олегом и, ничего не спрашивая у Андрея, пропустила их внутрь.
- m. [不完] **просвечивать** ([完] просветить) 「光を透す」 (基本形 светить 「光る」)
Ну дыра или щель, ну кусочек светлого неба сквозь неё просвечивает, ну и что?
- n. **просунуть** 「突っ込む」 (基本形 сунуть 「押し込む」)
Лора просунула свой язык к нему в рот и снова прижалась всем телом. У Борьки кончился воздух, и он замотал головой.
- o. **протечь** 「しみ込む」 (基本形 течь 「流れる」)
Голубушка, Женечка, у вас потолок случаем не протёк? — окликнула выглянувшая из квартиры слева соседка.

2. PASS に分類される派生動詞の例

- a. **пробежать** 「走って通り過ぎる」 (基本形 бежать 「走る」)
Мамка Ульяна, дремавшая около крепко спящего Юрия, вскочила с лавки, когда Иван пробежал мимо неё.
- b. **проехать** 「(乗り物で) 通過する」 (基本形 ехать 「(乗り物で) 進む」)
Дама проехала мимо входа, полубовавшись ёлкой.
- c. **пройти** 「通過する」 (基本形 идти 「進む」)
На этот раз они прошли мимо комнаты, в которой он уже был, и, пройдя по коридору, вошли большой зал, посреди которого был небольшой бассейн, позади бассейна, <...>.
- d. [不完] **пролетать** ([完] пролететь) 「飛んで通過する」 (基本形 лететь 「飛ぶ」)
Полина бодро застучала каблучками, направляясь в свой маленький, но уютный кабинет. – Добрый день, Полина Петровна, – поздоровалась пролетающая мимо Леночка.

3. MISS に分類される派生動詞の例

- a. **проиграть** 「負ける」 (基本形 играть 「競技をする, ゲームをする」)
В результате мы проиграли со счётом 4:0. Потом хотели провести матч-реванш уже на большом поле.
- b. [不完] **пропускать** ([完] пропустить) 「逃す」 (基本形 пустить 「通す, 行かせる」)
Часа за полтора Барух, стараясь не пропускать ни слова, прочёл рассказ до конца.
- b. **проспать** 「寝過ごす」 (基本形 спать 「寝る」)
Он проспал завтрак, но не жалел об этом.

4. DISTANCE に分類される派生動詞の例

- a. **пробежать** 「ある距離を走って通り過ぎる」 (基本形 бежать 「走る」)
«Этот автомобиль очень качественный (а) и пробежал всего десять тысяч метров (б)».
- b. **пробормотать** 「もぐもぐ言う」 (基本形 бормотать / 体のペア)
- Что за чушь, - пробормотал Артилок. - Мервин, ты бываешь в церкви? - Как приходится.
- c. **провести** 「(ある場所へ, 場所まで) 連れて行く」 (基本形 вести 「導く」)
Слуга провёл его до двери в комнату, Мервин вошёл, увидел кровать и жадно устремился к ней.

- d. **проводить** 「見送る」 (基本形 водить 「導く」)
Я тебя провоожу сам до гостиницы.
- e. **провозгласить** 「宣言する」 (基本形 возгласить 「大声で, おごそかに言う」)
Был провозглашён конец холодной войны, а Фрэнсис Фукуяма даже провозгласил «конец истории».
- f. **проворчать** 「うなる」 (基本形 ворчать / 体のペア)
— Упрямец ты этакий! — проворчал Гастон. — Хорошо, я поеду с тобой.
- g. **проговорить** 「言う, しゃべる」 (基本形 говорить 「言う」)
- Я вижу, тебе действительно нелегко решить, - проговорил Амит.
- h. [不完] **продвигать** ([完] продвигнуть) 「前進させる」 (基本形 двигнуть 「動かす」)
Мужчина, по смыслу своего именования в индоевропейских языках, должен был быть вождём, ведущим – для семьи, для рода, обязан был направлять, продвигать своё дело, проводить свои идеи, искать и прокладывать путь в любом полезном направлении.
- i. **продиктовать** 「口授する」 (基本形 диктовать / 体のペア)
М. А. продиктовал мне страничку о Салтыкове-Щедрине <...>.
- j. **проехать** 「(乗り物で) ある距離を通過する」 (基本形 ехать 「(乗り物で) 進む」)
Версты две вот проедем, будет справа Клязьма-река.
- k. **прозвать** 「あだ名を付ける」 (基本形 звать 「名付ける」)
<...> столько фотографий и видео с этой симпатичной белокурой девочкой, на которых она то играет с ягуаром, то катается на слонах, и из-за чего её и прозвали «девочкой из джунглей» или «настоящим Маугли».
- l. **прозвенеть** 「鳴り響く」 (基本形 звенеть / 体のペア)
Будильник прозвенел ровно в шесть часов.
- m. **прозвучать** 「音がする」 (基本形 звучать / 体のペア)
И хотя финальный свисток ещё не прозвучал, весь стадион встал в волной прокатившемся по овалу трибун порыве и в такт последним мгновениям великолепного матча горячо аплодировал всем <...>.
- n. **пройти** 「ある距離を通過する」 (基本形 идти 「進む」)
Надо быстро пройти всё это расстояние и с ходу дать сражение, а там, как бог даст, либо лечь костями, либо победить.

- o. **прокричать** 「大声で叫ぶ」 (基本形 кричать 「叫ぶ, 大声でしゃべる」)
 - Проклятие на твою голову, несчастный! – прокричала женщина низким голосом, <...>.
- p. **промолвить** 「口に出す」 (基本形 молвить 「言う」)
 Спаси Бог тебя на добром деле, – промолвил великий князь, – послугу твою не забуду.
- q. **пропеть** 「歌う」 (基本形 петь / 体のペア)
 Что значат эти слёзы...", - пропел Александр Александрович, <...>.
- r. **прочитать** 「音読する」 (基本形 читать / 体のペア / 7. THOROUGH にも分類)
 Уговорили М. А. прочитать им «Блаженство».
- s. **прошептать** 「ささやく」 (基本形 шептать / 体のペア)
 - Я думал, ты... - прошептал Мервин Артилоку в ухо, когда они покидали постоянный двор.

5. DURATION に分類される派生動詞の例

- a. **пробыть** 「ある時間いる」 (基本形 быть 「いる」)
 Весь день Андрей пробыл в банке, выполняя свою каждодневную работу, болтая с сослуживцами, обсуждая обычные, даже обыденные вещи: вчерашние телепрограммы, <...>.
- b. **провести** 「ある時間を過ごす」 (基本形 вести 「(生活を) 送る」)
 За причастность к убийству четырёх израильтян он был приговорён к пожизненному заключению и провёл в тюрьме почти 30 лет.
- c. **прожить** 「ある期間住む」 (基本形 жить 「住む」)
 История французской девочки, которая родилась в джунглях Типпи родилась в Намибии в 1990 году и прожила там 10 лет со своими родителями, <...>.
- d. **проработать** 「ある期間働く」 (基本形 работать 「働く」)
 Можно проработать всю жизнь в одном отделе на одной должности, а можно перепрыгивать с места на место, не придерживаясь традиционной последовательности.
- e. **просидеть** 「ある時間座っている」 (基本形 сидеть 「座っている」)
 В очереди он просидел сорок минут и немного поспал.
- f. **простоять** 「ある時間立っている」 (基本形 стоять 「立っている」)
 Несколько секунд он простоял неподвижно, затем стряхнул с себя оцепенение и бросился к воротам, отталкивая по пути не успевших уступить ему дорогу слуг.

6. EXTENSION に分類される派生動詞の例

- a. **продлить** 「長引かせる, 延期する」 (基本形 *длить* / 体のペア)
<...> антироссийские санкции уже продлены на полгода, и вопрос об их отмене будет рассматриваться лишь через несколько месяцев.
- b. **пролить** 「こぼす, 流す, 漏らす」 (基本形 *лить* 「注ぐ」 / 1. THROUGH にも分類)
Сколько же мы пота в этой игре пролили! В чём её сложность? Получая мяч, я первым касанием обрабатываю его, а вторым уже должен отдать партнёру.
- c. **проповедовать** 「布教する, 伝道する」 (基本形 *поведовать* 「告げる」 / 4. DISTANCE にも分類)
Именно так. Мой дед Абдаллах был другом Мухаммада, сына седьмого имама Исмаила. После его смерти он стал проповедовать его веру.
- d. **прославить** 「喧伝する, 有名にする」 (基本形 *славить* 「賞賛する」)
Эта работа быстро прославила художника, и в результате один парижский торговец искусством приобрёл сразу несколько его произведений.
- e. **протянуть** 「差し出す, 差し伸べる, 伸ばす」 (基本形 *тянуть* 「張る」)
Это наша община... Как, вы ни разу не были в кришнаитской общине? Приходите, вот адрес, — она протянула мне розовую бумажку.
- f. [不完] **проходить** ([完] *пройти*) 「渡る, 広がる」 (基本形 *идти* 「進む」)
<...> это гости из соседних деревень: мельник, рыбаки, лесорубы – словом, те, для кого важно, чтобы с рекой, проходящей через Мокрый лес, всё было в порядке.

7. THOROUGH に分類される派生動詞の例

- a. **проанализировать** 「分析する」 (基本形 *анализировать* / 体のペア)
В нашей работе мы проанализируем опыт изучения летних школ, и попытаемся описать примерную модель летней языковой школы за рубежом.
- b. **провести** 「遂行する」 (基本形 *вести* 「行う」)
Мало кто верил, что в России существуют профессионалы, способные с успехом провести операцию такого рода.
- c. **проделать** 「やり終える」 (基本形 *делать* 「する」)
«Как вы знаете, в прошлом году Анатолий Иванович Котов проделал огромную работу, включая обсуждение с предпринимательским сообществом, вместе с нашим агентством, с другими бизнес-объединениями <...>.

- d. **продемонстрировать** 「(はっきりと) 提示する」 (基本形 демонстрировать / 体のペア)
Кремль решил продемонстрировать Анкаре свою готовность (или возможность) выложить курдскую карту.
- e. **продумать** 「熟考する」 (基本形 думать 「考える」)
Он заранее продумал все свои действия.
- f. **проигнорировать** 「無視する」 (基本形 игнорировать / 体のペア)
Если же Кремль предпочтёт проигнорировать армянские претензии, то русофобские силы в Ереване получают ещё один «аргумент» для продвигаемой ими теории о предательском характере <...>.
- g. **проиллюстрировать** 「例証する」 (基本形 иллюстрировать / 体のペア)
Книга проиллюстрирована интересными и яркими фотографиями.
- h. **пройти** 「(試験などを) 通過する, 合格する」 (基本形 идти 「進む」 / 1. THROUGH にも分類)
Все проекты прошли тщательную экспертизу Международного научного совета ТПУ.
- i. **пройти** 「(時間が) 経過する」 (基本形 идти 「進む」 / 1. THROUGH にも分類)
Прошло почти два года, как он непосредственно вступил во владение Кантабрией, но ещё ни разу не появлялся при кастильском дворе.
- j. **прокомментировать** 「論評する, 解説する」 (基本形 комментировать / 体のペア)
В интервью Путин прокомментировал свои действия так: «Ясно, что если был Борис Николаевич Ельцин президентом, мы не вернули бы, скажем, такие символы нашей государственности <...>.
- k. **промокнуть** 「びしょ濡れになる」 (基本形 мокнуть 「濡れる」 / 1. THROUGH にも分類)
Например, не будут эквивалентны высказывания «Пошёл дождь, и мы промокли» (a^b) и «Мы промокли, и пошёл дождь» (b^a).
- l. **промолчать** 「黙り通す」 (基本形 молчать 「黙る」)
- О, приди, моя Луна, я один, и ты одна. Мать подумала: "жену бы ему хорошую", но промолчала.
- m. **проследить** 「見張る, 監視する」 (基本形 следить 「はなさずに見る」)
Мы обнаружили мясной фургон, в котором тебя вывозили из Москвы. Мы проследили за ним и, выбрав удобное место, провели операцию по твоему освобождению.

- n. **прослушать** 「終始聴く」 (基本形 слушать 「聴く」)

Огромную часть работы студенты могут выполнить самостоятельно, прослушав по заданию преподавателя определённую программу внеаудиторно в качестве домашнего занятия.

- o. **просмотреть** 「目を通す, 一覧する」 (基本形 смотреть 「見る」)

Просмотрев данные бабушки, Андрей выяснил, что у неё был сын, годившийся Андрею в отцы, погибший в автокатастрофе более десяти лет назад вместе со своей <...>.

- p. **просчитать** 「計算する, 全部を数える」 (基本形 считать 「数える」)

Это зависит от многих факторов, какая сумма, на какой срок, с каким риском. Просто так этого не скажешь. - Да и не важно. Ты всё просчитал, ты всё обдумал и вложил свои деньги - дальше ты их заложник.

- q. **протереть** 「きれいにする, 磨く」 (基本形 тереть 「拭く」)

На кухне он протёр письмо тряпкой, взгляделся в блеск австралийских марок, перевёл взгляд на поехавшие плиты двора и внятно сказал <...>.

- r. [不完] **протекать** ([完] протечь) 「経過する」 (基本形 течь 「流れる」 / 1. THROUGH にも分類)

Так однообразно их жизнь протекает, что миллион лет может пройти, и ничего не изменится.

- s. [不完] **процветать** ([完] процвести) 「繁栄する, 栄える」 (基本形 цвести 「咲く」)

Китай сделали его второй по экономической мощи державой в мире, так и не разрушив культ личности Мао Цзэдуна. У англичан уже свыше 500 лет процветает культ кровавой королевы Елизаветы, <...>.

- t. **процитировать** 「引用する」 (基本形 цитировать / 体のペア)

Ещё процитируем ту же книгу: «Когда в начале февраля 1942 года на Металлический завод (ЛМЗ) прибыла на ремонт первая партия повреждённых танков, <...>.

- u. **прочитать** 「通読する」 (基本形 читать / 体のペア)

Ему снова стало стыдно, что он так и не прочитал эту коротенькую брошюрку в тот же вечер.

8. EXPEND に分類される派生動詞の例

- a. **проесть** 「食に費やす」 (基本形 есть 「食べる」)

И после открытия обещанного королю пролива, дающего иной, западный путь к Островам пряностей, его флотилии, потерявшей два судна и проевшей почти все свои запасы, надо было вернуться в Испанию.

- b. [不完] **проматывать** ([完] промотать) 「浪費する」 (基本形 мотать / 体のペア)

Так мот, проматывающий кредиты и займы, может показаться богатым.

9. HARM に分類される派生動詞の例

- a. [不完] **проклинать** ([完] проклясть) 「呪詛する」 (基本形 клясть 「呪う」)

Керен, не зная, что ответить Михальке, начнёт фантазировать, выдумывать что-нибудь на ходу, запутается, проклиная себя, проклиная его...

- b. **пропить** 「飲酒でだめにする」 (基本形 пить 「飲む」)

У кого-то лицо обезображено болезнью, кто-то совершенно голос пропил, и теперь не то что петь, а и говорить может только хрипло и некрасиво.

- c. **продавить** 「押しつぶす」 (基本形 давить 「圧力を加える」)

«Порошенко имел все возможности продавить через радикалов, через экстремистов, которые пытались его обвинить в национальном предательстве, решения, которые воплотили бы в жизнь <...>.

謝辞

本博士論文を完成させるにあたって、多くの方からご指導とご助力をいただきました。ここに深く感謝の意を表したいと思います。

まず、匹田剛教授（東京外国語大学）からは終始格別なるご指導を賜りました。匹田剛教授のご指導のおかげで論文執筆だけでなく研究全般の展望を見据えて、ここまで活動が続けてくることができました。佐野洋教授（東京外国語大学）、投野由紀夫教授（東京外国語大学）からは、本博士論文の根幹を成すコーパス言語学のご指導を賜り、大変勉強になりました。お忙しい中、私の研究報告のためにお時間を見つけてくださり感謝しております。

林田理恵教授（大阪大学）と横井幸子准教授（大阪大学）からは、科研事業を通じてロシア語教育について実りのあるご指導を賜りました。また、両氏からは、数多くの活躍の場をいただきましたことに感謝を申し上げたいと思います。研究会「木二会」では、何度も研究発表をさせていただき、そこで堤正典教授（神奈川大学）、井上幸義教授（上智大学）、秋山真一准教授（上智大学）からロシア語学に関してのご指導を賜りました。

そして、モスクワのロシア語研究所に在籍している際、指導教官の任を引き受けてくださった Ольга Ляшевская 教授（ロシア高等経済大学）からはロシア語コーパス言語学、認知言語学に関するご指導を賜り、博士論文を執筆する上でその知識は大変役立ちました。また、モスクワでの研究活動の機会を与えてくださった日露青年交流センターや日本学術振興会、日頃の研究活動を応援してくれた大学院生、友人、家族にも感謝の意を表したいと思います。

ここに重ねて厚く謝意を表し、謝辞といたします。